
.hack//G.U. 黄金の右腕

ジーユー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

hack / G・U・黄金の右腕

【コード】

N0863S

【作者名】

ジーユー

【あらすじ】

かつて彼は仮想の世界で戦っていた。

その世界がおわり、彼はごく普通の学生として過ごしていた
しかし世界は彼を求めた

彼はその腕に思いを宿し再び舞台へと降り立った

プロローグ（前書き）

はじめましてジーユーと申します。

今回初めて投稿させていただきました。

全くのド素人なので読みにくいと思いますが完結目指してがんばりますので

よろしく願います。

プロローグ

2010年、この時小学生だった俺はあるオンラインゲームにはまっていた。

The world

当時小学生であった俺は普通の子よりも精神的に早熟だったように周りの子とあまり遊んだりしていなかった。まあ住んでいた場所が北海道という事もあって子供達だけで遊びに行くような場所もありなく、

加えて身体も同じような年頃の子に比べて弱かったこともあり余り外で遊ばない子供だった。

そんな環境にいれば自然と遊ぶのは家の中になっていき、The worldの今までやってきたどんなゲームよりもリアルな戦闘や今まで味わったことのなかったおもしろさを知ったらはまるのはまあごく自然なことだった。

まあ、ここまでだったならそんなに珍しいことでもないごく普通のちよつとませた小学生時代ってことだった・・・で終われるんだが生憎これでは終わらなかつた。

hakersと呼ばれた彼らと共にモルガナ八相との戦い、クビアとの最終決戦など普通じゃ絶対に体験出来ないような出来事に遭遇したとんでもないあの一年間ちよつとは今でも鮮明に思い出せる。

それまでのただの遊びだったはずのThe worldが本当に世界を救う舞台になったんだからまあ忘れられるわけないんだけどねまあそんな大舞台に立っていた俺もThe worldが閉鎖してしまえばただのガキだったわけ

幼なじみに振り回され、たまに当時の事を思い出してリアルで連絡を取ったりして普通の、少し物足りないけど普通の学生生活をおくっていた訳だ。

「なあ、一馬。The worldって知ってるか？」

・・・幼なじみのこの言葉で俺、御蔵 一馬（みくらかずま）のまた楽しい日常（いじょうなたたかい）が戻ってきたらしい。

side 智香

あたし、倉本智香（くらもとちか）には幼なじみが居る。

生まれた家の親が昔から仲がよくって家も隣同士だったこともあって私とあいつ、御蔵 一馬は本当に生まれた頃から一緒だった。

家が隣同士だったから隣のベランダからあいつの部屋に行くことだって昔はしょっちゅう。（実は今でも行こうと思えばすぐに行けるけど、他の子にこんなこと言ったら何言われるかわかったもんじやない。けど、これも幼なじみの特権なんだ！）

ほんと、マンガみたいだけども一緒にいて一緒に、その・・・お風呂も入ったことも・・・ある。

（本当に小さい頃で、まだ小学校上がっていない頃だったから別に問題ないんだ！！）

・・・まあ、それは置いといて。

あいつは小さい頃から頭がいいって言うか、やけに大人びていたしルックスも結構いいから同い年のやつと比べたら結構モテる。

本人は気づいてないんだけど同じクラスの女子なんかはあいつと近づきたくてあたしと友達になろうとしたやつも多かった。（まあそんな奴らなんかとは死んでも友達になんかならなかつたけど！）
だいいち、一馬のやつとは小学校の終わりあたりからそんなに遊んだりはしなくなった。

思春期だったのもあつたけどあいつは昔身体が余り強くなかったから外で遊んだりしないで家の中に居ることが多かったからあのころ外で遊ぶのが好きだった私は一馬と遊ぶことが少なかつた。

今じゃ一馬も普通に運動したりしてるからそこそこしゃべったりするけど今度は逆に私が図書館で本を読んだり、図書委員の仕事で忙しかったりとあんまり接点がなかつた。

・・・こんなんじゃないつか一馬が他の女に盗られるかもしれない。今はまだあたしの方が一馬との接点は多いけどどうかうかしてらんない。そんな風に焦っていた私に友達が見せてくれた雑誌にあるネットゲームの特集が載っているのが目についた。

The world R:2

確かあたしと一馬があんまり遊ばなくなつた頃に結構有名になつたオンラインゲームの二作目らしい。

友達が言うには前のバージョンよりも少し減つたけどそれでも世界に1200万人以上のユーザーがいるらしくって大人気のゲームらしい。

正直あたしはゲームしてるよりも本を読んだりしてる方が好きだったのでそのときはへえーって適当に合わせておこうと思つてページをめくつてただけであるページを見て思わず手を止めた。

アリーナバトルチャンピオン、紅魔宮チャンピオン大火チャンピオンを退任!!

天狗みたいな格好をしたPCの写真が貼られていたそのページに書いてあつたタイトルを見てその友達にアリーナバトルの事を聞いたらチームバトルのトーナメント戦で勝ち抜いていくプレイヤー同士のバトルと聞いて興味が一気に湧き出した。

実はあたしは最近三国志にはまっている。英傑が繰り広げる武将同士の命を賭した戦い、そしてその戦いのような戦いが出来たらなく、などと思ひながら本を読むことが多かつた。現実には無理なところと分かつていながらそう思つて仕方がなかつた。

だけど、これを見た瞬間この世界なら私もあんな本の中のような

戦いが出るかもしれない。そう思い出したらすぐにでもやりたくなつた。家に帰ったら、貯めたお小遣いを削ってこれを始めよう、結構かかるのかなあ〜などと思っているとふと、一馬の姿が目に入った。

そつえばあいつこつういうゲーム好きだつたたっけ・・・よし！

「なあ、一馬。The worldって知ってるか？」

第一話（前書き）

本日二話目です

まだThe worldには行きません。

多分次くらいには行くと思うのでよろしくお願いします。

第一話

SIDE 一馬

「・・・何だよ、いきなり」

読んでいた小説のページに栞を挟み閉じる。

結構いいところだったんだが智香は話しかけたときにそのまま本を読んできると問答無用で閉じられるからな。まあ、それはさておき

「なにつて、だからこれ、The worldだつてば、The world。」

一馬ってこういうゲーム詳しいだろ？だから知ってるかなつて。」

「・・・別に詳しい訳じゃないけどな。」

一応それなら知ってるよ。今のやつじゃなくて前のバージョンだったらそこそこやってたから。」

でも今のR:2はやったこと無いから詳しくはないけどな。」

「それで十分だつて！でさ、いい機会だから一緒にこれはじめよう！！」

「・・・どういい機会なのだろうか？」

「にしても珍しいな、智香がこういうゲームに興味示すなんて。普段は全然こういうのに興味なんて全く示さないのに。」

そういつて智香が持っていた雑誌を受け取って見てみる。

「・・・なるほど、アリーナか」

前作のR：1にはなかったPKシステムを公認という形でやるって感じのところか。

こういうとなんか感じ悪いな。簡単に言えばコロッセオみたいな感じのエリア。

そういや、R：1のプレイヤーがR：2に戻ってこない理由の一つにPKシステムの採用ってあったような気がする。

「なるほど・・・アリーナでチャンピオンを目指すために一緒にやるうって事か。」

「そういうこと！このアリーナって三人一組のチーム戦みたいでさ、一人でも別に出られるらしいんだけど、そんな無謀なことさすがに無理だと思ってるさ。だから一馬を誘ってアリーナに出たいんだけど。」

・・・ダメ、かな？」

・・・その態度は卑怯だろ・・・

普段快活な智香のこの少し弱々しい態度でお願いされて俺は今まで一度も断れたことがない。

しかもこれを無意識に出してくるんだからたまったもんじゃない。

余談だが智香は男子、女子共に高い人気がある。本人にその自覚は無いようだが快活な性格なためにムードメーカーになるためにいつの間にかクラスの中心人物となっていた。

まあ、何が言いたいかという智香はモテるためその智香とよくいる俺は女子はともかく男子の一部の奴らからはおもしろく思われていない。

そのため何度か絡まれた事もあるわけだが、どいつもこいつもそこまで強いわけではなかったのでそんな大事に至ったことは今のところない。

・・・まあ、今現在そのごく一部の男子の一人から指すような視線を感じるわけだが。

「・・・わかった、わかったよ。」

大して役に立たないと思うけどそれでもいいならやってやるよ。」

そう言ったとたんにさっきまでの少し弱々しい表情はどこに行ったのやら、とたんに明るい表情になって身を乗り出してくる。

・・・近いですよ」

「ホントだな！！じゃあ、今日必要なもの買うから一緒に帰ろう！！」

「いきなりか・・・別にかまわないけど結構金かかるけど大丈夫なのか？」

HMD（ヘッドマウントディスプレイ）一つでも結構バカに出来ない値段であるし専用のコントローラーを買ったらそんなに気軽に買えるものじゃないんだが・・・

「大丈夫！今までのお年玉とか小遣いを合わせたら結構な金額になるし。」

問題なしだ！！」

そう言えば智香って何気なく儉約家だったな。

お年玉とかも貰ったら貯めるタイプだったし。

「なら問題ないか。じゃあ放課後駅前のゲームショップに行くか。俺も色々買い換えたいし、ちょうどいいか。」

「よし！じゃあまた放課後にな！！」

そう言つて智香は自分の席に戻つてまた友達としゃべりはじめた。やれやれ、これでやつと「おい、御倉、ちよつといいか?」・・・

本を開こうとしていた手を止め呼び止められた相手を見る。

うわ・・・

「・・・何か用か、尾方。」

俺よりもずっと体格のいい（太つていると言う意味で）尾方 甲）おがたこう）の方を向いて若干気だるそうに返事を返す。

智香の隠れファンの一人が一番しつこいやつの一人であるこいつはとにかく俺によく突っかかってくる。全く、そんな暇があるのならさつさと智香に告つて振られてしまえばいいのに。

正直な話智香がこいつになびくことは100%ないと確信している。

智香の座右の銘は「体には鍛練、頭に読書」だし。

それに誰だつて嫌だと思う、こんな腹が出るだけならまだしも・・・

・

「おまえThe world始めるんだつてな？止めとけつて、ああいうのは俺みたいな上級者がやるゲームで、おまえみたいなド素人が出来るようなやつじゃないんだよ。」

「あつそ。」

こうやって人のこと勝手に決めつけて見下してくるようなやつは。つていうか、自分が上級者とか威張っているのだが、本当に上級者なのだろうかこいつ。

「せめて俺みたいに金持つてれば何とかなるかもしれねえけどさ、お前の家じゃそんな金もねえんだろ？」

第一最新型のHMDとか買う金あんのかよ。」

「・・・それくらい普通にあるし、別にお前に心配して貰うような事じゃないから。」

「ツてめえ、人が親切に教えてやってるのに何だよその態度は・・・！！」

お前のそれが親切だったら世界中が親切で溢れかえってるよ。そんなことを思っていたら休み時間の鐘が響いてしまった。

「チツ、時間かよ・・・いいか、御倉。

とにかくThe worldはてめえみたいな初心者がやれるほど甘くねえんだよ、わかったな。」

初心者が出来ないようなゲームだったら利用者なんか全然居ねえよバカ

つたく、バカのせいで全く本が読めなかった、チクシヨウ・・・結局手に取ったその本は開かれることなく鞆へとしまわれた。

side 智香

「えつと、これでいいのか、一馬？」

「いや、それは止めた方がいい。高い割にあんま画質よくないからそれよりもこっちの方が画質の割には安いからこっちにしたらどうだ？」

えつと・・・うわ、これさっきのよりの3000円位安い！

「こっちはちょっと重いけどそんなに長時間やるんじゃないよ。特に問題ないし、さっきのはどっちかって言うと廃人プレーヤーみたいな長時間プレイ専用みたいなもんだからこっちで智香は問題ないよ。」

へえ、そんな風に分けられてるんだ。

あんまそう言うの詳しくないから全然わかんなかったや。

「そっか。ありがとな、一馬！」

やっぱり一馬と一緒に来てよかったよ。あたし一人じゃ全然わかんなかったし。」

「別に、礼言われるようなことじゃないよ、このくらい。」

それよりもコントローラーはこれでどうだ？操作性もそんなに難しくないし値段も手頃だけど。」

そう言うって手渡されたのは片手で握れる位のコントローラー。

こんなのでどうやって動かすのかさっぱりだ。

「動かし方は割と簡単だから帰ったら教えるよ。」

ツそ、それって、一馬が家に来るって事！？

うわー！ー！待って待って、今日普通に帰る予定だったから部屋片付けてないし！ー！

あ、あの写真見つかったらどうしよう！ー！？いや、あの手紙も……！ー！？

「ツツ！ー！？」

「？どうした、智香？急に慌てだして。何か用事でもあるんだった

ら今日は

「だ、大丈夫！！問題ないよ！！うん！？？」・・・そ、そう。」

何か心なし一馬の顔が引きつってるけど・・・それよりも！！

（やばい・・・あれが確かまだ机の上に・・・！！？）

あれだけは・・・あれだけは見つかるわけにはいかない！！？

「ん〜・・・これにするか。智香、もう決まったなら会計行こうぜ。」

「わ、分かった！！今行くから！！？」

「・・・ホントに大丈夫か？さつきから何か変だぞお前。」

「全然問題ない！！？それより速く会計いくぞ！！？」

そう言つて一馬の手を握つて会計カウンターへと向かった。

・・・握つた一馬の手が温かかったことを後で思い出して顔が熱くなったのはあただしだけの秘密だ。

SIDE 一馬

「じゃあ着替えたらお前の家に行くから。」

「お、おう！！ゆ、ゆっくり来ていいからな！？？」

そう言つて智香は急いでドアを開けて家に入つていった。

歩いて10秒もしないのになにをゆっくりするのかわかんが。
そんなことを思いながら俺も自宅のドアを開く。

「ただいまー」

「あ、おかえりなさい。今日ははやかったのねー」

ドアを開けたらちょうど母がリビングから出てきたところであった。
俺の母、御倉 琴美（みくらことみ）は一児の母とは思えないほど
に若々しい……らしい。

正直言っても他人がそんなことを言っても俺にとってはこれが母親と
しての基準だし、実際結構若い内に俺の事を産んでいるらしいので
まあ普通よりは若いのである。うがそんな言っほどじゃ無いと思う。

「まあね。あ、着替えたらちょっと智香のところ行ってくるから。」

「あら、ひさしぶりね。一馬が智香ちゃんの家に行くなんて。
なに、ついに付き合うことになったの？」

そう言っつれしそうな顔をしてくる母だがそんなわけがないだろ
うに。

ことあるごとに智香と付き合うだの結婚するだの言っつてくるこの母
に呆れの色を隠さずに母さんに視線をやる。

「んなわけ無いだろうが。」

第一智香だつて俺みたいになつと付き合う気なんかあるわけ無いだ
ろうが。

母さんも京香さんも何で俺が智香と付き合うのかわんて聞くんだよ。

「

全くと言うと逆に呆れた目を返された。

「・・・全く、何でこんな鈍感に育っちゃったのかなー。
母さんどこで教育間違えたんだろ。」

失敬な。

まあいいや、いつものことだ。

そう思い階段を上がり自分の部屋のドアを開けるブレザーを脱いで
パソコンを立ち上げている間に
服を引っ張り出す。

ふと、窓の方を向くと

「ブツ！！？」

上着を脱いで居る智香の姿があった。

ちよ、なんで・・・！！？

「なんでカーテン閉めてないんだよ！！」

思わず口に出した思いは置いておいてすぐにカーテンを閉める。
部屋が向かいなのになんて無防備なんだあいつは・・・！！？

(それにしても・・・思ったよりも大きかったんだな、あいつ)

智香が着やせするタイプだと言うことを改めて知ったのだった。

第二話（前書き）

今回から一馬たちのキャラができあがります。

ほんと、キャラ作るまでどれだけかかってんだって感じですが、どうかご容赦を。

一馬のキャラについての容姿は一応描写していますが皆様のご想像
でおねがいします。

それでは、二話目、どうぞ〜

第二話

SIDE 智香

「ふう〜、なんとか間に合ったか〜」

散乱していた部屋の衣類、本や、写真（一馬の寝顔写真やサッカーでシュートを決めている写真など他多数）、そして一番の危険物だったアレ・・・作りかけの同人誌もクローゼットの奥深くへと隠せた。

そう・・・あたしは同人誌を書いている。親や一馬にさえも秘密なこの趣味は実は結構前からやっている。

さすがに高校生の身分で東京とかに行くのには距離がありすぎるからビックサイトとかには行ったことはないけどそこそこ有名だったりするのは密かな自慢だったりする。

でも、さすがに同人誌を書いているって言うのは恥ずかしすぎて言えないからみんなには秘密にしているんだけど。

「っと、もうすぐ来ちゃうよね、一馬のやつ。

さ〜て、準備準備っど。」

そう言ってシャツの裾に手をかけてめくりあげる。
最近大きくなってきている胸がちよっと苦しい。

（う〜ん、また大きくなったのかな？）

中学の頃はそうでもなかったんだけど最近なんだか急に大きくなってきている気がする。

まあそれでも他のみんなより少し大きいくらいだからとくに気にならないが。
だけど買ったブラがすぐにきつくなるのは財布的に厳しい。
今日結構使っちゃったからあんまり使いたくないし。
そんなことを思っているところと一馬の部屋でドタンツッて音がしたからどうしたのかと思って見てみるけどカーテンが閉まっていて中が見えなかった。

(?いつもは開いてるのに・・・?)

まあいつか。

とりあえず一馬に見られても大丈夫な服に着替えてパソコンを立ち上げる。

パソコン自体は通販とかでよく使うから結構いいやつだ。
そして買ってきたHMDとコントローラーを出して準備していたら下からお母さんの声が聞こえてきた。

「智香ー、一馬君が来たわよー」

「はい、今行くー!」

そう答えて自分の部屋のドアを開けて下へと降りていく。

「それにしても、大きくなったわね〜。

ほんと、男の子ってすぐに大きくなるのね〜」

「いや、正月にあったばかりですよ、京子さん。

そんな二、三ヶ月で身長なんてすぐに伸びませんよ。」

下に降りていくと玄関前でお母さんと一馬が話しているところだ
たみたいで
家のお母さん特有のなんだかのんびりした語尾の言葉に一馬が突っ
込んでいたところだった。

「そうかしら？」

それで一馬君、いつになったらうちの智香のこともらってくれるの
〜？

はやく一馬君のこと息子って呼びたいんだけど〜」

ツツー！な、何を言ってる！！

「お、お母さん！！何いってんだよ、もう！！？」

「あら、智香こそ何言ってるの〜？

お母さん息子にするんだったら絶対に一馬君しかイヤなんだけど〜
？」

「いや、娘の相手を京香さんの一存で決めちゃダメでしょ。」

そ、そりゃあたしだって一馬以外なんていやだし、今のところ一馬
以外の男子なんて

興味もないけどまだあたし達16歳だしあたしは結婚できるけど一
馬はまだ出来ないって言うか

まだ彼氏でさえないので〜！！

うあ〜！！！！？

SIDE 一馬

京香さんの呆けた発言をとりあえずスルーして智香を促して二階へと上がる。

相変わらずあの人はどこかずれている。

第一俺は智香の彼氏でさえ無いというのになぜ結婚の話まで飛んで行ってしまっのか理解が出来ない。

まああの人を理解できるのなんて家の母さんか京香さんのダンナの智貴（ともき）さんくらいだろう。

「で、どうすればいいんだ、一馬？」

つと、そうだった今は智香のパソコンでThe World R：2の立ち上げをしてるところだった。

「ああ、あとは・・・つと、これでよしつと。

これでキャラを作ってジョブを選ぶだけだ。」

智香のパソコンの前から立ち上がってイスに智香を座らせて画面を見せる。

基本的な設定を終え後はキャラデザイン、PCネーム、ジョブ選びと本人が決めることの説明に入る。

「キャラ作りとPCネームは分かるよな？」

「うん、それくらいは分かるよ。ジョブってのはなにがあるんだ？」

そうやってマウスを動かしてジョブの参照をクリックする。

そこに出ていたのはR：1の時よりも若干増えているジョブの一覧だった。

「へえ、結構ジョブ増えてるんだな。」

えっと、これが斬刀士（ブレイド）、戦士系のジョブでは一番バランスがよくなって、可もなく不可も無くつてのが特徴かな。で、これが撃剣士（ブランディッシュ）。

攻撃力に優れている分移動速度が遅いのと一撃の早さが無いからどっちかという対大型モンスター用つてところかな。

次が双剣士（ツインソード）。

移動速度、コンボが一番つなぎやすい反面一撃の威力がないからR：1じゃ魔法も結構使えたんだけどR：2じゃ他のジョブとあんま変わらないみたいだ。

で、R：1の時の双剣士の要素を引き継いだのがこの妖扇士（ダンスマカブル）ってやつみたいだな。

どっちかという補助専門みたいだけど。」

そういつてジョブの画像一覧に沿って説明していく。

智香はへえ〜となんだか感心したみたいに頷いていた。

「ところで一馬は前のジョブはなんだつたんだ？」

「俺の？昔は双剣士（ツインユーザー）・・・今の双剣士だったけど後期になって拳術士（グラップラー）に変えたよ。

双剣士もよかつたけどせっかくだから拳術士もやってみたかったかな。」

R：1の時のことを思い出しながら他のジョブを見ていく。

鎌闘士（フリッカー）に銃戦士（スチームガンナー）。

呪紋使い（ウェイブマスター）の派生系の魔導士（ウォーロック）に呪癒士（ハーヴェスト）。

結構変わつてんだなジョブの方も。

「お、なんだこれ？」

「ん？ああ、練装士（マルチウエポン）か。
えっと、4ポイント以内の複数の武器を使用できるが武器の経験値
が専門のジョブよりも溜まりにくい上級者向けのジョブ。
へえ、こんなのも出来たんだなR：2つて。」

なるほど、状況によっていろいろな武器を使えるって訳なのか。
まあ専門のジョブと比べたら武器の熟練度が低いのは納得だな。
ふむ・・・

「よし、俺これにするか。
智香はどうする？」

「えっと・・・うん！あたしはこの双剣士ってやつにするよ！
素早く敵を倒す！対人戦にはこれが一番だろ！」

「まあ対人戦が目的だったら魔導士とかよりは確かに向いてはいる
な。」

そんなに対人戦も単純ではないけど。

「じゃあ智香のジョブはこれで決まりな。
さて、俺も自分のキャラ作ってくるか。」

そう言っつて窓の方に歩き出す。

一応自分の部屋の窓は開けといたからすぐに戻るし。

「おう！あ、一馬あ！お前のキャラの名前はあ？
あたしは揺光ってしたんだけど！」

こんな感じと見せられたキャラは赤い髪の女性キャラ。
何か上半身がやけに露出の高い服装だが恥ずかしくないのだろうか？
The worldの一部女性キャラってR：1の時もそうだった
けど結構露出高いの多かつたし。

「カズマ。カタカナでカズマだよ。」

R：1の時から変わらないこの名前で行こう。
そう決めて自分の部屋に戻っていった。

SIDE 揺光

キャラを作り終えてすぐにログインしたその世界は想像していた以上
にリアルだった。

自分の手のようにもう一人のあたしである揺光（ようこう）が右手
を開いたり閉じたりする。

周りを見てみると現実ではあり得ないような獣顔のキャラややけに
美形の男性や女性のキャラが話し合ったりしている。

「すっごいんだな」The worldって。」

思わず田舎から上京してきたお上りさんのように周りをきよるきよ
ると見てしまう。

「……なにやってんだよ、智香。」

そんな風にしていたら聞き覚えのある声が後ろから聞こえてきた。
振り返るとそこには黒い服の青年が立っていた。

赤い逆立った髪に蒼い瞳。顔に傷のようなオレンジの紋様がある。

服装は黒いマントみたいなのを羽織っていて中は白い皮のような服をノースリーブみたいにしていた。なんかこう、不思議な存在感があるキャラだけど結構かっこいい。というか、髪型と目の色以外が一馬にそっくりだ。

「えっと、一馬であってるよね？」

「ああ、間違いねえよ。

てかカオスゲートの前でそんな風にしてたら迷惑だから一回外に出よう。」

そう言つて一馬・・・こつちじゃカズマか。

カズマはあたしの手を引いてでっかい扉の方に歩いていった。

「おお・・・」

外に出たあたしはまた思わず声を漏らした。

夕焼けが広がる空に橋を行き来する様々なPC。

しばらく歩いて広場に出るといろいろな出店があつて結構さわがしい。

「マク・アヌも基本は変わらないけど夕焼けつただけで随分印象が変わるもんだな。」

そうつぶやいたカズマの顔を見てみるとなんだか

久しぶりに帰ってきた故郷を懐かしむみたいな顔をしていた。

「そんなに変わったのか、こころ？」

「基本は変わってないな。
でも前は水の都だったのが今じゃ悠久の古都って変わってるし夕焼け
けっただけで結構変わって見えるもんだよ。
さて、タウンでのんびりするのもいいけどいっちょフィールドに
も行ってみるか。」

「いきなり！」

まだ来て十分くらいしか経ってないのに

「何言ってるんだよ。揺光の目標はアリーナチャンピオンだろ？
だったら少しでも速くレベル上げなきゃだろ？」

全くの初心者だから最初はそんなにキツいところは行くつもりもな
いよ。」

そう言ってさつき通ったばかりの道に戻っていく。

そして大きな水晶球、カオスゲートの前に立ったカズマがこっちを
向いてすぐに何かを送られてくる。

「えっと、なにこれ。」

「メンバーアドレス。これを登録してないとパーティー組めないか
らな。」

ほら、揺光もこっちにアドレス渡してくれ。」

「えっと・・・これか。はい。」

「・・・うし、来た。じゃあ今回は俺がパーティーリーダーで行く
けどOK？」

リーダーって言われたって何にもわかんないし別にいいか。

「いいよ。任せる。」

「じゃあ・・・ここでいつか。（デルタサーバー）生い茂る
緑の 湿原」

カズマがそう言った瞬間に転送が始まり、マク・アヌからあたし達
は姿を消した。

第三話（前書き）

今回は初めてのバトルです。

正直な話書いていて結構手こずった部分も多く普段読んでいる他の方々の戦闘というのはなぜあそこまでかけるのかと今回しみじみと思ひ、改めて自分のレベルの低さを痛感しました。

今回のバトルで、結構無茶なことをやったりしております。

作者バカじゃねえの、こんなのありえねえよと言ったこともあると思います。

どうぞ温かい目でご覧になってください。

では三話目お楽しみください。

第三話

SIDEカズマ

カオスゲートからの転送が終わり俺と揺光が降り立ったのは広がる
草原地帯。

今回は無難に獣神殿の宝箱を開ければクリアーと言ったタイプを選
んだから支障はないだろう。

「さて・・・揺光、まずはザコモンスターで「あれ」、君たち初心
者?」「・・・」

揺光に話しかけていると男女二人組のPCが突然話しかけてきた。

「えっと、そうですね・・・」

「へえ、ようこそ、The Worldへ!!」

俺たち今初心者へのレクチャーサービスつてのをギルドでやってる
んだけど、どう?
受けてみない?」

・・・ホントかよ・・・

R:1の時と違いこのR:2ではフィールドでのPK(プレイヤー
キル)が制限されていない。

このせいで止めていってしまうプレイヤーも少なくないらしいが・
でも実際初心者支援ギルドつてのもあるけど・・・でもなんかこ
いつら違う気がするな。

さて、こいつ「あ、そうですね?じゃあお願いします!」って、

「おい、なに普通に頼んでんだよ。」

相手を疑いもせず頼んでいる揺光を引き寄せる。
初対面の、相手をいきなり信用するなんていくらなんでも無防備すぎるだろ。

第一こんな初心者用のフィールドに待ち構えている時点で大分怪しい。

「何言ってるんだよカズマ。せっかくレクチャーしてくれるって言うてんだから

素直に受ければいいじゃないか。」

「そうそう、その彼女の言うとおりだって！」

第一ギルドでやってることだから遠慮しなくても大丈夫w」

そう言ってくる女性キャラ

・・・まあ、PKだとしてもこんな完全初心者用のフィールドにいるくらいのやつだったなら何とかなるかな・・・

「・・・分かりました。」

じゃあよろしくお願いします。」

「はいはい、こちらこそ！」

あ、おれsinyaね。よろしく！で、こっちがアンナね」

「よろしくねw」

「あたし揺光ついていいいます！」

「・・・カズマです。」

お互いに名乗りあつてフィールド散策することになった。
さて、ホントにただの親切なプレーヤーかそれともPKなのか・・・
まあその時はその時か
そう区切りを付けて彼らについて行くことにした。

SIDE 揺光

「・・・と、こんなもんだけど質問は？」

「いえ、大分分かりやすかったです。な、カズマ。」

「ん？ああ、そうだな。大分分かりやすかったですよ、sinya
さん。」

「ハハハ、ならよかった。それとさん付けはいらさないから。
呼び捨てでいいから。」

「やっぱいい人だなこの人。
最初はなんだかカズマが警戒してたから悪い人なのかと思つたけど
戦い方とかも結構詳しく教えてくれたし、モンスター倒したりする
のも手伝ってくれたし、
やっぱ頼んで正解だったみたいだ。」

「（やっぱいい人達だったみたいだな。）」

「（・・・さてな。一応信用しきるのは止めとけよ。」

何となく怪しい感じもするから。」

カズマにささやくと逆にそう返された。

なんだよ、せつかく親切にしてくれてる人たちなのに失礼なやつだな！

そんな風に思っているとアンナさんにどうかしたのかと訪ねられてしまった。

さすがにカズマがあなたたちを疑っているんですなんて言えるはずもなく何でもないですと誤魔化した。

まったく、何であたしがこんな風に誤魔化さなきゃいけないんだよ！そう思っただけカズマを少しにらみつけていると神殿らしきものが見えてきた。

「お、アレが獣神殿ね。」

獣神像の前の宝箱を開ければこのフィールドのクエストはクリアだよ。」

そう言われて獣神殿の中に入り宝箱の前に近寄っていく。

よし、これで初クエストはクリアーだな！

「ホント、ありがとうございます。」

こんなにお世話になってどうお礼したらいいですか？」

やっぱりあの宝箱の中のアイテムとか渡した方がいいよな！

「イヤイヤ、いいよ別にお礼なんて！」

「そうそうwだってこれからあたし達の

目的に付き合っただけだからさ……」

え？

疑問に思った瞬間にあたしはカズマに突き飛ばされた

「ウワツ！いきなり何すんだカズ「チツ！！よくよけたなテメエ・・・！」ツ！」

ア、アンナさん・・・？」

そこにはさつきまであたしがいた場所に剣を突き刺しているアンナさんと同じく剣を構えて笑っている

sinyaさんがいた

SIDEカズマ

はあ・・・やっぱり思った通りになったか。

俺はさつきまでの善人面を止めたsinyaとアンナを見据えて拳を構えていた。

チラツと揺光を見てみるがまだ混乱しているようで尻餅をついたままあの二人を見つめている。

「しっかしよく今のかわしたな。

いつも初心者ならここまで親切にしてやったら完全に油断して普通に斬られるんだけだな。」

「・・・べつに、警戒してればかわすくらい問題ないだろ。」

「へえ、キミ初心者のくせに私たちが君たちをPKしようとしてたことに気づいてたんだ！

いつから？」

「！PKだったの・・・！！！」

「・・・最初から。こんな初心者用のフィールドにいて待ち構えてたみたいなタイミングで話しかけられたら普通は警戒するだろ・・・」

ようやく事態を飲み込めたのか双剣を取り出して構える揺光。

まあ完全に初心者揺光じゃとつさに反応しろなんて無理な話だったから結構立ち直るのは早いほうか。

「なんでこんなこと・・・！あんな親切にしてくれたのに・・・！」

しかしまだ信じ切れないのか弱々しくアンナに問いかける揺光

まあこういつたタイプの奴らは楽しいからってのが全てで他に理由なんて無いと思うけど。

「ハッ！！バツカじゃないの！あんなの相手を油断させるための演技だっつうのw

第一ホントに初心者の支援なんてやってるヤツなんか只のお人好しでしょw」

そう揺光の言葉を笑い飛ばすアンナ

まあ確かに有効だよな。初めて来たゲームであそこまで親切にされたら大抵のヤツは油断するはずだ。

俺の場合はただR：1の時の経験から警戒していたから分かっただけで今回がはじめての揺光は完全にあいつらを信じ切ってたし。しかし・・・

「だからさあ、親切にしてやった代わりにいっ・・・俺たちにキルされるって事だよ！！」

ハハハハハッ「喋りすぎだよ……!!」「ツツぐわ!!」

笑い声を上げていたsinyaの顔面に思いっきりスピードを乗つけた拳を叩き込む

2、3メートルほど吹っ飛んだsinyaから目を離し俺の突然の攻撃に驚愕しているアンナへ注意を移す。

「sinya!!このっ!?!」

遅え!!大振りで向かってくる剣をすれすれで躲し……

ガッ!!

刀身の腹に拳を当て軌道をそらす

「んな!!」

初心者ではあり得ない挙動に目を見開いているアンナに拳を固め!!放つ!!

「フツ!オラア!!」

「ガハッ!!く、テメエ……!ホントに初心者かよ……!!」

応える義理は……ない!!

体勢を立て直せないうちに連続で拳を当てに行く

痛みは感じなくてもPCの動きは止まるからな

そうして何発か当てた後即座に距離をとる。

ブンッ!

「チイツ！後ろに目でも付いてんのかテメエは・・・！！」

実際はそろそろこっちに戻ってくる頃だと思っただから下がっただけだが。

しかし・・・

（やっぱりレベル差がありすぎるな。そんなに削れていないか。）

sin yaの方は10くらい、アンナの方は30くらいだな。

「チクシヨウツ・・・！初心者がなめたことしてくれてんじゃねえか・・・！！」

血走った目でこっちを見てくるアンナ

よほどこちらにダメージを食らったことが頭に來ているのだろう
ロールしていた口調が崩れて悪態をついてくる

「落ち着けアンナ！！動きは初心者じゃなくてもダメージは全然ねえ！！」

こんくらいだったらいくら食らったって痛くもかゆくも無えさ・・・
「！！」

「とか言っただけアンタもその初心者の攻撃食らってるんだから世話ねえな。」

「ツ！！テメエ！！ぶっ殺してやる・・・！！」

落ち着けと言っているsin yaの方も大分いらだっているようで、
歯を剥き出しにしながらこちらを睨んでくる。

まあ怒って動きが単調になってくれれば儲けものなのもつと怒らせるか。
つと、そうだ。

「おい、揺光」

「えー！あ、なにカズマ？」

「ポーっとしてんなよ。」

しつかり動きを見てれば避けるくらいは出来るからがんばって生き残れ。」

「ちよ、でもあたしまるつきり初心者なのに・・・！！」

「避けるくらいなら大丈夫だよ。落ち着けば必ず出来る。」

逃げ回っている内に何とかしてみようからよ。」

「で、でも！！「来るぞ！！」・・・ツ！ああもつつ、やってやる！！」

そう言っただけで叫んだ揺光に笑みを浮かべてこっちに突っ込んで来たア
ンナを迎撃する

やはりこちらに傷付けられたことが余程イラついたらしく攻撃がさ
つきよりも大分大振りだ。

こんくらいなら余裕で避けられる。

「クソツ！当たれってんだよ！！」

カウンターで何発か攻撃を当てていく内に更に大振りになる攻撃
こんなに大振りでは逆に避けてくださいって言うてるようなモンだろ

「じめん被るね！」

大きく振られた剣がブンツと風切り音を発し身体を通り過ぎた瞬間、アンナの剣を持つ右手に拳を振り下ろし剣を手放させる。

プログラムが現実には起きるであろう動作を再現させプレイヤーが意図しない動きを勝手に再現する。

こういう再現度の高さはR:1、R:2でも変わらなかったらしい

「ッ！なんで・・・！」

「そう言う仕様なんだよ・・・！」

ーアーツ発動・・・！ー

『獅子連撃！！』（シシレンゲキ）

アーツのプログラムに従ってカズマの身体がコンボを繰り出していくだがこれだけで終わるほど今の俺の攻撃力は高くない。
だから・・・！

「まだだ！！」

アーツにより硬直していたカズマを吹き飛んだアンナに飛びかからせる。

跳び落ちていく力を加えた一撃を振り下ろす！

「ウギッ・・・！」

反動で浮いた身体をアッパーで打ち上げ回し蹴り！！

その瞬間コンボがつながったことによりアンナの身体の回りに出現したリングを見た瞬間に再びアーツを発動させる。

『連撃!!』

「これで決まりだ!!」

『獅子連撃!!』

通常のアーツよりも更に威力の上があった攻撃、連撃を喰らいアンナの身体が地面へと叩きつけられる。

いくらレベル差があったとはいえこれだけの攻撃を喰って耐えられるはずもなくアンナは地面へと力なく倒れ込む。

「ガハッ!!・・・ちく・・・しょう・・・初心者なんか・・・やられる・・・なん・・・て」

そう言い残しアンナの身体は灰色へと変わる。

HPがなくなつたPCはバトルフィールドがとけるまで仮死状態となつてその場に居続ける

他のパーティーメンバーにアイテムでよみがえらせて貰うまでなにも出来ない状態で

「ふう・・・さて、揺光助けねえとな。」

SIDE 揺光

「うわ!!」

あぶな！！今かすつたつて絶対！！ちょ、また！！

カズマがアンナの方に言ったと同時にあたしに攻撃を仕掛けてきた
sinya。

今のところ何とか避けられてるけど、このままじゃ持たないって絶対！！

うわ、また近い！！

「くそ、ちょこまかと避けてんじゃねえぞこのやろっ！！」

「うっせえ！！あんたこそ攻撃してくんじやないよバカ！！」

(クッソー、PKだつて分かつてたなら言えよなカズマのやつ！！)

大きく振られた剣を間一髪避けたあたしはカズマに対する恨み言を
心の中で叫んだ。

確かに迂闊にこんな奴ら信じたあたしもバカだったけど一言くらい
言ってくれてもよかったと思う！！

うわっど！！クッソー！！

「しつこいつツーの！！」

そう言つて思わず振つた双剣はsinyaの胴体に当たつた。

！！当たる！やられっぱなしだったけど、あたしの攻撃でも当たる
じゃん！

「クッ！！この、初心者の分際で！」

ーアーツ発動ー

！！やばい、防御！！

「死ねオラア！！」

『流影閃！！』

「クウツツ！！」

防御してるのにその上からダメージが・・・！

「ハツ！！低レベルの、それも双剣士みたいな紙の防御なんざ意味ねえんだよお！！」

「うわっ！！」

強烈な一撃で防御が崩れる！！
ダメだ、やられる！！

「そら、シネヨオオオ！！」

「やらせるかよ！！」

「なに！！グア！！」

あたしに攻撃しようとした瞬間横から来たカズマの攻撃で横に飛ぶ
sinya

よ、よかった、助かった

「よう、何とか間に合ったみたいだな揺光。」

そう言って笑いかけてくるカズマは悔しいけど凄くカッコよかった。
・
う~~~~

S I D E カズマ

揺光に攻撃が当たる前に何とかsinyaに拳を叩き込めた。
あぶねえ〜、揺光のHPもう少しでなくなるところだったみたいだな。

「オセエよ、カズマ！！あたしもう少いでヤられるところだったんだぞー！！」

せっかく助けたのに何故か怒鳴られた。

ムウ、これでも結構早く来たのに。

「無茶言うなよ、レベル差考えたら十分早いっつうの。
それよりほれ。」

揺光にターゲットを合わせフィールドで拾った癒しの水でHPを回復させる

「お、ありがとー！いや〜ホントHPギリギリだったから助かるよ」
さて・・・

回復し終えた揺光からsinyaへと視線をやる。
いきなり攻撃されたからか少し混乱していたようだが俺を見ると周りを見回し仮死状態のアンナを見て
驚愕の表情を浮かべる。

「嘘だろ・・・始めたばかりの初心者にアンナのヤツがヤラれるなんて・・・!」

さて、仲間を蘇らせられると面倒だ。
一気にたたみ込む!

ーアーツ発動ー

『獅子連撃!!』

「ぐあ!!しまっ「揺光!!」ッ!!」

「おう、いくぜ!!」

ーアーツ発動ー

『疾風双刃!!』

揺光のアーツが発動し更に攻撃が決まる。
もう一撃!

揺光のアーツ終了と同時にsinyaの身体を宙に打ち上げる。

「やってやれ、揺光!!」

「了解!!」

落ちてくるsinyaの身体を連続で斬りつける。
あと少し!!

「くそ、テメエら、調子に」のらせて貰うぞ!!」「ぐお!!」

拳を一撃放つと同時にアーツの待機時間が溶ける
そしてそれと同時に揺光の攻撃によって先ほどアンナにも出現した
連撃のリングが浮かび上がる。
このチャンス、逃しはしない……!!

『連撃!!』

「これで……『獅子連撃!!』……止めだ、揺光!!」

「任せろ!!いくぞお!!」

ーアーツ発動ー

『疾風双刃!!!!』

「ガアア!!!!」

アーツの終了と同時にドサツと地に堕ちる *Sinya*
その身体は敗北を示す灰色に染まっていた。

「……やった……やったぞカズマ!!」

フウと息を吐き武器を収納した俺に揺光が飛びついてきた。
武器をその手に持ったまま。

「ちょ、落ち付けて!!とりあえず武器しまえって!!あぶねえ
から!!」

戦闘が終わって仲間に殺されるなんて冗談でも笑えねえ

「っと、ゴメンゴメンwでも、あたし達勝ったんだぞ！！うわ、もうレベルがあがった！！さっき始めたばっかなのに！！」

そりゃあレベル差のある相手に勝ったんだからその分経験値も多めに入ってくるよな普通。

しかし武器をしまっても興奮しっぱなしの揺光は上気した顔で詰め寄ってくる。

ほんと、リアルと同じ事すんのなお前って。

「運がよかつただけだよ。」

もっとあいつらのレベルが高かったり操作が上手かったらこっちが瞬殺されてたよ。

まあ今回のことに懲りたら今後無条件に相手のこと信じたりすんなよ。

ちゃんと相手を見て考えてからにしろ。」

「う・・・ご、ごめん」

「まあとにかく対人戦を経験できて勝てたのはラッキーだったよ。お前もよく生きてたよ。」

さて、さっさとアイテム手に入れてタウンに戻ろう。今日はもう疲れた。」

ああマジで疲れた。

そうして何とか無事アイテムを手に入れた俺たちはトランスポーターからタウンへと転送された。

第四話（前書き）

はい、第四話でございます。

今回は原作キャラが出てきます。

喋りますよ、ちゃんと。戦闘はありませんが。

そして今回この物語のキーとなるアレの手がかりが出てきます。

まあアレを手にするのもう少しあとですが。

まあ是非楽しんでください

あ、あと今回は後書きがあるので、補足の方はそちらでおこないます。

第四話

SIDEカズマ

「さて、これからどうしようか。」

タウンに戻ってきた俺たちはマク・アヌの広場で一息ついていた。まさか初日にいきなりPKと戦闘になんて事になるとは予想もしていなかったので
当初予定していたフィールドでの戦闘訓練なんて今から出来るほど揺光のヤツに気力も残っていないだろう。
只でさえこういったゲームは初めてなのにいきなりの対人戦を経験したのだ。

今日はもう落ちた方がいいかな

「揺光、今日はもう一回落ちた方がいい。」

格上相手の対人戦だ。結構疲れてるだろ？」

タウンに帰ってくるまでは元気だったが帰ってきてからは疲れが出たのか静かだからな。

「……………」

「？揺光？」

返事がない。

……只の屍のようだ、とでも言つべきなのだろうか。

少し不振に感じて目の前で手を振ってみる。

……反応がない。

「・・・寝落ちか？」

そう判断し一端HMDを外し俺の視界がThe worldから元の俺の部屋へと移る。

SIDE一馬

HMDを外しベランダから智香の部屋の窓を叩いてみる。
・・・返事が返ってこないな。

「智香、入るぞ。」

一応断ってから窓を開ける。

小学校の頃まではほぼ無断でお互い出入りしていたんだがある時智香の着替える場面に遭遇してエライ目に遭ってからは断りを入れてからにしている。

そして中に入るとHMDをしたままスウ・・・スウ・・・と寝息をたてて机に突っ伏している智香がいた。

「全く、まあこんなこったろうとは思っただけだな。」

そう腰に手を当てて呟くとパソコンを操作して揺光をログアウトさせる。

そしてHMDを外し肩と膝裏を抱えベットまで運ぶ。

「よっと・・・思ったより軽いな。」

普通人一人をこうやって運ぶのは大変である。

よく漫画なので普通にしているこれ・・・要はお姫様抱っこと言うヤツであるが、

実際やってみると人というのは案外重いもので、特に寝ていて意識がない状態の人は意識があるときと比べて自分で身体に力を入れられないため意識があるときと比べると大分重い。

最初はもう少し重いだろうと想定していたので、このくらいだったらベツトくらいまでなら十分運べる。

一瞬智香の身体が動いたような気がしたが、気のせいだろう。

とにかく智香をベツトまで運び終えた俺は風邪をひかないように掛け布団を智香に被せる。

「・・・今日はお疲れさん。」

起きていないので聞こえてなんかいないだろうがそう言って智香の前髪をサラリと撫でてみる。

おおっ、予想以上にサラサラとしている。

「女子の髪ってどうしてこんなに柔らかいのかねえ・・・」

撫でていた手を離し窓へと近寄る。

窓辺に足をかけながら今日のバトルをふと思い出す

かつての自分・・・R：1の時と比べて、レベルのことを差し引いても・・・

「大分・・・鈍ってたな」・・・

かつての自分ならばもっと早く倒せていた程度の相手にあれほどの時間をかけてしまった。

R：1の時の自分ならば、正直言って今の自分など大して苦戦もせず倒してしまう。
否、”倒せてしまう”

「うーん、こりゃ要りハビリだな。」

レベル上げすつか。

SIDE 揺光

一馬が出て行ってからすぐ、あたしはベットから起き上がった。

「……ッ!!」

さっきまで撫でられていた頭がアツイ……!!
自分の顔が真っ赤になっていることなんて鏡を観なくなっただけで分かった。

(しかも……お姫様抱っこって……!!?)

「ウウ~~~~ッ……!!は、恥ずかしかった~~~~……!!」

思わず枕を抱きしめて唸っちゃう……!?

イ、イヤ、嬉しかったよッ!!

嬉しかったけど、起きたらいきなり抱っこされてるんだもんッ!!
うわ~~~~!!うわ~~~~!!!!

「……でも……」

『大分・・・”鈍ってたな”・・・』

(一馬のヤツ・・・どれだけ強かったんだろ・・・)

今日初めてやったゲームでのいきなりの戦闘。

あたしは逃げるのが精一杯だったのにレベルがあんなに離れている相手だったのに普通に勝った一馬。

あんな風に戦えるのにそれでも”鈍ってる”なんて言えるほど凄かったのかな・・・

「・・・はあ・・・」

新しいR：2に誘ったのはあたしだけだなんだか自信なくした・・・そりゃ今日始めたばっかなのに無くす自信なんてあるのかって話だけど・・・

「あんくらい強くなきゃチャンピオンなんてなれないのかな・・・」

あたしがThe worldをやるうって思った切っ掛け。

友達に見せてもらった雑誌の「アリーナチャンピオン」という文字。現実では、今の時代じゃなる事なんて絶対無理な「英雄」という称号。

今まで読んだいろいろな本に描かれていた彼ら、遙か昔にそう呼ばれた彼らのような本物の英雄ではないけれど、ゲームの中ならば現実では只の「妄想」で終わってしまう夢でもゲームの中ならば「英雄」(チャンピオン)に成れるかもしれない。

そう思っただけで、本当にそうなるには一馬みたいに強くなきゃ成れるはずもない。

そう思うとゲームを始める前に抱いていた「英雄」の座がとてつも

なく遠いことに思えた。

「……ッあ~~~~!!もう!!」

こんな考え方じゃダメだ!!

一馬だって最初っから強かったわけ無いじゃん!!

いっぱいプレーして、レベル上げて、技術磨いたりして!!

そうやって鍛えに鍛え上げた自分と比べたに決まってるじゃん!!
というか!!

「うじうじ悩んだってしかたない!!

鍛錬あるのみだ!!」

現実でも強くなるには鍛えなきゃダメなんだから、ゲームだって一
緒だ!!

「そうと決まれば修行だ修行!!」

そう言って布団を剥ぎベットから降り立つ!!

身体に鍛練!!頭に読書!!んでもって

「ゲームじゃ修行だ!!」

やるぞ~~~~!!

SIDEカズマ

「夜中に何叫んでんだあいつ・・・」

「ん？どうかしたのかね？」

「いや、リアルの方でちょっとな。しっかしやっぱりお前は居るんだな、火野。」

「八咫（やた）と呼んでくれたまえ、カズマ。しかし、キミがThe worldに帰ってきているとわね・・・」

「幼なじみに頼まれてな。正直俺自身も少し驚いてる。」

そつおどけながら言うと「キミは変わらないな・・・」と苦笑された。

修行僧のようなPCのこいつは八咫。

R：1の時の知り合いでタウンを歩いていたら声をかけられ最初は誰だか分からずに疑いのまなざしで居たのだがR：1の時のPCネーム、ワイズマンと名乗られようやく分かった。
しっかし・・・

「そう言うお前も変わらないな。」

ほんと、昔のまんまだぜ。見た目は大分違うけど。」

R：1の時からやけに皮肉った口調だったし・hackersでは参謀役だったからなー

当時まだ小学生だったのに。
リアルであった時はまさか同じ年頃だとは思ってなかったからマジで驚いたなー

「けど、よくこのPCが俺だって気付いたな。」

名前だけで大分外見も違ってるのに。」

R：1の時は青年型じゃなくて少年型のPCだったし。

「なに、今は少しばかり使えるものが多くてね。

懐かしい顔なじみが居たようなので少し声をかけてみただけだ。」

「あっそ・・・

で、相変わらずThe worldの謎とやらを追いかけている訳か？」

R：1の時からThe worldの不思議な現象に見せられていたらしく

「賢者」とまで言われるほど詳しくあったからなあ。

しかしそう尋ねかけた八咫はどこか思い詰めたような表情で逆にこちらに尋ね返してきた。

「・・・カズマ、一つ聞いてもかまわないか？」

「ん？なんだよ、改まって。」

「・・・The worldは、かつて私たちが命をかけてまで救う価値が本当にあったのだろうか・・・」

「？なんだ、それ」

突然の、それも予想もしていなかった問いに逆に尋ねてしまう。

と云うかはじめてこいつにこんな質問されたな。

R：1の時は逆にいつもこちらが質問する立場だったから不思議な感じだ。

「このR：2ではかつてR：1でプレイしていたプレイヤー達ほとんど離れていく。

私たちが命をかけて守ったこの世界を平気で捨て去るような者たちが多すぎるとは思わないか？

これではかつて勇者達が命をかけて守った意味すら無いのではないのだろうか……」

ふむ……

まあつい昨日まで戻ってくる気の無かった俺がとやかく言えることでは無いと思うのだが……

「八咫、お前……」

はあ……と一息入れて思ったことを口に出す。

「バカじゃないのか？」

「……なに？」

予想外の答えが返ってきたのだろう。

珍しくこいつのびっくりした顔が見れた。

「確かに俺たちはかつて本当に命をかけて戦った。

モルガナ八相、クビア。

どれもこれもホントに命がけだった。

そりゃ今のこの世界を見たら疑問に思うのも分かるぞ。」

今日仕掛けられたPKのことを思い出す。

R：1の時にはなかったあの要素でただ楽しんだりすることが困難

になったのかもしれない。
けどさ・・・

「あのおとき、俺たちはこの世界を守るかに値するかなんて考えたか？」

「ッ！！」

「あのおとき俺たちはただあの世界を守りたいと思った。
いろいろな人たちがいて、いろいろな楽しみがある。

知らない人たちと笑いあったり、ぶつかり合ったりするあの世界を
ただ守りたいと思ったんだろ？」

誰かに頼まれたからとかじゃなくて、ただ俺たちがそうしたかった
から。

誰かの為だったりもしただらうけど・・・」

それでも

「俺たちはあの世界を守るに値すると信じたから守ったんだ。
今更そんなこと疑ったって仕方ないだろ。」

まあガキみたいな英雄願望が無かったって言ったら嘘になるけどな。

そう付け出すと、唾然としていた八咫は俯いたかと思っていたら身
体を震わし突然笑い出した。

「フフフフ・・・ハハハハハッ！！！」

そうだったな・・・私たちは守りたいと思ったから命をかけて守っ
たのだったな。

今更”守る価値があったか”などと考えても仕方のないことだ・・・

「
そう言うところかすっきりした顔で目を合わせる。

「カズマ、感謝しよう。」

おかげでどこかスッキリとした気分だ。」

「あっそ。別に感謝されるようなこと言っただつても無いから別に礼なんていらないけどな。」

「フツ、本当にそういう所も昔と変わらんな。」

「ヘツ、どうせ俺はガキのまんまだよ。」

そういつた俺を未だに笑いながらそう言うなと行ってくる八咫。俺がガキっぽいんじゃないや無くてお前が年不相応なだけだろうに。

「ともかく、これは礼だ。受け取ってくれ。」

そう言うて俺にメンバーアドレスとエリアサーバーを送ってくる。

「ハイよ・・・なんだよ八咫、お前セカンドPCどころかサードPCまでもう作ってるのかよ。」

渡されたメンバーアドレスには八咫の他に直毘、檜というPCのアドレスも付いていた。

「仕事用でね。」

必要だったから作ったまでだ。

それと送ったエリアサーバーは未だ発見されていない君にぴったりのレアアイテムがある。
是非行ってみるといい。」

「・・・あのよ、俺未ださつき始めたばかりの初心者レベルなんですけど。」

「なに、レベル適正値はたったの30程度だ。
君ならばあつという間だろう。」

何なんだろうなその無駄に確信に満ちた顔は
こちらはまだレベル10にさえ到達していないのにいきなり30か
・・・こりゃあマジでレベル上げていかないとな。

「ああ、言い忘れていたがそのエリアのレアアイテムは期間限定で
な。

隠しサーバーなので早めに行かなければ消えてしまうぞ。」

オオオイ!!!

「期間限定っていつまでだよ!!!」

「確か明日の深夜0時までだ。」

「あと28時間!!!」

なんつう無茶ぶり!!!クソ、すぐにレベル上げ行かねえと!!!」

なんで昔っから俺に渡す情報はいつも期限ギリギリなんだよあいつ
は!!!

そう思いながらカオスゲートにかけていく。

最低でも明日中にレベルを20そこそこまで上げなくては！！

SIDE 八咫

「フ・・・守りたかったから・・・か」

久しぶりに会ったかつての仲間、カズマ。

昔は突撃思考の単純な性格だったが思い出してみればその性格のせいかあのカイト達でさえ引つ張っていくこともあった。

そんな彼に問うた私の抱える疑問。

”この世界は命をかけてまで救う価値があつたのか”

そんな私の疑問に彼はあのとときの私たちの気持ちを語った。

”誰かに頼まれたのではなく、自分たちが守りたかったから”

「・・・たしかに私たちはそう思ったからこそ命をかけたのだつたな。」

至極単純だった。

今考えてみれば悩んでいたことさえ馬鹿らしく思える疑問。

そうだな。

他人がどうこうではなく自分がどうしたいか

只それだけだったのだ。あの頃の私たちは。

「・・・八咫様。」

「パイか。どうかしたのかね？」

背後から近づいてきた女性型のPC、パイ
有能な彼女は今私が抱えている仕事の補佐として私の下に付いてく
れている。

・・・まあ監視と言った面を隠しきれないでいるが有能な女性だ。
少々露出が激しすぎると思うがね。

「上層部の方々が通信を求めてきています。」

「フ、やれやれ。」

お偉方もこんな時間までご苦労なことだ。」

そう呟くと@ホームへと歩き出す。

さて、疑問が一つ晴れたところで、また謎を追究してみるとするか。
そうだ、私はこの世界を

”愛しているのだから”（しりたいとおもっているのだから）

第四話（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか？

今回出場していただいたのは八咫さんです、はい。

正直私はゲームで八咫を使用したことが一回しかありません。

それも私が選んだのではなく物語の都合上仕方なくパーティー加入となった一回のみです。

そんな八咫ですが今回はG・U・発足以前、それもまだ八咫がC・C・社と契約を交わしたばかりの時とさせていただきました。

ちなみに調べれば分かることなんですがこの頃未だ八咫は直毘を作っていません。

しかしこの作品ではこうしないと後々面倒なことになるので作っているとさせていただきました。ご了承ください。

余談ですがジーユーのパソコンでは「やた」と入力しても「八咫」と変換できません。一回一回「や」と「しせき」と入力しないと「八咫」と出ません

ちなみに出ないのは「咫」この文字で「しせき」とは『咫尺』こういう文字で長さのことを表すらしいです。

第五話（前書き）

はい、前回に引き続き原作キャラが出ます。

今回は会話だけでなく一緒に戦いますので。

で、今回で例のアレを手に入れるための準備がおわります。

だらだらとレベル上げの話を書いたってしょうがないので一気に省略です。

では五話目是非楽しんでってください

第五話

SIDEカズマ

「・・・眠みい・・・」

八咫から教えてもらったダンジョン攻略のためのレベル上げを始め
てから

もうすぐ22時間。

レベル高そうなエリアを重点的に回ってなんとかレベルは23にな
ったが

適正レベル34だからなー、あのエリア。

もう少し上げないとキツイか・・・

いや、それよりも半端なく眠い

ここ最近徹夜なんて全然してなかったし、一つ一つの戦闘がレベ
ル差もあって

集中して攻撃避けなきゃならなかったからよけいに疲れたし・・・

「かといって今から眠るなんて出来ないしな・・・」

ブンッ！！

振られた槍を避ける。

「ああ、眠いなつとー！！」

槍を振り切つて隙だらけのモンスターの身体に拳打を叩き込む。

連続して攻撃が当たっていく内に出現する連撃リング

「っし、もらった!」

『連撃!』

『仁王槌!!!』

つिसつき習得した新しいアーツを叩き込む

HPの2/3は削れた!あと一息!!

「ハアアア!!」

連打連打連打!!!

絶え間なく、攻撃させる隙を与えないように拳を振るう。

10発以上叩き込んだ頃、ようやくモンスターの身体が灰色に染まる。

ある程度レベルが上がったとはいえ、やっぱりレベル差が7もあると中々時間がかかるな。

「まあ後はボスだけだから何とかなるか。

なんだかねでレベルもこのフィールドで3は上がったし。」

普通ならやらない無茶をした甲斐があったってもんだな。

そう納得しボスがいる場所まで移動していると戦闘が展開されている場所に出くわした。

はて、ボスはもう少し先の筈なんだが。

そう思いながらも戦っている奴らの会話を聞いてみる。

そこには黄色い服を着た銃戦士とPKらしき3人組がいた。
なぜPKだと分かるのか？

それは・・・

「ほおくら、どうした!!」

ケストレルの副団長って言ってもその程度かよ!!」

「なんなら俺たちがなつてやろうかあ〜!!」

ギャハハハハ!!」

「クツ、寄って集って一人にこんな手こずってる割にでかいこと言うんだねえ〜!!」

そう言つて銃弾を放つが防御範囲の広い大剣を持つ撃剣士に防がれてしまう

「ハッ!!ここまで追い込まれても減らず口は叩けるんだなあ〜!!」

「そおらよつと!!」

大剣の陰から飛び出し剣を振るう双剣士。

そのスピードはそこそこ速い。

銃弾を放つ余裕もないようでもどんどん後退していく銃剣士。

「チツ、不味いなあ・・・!!」

まあこんな会話が展開されていればどつちがPKかなんて一目瞭然だよな、普通。

まるで漫画のようなベタな展開ではあるが経験値と少しでも勘を取り戻すにはちよつどいいか。
さて、そうと決まれば

「なら加勢してやるよ。」

「なあっ!!くお!!」

そう言つて黄色い銃戦士に迫っていた双剣士のPKに不意打ちで拳を入れる。

我ながら上出来なタイミングだったためきれいに入った。

「な、なんだデメエ!!いきなり何しやがる!!」

「いや、なにつてさつき言つたじゃん

こいつに・・・」

そう言つて後ろでこの状況に困惑している銃戦士を指さす。

「加勢するつてさ!!」

そう叫ぶのと同時に斬剣士へ突つ込む

慌てて剣を振つてくるがそんなんじゃ当たるわけがない。

少ししゃがみ剣を避けるとボディへ拳を叩き込む!

相手が一步後ずさり距離を開けようとするがそうはさせない

一気に距離を詰め左右に連打!

やはりレベル差があるので一気に削れはしないが元々あの銃戦士が与えていたダメージもあつてHPが残り少なくなつていたがここで

拳を振りかぶり相手を吹き飛ばす。

そして撃剣士の方を向くとちょうどこちらに突撃してくる所だった

「うおおおおー!!」

「っ!!」「バキュンッ!!」「っ!!」

「があー!!」

「おいおい、俺の事忘れちゃいないかw」

横からの銃弾に気づかずダメージを受けひるむ撃剣士

・・・正直忘れていた。

「サンキユ、助かった。」

「いやいや、こちらこそ。」

そう言いあうとお互いに相手に向き直る

最初に吹き飛ばした双剣士の方も二人に混ざり剣を構える。

目が大分血走ってるな。

「さて、じゃあ俺が双剣士と斬剣士を受け持つからそっちは撃剣士を頼む。」

「あら、いいの? てっきり俺が二人相手にすると思ってたけど。」

「別に、瀕死状態の斬剣士と双剣士。

それとダメージを余り受けてない撃剣士なら大体イーブンだろ?」

そうおどけて言うと銃剣士は笑いながら「それもそつだ」と言つて銃剣士に銃を向けた。

「さて、一丁やりますか！」

SIDEクーン

(しっかし、どっかの正義の味方みたいな展開だな、こりゃ。)

適当にふらついていたら3人のPKに絡まれていた俺。

そんな俺に加勢する男。

端から見たらホント、どこの正義の味方だよって言いたくなるな。

そう思いながら銃弾を放ちPKの一人を牽制する。

そんなに防御力高くないんだから大剣の攻撃なんて願い下げ打だよつと。

「チツ！！テメエ、逃げてんじゃねえよ！！」

「イヤイヤ、普通に戦ってるじゃん、こうしてさ！！」

振るわれた大剣の範囲よりも後ろに下がりながら銃弾を放つ

さつきまではこうしたらすぐに防御に入って全然ダメージを与えられなかったけど

おまけにこの後すぐに双剣士か斬剣士が攻撃してきたから避けるので精一杯だったからな~~~~

けど・・・！！

バアン！！

「一対一ならどうってことないぜ！！」

放った銃弾はさすがに防がれる。

まあ何度も当たってはくれるわけ無いしね。

そう思いながら何度か銃弾を撃つけどガツチリ剣を盾にして攻撃は防がれちまう。

でも、そんな風にしてると・・・！！

「横がから空きだぜ！！」

そんなでつかい剣で前を塞いでたらこつちの動きなんて見えるわけも無いしな！！

横に回り込み今度は銃撃じゃなくて銃剣で攻撃する。

俺の銃剣、水銃剣・旗魚丸は普通の銃剣よりも近接の攻撃力は高いんだぜ！！

「そおらよつと！！」

「ぐお！！ちくしよ、このヤロオ！！」

悪いけど、もらっぜ！！

連続して当たった攻撃でやつの上に連撃リングが浮かび上がる。

『連撃！』

『雷光閃弾！！』

「ぐあああー!!」

連撃によってダメージがHPを削りきって相手PKのボディが灰色に染まる。

ふう〜、何とか勝てたか。
つと、いけねえ。

「あいつの手助け・・・ってあらっ?」

助けてくれた拳術士らしきPCを手伝おうと思って見てみると斬剣士の方はすでに終わってて

双剣士に止めを刺そうとしてるところだった。
いやあく思ってたより・・・

「強かったのね、あいつ。」

味方になってくれてよかったー

そう思ったときにはその拳でPKを空中に殴り飛ばし止めを刺していた。

SIDEカズマ

『仁王槌!!!』

「ガアア!!!・・・ちく・・・しょう・・・」

地面にPKの身体が力なく横たわりバトルが終了する。
さっきの銃剣士の方は別に心配するまでもないだろう。
3対1でも渡り合ってたんだ。
1対1ならば余裕だろうな。

「よう、お疲れさん。いやあ、助かったぜ、マジで。」

そう言っただけで武器をしまった俺に近づいてくる銃剣士。

そいつの方を向いて別にたいしたことじゃないと言っただけで苦笑しながら謙遜すんなよ

と言ってくる。

実際そんなたいした相手じゃ無かったんだが。

攻撃してくるモーションはプログラムに頼り切ったものだったし、斬剣士の方は最初に与えられたダメージを何とか回復しようとしてアイテムを使おうとしていたから一気にアーツを使って接近。

そのまま連続して拳で攻撃していたらすぐにダウンしたし、双剣士の方はカウンターを合わせていたら

すぐに焦りだして決まるはずのない場面でアーツを使ってくる。

それにカウンター気味にこれまたアーツを使ってみればすぐに終わった。

そのとき双剣士の顔があり得ないと言った顔をしていたが、別にあり得ないことなんかじゃない。

相手がアーツを使ってくるって分かっていたら別にアリーナじゃないくっただけでこのくらいの芸当は普通に出来る。

システムに頼り切った戦いをするからダメなだけで腕のあるヤツならば普通に出来るはずである。

「とにかく助かったぜ。」

俺はクーン。見ての通り銃剣士だ。」

「カズマ。見た目通りの拳術士じゃなくって練装士だがな。」

「練装士！よくあんな使いにくそうなジョブ選んだな！」

「一番人気のないジョブだぜ、それ。」

「だろうな。」

まあ選んだ理由がおもしろそうだったってだけだったし。

それに腕があれば問題ないしな。」

そう言うとクーンのヤツは思いもしなかった返答に一瞬固まり、そしてすぐに笑いながらこちらの肩を

叩いてきた。

「ハハハハ！おもしろいヤツだな、アンタ。」

気に入ったぜ！あのさ、もしよかったらこの先のボス一緒に倒さないか？」

「いいのか？別にお前のレベルだったらわざわざ付き合わなくても十分倒せるんじゃないか？」

「いやいや、そんなことねえよ。」

ここのボスって入ってくる経験値も多いらしいけどそれ以上に手強
いって話だしな。」

それに、カズマみたいな腕のいいやつと一緒にの方が楽に終わりそう
だろ？」

そうおどけて言ってくるクーン。

なるほど、悪いやつじゃなさそうだし何より俺が一番助かる提案だ。

「いいぜ、乗った。」

「そうこなくつちな！じゃ、前衛よろしく！」

「そつちも援護頼んだぜ？」

そつ言つて突き出された拳に同じくこちらも拳をゴツンと当てる。さて、さつさとボス倒しますか。

「クーン、さつさと撃てつて！！」

「そつせかすなつて！！いくぜ、『雷光閃弾！！』」

クーンのアーツによる銃撃に怯むボスモンスターであるドラゴン。ボスモンスターにふさわしいその凶体はこちらの拳ぐらいじゃびくともしない。

確かに俺一人では苦戦したであろうが今は頼もしいことに後衛であるクーンの援護射撃により

離脱せずにインファイトを十分仕掛けることが出来る。

ボスにぴったりとくつつき拳を連続して叩き込む。

中々今までのザコモンスターのようにすぐに連撃リングが浮かび上がったりはしないが、

もうそろそろ・・・！

「カズマ、出たぞ！！」

「よし！！」

『連撃！！』

『仁王槌！！』

クーンの声で連撃リングが浮かび上がったことを確認した俺は間髪入れずにアーツを発動する。

連撃が決まり大きくHPが削られ後退するボス。

そこに連撃リングが消えそうになった瞬間、クーンのアーツが発動した。

「俺も行くぜえ！！」

『連撃！！』

『撥球弾！！』

(上手い！やっぱりクーンのやつ、腕はかなりいい！)

今まで回ったクエストでも何人かと組んでボスと戦ったりしたが誰もこの連撃が成功した後の更なる連撃を決めたプレイヤーはいなかった。

確かにホームページもマニュアルなどでは「連撃は原則として一回につき一人のプレイヤーしか出来ない」と記されていたが、腕のあ

るヤツは連撃リングが存在している間に何度か決めることが出来る。実際今クーンがやって見せたのがその証拠でシステムだけに頼らずにプレイヤーの腕があるならば可能なことだ。

それがThe worldと言うゲームが高い人気を誇る理由でもあると思う。

プレイヤーの腕次第でどこまでも広がる可能性。

そう言った普通のゲームにないこの要素こそがThe worldの奥深さと言うヤツだろう。

「これで・・・」

クーンの連撃が終わり地面に落ちるボス。

後一撃、大きなダメージを与えれば、決まる。

そう判断した俺はボスへと駆け出し右拳を振りかぶる。

ボスがそれに気づきブレスを放ってくるが、当たる直前に真上に飛び上がり回避。

そのまま一回転し、遠心力をつけた右を・・・

「終わりだ!!」

ぶちかます!!!

我ながら見事に決まったその一撃は残っていたボスのHPを消し去り、戦いに幕を下ろした。

それと同時にボス戦をクリアしたことを知らせるBGMが鳴り響きこの戦いで獲得した経験値が表示されていく。

お、思った以上にこのエリアのモンスターは経験値が高かったようで一気にレベルが上がリ目標としていた30まであとモンスターを

一体ほど倒せば届くと言った数値まで上昇した。

このくらいで十分だな。

そう満足し、表示されていたモニターを消し去ると同じく経験値を確認していたクーンに近寄る。

「よ、ご苦労さん。援護、助かったぜ。」

「よく言うよ・・・ほとんどお宅が与えてたじゃねえか、ダメージ一人でも十分勝てたんじゃないの？」

「そんなことないさ。クーンの援護が無けりゃもつとキツかっただらうしな。」

十分助かったんだよ。」

そういうと、「はいはい、そう言うことにしておくよ。」と頭をかきながら言ってくる。

実際クーンの援護が無かったら倍近い時間とダメージを喰らってたと思う。

やっぱりソロよりもパーティー組んだ方が効率は段違いだな。

「まあとにかくお疲れさん。さっさとタウンに戻ろっぜ。」

「それもそうだな。」

そう言いあって二人でプラットフォームへと向かい、タウンへと転送した。

マク・アヌへと到着するとクーンは用事があるらしく今日はもう落ちると言っただけで別れることになった。

その際わたされたメンバーアドレスとケストレルのギルドキー。

驚いたことにクーンのやつはあのThe world最大の巨大ギルドであり多くのPKが所属しているらしいケストレルの副団長らしい。

見かけによらず、そんな巨大ギルドの副団長を務めていると聞いて驚いていたらたいしたことはいないし、ギルドの団長が放任主義らしいのでみんな好き勝手にやってくる内にそうなったのだとか何となく理解した俺はそれ以上何も言わずにクーンと別れた。

「一応目標に達したし、もうそろそろタイムリミットか。」

時間を見てみると、大体22時30分。

モンスターと戦闘することを考慮に入れるとそろそろ行った方がいい時間だ。

「揺光はクエスト行ってるみたいだし、八咫の野郎は誘っても来るはずねえな。」

クーンは用事あるって別れたばかりだしな。
「じゃあない、一人で行くか。」

そう呟くとカオスゲートにワードを入力する。

輝きし 黄金の 弾丸

「っと、じゃあまあいってみますか」

第五話（後書き）

どうだったでしょうか？

今回登場したのはG・U・の兄貴分クーンさんでした。

まあ途中の戦闘で突っ込みどころ満載だったりしましたが出来れば見逃してください。

さて、次回はついにアレを手に入れるために八咫から教えてもらったエリアへと向かいます。

そこであの人と会う可能性も・・・！

まああるかもしれませんが

とにかく次回をお楽しみに
では〜

第六話（前書き）

今回はダンジョン攻略前編です。

途中にさすがにありえねえだろ、と言っ突っ込みどころがありますが
できればスルーしてください。

とにかく今回も楽しんでいってください。

第六話

SIDEカズマ

カオスゲートから転送され、目の前に広がっていたフィールドはThe worldにしては珍しい廃墟のようなエリアだった。さすがに近代的な建物などはなかったが中国風のエリアなのだろう、朽ち果てた柱や像がその名残を残していた。

「さて、さっさと行きますか。」

こんなところで突っ立ってたっしょうがないしな。そう結論を出しエリアを歩き出す。

最初の広場は特にモンスターも出ずにアイテムを回収して通過する。てっきり最初から戦闘があると思ってたからまあラッキーだ。

二つ目の広間には……

「なるほど……これはやりがいがありそうだな。」

三匹で一グループのモンスターが大体四組。

全く、これに一気におそわれると思うと……

「腕が鳴るな、こりゃー!!」

一番近い龍人型のモンスター、リザードマンに背後から奇襲の一撃をお見舞いする。

全くこちらに気づいていなかった敵はその一撃を食らい前のめりに

倒れる。

一撃で決まるはずもないからただ倒れただけだな。

そいつは一時的に放置しただけこの状況に対応できていない二体のゴブリンへと拳を振るう。

素早く左右の拳を連打！

一体目のゴブリンを仕留めた俺はすぐさま二体目のゴブリンへと蹴りを放ちすぐさまコンボをつなげる。

右フック、左アッパー、打ち下ろすように右をぶち当てすぐさま回し蹴り！！

吹っ飛んでいくゴブリンはその身体を灰色に変え粒子となって消え去った。

しかしそれを見届けている余裕などあるはずもなくすぐさまそのまま前転でその場から離れる。

思った通りその次の瞬間には奇襲で倒れていたリザードマンがその手に持った剣でさつきまで俺がいた場所をえぐっていた。

思わず口からヒェ〜と言う声が漏れる。

あんなの喰らったら一気にHPもってかれるわ。

「さて、ここからが本番か……」

起き上がってみるとようやく事態を飲み込めたのだろう、リザードマンにゴブリン、ゴブシャーマンに

フアンーフェイスなどなど様々なモンスターが臨戦態勢で俺を見つめていた。

「いやいや、モンスターの種類多すぎやしないか……？」

そう呟くとリザードマンはそんなこと知るかとかばかりに剣を構え吠える。

「ゲウウウ・・・ガアアアアア！！」

それを合図にしたように一斉に飛びかかってくるモンスター達
ちつくしょう！マジで難易度高いな、オイ！！

「やってやらあ、この野郎！！」

やけくそ気味にそう叫び返してやり他のモンスターより早く攻撃し
てくるリザードマンの剣を

右の拳の甲で反らし左を打ちかます。

そのまま右を思いつきりぶち込んでやるとすぐさま右側から突っ込
んでくるゴブリンを左の回し蹴りで吹き飛ばすとそのままの勢いで
逆側から突っ込んできたゴブリンリーダーの顔面に思いつきり拳を
ぶちまけ、そのままコンボ数を上げていきそのボディを灰色へと変
えてやる。その場をすぐに飛び退くためバックステップを踏む。

そこに光の矢・・・ファニーフェイスが放ってきたレイザスが突き
刺さり光が四散する。

しかし止まっていればいい的になるだけなのですぐに駆け出しファ
ニーフェイスとの間にリザードマンを入れ遠距離攻撃に対する壁と
する。

もちろんリザードマンもタダで壁になっってくれるはずもなく後ろに
回り込んでいた俺を薙ぎ払い追い払おうとする
だけどそんな簡単には離れてやらん！

「オラアアア！！」

右のストレートを叩き込みリザードマンの動きを封じるとすぐさま
左、右、左、右そしてハイキックなど

攻撃を絶やさずリザードマンの動きをそこに固定する
そうしていく内に出現する連撃リング。

もちろんこのチャンスを逃すはずもない！

『連撃！』

『獅子連撃！！』

発動したアーツによりガリガリと削られていくリザードマンのHP。そしてそれがついに0になった瞬間背後からゴブリンが飛びかかってくる。

とつさに反応するがアーツ終了時の瞬間的な硬直時間なため避けきれず剣が背中を直撃する

大したダメージではないもののこの数のモンスターを相手にしているため油断は出来るはずもない。

すぐさま攻撃してきたゴブリンを倒すと再びその場をステップで移動する。

そのすぐ後に再びレイザスが突き刺さり今度は岩の固まりが降ってくる。

ゴブシャーマンのガンボルクか。

ホント、後衛系のモンスターは邪魔だな。

「グオオオオ！！」

三度剣を振り下ろしてくるリザードマンの横を駆け抜けゴブシャーマンへと突撃する。

「ゴ、ゴブツッ！」

驚いたのか慌て始めるゴブシャーマン。

しかし、C・C・社仕事細かいな。

そう思いながらスピードを乗せた拳をゴブシャーマンの顔面に打ち

込みそのまま連打。締めに関転蹴りを放つと「ゴブ〜」という声を残し吹っ飛んでいくゴブシャーマン。
いや、ホントC・C・社ががんばったんだな。

「つと！」

手にした斧で斬りかかってくるゴ布林リーダーを逆にカウンターで吹き飛ばすと
こちらに背を向け遠ざかろうとするファニーフェイスを捕らえる。

「行かせるかよ・・・!!」

足に力を込め一気に解放する。

すると現実では出ないような加速で一気にファニーフェイスへと辿り着く。

ファニーフェイスは飛行していて普通では攻撃は届かない。

しかし届かないのなら・・・!!

「届かせるだけだ・・・!!」

ダッシュの勢いを乗せたままファニーフェイスの手前で真上へと飛び上がる。

そのまま一回転し踵をファニーフェイスのにやけ顔にめり込ませる!

「ヒギイイ!!」

そう不快な鳴き声を発して地面へと落ちていくファニーフェイス
しかし一撃だけではあいつを地面には落とせはしない。

それにいつまでも空中にいれば他のモンスター達への恰好の餌だ。

(やつてみるか・・・！)

空中で向きを変え手を斜め上に伸ばす。

そしてアイテム覧から一つのアイテムを取り出し空中に放つ！！

「いくぜ、レイザス！！」

右手から放たれる白い光の矢。

しかしそれは敵を貫くためではなく・・・！

「反動を利用してテメエを追いかけるためだ！！」

レイザスの反動で空中に浮いていた身体が一気にファニーフェイスの後を追う。

やっと踵落として与えられたスピードが収まったのかこちらに向き直ったファニーフェイスの顔には

笑顔以上の驚愕が見て取れた。

「そおらよつと！！！！！！」

そのまま身体をねじり、前のエリアでボスに見舞ったように遠心力を付加させた拳を叩き込んだ。

するとファニーフェイスの周りにつむじ風のようなグラフィックが現れヤツから飛行能力が失われた。

「空を飛べないお前なんざ・・・！！！！」

再び一足飛びでファニーフェイスに接近し足を振りかぶる。

「ただのにやけたキモいやツなんだよ！！！！」

そのまま跳び蹴りを喰らったファニーフェイスは「ヒ・・・ギイ・・・」
「と言いきれなくなり消えていった。」

「よし、後はお前らだけか。」

眼前で剣を構えるリザードマン、ゴブリンリーダー、ゴブリン二匹とゴブシヤーマンを見つめながらステップを踏む。
心なしか最初よりもびびっているような印象を感じるが、そんなことはどうでもいい。

「さっさとケリ、つけさせてもらっせ、おまえらあ！ー！」

そう気合いを込めて叫び、怯んだように後ずさったりリザードマンへと飛びかかった。

結局あの後はずんざんとリザードマン達を倒しきり次の広場へと到着した。

そこには二体の大型モンスターが徘徊していた。

「うげえ、大型が一度に二体かよ・・・」

やけにでっかい顔で舌を地面に垂らしながら歩くギガマウス。それと両手にでっかい砲塔をつけたガンジャイアント。とくに驚異的なモンスターでは無いものの二体同時となると中々にめんどくさい。

マジで難易度高いつてこのクエスト。

そう思いながらも進まなければならぬので諦め背後を向いているギガマウスへと武器を装備し不意打ちをかます。

「グオ？」

「ち、やっぱり図体がでかいと大剣じゃないときついな。」

大したダメージを負った様子のないギガマウスは何をされたかよく分かっていないと言った様子で首を傾げている。

地味にイラツとくるな、あれ。

ガンジャイアントの方も俺に気づいたようでドスンと音を立てながらこちらに向かってくる。

仕方ない。

「お前からさっさと片づける。」

舌を振り上げ攻撃しようとしてくるギガマウスの舌を横に飛ぶことで躲しその舌を踏んづけ顔を俺の目の前に固定する。

まさかそんなことになるとは予想もしていなかったであろうギガマウスはどうしたらいいのかと言った様子で困惑しているがそんなこと知ったこっちゃない。

問答無用で両拳を固めひたすらに連打。

ガリガリとギガマウスのHPが削られていくなか後ろから聞こえていたガンジャイアントの足音が停止した瞬間踏んづけて固定していたギガマウスの舌をあっさり離しギガマウスの顔を駆け上がりギガ

マウスの背後を取る。

その瞬間ガンジャイアントからの衝撃砲がギガマウスに直撃する。想定されていなかったその大ダメージによるけるギガマウスだが俺がいることを忘れてもらっては困る。

背後から再び拳を振るっているとダメージとコンボ数が一定以上に達した瞬間、連撃リングが出現する。

もちろんこのチャンスを逃すはずもなくすぐさま連撃を発動し、大ダメージを与えた。

しかしそれで気を抜けられるはずもなく連撃の硬直時間が解けると共にギガマウスのその狙いやすい頭を回し蹴りで吹き飛ばす。

それと同時にガンジャイアントがこちらにその砲塔を向けてくるがさっきの戦闘で使った方法はアーツを使っただけなのでアイテム使用禁止時間がまだ継続されていたので出来ない。

とっさに腕を身体の前で交差させ防御体勢をとるがさすがに大型モンスターの攻撃だ。

一気に10メートルほど吹き飛ばされ地面に叩きつけられるが受け身を取ってすぐさま起き上がる。

「ち、さすがにダメージがでかいな・・・」

練装士は1stフォームでは軽装の防具しか装備出来ないので防御力がそこまで高くない。

さすがに後衛の魔導士や戦士系の中で一番防御力の低い双剣士ほどではないが低い分類に入ってしまう。

そんな防御力で大型モンスターの攻撃を受けてしまえばそう長くはもてない。

「さつさとギガマウスの方だけでも仕留めないとな。」

そう頭を切り換えると起き上がり頭を振っているギガマウスを見る。

さっきまでの攻撃でそこそのHPは削れた。
最初みたいにガンジャイアントの攻撃を利用できればいいのだがそ
う簡単にはいかない。
となると・・・

「普通に倒して、それからこいつだな。」

両拳を胸の前でガンツと打ち合わせ気合いを入れる。

さて、さつさと終わらせて寝ようかねえ！！

このあと取る行動を決めるとガンジャイアントから放たれる攻撃を
躲して舌を振り上げるギガマウスへと
突撃していった。

第六話（後書き）

どうでしたでしょうか？

さすがにレイザスで方向転換はやり過ぎたかなあ〜

と思いましたが他に思いつかなかったののでやってみました。

前回予告したあの人は今回出ませんでした。すみません

多分次かその次くらいには出ると思うのでどうぞお楽しみに〜
でわでわ〜

第七話（前書き）

今回やっとあれができてきます!!

そしてチラッとあの方も・・・?

それでは七話目、お楽しみください!!

第七話

SIDEカズマ

振り上げられた舌をかくくぐるように回避してギガマウスへ渾身の
一撃を振るう。

最初の奇襲ではびくともしていなかったギガマウスだがスピードと
回転による遠心力が乗ったこの一撃は聞いたのか一瞬空中に身体が
浮かび上がりそのまま2、3歩後退する。

その後退した分だけ距離を詰め再び拳を振るう。

確実に減っていくギガマウスのHPを確認した俺は視界の隅に映っ
たガンジャイアントの姿に舌打ちをしてギガマウスから距離を取る。
その直後ガンジャイアントの腕の砲塔が鈍器のように振るわれる。

攻撃の前に距離を取っていたのでダメージは全くないが出来ること
ならもう少しギガマウスにダメージを与えておきたかった。

そう思ったが気を取り直しガンジャイアントに向き直る。

正直大型のボスモンスターの中でもこのガンジャイアントは特にや
りにくいモンスターの一匹だと俺は思っている。

ある程度の射程を持った強力な遠距離攻撃に、その腕の砲塔を使っ
た近距離攻撃。

1対1ならばそこまでの脅威ではないが1対多になってくると途端
にやっかいなモンスターになる。

そう思っているとその腕の砲塔をこちらに向けて発射態勢に入るガ
ンジャイアント。

チラッとギガマウスを見るとちょうど倒れた状態から起き上がろう
としているところだった。

「利用させてもらうか・・・」

ガンジャイアントが攻撃する直前、くるっとガンジャイアントに背を向けて立ち上がるうとして、いるギガマウスに向かって走り出す。もちろんそんな隙をガンジャイアントが見逃すはずもなく背後から行われる砲撃。

燃えさかる砲弾が背後に迫るなか近づいてくる俺にやっと気づいたギガマウスは今度こそ俺に喰らわそうと舌を横に振り出し薙ぎ払おうとしてくるがその前に俺がギガマウスの顔面を蹴ってヤツの真上へと飛ぶ。

すると俺に迫っていたガンジャイアントの砲弾はちょうど舌を振り切ったギガマウスの顔面に直撃し、爆発を起こした。

その爆発でフラフラとしているギガマウスに俺は容赦なく追撃のアイツを発動させる！

ーアイツ発動ー

「これで沈みな・・・！」

『仁王槌！！』

上空からアイツの発動によって通常ではあり得ない速度で落下し拳を繰り出していく俺。

そしてアイツが終わりプログラムに従っていた動きが終わるとギガマウスは仰け反るようになり倒れ、光のエフェクトを発生し消えていった。

「さて、残るはおまえだけだな。」

「グウウウ・・・！！」

「グオオオオオオ・・・！！！！！！！！」

二度も自分の攻撃が利用されたのがそんなに悔しかったのかこちらに吠えて怒りを示すガンジヤイアント。
しかし正直1対1になつた今。

「お前に脅威は感じてねえよ。」

「グオオオオ!!」

そう吠えると同時に発射される燃えさかる砲弾。
しかし不意で撃たれれば脅威なそれもこうして正面から撃たれれば躲すのなんてそれほど難しくなんて無い。

余裕思つて右に回避した後一気にダッシュで接近する。

近づけまいと振るわれるその砲塔も大振りすぎて余裕だ。

ヒョイと跳び上がつて回避すれば丁度正面にある目がある部分に包帯の様なものをしているガンジヤイアントの顔

その顔を容赦なく殴つてダメージを与える俺。

追撃に空中で身体をひねり回転蹴りを叩き込みおまけでそのまま踵落としへとつなげる。

踵落として頭から倒れるガンジヤイアント。

もちろんそんなチャンスは俺は見逃さない。

そのまま落下速度を利用して思いっきり右をガンジヤイアントの頭部へと叩きつける！

「グオオオ!!」

その一撃にうめき声を上げるガンジヤイアント。

だがそんなことは一切気にせず遠慮無く次々と拳を繰り出しコンボ数を増やしていく。

しかしガンジヤイアントの方もタダでやられるつもりはないと言わ

んばかりに倒れている状態から腕の砲塔をこちらに向けて発射してくる。さすがにそんなことをしてくるとは思ってた俺はもろに直撃をもらってしまふ。

「ぐあー!!」

やべえ、油断した・・・!!」

HPの1/3程を削られガンジャイアントから距離が離れてしまふ。いつもだつたらしないようなミスだ・・・やっぱ徹夜で集中力が無くなってきたな・・・さっさと決着つけねえと、こっちが危うくなる・・・!!

「そうと決まれば、さっさと決めさせてもらふ・・・!!」

改めて気合いを入れ直しガンジャイアントへと接近する。今までと違い振り回すのではなく砲塔を頭上に掲げ打ち下ろそうとしてくる。

確かに振り回すよりかは早いだろうが・・・!!

「そんな予備動作が遅くちゃ、当たるわけねえだろお!!」

砲塔を振り下ろす前にその右腕を蹴り上げる。

バランスが崩れたことで後ろへ倒れるようにして攻撃を中止するガンジャイアント。

その間にボディへとパンチを決め、さらに拳速を早めていき、どんどん追加されていくコンボ数について連撃リングが浮かび上がる。

「っしゃ!もらったああ!!」

『連撃!!』

『獅子連撃!!!!』

獅子連撃がクリアヒットして倒れ込むガンジャイアント。

しかしそこに更なる追撃を加える!!

「おらぁ、おまけだ!!」

今まで以上に空中で回転した右の拳をそのボディへと叩き込む。

その一撃は今までの攻撃とは比較にならない数値をたたき出しついにガンジャイアントの身体を灰色に染め上げ、光の粒子へと変えた。

「お、おわった〜」

そう言って尻餅をつく。

今までの疲れが顔を出したみたいで、一気に気が抜けた〜

「っと、未だ終わってなかった。

はぁぁ・・・あと少し、がんばろう。」

肩を落としてトボトボと歩く姿は我ながら疲れ切っていたと思う。

ガンジャイアント達を倒してから約1時間。

あれから四回ほど戦闘があり、精神的にめっちゃ疲れた。

流石にあれ以降大型モンスターが二体同時と言ったことはなかったが代わりに大型モンスタープラス小型ザコモンスターと言った組み合わせが続きはつきりと言えば大型二体よりも時間を食ってしまった。

大型の場合ならばそう連続して攻撃されたりしないんだが小型と組み合わさると、

これがまた面倒だった。

大型の攻撃が終わった直後に小型の攻撃が連続して来たり、小型の攻撃中に大型の高威力な攻撃が迫ってきたりと予想以上にやっかいで一回ブチ切れてアーツを使いまくったりもした。

おかげでSPが尽きかけたりしてちよつと不味い場面もあったが何とかここまで来たんだ。

「ダメだ・・・終わったらぜつつつたい爆睡してやる・・・誰がなんと言おうと爆睡だ・・・!!」

明日は幸いにも日曜。

何が何でも8時間以上は寝る!!

「まあここで最後だし、気張るとするか。」

目の前に立ちふさがるでっかい扉。

現実でこんなのを開けようとしたらとんでもない力が必要だろうけど幸いにもこれはゲーム。

ちよつと扉をロックしてスイッチ一つであら不思議。自動で開くんです〜！

「・・・不味い、眠くて変なテンションになつてきてる・・・」

ただ扉を開くだけでこのテンション。

我がことながら気持ち悪いな。

そんな風に思っていると思つていき大広間に出る。

どんなボスが出てくるのかと思つて前を見ていると変な人型が経っていた。

「・・・？あいつがボス・・・なのか・・・？」

黒いのつぺりとした人型のモンスターなのか？

そう思いながら広間に足を踏み入れると背後の扉が独りでに閉まる。

そのまま足を進めていると突然広間に低い男の声が響き渡る

「汝、力を求めし者カ」

「・・・そうだ。」

凝った演出だな〜

「汝、何が為に力を求めル」

う〜ん、なんて言つたらいいのかな・・・

「・・・約束を、果たすために」

・・・まあ嘘じゃないしな。

「汝その力、手に入れし時、破滅を背負う覚悟有りしカ」

破滅って、穏やかじゃないな・・・

まあ、ここは無難にいこうかね。

「その破滅がどんなものでも」

右手を胸の前にかざし握る。

「それが俺の前に立ちふさがるならばうち壊すだけだ。

俺の、この拳でな。」

「ならばその覚悟、ここで示せ」

その声が響くと目の前の黒い人型が姿を変えていく。

「なるほど、ドッペルって訳か。」

そう、人型は俺、（カズマ）そっくりに変化した。

最後の敵は自分自身、てか。

このクエスト作ったヤツはあれだな、絶対に少年漫画大好きなヤツだ。

展開がお約束過ぎるし。

「まあとにかく、さっき言ったばっかだし」

拳を構えドッペルとの戦闘に移る！！

「立ちふさがるなら、ぶっ壊すだけだ!!」

俺はドツペルに気合いを入れるためにそう叫ぶと拳を構えた状態で相手の出方を見る。

しかしドツペルも俺と同じように拳を構えた状態から一步も動こうとしない。

まるで今までの俺のように相手にカウンターを仕掛けるときのように……

「……ツツ!!」

(来ないならこっちから行ってやる!!)

1分近く経ったその時ここまで連戦していた俺は持久戦にするのは避けたかったためにドツペルに向かって先に仕掛けていった。

するとドツペルの方も同じように駆けだしてくる!

そのことにやっとな動きを見せたと言う事よりもほとんど同じタイミングで仕掛けられたことに若干惑いながらも拳を振るう。

しかし予想に反して俺のモーションとドツペルがほとんど同じモーションで拳をぶつけ合う。

俺はすぐさま逆の拳を振りかぶるがドツペルもまるで鏡合わせのようになんか同じ行動を取り再び拳が空中でぶつかり合う。

(こいつ……!)

今度は拳をフェイントにしたハイキック。

しかしこれにもしっかりと合わせてくるドツペル。

すかさず身体を空中に浮かせて左足をヤツの顔面に叩き込もうとするがまた空中でぶつかり合う互いの足。

しかし俺がそこにもう一発蹴りを食らわそうとするとあいつはそれさえも合わせて同じようにかえしてくる。

「チイツ！」

地面に足が付いたと同時にステップで距離を取りダッシュで再び接近。右を振りかぶり思いっきり突き出す！！

ドッペルも同じように右を突きだそうとするがそこで何故か回転を入れたためドッペルの攻撃はワントンポ遅く中途半端な位置で当たりあい、吹き飛ばされていく。

流石にこれだけ同じ動きを、しかしどこか違和感のある動きをされれば気が付くに決まっている。

「アイツ、俺の動きをコピーしてやがる……！！！」

ぴったりと打ち合っていたあいつの動きに微妙な違和感を感じて試して試してみたがただのコピーじゃない。

さっきやった余計な一回転。あれはさっきゴブエリオンに叩き込んだときのモーションだ。

つてことは……

「さっきまでの戦いは俺のモーションデータを取るためだったてことか……」

マジで決定だな。このクエスト作った野郎は少年漫画の王道的展開が大好きな野郎だ。

しかしそれが分かったとは言えどうしようか……

今までの戦闘であらかた俺のデータは取られたと思った方がいいだろう。

となると……

「戦い方変えるのがいいかな。」

普通なら出来ることじゃないが俺なら出来る。

伊達にR：1の時にモルガナの野郎どもと戦ってきた訳じゃないってとこ証明してやるか！！

スツ・・・

「？」

構えていた拳をダランと下ろした俺に訝しげな雰囲気を出すドツペル。

しかし本当に困惑するのはこれからだぜ！

「ツシイ！！！」

「！！！」

腕を下げたまま跳び蹴りをかます俺。

今までは拳の補助で足を使っていたが今からは逆だ。蹴り主体でいってやるよ！！

「フツ！！オラア！！！」

「ツ！！ガアツ！！！」

今までに無い戦闘パターンに対応できないドツペル。

さっきまでとはまるで違いおもしろいように攻撃が決まっていく。

回し蹴り、ハイキック、ミドルキックにその場でジャンプし空中で

踵落とし。

地面に叩きつけられたドツペルにすかさず拳を叩き込む。
そうしてバウンドしたドツペルを逆回し蹴りで吹き飛ばす!!

「空中でだったら動きのまねなんて出来ないよな!!」

そのままドツペルを追走し拳を当てていく。

そして最後の1撃に動きをまねされ若干むかついていたこともあり
思いつきり空中へとアッパーでぶちかます!!!

するとその1撃で現れる連撃リング。

うっし、いくぜ!!

『連撃!!』

『獅子連撃!!』

「グオ!!」

「まだまだあ!!」

連撃によって吹き飛ばされたドツペルに俺はダッシュで勢いをつけ
そのまま空中にヤツを蹴り上げた。

そしてドツペルの後を追い、俺はヤツよりも高く跳び上がる!!

「お前には、俺を模倣なんて出来ねえんだよ!!」

そのまま数回空中で回転し、勢いの乗った踵落としを振り下ろす。
すると地面に勢いよく叩きつけられるヤツとは対照的に蹴った反動
で俺はわずかに滞空する。

そのままヤツへと落ちていこうとする身体を俺は横にひねり、弓か

ら放たれる矢の如く右拳を握りしめる！！

「これがホントの・・・」

よろよると起き上がり何とか防御をしようとするドッペルだが無駄だぜ！！

「俺の、拳だぁ！！」

ドッペルの交差した腕を上から叩き壊すように打ち下ろされた俺の拳はドッペルの防御を打ち崩し、その顔面を捕らえる。

首がねじ切れそうなほど勢いよく地面へと叩きつけられるドッペルは2、3度バウンドしたと思ったら

身体が灰色に変化し、元の真っ黒な人型に変化したと思ったら光の粒子へと代わり消え去った。

「フウウ・・・あゝ、結構恥ずかしいこと口走ってたな、俺・・・」

いつもの俺なら言わない、「俺を模倣なんて出来ねえ」発言や「ホントの拳」発言。

思い返してみるとイヤ、どこの少年漫画の主人公？と尋ねたくなるようなセリフだったな、我ながら。

さっきまでの俺を恥じていると最初の低い男の声が再び響き出す。

「汝の覚悟、しかと見届けた」

その言葉と同時に空中から落ちてくる光。

その光に手を伸ばすとその光は手のひらで弾け、何かのアイテムが出現した。

「?これがその力ってヤツなのか?」

一応しまつてからアイテムを確認する。

しかしそこには特に変化もなく何も増えていない。

変に思い武器、重要アイテムの覧を順に見ていくと一つ増えている項目があつた。

「想いの欠片?なんだこりゃ?」

一汝、更なる力を求めし時、真なる力が手に入るだろう一

そう声が響くと俺が来た方とは逆の方向の扉が開き出す。

一行け。汝が求めし力はこの先にある。一

「・・・結局これはなんなんだよ・・・」

訳の分からんこのアイテムに首を傾げながらも扉の向こうへと進む。
もういい加減限界が近い。

今にも眠りそうなのでさっさと行こう・・・

一その力、あなたなら必ず・・・一

「?なんか声がしたような・・・まあいいか。ああ〜ねみい。」

この時おれは意識が朦朧としていたからか最後の声がよく聞こえなかつた。

けどどこか懐かしい少女の声だった様な気がした。

「っと、やっとなつたぜ。」

やけに長い通路を渡り終えた俺の眼前には今までの獣神像とは違う、なんか人間だったような像の残骸があった。いや、人間みたいなんだがどこか獣のような感じもするが。まあとにかく。

「こいつがその武器かな？」

やはりこれもいつものパターンとは違い空中に浮いている金色の球。これにターゲットが合わさると言うことはこれが例の武器なのだろう。

そう思って合わさったターゲットの球に手を伸ばすと球が逆に俺の右腕に飛んできた。

「っおー！」

いきなり動いた球にびっくりしていると球が右腕全体を包み込み光り出す。

そして光がやむと俺の右腕はさっきまでの面影が全く無くなっていた。

「な、なんだこりゃ!」

敵つくなった右拳を開きながら右腕を観察する。

右手は左手よりも一回りほど大きくなり指が赤く、爪が鋭くなっていてこれだけでも十分攻撃に使えるそうくらいだ。腕は全体的に言えば金色。腕の途中から肘のあたりまでがやけにでかくなっている上に割れ目があることからもしかすると開くのかも知れない。

なんだか全体的なイメージは獣の腕って感じだな。微妙に機械的な感じもするけど。

個人的にはこういうのも嫌いではなくむしろ好きなんだがいきなり腕が変化すれば誰でも驚く。

ちなみに左腕は変化していなく、代わりに通常の拳術士が装備するような金色の護拳が装備されていた。

・・・左右対称では無いんだな。

そうして右腕を観察している内に背中に三個の赤い羽根のようなのが出来ているのに気づいた。

背中に付いているのではなく微妙に浮いているみたいだ。

疑問に想いながらさっき力の欠片とか言うのを入手した時と同じくアイテムメニューを開いてみる。

今回はしっかりと武器の覧に一つ増えていた。

そこまでは普通だったのだがこの武器の説明を読んでいく内に思わず「はああ!?!」と叫んでしまった。

「徹甲拳・シエルブリット・・・武器名力タカナのか・・・なに、かつて孤高の戦士が身につけていた伝説の武器。この武器は

所有者を自ら選び、己の選んだ者にかつて無い力を授ける。．．．
まあありがちな伝説だな。．．．その背の羽は武器を吸収すること
で3回限りの必殺の力を生むことができる。

しかしこの武器は一度装備すれば二度と外すことは出来ない。．．．
はあ！！？なにそれ、呪いの武器ってか！！？．．．うわ、マジで
はずれねえ！！」

ホントかどうか確かめるために今まで装備していた鉄拳・鼓樓を装
備しようとするが「この武器は固定されており装備から外せません
」と表示され思わず膝と手を床に着く。

「マジかよ．．．マジで呪いの武器なんですか．．．とりあえず続
き読むか．．．」

あまりの事態にテンションが落ちまくる中、再度メニューからシエ
ルブリットの項目を見てみる。

「なお、この武器は装着者と共に進化する。．．．？どどういう意味
だ？攻撃力が上がるって意味なのかな？．．．まあ、いいや。一回
落ちよう。」

そう決めると武器を収納する。

ちよつともしかしたら収納も出来ないのではとドキドキしていたが
一応収納は出来るみたいなので一安心。

そうして俺はイマイチ釈然としない気持ちで壊れた獣神像的なもの
を去り際に見つめ、プラットフォームからタウンへと転送された。

S I D E ????

カズマが去っていった直後に漂う青い光。

その光は一瞬少女の姿をとりほのかに笑みを浮かべた瞬間、まるで幻のように消え去った・・・

S I D E カズマ

「「「グオオオオオオオオ!!!」「」「」」

「ちよっ!!!ここどこだよ!!!タウンに転送された筈って、「グオオ!!!」うああああああ!!!どうなってんだ一体イイイイイイイイ!!!」

タウンに転送された筈の俺は、何故だか覚えの無いダンジョンへと転送され、モンスターの大量に追い回され、その後、3時間に渡る激闘を繰り返したのだ・・・

第七話（後書き）

はい、と言うことでやっと出てきた男の憧れ（私の憧れ）シエルブリット！！

いや、あれを初めて見たときには痺れましたね。

カズマの「衝撃の、ファーストブリットオオオ！！」という叫び声と共に放たれるあの拳！！

男なら拳で語れー！！って感じで。

まあ私一人の感想なので、お気になさらず。

さて、今回シエルブリットを出した訳なんですけど・・・武器の名前、メチャクチャですよ。

自分でも分かってるんですが良い名前が思いつかないプラスこれらの展開で

カズマ君が武器の名前を叫ぶという場面が出たりするときに

あれ以外びったり来るのがなかったって言う・・・

まあ全て私のポキャブラリーの少なさが悪いんですがね・・・

それはともかく、今回ちょっとだけ出たあのお方！！

あえて名前は出しませんが、あの方です！！今回はちょっとした複雑もありましたがそれをしっかり回収出来るようにがんばりますのででは皆さん、また次回！！

第八話（前書き）

はい、第七話です。

今回はリアルにもどって日常編ですね。

しばらくリアルとゲームを混ぜてやっていきたいと思います。

後今回少しだけAiccorの湯浅さんが出てきます。

一応Linkの七星のしゃべり方を参考にはしましたが違和感があったら遠慮なく言ってください。

ではお楽しみください。

第八話

SIDE 一馬

「やっと・・・終わった・・・」

よろよるとHMDを外し椅子の背もたれに寄りかかる。

久々のThe world、おまけにいきなりの徹夜で精神的にもうダメだ。

一日中とまでは流石に言わないが、食事やトイレなど以外の時間は全てこの椅子に座っていたため

もう身体が固まってしまっている。

一応身体を伸ばしてみるが余り効果はなかった。

「くそ、まさかあの後強制的にまた戦闘が始まるようになってるとか、あのイベント考えたプログラマーかなり性格歪んでるって・・・」

シエルブリットを手に入れた直後、いきなり他のダンジョンに転送された。しかも、その場所が、モンスターの群れのど真ん中。

あのイベントを考えたヤツは相当な陰険だっと思ってたね。

「おかげでこんな時間まで掛かっちゃった・・・でも・・・やっと寝れるぜ・・・」

フラフラと椅子から立ち上がりベットへと倒れ込む。

もう6時を過ぎてるけど、今日は日曜だから思いつきり寝る。明日の朝まで眠ってやる。異論は認めない。

明日は月曜で、祝日とかじゃないから、学校がある。

まあ、今日丸々寝れるって考えれば、どうって事無いか・・・
いい加減、眠気がヤバイ。風呂は朝に入ればいいや。徹夜直後だが、別に着替えなくても問題は無い、どうせ明日の朝になったら制服に着替えるんだ。

あとは・・・目覚ましを・・・

「グウ・・・」

SIDE 智香

「智香あゝ、朝よ。」

いい加減に起きなさいって。」

「うゝん・・・分かったつてば、もう・・・」

春と夏の境目のこの季節、暑い都心とかなら最悪らしいがあたしのすんでいるこの北海道ではそこそこの気温だ。

まあ一口に北海道といっても暑いところは暑いみたいだが幸いにもあたしの住んでるところら辺は適度な気温が続いている。

今日もそんな朝で出来ればベットの温もりを手放したくは無いだけど仕方なく這い出る。

「もゝう、全く、シヤンとしなさいよ？」

今日は学校あるんでしょう？」

「分かってるってば・・・顔洗ってくる・・・」

未だ眠い目をこすりながら階段を下りていく。

頭はまだボーっとするが流石に16年間降りてきた階段で転んだり
はしない。

そのままリビングに入るとすでにお父さんが新聞を広げながらお茶
を飲んでいるところだった。

「おはよ〜・・・」

「おはよう、智香。相変わらず眠そうだな。」

そう言っただけで笑うお父さんをスルーして洗面所へと向かう。

フラフラとしながらも洗面台の前に立ち水を手ですくって顔にかけ
る・・・ッ!!

「〜ッ!よしっ!」

ふう〜!

冷たい水で一気に覚醒したあたしの目は相変わらず変なところに飛
び跳ねている寝癖を直す。

大体肩のあたりまで伸ばしている髪だけど、寝癖が付きやすくてい
つも起きると飛び跳ねてるんだよね・・・

「そう言えば今日は御倉さんの所ご両親ともいないんだってな。」

「え?なにそれ?」

寝癖を直し終わったあたしはリビングで朝食を食べている途中にお父さんが言った話題に進めていた箸を止めた。

確か一馬の所のお父さんの信吾（しんご）さんは普通に働いているけどお母さんの琴美さんは普通に専業主婦だったと思うんだけど・

「いやさ、なんでも信吾さんの出張先がなんでも東京らしくてな。琴美さんがついでに二人っきりの旅行がしたいんだとき。」

ええ〜〜

「いいわよねえ〜、二人っきりで旅行なんて〜あなた、わたしたちも行きましようよ、旅行〜」

いやいやいや！

「母さん、信吾さんは出張に行くんであつて旅行に行く訳じゃ・・・

「ていうかあたしそんなの初耳なんだけど!!」

今初めてそんなこと聞いた!!

一馬のヤツもそんなこと一言も言っただけに!!

「あれ、僕は一馬君から聞いたつて母さんにいわれたんだけど・・・

お母さん!!

「あら、言っただけじゃあなかったかしら〜」

「全く！！これっぽっちも！！聞いてない！！」

なんだよそれ！知らなかったのはあたしだけかよ！！
つて、ちよつと待った。

と言うことは今あいつは・・・

「一馬一人って事じゃん！やばいってそれ！！」

「あら、どうして？一馬君智香よりしっかりしてるから大丈夫でしよう？」

そうじゃなくって！！いや、悔しいけど、間違っではないんだけど！！

あいつ朝はあたしよりも弱いつてこと忘れたわけ！？

昔、今と同じ様に一馬の両親が出張で居なくなったときがあった。

その日一馬は待ち合わせの時間に来なくて仕方なくそのまま学校に行った事がある。

しばらくしたら来るだろうと思って待っていても全く来る気配が無く家のチャイムを鳴らしても全く反応が無くて先に学校へ行ったんだ。

でも教室に行っても一馬はいなくて変に思ったけど授業が始まっちゃったからそのままだったんだ。

それで昼休みが終わった次の授業の時間、すさまじく眠そうな目をして一馬が登校してきた。

その時の遅刻の理由が「寝坊」だったのは信じられなくて、先生も正直に言えと言っても「本当に寝坊した。」と真顔で言ってくる一馬に先生もはいはいと言ってその場は終わった。

その後一馬のお母さんにそのことを尋ねてみると「あの子朝はとてつもなく弱いのも」と笑っていたことであたしはそれが真実だと

知ったのだ。

(下手すると今回もその時同様の結果に・・・！？)

バツと振り返り掛けてある時計を見る。

時刻は7時52分

いつも8時10分に家を出て大体丁度いい時間だからまだ間に合うはず！！

止めていた箸を急いで動かし残りのご飯をかき込む。

食べ終わった後手早く歯を磨くと制服に着替えて窓を開け、一馬の部屋の窓を叩く。

「一馬！！起きてるよな！！朝だってば！？」

ガラスだからそんなに強くは叩けないけど出来るだけ大きな声で呼びかけてみる。

それでも全く反応はない。

起きているのかと思っただら部屋の中からシーツの動く音が聞こえてきた！！

(ヤバイ、絶対に寝てる！！)

起きていたら返事くらいするはずだし、これは前回同様寝てる可能性の方が高い！！

窓に手をかけガラツと開ける。

子供の頃の約束でお互いの窓には鍵を掛けないようにしていたのがここに来て役に立った！

そう思つて窓から入りベットを見てみると案の定寝息をたてて爆睡中の一馬がいた。

普段着のまま布団も掛けずに寝ているからベットに倒れ込んでそ

のまま寝ちゃったのかな？

「っと、それよりも！」

寝ている一馬に近寄り身体を揺すって起こそうとする。

ふと一馬の顔を見てみると普段では全く見せないどこか子供っぽい寝顔があった。

いつもは大人びた一馬の年相応の、ううん、それよりも子供っぽい寝顔。

「……………ハッ！」

その一馬の寝顔をしばらくボーッと見つめていたあたしはここに来た目的を思い出し一馬の身体に手をかけた。そして揺すってみるが全く反応がない。

思い切って耳元で「起きろー！！」と声を上げてみるがちよっと顔をしかめたと思ったらモゾモゾと反対側を向いて再び寝息を立て始める。

コイツう……………！！

わざわざ起こしに来てやってるのに、何で起きないんだよ！！？

少し頭に来たあたしは一馬の身体にまたがって襟元をつかみ前後に揺すろうとした。

「オイ、いいかげんに……………！！うわぁ！！？」

そしたらいきなり一馬に抱きつかれた！！

それだけでも頭が真っ白になったあたしは次の瞬間には抱きつかれながらいつの間にか一馬と一緒にベットに横になっていた！！

「……………ツツツ!!?」

(うわあ~~~~!!ナニコレ!ナニコレエ!!)

あ、あたしがなんで一馬と一緒に寝てんの~~~~!!?)

あまりの事態に頭ん中がメチャクチャになった。

あのお姫様抱つこの時以上にあたしの顔は真っ赤だっ自分でも分かつちゃうくらい顔が熱つい!!

はわわわなんて訳のわかんない言葉が口から出ていたあたしは目の前に一馬の顔があるのにたっ今気がついた。

さっき見たときよりも安心しきった顔。それに一馬のその……く唇がこんな近くにい……!!

もう破裂するんじゃないかってくらい心臓がバクバク言ってるのにあたしの視線は一馬の唇から離れない。

イヤ、もうあとで考えてみると自分の事ながら何しようとしてんの!!ってくらいあたしは大胆だった。

気づいたらどんどん吸い寄せられるみたいに一馬の顔に近づいていくあたしの身体。

いや、ホントこの時は

頭んなかで(イヤあたしなにしてるの!!?コラ、止まれ~~~~!)
!!って言うてるのに全然止まなくなつて……

プシュ~~~~

たぶんその時のあたしはマンガだったら頭からこんな音を出してたと思う。

あたしはその後、頭が真っ白になっていて何があつたか全く記憶にない。

そして次に気がついたのはお母さんがいつの間にか来ていてこう、いつもとは違う笑みを浮かべながら写真を撮っている所だった……

ちなみにその日、あたし達は見事に遅刻した……

お母さん、その写真一枚あたしにちょうだい。

120

SIDE 一馬

「ふあ~~~~あぁ……寝みい……」

「おいおい、寝坊してきたのに未だ寝たり無いのかよ。」

笑いながらそう言ってくるこいつ、朝倉 啓太（あさくら けいた）は小学校からの悪友で身体が丈夫になってきた頃から良くなるんではないかもする。

「ちなみに部活はサッカー部です。」

「・・・何言ってるんだお前。」

いきなり人の心の声に合わせてくんじゃねえよ。
キモチワルイ・・・

「・・・なんかスッゲーひでえこと言われた気がする。」

・・・無駄に勘のいいヤツめ。

まあいいや。

「いや、昨日ちょっとゲームで無理してな。」

土曜から日曜まで徹夜しちゃったからスッゲー寝みいんだ。」

机に突っ伏しながら言う啓太はへえ、とどこか感心したように言ってくる。

「お前がゲームで徹夜かあ。」

何か想像できねえな。お前ってゲームやるタイプには見えねえし。」

「・・・別に俺だってゲームくらいやるって。」

第一あんまやること無くて暇だし。」

そう言う啓太はクワツと目を見開いて机に突っ伏している俺と顔を突き合わせてくる。

・・・ちけえよ。

「あゝあゝ、いいよな、推薦で行けるってくらい成績良いお人はさゝ俺なんかと違って暇でさゝ」

どうせ推薦使うんだろ？いいよな〜成績いいやつはさ〜」

やらかした。こいつ、部活に熱中しすぎて推薦で行くには単位足りなかつたんだっけ。

メンドクセエ〜・・・

「・・・なんだよ。言いたいことあるならハッキリ言えっつての。」

「じゃあ遠慮無く。」

そう言つとコロツと態度を変えて起き上がる啓太。

コイツ・・・

「あのさ、勉強教えてツ！」

ペコちゃんのような顔してそんなことを言ってくる啓太。
正直キモい。

「キモい。止めるその顔。」

「ヒデエ！！ちょっと自分でも」あ、この顔はキメエだろうな〜
とは思っていたけどそんなバツサリ言わなくても良いじゃんか！」

自覚あるならやんなよそんな顔。

そう思いながらも別にそのくらいならかまわない。OKと言おうと思つた時コイツは「あ、あと今度の試合助っ人で入ってくれ。」と抜かしやがった。

「・・・気が変わった。」

勉強も見てやんねえしサッカーの助っ人も絶対やってやんねえ。」

「ちょっと待ってー！！いまOKって言おうとしたじゃん！ならそのままOKって言おうよ！！」
俺たち友達だろー！！」

「いえ、他人です。」

「ヒデエー！！コイツ真顔で言いやがったー！！」

しかし今日はやけにテンションが高いなコイツ。

「とまあ冗談はさておき」

「マジで俺はやんないけどな。」

「いや、そこは黙って俺の話聞こうぜ！！」

・・・コホン、今度さ、あの青葉西と試合することになってさ。」

「へー、あそことやんのか。」

ここらでも強豪校として知られる青葉西。

そことやるのならばさぞかし大変な試合になるだろう。

・・・やはりめんどくさそうだからやらない。

「でさ、2組の小柳（こやなぎ）いるだろ？あいつがこの前練習で腕折っちゃってさ。」

「それは残念だったな。」

三年のこの時期に腕を折ってしまうとはなんと運のない。もうすぐ

夏の大会だつてはじまるだろうに。
小柳には同情するね、ホント。

「いや、怪我自体はそこまで酷くないみたいで2ヶ月も安静にしてれば治るんだと。」

まあ夏大は微妙だろうけど。」

それでさ〜と猫なで声で言ってくる啓太。
だからキモいつてのに。

「頼む！今度の試合だけで良いからキーパーで助っ人頼むよ！！
今うちには補欠のキーパーいなくてマジやばいんだって！！」

「知るか。それに俺は見たぞ、この前サッカー部の練習でキーパーが二人いたのを。」

しっかりとこの目で見たんだからな。
普通に二人でローテーション回してたし。

「いや、そいつホントはフォワードなんだよ。
しかも1年だったから練習って事でやらせてただけだし。」

じゃあその一年にやらせればいいじゃないか。

「ねえ、何の話？」

「お、倉本丁度良いところに。お前から一馬のこと説得してくれよー！」

まずい……

智香のヤツは家族揃ってサッカー好きでドサコンデ札幌というサッカーチームのファンだ。

しかもこう言った助っ人の話を聞くといつもこいつは……

「サッカーの助っ人！いいじゃん、一馬！あたしも当日応援に行くからさ、やってやんなよ！！」

ほらきた。

毎回こうなのだ、智香は。なぜだか俺に回ってくる助っ人の部活にわざわざ応援に来るのだ。

しかもコイツはこういったどっか「青春」っぽいことをしている俺がみたいらしくすさまじい気迫で助っ人を承諾させようとしてくる。そして俺は今までこのかた智香のこういった押しに勝てたことがない。

「……ハア、わかったよ。やりやあいんだろ、やりやあ。」

俺がそう言つと啓太と智香のヤツがイエイ！と言いあつてハイタッチを決める。

……ちよつとイラツとしてくるな。

そんな二人を見ていたら啓太が試合のことを話し出す。

「試合は今週の日曜、うちのグラウンドでやるからさ、一応ユニフォームとか渡すから放課後一回部室に来てくれよ！」

「わかったよ……せつかくだから少し練習させてくれるか？」

流石に試合でいきなりは俺も久しぶりだから調子見ておきたいし。」

「あいよ。じゃあ放課後よろしくな。」

そう言つて席に戻つていく啓太。
しっかしまた面倒くさいことになつたぜ。

「・・・ハア・・・」

「あの、御倉君・・・」

「ん？どうしたの、湯浅。」

ため息をついた俺に戸惑いがちに声を掛けてきた彼女は湯浅 真希

(ゆあさ まき)

中2の時に同じクラスになつて何でも智香にあこがれているらしい。
まあ智香にあこがれる下級生も多いから特に気にしなかつたが彼女は智香と仲良くしたいからどうしたらいいかと俺に聞いてきたこつと言つたらなんだが変わり種だ。

智香に憧れるヤツの大半は声も掛けずにただ見てるだけのヤツの方が多いし友達になるヤツでも俺に助言を求めてきたのは今のところ湯浅だけだ。

その後、一応智香のヤツに紹介してみたところ、最初は何故か湯浅のことを妙に警戒していた智香だったがある日突然いきなり仲良くなつていて不思議がつたもんだ。

「あの、今度、私も倉本さんと一緒に応援に行きますから、がんばってください・・・」

「うーん、結局智香にまた押し切られる形になつちやつたけどね。まあやるからにはがんばるさ。」

「なんだよ、べつにいいだろ？あたし達も応援してやるっていつてんだからさ！な、真希！」

「うん、そうだね。」

「じゃあ、授業もはじまるので、これで。」

「あ、あたしも席もどんなきや。じゃあ一馬、またあとでね！」

「おう、応援ありがとな。」

自分の席に戻っていく智香と湯浅に礼をいうと再び机に突っ伏す。
今はとにかく……寝る……

第八話（後書き）

どうでしたでしょうか？

自分の手元にはまだA i c c o rが無いので正直違和感を覚えたりもすると思います。

それと湯浅を中学での友達としましたがこれは色々と湯浅を絡めていくのに必要なことなので、できればご了承ください。

なにか意見などがありましたら遠慮せずに送ってください。
ではまたよろしく願います。

設定1（前書き）

設定集です。

一応ネタバレしない程度にしようと思いますので安心して見てください。

設定 1

御倉 一馬 (みくら かずま)

現在 15 歳

北海道在住

身長 174 cm 体重 64 kg

趣味 読書 スキー 水泳

倉本 智香を幼なじみに持つ本作の主人公

容姿は 174 の高い身長に細身ながらも筋肉のしつかりとついた所謂細マツチヨ。

顔は彫りの深い顔にほどほどに焼けた肌。目は薄い茶色で光の加減によって琥珀色になる。

作中でも揺光一（智香）の言うとおりゲーム内の顔とそっくりなため本人の自覚は全く無いがイケメンの類。

髪はそこまで気を使っていないため短く切っている。ちなみに切っているのは母の琴美。

元ヘアスタイリストな為腕は確かで下手な床屋よりも断然上ちなみに智香も髪を切るときは琴美にお願いしている。

小学校 5 年生頃までは身体が同年代よりも弱く外で遊ぶよりも部屋で遊ぶことの方が多く

The world への初ログインは 3 年生（2009 年）で当時

のジョブは双剣士

後期には拳闘士へとジョブを変更している

当時の性格は達観しているところが多く同年代よりも大人びていた。The worldでは逆に年相応的な言動が目立ちリアルな反動でそうなったのかは定かではない。

・hackersでは突撃隊長的なポジションであったため戦闘能力は高い

戦闘スタイルはどちらかというカウンター型で相手の攻撃を避けたり合わせたりしてからのスピードを生かした強烈な一撃と言ったスタイルだった。

拳闘士では更に自ら攻めていくというインファイター的な戦法も身につけR:2でもその戦い方。

今はThe worldから遠ざかっていたため本人曰く”大分鈍っている”とのこと

現在のリアルの性格は比較的年相応だがモルガナ事件での出来事からやはり周囲と比べると大人びている。上記の通り小学五年生の頃からだんだんと身体も強くなっていき今では部活の助っ人に誘われたりするほどになった

実は最初BBSなどでhackersと言う名称を見たとき思わずなにこれ?と思いこの名称をつかうことはほとんどなかったが他に良いネーミングが見つからずに仕方なくこの名前を使っている。しかし自らこういつたことを自慢するようなタイプではないために話の通じ合うかつての仲間との会話に使うぐらいで、本人は周りが騒ぐほどの事をやったわけではないんじゃないかなどと思っているので微妙に天然が入っていると思われる言動を偶にする

ちなみに好きな食べ物野菜と魚

嫌いなものは、ことは面倒くさいことと、大根おろし 昔食べた大根おろしのあまりの苦さに今でも若干トラウマ

余談だが動物に好かれやすい体質でよく野良猫や野良犬、果てはキ

ヤンプに言った際は狐がよってきたこともある。(流石に触ろうとしたら微妙に距離を取って一定以上には近づいてはこなかった) そのため智香から一時期ブリーダー一馬と呼ばれたこともあり動物園に行くとき檻の方に動物が自らやってきてくれるため遠足などでは大人気だった。

カズマ

ジョブ 練装士(マルチウエポン)

一馬がR:1の時から続けているPCネームでR:1の時の容姿はhack/NO SIGNのクリームと似ている少年型のPCだった。

現在は作中の通り赤く短い逆立った髪に蒼い瞳、オレンジ色の紋様を頬に刻んでいる。

現実の一馬によく似ておりゲーム内ではそこまでではないが十分なイケメンのキャラ。

(赤い逆立った髪型はスクライドのシエルブリット使用時のカズマの髪型がモデルです)

使用武器は超レアな徹甲拳・シエルブリット

あるプログラマーの趣味で作られたこの武器は期間限定でThe world内に一つしかないウルトラレアなもので特殊な能力がある。

一度装着すると外せないのは原作者の意図するところではなく何か他の原因があるらしい。

一応収納は出来るが手首に金色のブレスレットが装着されている状態になる。

ちなみに一馬本人は気づいていないがカズマの服装がシエルブリット

トが装着されてから変化した。

前の服装は黒いマントを羽織り白い皮のノースリーブ状の服を着て
いてしたは黒い装飾のついたズボンと言った服装だったが現在は黒
いマントは右半分が無くなり左肩あたりにくすんだ金色の肩当てが
追加された（ガンダムWのトレーズやゼクスが着ていた様なタイプ
をご想像ください。）中に着ていた皮のノースリーブ状の服が左腕
だけ長袖になり、肩の部分にマントのものと同じ肩当てがある。右
腕はそのままだが腕の外側に紋様が新しく刻まれている。

戦闘時このマントは脱ぎ捨てられ戦闘終了時に再び張られる仕様になっ
ている。

設定1（後書き）

一応言ったとおりネタバレしない程度で現状の一馬、およびカズマの設定を書かせてもらいました。

シエルブリット装着後のカズマの服装についてはですが文章にすると大きな変更点に見えるかもしれませんが実際はマントが半分になっただくらいですので見た目的にはジョブエクステンド後のハセヲのように大きく変わった訳じゃありません。

そう言えばちよつと変わったねって言われるレベルです。

まあもつと詳しく知りたいといった方は質問してください。

ネタバレしない程度に伝えていくつもりです。

それでは皆さんまた次回です。

第九話（前書き）

どうも第九話です。

今回は皆様にご報告があります。

なんと、いつの間にか1,4000PV突破しておりました!!

まだこの小説始めて一週間しか経っていないのにびっくりです。

ユニークの方も1500超えておりましたのでホント皆様に感謝です。

これからもがんばっていきますのでどうかよろしくお願いします!!
では九話目どうぞ!

第九話

SIDE 智香

授業が終わった休み時間、残すはあと一科目だけだしみんながもう放課後の事を話し合う中、あたしは今週の日曜に行われるサッカー部の試合のことを考えていた。

あたしの家はみんなサッカーが好きで札幌のドサコンデ札幌の大フアンだ。ドサコンデの試合がある時は家族みんなで応援するくらいサッカーが好きで小学生の頃は男の子達に混じってよくサッカーをしていたしね。

それに今回は一馬が出るって言うじゃないか！！

一馬は今じゃ運動神経抜群でいるんな部から誘いがあったのに興味がなくて言いながら実はめんどくさがって入らなかったという経緯を持っている。

実にもつたいたいと思っただあたしはあいつが助っ人を頼まれているといつとも一馬に助っ人をやらせる。だって、もつたいたいじゃないじゃん！！

あんなに運動出来るようになったのに何にもしないなんて！

それに中一の時いつも本読んでたあいつをバカにしたヤツが居て許せなかったってのもある。

「本ばかり読んでんのは運動出来ないから」とか抜かしやがってさー！！

一馬はそんなこと全く気にしてなかったけどあたしはそれを聞いて思わず言っただ。

「あんたら何かより一馬の方が何倍も上手いんだからな！！」

それを聞いた奴らは「なら証明してみるよ！」なんて言い出して、一馬は乗り気じゃなかったけどあたしが悔しくて泣きそうになって他のを見てめんどくさそうにしながらもやってくれた。

その時はサッカードジャフオワードでみんなを引っ張って大差で勝っちゃったし、バスケだって一人で何本もシュートを入れてた。

野球で何かピッチャーで何人も三振に取っちゃうし、野球部のピッチャーからホームランだって打っちゃったんだ!!

その時のバカにした奴らの顔と来たらもうおかしくておかしくて……!

それからバカにした奴らも一馬の事認めだし、みんな揃って自分たちの部活に入ってくれ!! って言ってきたわけ。

でも一馬のヤツ「メンドイ」の一言で見向きもしなかったけど。

「せめて助っ人で」って言う話はあたしが受けた。

だって活躍する一馬をみたかったし……/ / /

と、とにかく、今度の試合のことだ!!

そうだな……弁当とか作っていったら喜んでくれるかな……

前に作っていったら結構喜んでくれてたし……

「智香ちゃん、嬉しそうだね？」

「え!そ、そんなことないって!もう、何言ってるんだよ真希!!」

ついつい考え込んだりしたあたしにそんなことを言ってくる真希。

思えば真希と知り合ったのってその直後なんだよね。

その時はあたしを口実にして一馬と仲良くするつもりでヤツが多くなってコイツもその類かと思ったりもして警戒してたんだけど、話してみるとそうじゃなくて逆にあたしと仲良くしたくて一馬に話しかけたんだって言われて。

それからちょっとした相談相手にもなってもらってるからもう親

友と言って良いくらいじゃないかな？ちよつとまだ引つ込みがちな性格だけどむしろあたしの周りにこんなタイプはいなかったから結構楽しかったりする。口も堅いから気兼ねなく相談出来るしね。

「倉本さん、ちよつといい？」

そんな風に真希と喋っていたらイヤなやつに声をかけられた。

「・・・なにかよう、尾方。」

コイツはいつもあたしにいやらしい視線を送ってくる。

それにいつも一馬に突っかかっていくし運動もしていないのかとても同年代とは思えない程腹が出てて

あたしのモットーとは正反対で運動もしないでいつもゲームばかりしているクラスの中でも嫌われているヤツだ。

そんな尾方はいつものように鼻息荒く、そして嫌らしい目で見てくる。

本当にコイツに見られると思うと気持ち悪くてしかたない。

ちよつと家がお金持ちだかなんだか知らないけどコイツと友達の奴らの正気を疑いたくなるね。

「あのさ、今度のサッカー部の試合、見に行かない方がいいよ。

青葉西つて言ったらここいらでも強豪校だし御倉のやつが入ったってボロボロにやられるだけだよ。」

「ッ！そんなことやってみなきゃわかんないしアンタなんかに関係ないでしょ！！」

「ち、智香ちゃん落ち着いて！尾方君に怒鳴ったってしょうがないって。」

「真希……でもさ……！」

「倉本さん、僕は倉本さんの為に言ってるんだよ？」

それに「昨日The world始めたって聞いたけどあいつじゃ全然役に立たないでしょ？」

良かったら僕が教えてあげるよ。これでも上級者だから色々教えてあげられるよ？」

そうニヤニヤと笑ってくる尾方。

こいつ、この前のこと盗み聞きしてたんだ……！

「ハッ！お生憎様。一馬はメツチャ上手いからアンタから教わる事なんて何にもないよ。」

それに、アンタから教わるより一馬から教えてもらった方が何倍も分かりやすいしね。」

「ッ！そんなことあるはずないよ。」

あいつ初心者なんだろ？だったら僕から教わった方が絶対良いに決まってるよ。」

僕の家なら最新のHMDだってあるし、コントローラーも最新型でレアアイテムもたくさん持っているから

絶対に僕の方が「しつこいってば！！あたしは一馬と一緒に強くなるって決めたんだ！！アンタなんかにとやかく言われる筋合いなんてないんだよ！！」……分かったよ。そこまで言うなら今回は諦めるよ。」

でもね、絶対に僕の方があいつ何かよりも上手いって直ぐに分かるよ……。」

そう言って尾方は自分の席に戻っていった。

最後にあいつの言ったセリフがちょっと気になったけど一馬はそんな簡単に負けるわけがない。
あんなに強い一馬が負けるとこなんて想像できないし、第一尾方のヤツがどれだけ上手いんだか知らないけど一馬に勝てるわけがない。あたしはなぜだか分からないけどそう確信できた。
まあ今はそれよりも。

「気合い入れて応援しなきゃね！」

「智香ちゃん試合は日曜なんだから今から気合い入れる必要ないよ・・・」

S I D E 一馬

HRも終わり帰宅部の生徒が帰路に着く中、同じ帰宅部であるはずの俺は何故かサッカー部の部室に来ていた。

「いや、さつき自分で練習したいって言って部室来たんだろ。」

だから心の声に突っ込むな。だからお前はキモチワルイんだ。

「ヒドッ！！」

そう一人で叫ぶ啓太を一人置いてスタスタとグラウンドへと向かう。偶にすれ違ってくる後輩がやけに挨拶してくる。

やっぱり運動部というのは上下関係が厳しいのだろう。

「かわいそうに・・・あんなバカな先輩にも敬語を使わなきゃいけないなんて・・・」

「失礼すぎるだろー馬お前え！！いくら本当のことでもそこまで言わなくてイイじゃん！！」

なに！俺なんか気に障ることもしましたかあ！！あなたに迷惑になることでもしましたかあ！！」

「この状況をそうじゃないと認識している時点で俺の気に障っているし、この状況こそが俺の迷惑になっているんだよバカ。」

そう言うと酷すぎるうーと叫びながらグラウンドに走っていく啓太。まったく、周りを見てみる、お前の後輩が「何あの先輩」と言った視線でお前をさげすんでいるというのにそれに全く気がつかないとわな。

救いようのないバカだ。

そこまで言わなくてもいいだろー！！と叫んでまた後輩に見られている。

ホントに救いようのないバカだ。

「そんなに啓太のこといじめないでやれよ、御倉。」

「いじめてるつもりはねえよ、ただあいつが大げさに騒いでるだけだつて。」

「相変わらず手厳しいな。」

そう言って笑いながらストレッチをするこいつはサッカー部の部長

でエースの斉藤 晴彦（さいとう はるひこ）。

所謂さわやか系のモテ男で現在高校生の彼女が居るらしい。

かといってチャラ男という訳ではなく、去年までこの学校の先輩だった人と今でも付き合っていると言う理由で、ナンパしてとか言う訳ではない。

その先輩のことが凄く大切らしく来年は自分もその先輩と同じ高校に行くために俺に勉強を教えてもらいにくるなど、真面目な男だ。ちなみに斉藤はすでにスポーツ推薦などの話が来ているそうだがその先輩の高校に行くので推薦を蹴ったという強者でもある。

「けど、今回は悪かったな。急にこんな事頼んだりして。」

「いや、別に構わねえよ。どうせ家帰ってもゲームするか、本読んでもくらいだし。」

「へー、御倉でもゲームしたりするんだな。」

「・・・そんなに俺がゲームしてる所って想像できないわけ？」

昼に啓太に言われたことと同じ様な事を斉藤にも言われてしまった。これでも昔はインドア派だったからそこそこゲームはしてきたのだが・・・

「いや、別にそう言う訳じゃないよ。ただ、あんなだけ勉強できるし休み時間とかでもよく本読んでるから家でもそんな感じなのかと思ってさ。」

そう斉藤に言われるがそんなことは無いと否定する。

「別に俺だってゲームくらい普通にやるって。ただ学校でやるほど

流石斉藤。

啓太なんかとは違って人望の厚いやつだ。

そんなことを思いながら俺もゴールへと向かっていった。

「ちわつす、美倉先輩！！お久しぶりです！！」

「よう、悠人。元気だったか？」

「そりゃあもう！でも御倉先輩がまた助っ人やってくれるなんてうれいす！！
また色々教えてください！」

「そんなに教えられるとは思わないけどな。
そこまで上手くないんだし。」

。そう言ってゴールで話し合うこいつは池田 悠人（いけだ ゆうと）
。一つ下の2年生で前にサッカー部の助っ人をしたときにちょっとプレーのアドバイスをしたら何か知らんが懐かれた。

「何言ってるんすか！！先輩が入っての3年生との試合は俺たちの中

「じゃもう伝説っすよ!!」

「んな大げさな・・・」

悠人の言う三年との試合というのは去年卒業した三年生との卒業試合のことだ。

齊藤に誘われて参加したその試合は当時の3年生+レギュラーの一部と齊藤たち2年と1年+俺という形で試合をした。

その時俺はボランチとキーパーをやったわけだがその時たまたま良いパスが通ったりしてアシストを結構できたり、何本か飛んできたシュートをパンチングで弾いたりして守っていたら勝ったと言うだけで悠人の言うような大げさな試合では無かったと思う。

「全然大げさなんかじゃないっすよ!!あの代は全国に出場する一個手前まで言った奇跡の代なんすよ!!そんな人たち相手にあんなアシストやファイナーブ決めてたらそりゃ伝説にもなりますよ!!」

いや、ホントただ単に運がよかつただけなんだが・・・アシストは運良くディフェンスの間を通してそれに齊藤がしっかりと合わせてくれただけだし、啓太も俺の浮いたボールをしつかりヘッドでちゃんと入れてくれたから結果的にアシストって事になっただけだし。キーパーはディフェンスがしつかりとルートを限定してくれたからそこを意識して守ってればいいだけだったからホント大げさだと思っただけだな

「まあいいや。」

それよりも悠人はあっちに行かなくていいわけ?もうパス練始まつてみたいだけだ。」

そう言うといいんすよ、と手を振って言うてくる

「俺、去年からキーパーやらせてもらってるんでこっちでいいんです。

小柳先輩も怪我しちゃってるし俺と一年で青葉西とやらなきやいけないって思ってたんすけど、御倉先輩が出てくれるんだったら勝つに決まってますよ!」

「・・・なに?キーパーって小柳しか居ないんじゃないの?」

「?いえ、俺と一年入れたら三人すね。それがどうかしたんすか?」

・・・啓太、アノ野郎・・・!!」

「・・・ちよつとボール借りるよ・・・」

ゴールに入れてあつたボールを一つ取るところに背を向け後輩に指示している啓太のバカをねらつて
思いつきり蹴る!!」

「おゝい、そのの一年!!さつさと「ボゴツ!!」「ゲフツ!!」な、
なんだいきなり!!」

突然飛んできたボールに頭を押さえ周りをきよるきよるとし出すバ
カ。

そのバカの方に思いつきり走り出し頭を後ろからロックする。

「うおつ!!い、いきなりなにs「オイ啓太・・・」は、はい!何
でしょうか!!」

俺が怒っていることを察知したのか言葉をただし俺に尋ねてくるバ力。

「おまえさあ・・・昼休みに言ったよな・・・」キーパーが一年しかいなくってその一年もとりあえず入ってるだけで本職じゃない”って・・・そう俺に言ったよなあ・・・」

「いやそうじゃな」メキツ！「イッタ！！今メキツ！っていった！メキツっていったって！！」

痛い痛い！！そんな感じですよ！！そんな感じのこといいました！！」

よし・・・

「だったらなんで悠人のヤツが去年からキーパーやってること黙ってたんだ？おまけにちゃんとした一年のキーパーも居るみたいじゃねえか！！」

さらに腕の力を上げていくとバカのイテェ！！という声がかくなっていく。

そこに流石に見かねたのか斉藤が止めに入ってきた。

「お、おい御倉！ちょっと落ち着けて！事情があるんだって！！」

「事情？」

その斉藤の言葉にパツと手を離し啓太を解放する。ろくな事情じゃなかったら再びやるがな。

「ああ。実はな、前原先生の指示なんだよ。」

「前原先生の？」

「ああ。前原先生から今度の試合に御倉を出すように指示があったんだよ。」

サッカー部顧問の前原 大介（まえはら だいすけ）。

ことあるごとに俺をサッカー部に入部させようとしてきた男。彼はさつき悠人がいつていた試合からずうっと俺をサッカー部に入部させようと画策してきた教師で俺がなんと断つても一切聞かなかった男だ。

一時には単位をだしに入部を迫ってきたこともある。

「先生がどうしても御倉を連れて来いって聞かなかつたんだ。

それで啓太が。」

そうか。・・・まあ顧問の言うことじゃ仕方ない

「社会の単位上げてやるからなんとしても連れて来いって。」

「オイ立て屑。とりあえずボッコボコに殴るから良いっていつまでそこで立ち続けてろ。」

「流石に死ぬ！！俺、死んじゃう！！」

そう言つて殴りかかろうとする俺を羽交い締めて押しとどめる斉藤。放せ斉藤。とりあえずコイツの顔をボッコボコにしなきゃ気が収まらない！

「気持ちは分かるけど落ち着けて！イヤなら今からでも俺が断つてくるから！」

「・・・イヤ、一度引き受けたんだしちゃんとやるって。」

そう言っつてゴールへと向きを変え歩き出す。

一応一回は引き受けたんだし、智香達も応援に来るっつて言っつてたんだから今更断れないしな。

「御倉・・・サンキュ。」

「一馬あー！ー！やつぱり俺のために！ー！」

「けど啓太の単位は落とすっつてのが条件な。」

「酷い！ー！ー！」

これくらい当たり前だバカ。

第九話（後書き）

どうでしたでしょうか？

後半のサッカーの顧問についてなのですがぶっちゃけモデルがおります。

自分の中学時代の顧問が似たようなことを自分にしてきました。

で、結局単位ほしさに野球部からサッカー部に入っちゃった訳ですが。

まあ結局足折ったりして半年くらいしかやりませんでした、サッカー

まあとにかく練習は次回に続きます。

とりあえずもう一話くらいしたら再びネットの方に行くつもりです
それでは皆さん次回もよろしく願います！

第十話（前書き）

はい、第十話。

今回も前回に引き続き日常編です。

今回はサッカーの試合があります。練習ですけど。

中学時代わたしもこんな感じでサッカー部との試合をしていて、夏休み、いきなりサッカー部の試合に来说われ、その指示に従い言った後になぜだかサッカー部に転部という始末に。

・・・あのときの俺を今でも引き返させたいと切に思います・・・

まあそんな話はさておき、今回も存分にお楽しみください！！

第十話

SIDE 智香

図書委員の仕事も終わって一馬達が練習しているらしいグラウンドへ向かった。

最近は1年生も増えたからあたし達3年生はちょっとだけ仕事をすればすむから結構助かる。

今までは仕事して本読んでから帰ってたから別に苦じゃなかったけどやっぱり楽なら楽な方がいいしね。

そんなことを考えながらグラウンドに向かってみると丁度練習が一段落したところだったみたいで

サッカー部の部員と話してる一馬に手を振りながら近づいていった。

「おーい、一馬!」

「あれ、どうしたんだよ、智香。」

今日図書委員の仕事あるんじゃないかなかったっけ？」

「もう終わったよ。」

それより一馬の方はもう練習終わりな訳？」

そう聞くと一馬はそうじゃないって答えた。

なんでも野球部との試合をやるらしい。月に2、3回野球部とサッカー部で練習終了間際に30分程度の試合をいつもしてるらしくって一馬の勘を取り戻すのにも丁度良いからってことでそうになったんだって。

それで今野球部の方が出る選手を決めてるらしくて丁度良いから休

憩してるらしい。

「へえ、じゃあ、あたしもその試合見ててもいい？」

「ん？別に見て無くっても先に「イヤイヤ！！是非見てつてよ！！
倉本が見ててくれた方がみんなやる気出るし！」・・・岡本、テメ
エ・・・」

そう一馬を遮るように言つて来たのは去年同じクラスだった岡本
秀一（おかもと しゅういち）。

結構色々世話焼いてくれたいい人だ。

「そう？だったらあたしあっちで見てるね。」

そう言つてサイドにあるサッカー部の方のベンチに向かう。

「（おい、岡本。お前どういうつもりだよ。）」

「（そう言つつもりとは人聞きの悪い。只ちよつと野球部のヤツに
頼まれてさ。購買の焼きそばパン2週間分で手を打った。）」

「（買収されやがったって事かよ！？）」

「（まあまあ、別に良いじゃねえか。どうせお前がキーパーやつて
れば一人も入れられねえんだし、
ついでに倉本に格好いいとこ見せられるじゃん。）」

「（？なんで俺が智香に格好いいとこ見せるのがそんなにいいんだ
？）」

「・・・そう言うヤツだったな、お前。倉本もかわいそうにな・・・」

「？」

そんなことがあったなんてあたしは全く知らずにこれから始まる試合にワクワクしてた。

SIDE 一馬

「マジでどういう意味なんだ、あいつ。」

そう思っていると試合の前にハーフラインでの挨拶があるのでみんなが集められた。

一応練習だが試合形式はほぼ本番とサッカー部は同じ形式でやって野球部の方は多少のハンデがあたえられる。ウチの野球部は俺もたまに助っ人で顔を出すが結構運動神経が良いやつが多い。多分単純な運動神経だけを見ればサッカー部よりも上のヤツが全体的に見て多いと思う。

だからこそこうやって試合形式でサッカーをやるわけだが、流石にサッカー部相手に向こうもそのまま正規のルールを当てはめられてしまえば小さな反則を犯してしまうため多少のハンデがあたえられる。

ちなみに俺は野球部の一部から凄まじく嫌われている。

別に俺はそこまで嫌いではないのだがその一部の奴らは例によって智香のファンクラブの会員だったりする。

そいつ達曰く、「偶に助っ人で参加してくれるのはこちらとしても助かる。しかしいつも倉本智香を応援に連れてくるのが気に入くない。おまけに俺たちより目立つのがよりムカつく。」と言うのが向こうの言い分だ。

俺としてはとんでもない言いがかりなのだが悲しいことにそう言った輩は多く大抵の部活にいるわけで。

逆にサッカー部みたいな全面的にみんながフレンドリーな部活の方が俺としては珍しい。

まあしかしそう言う奴らは姑息な手を使ったりこちらを極端に見下してくるような尾方とは違い自分の得意なスポーツなので勝負してくるので俺としては別に嫌いではない。

事実、今もこうやってこちらを睨み付けてくる野球部の越前 浩一（えちぜん こういち）もそう言った輩の一人なのでまあ普通に勝負しよう。

そう思つて礼をすると解散前に呼び止められ宣戦布告的なものを告げられた。

「おい、御倉！今日こそ倉本さんの前でお前を負かしてやるからな
！！」

「はいよ。まあがんばってくれ。」

「ッ！！相変わらず余裕そうにしゃがんで……！！ゼッターやつてやるからな！！！」

そう言つて自分たちのフィールドの方へ下がっていく越前。
何をそんなに怒っているのだろうか……？

「御倉……お前相変わらずそう言つところは天然なのな。」

「?どういう意味だよ、斉藤。」

なんでもないよ、と返され早くゴールに向かうようにと言われた。はて、天然とはどういう意味なんだろうな。

ホイッスルが吹かれ試合が開始される。

流石に連携ではサッカー部の方が上でどんだんパスが繋がって行く。

しかし野球部の方も負けてはいないようで連携ではなく、個人の力で攻めてくる。

その高い身体能力を存分に活用してドリブルで上がってくる。流石にそう簡単にサッカー部のディフェンスを突破しては来ないが中々良いところまで来ている。

しばらく展開が硬直していたが、試合が始まって丁度半分くらいが経ったころ、展開が動き出した。

「っと、来たか!」

「うおおお!!」

叫びながら突っ込んでくる越前。

そんな越前を止めるべくディフェンスの2年生がサイドからプレッシャーを掛けるが鍛えてる現役野球部の3年生をそう簡単に止められる筈もなく、シュートの体勢に無理矢理持つて行く越前。

けど……!!

「ここまでルートが絞れてれば・・・!!」

シュートが放たれるのと同時に横に飛ぶ!

するとタイミングドンピシャでボールが胸元に飛び込んでくる。

それをガツチリと確保すると越前が目の前で悔しそうな顔をしてサツとフィールドに戻っていく。

フウ、良かった、予想通りのコースにボールが来て。

「ナイスセーブです、御倉先輩!」

「いやいや、そっちこそナイスディフェンス。

君のディフェンスが良かったから出来たんだよ。」

そう言いながらボールを持ってペナルティエリアラインまで上がる。えっと、空いてるのは・・・

そう言いながらフィールドを見渡していると啓太が飛び出そうとしているのが見えた。

ハーフラインよりちょい向こうだけど・・・

「まあ届くか!」

そう言いながらパントキックを放つ。

ボールは思った通りの軌道を描きながら啓太の前方に落ちる。

それを上手くトラップした啓太はそのままドリブルしていく。

フム、一応これで一息つけるか。

・・・って!

「あのバカ!!」

油断してドリブルしてたら相手にアッサリボール盗られやがった!!!

「カウンター!!!」

そう俺が叫ぶと同時に啓太からボールを奪った野球部のヤツは走り出しているフォワードに向かってロングパスを通す。
それを受け取ったのは・・・

「今度こそ決めてやるぜ!!!」

またお前か、越前。

受け取ったボールをドリブルしながら猛スピードで駆けてくる越前アイツ、そう言えば野球でも俊足ランナーで内野安打数が一番多かったんだっけか。

そんなヤツがカウンターで一気に走ってくるわけで、ディフェンス陣も不意を突かれた形だったわけだから当然の如く一対一だ。

「今度は邪魔なヤツはいねえ!!!今度こそ倉本さんの前で「一馬!!!絶対止めるよ!!!」・・・
絶対エ恥かせてやる!!!!」

智香、お前少し黙っててくれ。

智香の声援で火に油を注ぐが如く越前が怒り狂って叫び、突っ込んでくる。
仕方ないな。

バツ!!!

「御倉先輩が前に出た!!!」

「へッ！！上がガラ空きだぜ！！」

俺が前に出た瞬間に俺の頭上をループで抜こうとしてくる。
けどな……！

「そう来ると思ったよ！！」

「なあ！！」

ループが放たれると同時に前に飛ぶ。

そして丁度頭の上を越そうとするボールに手を伸ばす。

普通なら下がって捕ろうとしてしまつところだが、こう来ると予想
してればこのくらい！！

バシッ！！

「止めたッ！！」

「スッゲー、今の普通なら完全に決まつたぜ！！さすが御倉先輩
！！」

フウ、何とか止められたか。

正直一か八かの賭けだったから、当たって良かったぜ。

そう思いながらボールを持って立ち上がる。

「クソッ、また止められ「いいぞー、一馬！！ナイスセーブ！！」
・・見てろよ！！次は絶対え決めて、倉本さんの前で恥じかかせて
みせるからな！！！！」

そう捨て台詞を吐いてさっきよりも怒りながらダッシュで戻ってい

く越前。

そんな越前を見て、さらにこちらに声援を送ってきた智香の方を見ながら思わずこう思った俺は悪くないだろう。

(頼むからもう帰ってくれ。)

そんな俺の心境を分かるはずもない智香はこちらに手を振りながら楽しそうに試合を観戦していた。

・・・ハア・・・

S I D E 晴彦

「流石だな、一馬のヤツ。」

去年の試合の時から思ってたけどあいつ、ここぞという時の判断力が半端無いんだよな。

今のも普通なら下がってボールに追いつこうとしてたら絶対に止められなかっただろうし、さっきのシュートも、越前のシュートをあらかじめ予想していたんだだろうけど、普通だったらあんなに直ぐに反応できるモンじゃない。

正直小柳だったら2本とも入ってただろうし、他の普通のキーパーでも二本とも止められたかって聞かれれば正直な所、無理だったんじゃないかって思う。

そのくらい、越前の打ったシュートは良い球だったんだ。

「いやー、相変わらずスゲエな一馬のヤツ。全然鈍ってなんていねえじゃんか。」

「お前は油断しすぎだよ、バカ。
また後で御倉にどやされるんじゃないか？」

あんな馬鹿正直に突っ込んでいってボール盗られてたら何にも言う
こともないし、弁護してやろうと言う気も起きてこないな。

「うおお！！そっだ、ヤツべえじゃん俺！！晴彦、頼むから庇って
くれよ！！」

下手したら俺殺されるかもしれない！！頼む！！俺たちチームメイ
トだろ！！二年間一緒にやってきた仲間じゃないか！！」

「知るか。自業自得だろうが全く。そんなに御倉からの制裁が怖い
ならさっさと行って活躍でもして来い。それで汚名返上すればもし
かしたら許してくれるかもしれないぞ。」

「おお！！そっだな、許してくれるかもしれないよな！！
よーし、そっで決まれば早速行ってくるぜ！！へい、パス！俺にボ
ールくれ！！」

はあ・・・あんなのでも一応チームメイトだしな。

御倉のヤツがやり過ぎてたらさすがに止めてやるか。
最初から止めたりはしない。だってあいつの自業自得だから。

「よう、斉藤。なんか大変そっだな。」

「そっ言っお前も大変そっなのが同じチームに居るみたいだけどな、
松本。」

それを言うなよ、と苦笑いで声を掛けてきたコイツは松本 純（ま

つもと（じゅん）。

同じクラスで野球部の現部長だ。

お互いに大変厄介な部員を持った身として偶に話し合ったりする仲だ。

ちなみに彼女持ちで野球部のマネージャーと現在交際中らしい。

「浩一のやつも普段はちゃんとした良いやつなだけだな。倉本の前で格好つきたいからってちょっと張り切りすぎてる気もするけどまあ、いくら浩一のヤツが張り切ったところで御倉が負けるところつてもあんま想像できないわけだけど。」

野球でさえ勝てないつてのにサッカーで勝てるのかね、ホント。」

「まあ無理だと思うよ。俺も御倉を抜いてゴール出来るとは思えないしな。」

正直なんであんなに上手いのか分かんないよ、ホントにさ。」

「おいおい、サッカー部部长がそんなに弱気でいいのかよ。」

「そうは言うけどな、御倉のヤツは去年の先輩達のシュートも完璧に止められるほどの腕なんだぜ？」

正直に言っただけで太刀打ちできるかどうかなんて考えるまでもないと思うけどな。」

マジで御倉が入部してくれたら全国も夢じゃないと思うんだけどな。」

「」

「ああ、それは俺も思う。あいつがキャッチャーやってくれたときは誰も打てないし、投げてた俺が一番不思議に思ったくらいみんな空振りになっていくしな。」

あの札幌東との試合もまさかの完封でみんなで大騒ぎだよ。

監督なんてどうにかして御倉のヤツを野球部に入れようとしてな。」

でも御倉のヤツ全く聞く耳もたずって感じで監督の誘いも断つてたし。

そう言えばサッカー部でもそうだったんだろ？噂じゃ単位を餌にして引き込もうとしたって聞いたけど。」

ハハハハハ・・・

とにかく、そのくらいあいつは凄いんだって事だな。

「っと、もうすぐ終わりだな。俺もちょっと参加してくっかな。」

「だったらさっさと行って来いよ。」

越前と啓太みたいにならないんだったら俺たちの良い練習台だからな。」

「イヤな言い方するな、お前・・・」

そう言いながらも動いてボールを盗りに行く松本。

俺も最後くらいは仕事するか。

そう思つて走り出そうとしたらまた啓太がボールを盗られてカウスターを喰らいそうになっていた。

・・・啓太の事助けるの止めようっと。

SIDE 智香

「いや、相変わらず凄かったな一馬！！今日4本もシュート止めてたじゃんか！！」

「・・・ウチ二本はあのバカのせいで危なかったけどな。」

「ハハハハハ・・・ま、まあ朝倉のヤツも反省してたことだしもう良いじゃんか。」

「あいつのことだ、どうせ明日になったらコロツと忘れてまたいつものテンションで絡んでくるに決まってるぞ。あいつの記憶力は鶏と同レベルだからな。」

「知ってるか？去年の期末であいつの勉強を見てやったことがあつてな。テストで出た問題は俺が作ってやった模擬テストとほとんど一緒だったのにも関わらずあいつは平均点を下回るといふ結果を出しやがったんだ。」

「アハハハ・・・で、でも平均点が高かったってことなんじゃ・・・」

「ちなみにそのテストの平均点は43点だ。それと同じ問題をやったお前と斉藤の点数は80点後半。覚えてないか、あの社会のテスト。」

ああ、あれか・・・

たしか一馬に作ってもらった模擬テストがバツチリハマってたやつで大体7割が同じだったんだよね。

・・・あれでダメだったのか・・・

「ちなみに本人に何で点数を取れなかったのか聞いてみたところ「寝たら忘れた」という答えが返ってきた。それ以来俺はヤツの記憶力という点に関しては完全に信じるのを止めた。」

・・・ゴメン、朝倉。

否定できる要素が見つからないや・・・

「ところで今日はどうする？帰ったら早速クエストに行くか？」

「おう、もちろん！あたしだって昨日メツチャ修行して経験値貯めたからレベルスツゲエ上がったんだぞ！！見てびっくりするんじゃないぞ！！」

「おお、がんばったんだな、智香。偉いぞ。」

「バ、バカ！！べ、別に一馬の足手まといにならないように二つてレベル上げた訳じゃないんだからな！！」

おいこら、あ、頭いつまで撫でてんだよ！！は、恥ずかしいだろ！！」

そう言っても一馬のヤツは笑っただけで撫でる手を止めようとしなかった。

・・・ま、まあホントは嬉しかったんだけど・・・照れくさくてそんなこと言えるはずもなかった。

SIDE 啓太

「カラダガイタイデス・・・」

「自業自得だったの。まったく、アレでホントに現役サッカー部かっつての。」

結局あの後再びボールを盗られた俺は一馬から半端じゃないお仕置きを受けた。

正直なところ晴彦が止めてくれなかったら俺、死んでたかもしれない。

「それにしてもやり過ぎだったとワタクシは思う訳なんですよ！あれじゃ人権を尊重してるとしか思えないね！！」

「人権を損害な。それじゃあ御倉のヤツがお前に優しくなってるからな。」

そうとも言つな、うん・・・あれ？

「なあ、あれ一馬と倉本じゃねえか？」

「うん？確かにそうみたいだけど・・・」

「おい！！か「やめろつて。」ゲフツ！んだよ、叩くことねえじやねえか・・・ん？」

晴彦に叩かれた拍子に目に入ったのは壁の角から二人を見ていた尾方だった。

しばらくするとこっちに気づいたのかなんだか慌てて消えたけど。でも二人を見ていたあいつは爪を噛み、イライラした表情で二人を見ていたあいつの目はなんだか、普通じゃない感じがした。

「なんなんだ、あいつ・・・」

「どうかしたのか、啓太？もしかして頭強く叩きすぎたか？これ以上バカになると小学生にまでバカにされちまうぞ？」

「そこまでバカじゃねえよ！！てか、今だって普通の中学三年生の

問題くらい解ける頭はあるわ!!」

「じゃあ問題だ。アメリカ初代大統領の名前は？」

そんなの決まってるじゃないか、あんまバカにすんなよ？

「あれだ、ほら・・・ジョージ・ワシントン!!」

「・・・啓太が正解するなんて・・・!!明日は雪なのか・・・!!」

「失礼じゃね!?!いくら何でもこのくらい覚えてるわ!!?!」

・・・実はさつき一馬に同じ問題出されて間違えてるなんて言えない。

その時の答えがアドルフ・ヒトラーだったことも・・・

「って、そうじゃなくって!!さつきそこに尾方が居たんだよ。しかも一馬と倉本の方をジツと見てさ、なんだかやばい感じの目だったな。なんて言うか、こう、普通じゃないって言うか・・・」

ヤバイ、なんて言ったらいいか分かんねえ。

「尾方が・・・あいつ、あんまい話聞かないんだよな・・・」

「ん?そうなのか?あいつクラスじゃ嫌われてる方だけど別にこれと言ってやばいって話は聞いたこと無いぜ?あの体格の通り喧嘩も弱いし。」

「いや、喧嘩とかじゃなくってあくまで噂だけど、あいつの友達っ

つつか金でつながってる、ヤンキーみたいな奴らが居るらしいんだよ。そいつらがどうも近くのヤクザと関わってるらしくてさ……」
ヤクザあ？いやいやいや。

「さすがにそれは無いんじゃない？第一あいつにそんな奴らと関われる度胸があるなんて思えねえんだけど……」

「だからあくまで噂だって言ってる？で、そいつらが近くの高校の男子生徒を襲ったって話なんだよ。どうも昔尾方の事いじめてたヤツだって話だけどな……」

おいおい……

「ま、所詮噂だからな。信憑性もあんま無い話だからそこまで気にすることも無いと思うけど、一応注意した方が良くぞって話。」

「そうか……にしてもさ。いきなり話変わったやうなだけどさ？」

「ん？」

前方の二人を見てメツチャクチャ思うことが一つある。

「一馬のやつ、あれでまだ倉本の気持ちに気づかないのな。」

「ああ、そのことか。……確かにアレを見てたら付き合っていないなんて思えねえけどな、流石に。」

倉本の頭を撫でながら笑う一馬。そんな一馬に怒りながら顔を真っ赤にしてそれを受け入れている倉本。

・・・普通に見たらどっからどう見てもバカップルだよな、あの二人。

しかもどちらレベル高いからお似合いって感じの。

「・・・俺も彼女欲しいぜ・・・」

「頑張れよ、独り身。諦めなけりゃいつか出来るって。」

どこか勝ち誇った様にそう彼女持ちに言われた・・・

うううう・・・

チクシヨオオオオオオー！！！？

第十話（後書き）

ちよつとフラグを立ててみた・・・かな？

はい、と言うことで傍から見た一馬と智香の第三者の意見を書いてみました。

あと思いつきり展開が読めてしまう感じのベッタベタな尾方君の行動も。

まあかと言って本当にこの伏線を回収するかどうかは全くの未定な訳ですが。

そんなことはさて置いて、次回はいよいよネットに行きます!!

・・・hackの小説なのにリアルな描写が多いことにちよつと考えたりもしてますが。

まあいつか！

さて、では次回もよろしくお願いします。

第十一話（前書き）

どうも、ジーユーです。

十一話です

特に言うこともないのでどうぞ、グダグダな部分がありますが楽しんでいってください。

第十一話

SIDE 揺光

学校から帰ってきたあたしは直ぐに服を着替え、この世界へとログインした。

相変わらずの高度なグラフィックを一通り眺め、一馬が現れるのを待つ。

(この前よりもレベルアップしたあたしを見てどんなこと言うのかな・・・?)

始めてログインした日はカズマの足を引っ張ってばかりだったけど、知り合ったPCや、ソロでいるんなエリアを回っているんなモンスターと戦闘を繰り返したあたしはすでにレベル14まで上がったんだ!!

帰りに修行したとは言ったけどきつとここまでレベル上がったとは思ってないはず!!

それにカズマだっけきつとレベル上がったとしてもせいぜい15〜20くらいだろうから今度こそ一緒にレベルを上げていくんだ! それで、「もう足手まといなんかじゃなくって、背中を任せられるんだな。」

って言われてあたしは

「そ、そんなことないけどさ・・・アンタがそう頼むなら、別に・・・いいよ・・・」って答えて、

それで「揺光・・・」って近づいてきて「カズマ・・・」ってなつてそれで、それで・・・!!

「うわーもうー!!そんな、そんなことまで!!」

「・・・なにしてんだよ、揺光・・・」

「ハッ!!」

思わず妄想にふけってしまった!!

慌てて変な物を見るようなカズマの方を向いてなんでもない!!つて手を振って弁解しようとしてみるけど・・・ん?

「なんかさ、ちよつとキャラデータ変わってない?そんな風だったっけ、カズマの恰好?」

「ん?あれ、言われてみれば、なんだかちよつと変わったかな?もしかしてこれゲットしたからか・・・?」

そう言つて虚空を見つめるカズマ。

まああたしには見えない自分の表示されてるメニューを見てるんだろっけど。

「これ?なんか武器でもゲットしたわけ?」

「ああ、ちよつとした知り合いに聞いてな。俺にぴつたりのアイテムがあるから行つてみたらどうだ?つて言われたから言つてみたんだけどこれがまた面倒なクエストでさ。一応目当てのアイテムゲツトは出来ただけどうも変な武器つて言うか変わった武器つて言うか・・・まあそんな感じの手に入れたわけだ。しっかしレベル上げがこれまた面倒でさ。クエストの基準が34だから最低でも20後半は必要だったから昨日は徹夜だったって訳だ。」

なるほど。今日の一馬の異常なほどの寝坊はそう言う訳だったのね。
・・・ん？

「ちょっと待て！！今レベル何って言った!？」

「ん？クエストのレベルか？34だけど・・・」

34って、今のあたしより20は上え!!？
って言うことは・・・

「カズマ・・・今のアンタのレベルは・・・？」

「何なんだよ、さつきから・・・今は36だな。流石に2、3日じやこれくらいが限界だったけど、
まあ大分上がったな。」

・・・大分ってレベルじゃないよな、それ!!
なんなんだよ、レベル36って!!こっちはあれからいるんなヤツに手伝ってもらっても15レベル上げるのが精一杯だったし、知り合った奴らも始めて2、3日でこれだけ上げられるなんて普通じゃあり得ないからって言う太鼓判も貰ってたから、カズマと冒険できるって、もう足引つ張らなくて済むって思ったのに・・・!!
・・・なんかスツゴク腹立ってきた・・・!!？

「オイ、揺光？」

「・・・げるな・・・」

「は？なに？」

「・・・間レベル上げるな・・・！」

「だから、レベルが何「今日から2週間絶対にレベル上げるなっつってんの!!?」

突然叫んだあたしにカズマだけじゃなく周りのPCまで驚いてるけど、そんなこと知るか!!

「な、なんだよいきなり。それにレベル上げるなってどついう事だよ。」

そのままだつての!!?

「なんででもだ!!?いいか!!絶対エエツ対に、今日から2週間はレベル上げんじやないよ!!
分かった!?

「イヤだから理由w「分かったかつて聞いてんの!!?」・・・分かったよ。」

あたしだつてアンタの足手まといになんないで、一緒に冒険したいんだよ・・・

「ん?なんk「なんでもない!!?それじゃあな!!絶対に約束守れよな!!!?」

絶対エエツ対に追いついてやるんだからなあ!!!?

SIDEカズマ

「・・・行つちまいやがった。」

変な言いがかりというか、なんと言ったら良いのか分からないが、まあ行つてしまったわけだ。
さて・・・

「これからどうすれば良いんだよ、ったく。」

クエストに行く気満々だったのにいきなりの揺光によるドタキャンで予定が全て狂ってしまった。
仕方ない、一回落ちて掲示板でも見てみるか。

「あれ、カズマじゃないの？」

そう思つて落ちようとしていたところに余り聞き慣れないヤツの聲が俺を呼び止めたので、動かしていた手を止めた。
振り向くとそこにはこの前出会つた銃戦士のクーンがいた。

「クーンか。どうかしたのか？」

「いやいや、別に用があつて声かけた訳じゃないぜ？只見かけたから声かけただけだし。第一、用なら男何かよりも女の子に作るようにしてるし。」

「・・・あつそ。」

なんか始めてあった時よりもどことなくチャラい感じがするように
なったような・・・いや、元々こんな性格だったのかな。

「で、こんなところで何突っ立てたんだ？」

・・・コイツに言ったらなんかややこしい事になりそうな気がする
が・・・しかし、女性関係に強そうだしな・・・とりあえず話して
みるか・・・

「いや、幼なじみと一緒に来んだけど、なんか分かんないウチにい
きなり怒り始めて、2週間レベル上げるなって言っただけで行っ
ちまったんだ・・・それで仕方なく一回落ちようかって思ってた
ところでクーンに呼び止められたってわけ。」

そう俺が言うとはじやそりゃと逆に尋ねられた。だから俺がそれを
一番聞きたいんだってのに。

「うーん、状況がイマイチ飲み込めないな・・・てかさ、その幼な
じみのヤツが始めたのっていつな訳？」

「俺と同じで3日前。」

「3日前か・・・ちょっと待て、今俺と同じでって言ったか？」
言ったけど・・・

「それがどうかしたのか？」

「・・・3日前に始めた動きじゃ無かったんだけど・・・まあいい

や。で、その幼なじみのレベルは？」

えくつと・・・

「さつきチラツと聞いたときは14って言ってたな。」

帰り際に聞いたのは確かそのくらいだったような気がする。

「で、お前さんは？俺と出会ったときが27位だったから30くらいなわけ？」

「いや、36。あの後目的のクエストやってたらそこそこのレベル上がってたさ。」

「・・・3日でレベル30越えてバケモンかよ、お前。廃人プレーヤーだってもうちょっと大人しい気がするぜ・・・」

失礼な。

「R:1の時にちょっとやってたから多少なりとも慣れてたからだよ。俺だって初めてだったらいきなりこんなレベルに成れるわけないし。」

「へえ、そうなんだ。まあいや、それよりも、その幼なじみはお前と一緒にレベル上げたかったんじゃないか？だってよ、同じ日に始めたヤツだったら一緒に冒険して楽しんで強くなっていきたいって思うだろうが、普通。」

そんなものだろうか・・・？

R:1の時は特にそう言った仲間はいなかったし、レベル上げも楽

しむ物と言うよりは必要だったから上げていくって感じだったからな。

後期は特にレベルも気にしないでただ遊んでたからそう言うことは意識したこともなかったが……

「普通はそうなのか……？あんまり友達とかと一緒にこういうゲームしたこと無かったからよく分かんなかったぜ。ありがとな、クーン。参考になった。」

そう礼を言つと気にするな、たいしたことじゃねえよ、と言ってきた。

やっぱりこう、兄貴的なキャラだな、クーンって。

「てか、そんなに友達いなかったのか？男友達って言うのはそういうの結構気にするからな。気をつけた方がいいぜ？」

？何言ってるんだ、コイツ。

「揺光は女だぜ？」

「……なに？」

揺光が女だと告げた瞬間クーンの顔が変わった。どう変わったかと言われれば、こうさっきまでは頼れるお兄さんの空気だったのに女だと聞いた瞬間、こう、殺気だった感じになったって言うか、そう！

丁度啓太が変な言いがかりをつけてこようとしてる時の感じだ！

「お前、幼なじみって言ったよな……？」

「ああ、そう言ったぜ？」

それがどうしたんだよ・・・

「女の子が幼なじみなのか、お前？」

「別に珍しくもないだろ？ただ隣同士に住んでるだけだしさ。」

「隣同士・・・だと・・・!!！」

そうクーンが言った瞬間に何故か周りの男性型PCどもが騒ぎ出した。

聞こえる言葉は「それって、さっきの子か？」やら、「幼なじみが女の子で隣に住んでるって・・・」

とか「まさかのリア充野郎!？」などの意味の分からない声が聞こえ出す。

・・・なんか気味悪いな・・・

「ち、ちなみにさ・・・朝起こして貰ったりとかしたり・・・?」

「・・・今日そうだったけど・・・」

「ツツ!!！」

そう言った瞬間に上がる周りの殺気!そしてだんだん近づいてくるクーン。心なしか他の男性型PCも迫ってきている気が・・・

「ま、まあいい。それで、まさかとは思つが・・・着替えうっかり目撃したりとか・・・!!！」

な、なんでそれを！！そう思ったが決して口には出さない。今まで気がつかなかったがこいつら、確実に包囲してきてやがる・・・！！おまけにクーンとの距離がやばいくらい近い・・・！！

「そ、ソナワケナイジャナイカ・・・」

「・・・見たんだなあ！！？」

そう叫んだ瞬間に近づいていた男性型PCの奴らが俺を囲い込んだ！！なんて連携だ！！？一瞬のうちに逃げ場がなくなりやがった！！そして包囲してきた奴らが口々にリア充シネやらリア充にシヲだの、リア充なんか・・・リア充なんか・・・と言ってくる。すっげえ気持ち悪い！！？

「カズマ・・・俺なんてな・・・俺なんてなあ！！？」

「な、なんだ！！」

詰め寄ってくるクーンだがこの状況じゃ聞くしかない。てか、耳元で呟くのヤメテェ！！背筋ゾツとなるからあ！！？

「付き合ってた彼女にいつの間にか振られて・・・それから全く彼女出来なくて寂しい思いをしているというのに、お前は、おまえはあ！！？どこのエロゲの主人公だあ！！？俺たちを、彼女出来ない男達を嘲笑っているのかあ！！！」

「何の話だ、何の！！第一俺はまだ彼女なんて出来たこと一度もねえよ！！？」

「「「・・・え？」「」」

その言葉にその場の空気が変わった。なんかこう、予想してなかった答えに次にしようとしていたことが出来なくなっただって感じ。

「え〜っと、お前幼なじみの女の子と付き合ってるんじゃないの？」

「誰がいつ、そんなことを言ったあ！！？一っ言もそんなこと言っていないだろうがあ！！？」

「いやだって、幼なじみに起こして貰ったって」

「両親が出張で居なかったときに俺が徹夜したせいで中々起きれなかったから一応起こしに来てくれただけだよ！！第一最終的に起こしてくれたのはそのお母さんだよ！！？」

「「「「「「「」」」」」」」」

「・・・なんだよ、それならそうと先に言ってくれよ。変な勘違いしちまったじゃないか。」

そう言いながら肩を叩いてくるクーン。

テメエが勝手に勘違いしたんだろうが・・・！！

そんなクーンの一言で散っていくPC達。

口々に「なーんだ」「リア充じゃなかったのかよ」「でもなんでこんなに神様は不公平なんだ」などなど

どこかで聞いたような台詞を残して去っていく。まったく、こっちは良い迷惑だったの。

そう思いながらまだ方に腕を乗せて笑っているクーンの腕を払い掲

示板で手に入れたエリアにでも行ってみようと思いいワードを入力する。

「……ん？でも、着替えは覗いたんじゃ……」

そのクーンの言葉が聞こえた瞬間、散っていた奴らの戻ってくる音と共に俺は急いで転送実行ボタンを押した。

……クーン、月のないエリアじゃ気をつけるよ……!!

隠されし 禁断の 聖域 ーグリーマ・レーヴ大聖堂ー

ロストグラウンド。The world R:1の前のゲーム、「フラグメント」の時代に作られたとされるそう呼ばれているエリアの全てはモンスターも宝箱も何も存在せず、ただエリアとしてのグラフィックがの残されているだけの場所。一応このR:2では公式設定として世界観に組み込まれているがほとんどのプレイヤーは来ることもないこのエリアに俺は来ていた。

本来ならば最初にログインしたときから来ようと思っていた場所なんだが、予想外の出来事の連続で全く来れなかったんだ。

中性ヨーロッパ時代に建てられたかのような外観をしたその聖堂に歩を進める。

昔はこの長い橋を全速力で駆けていったんだよな。毎日遊ぶあの子

に1秒でも早く会いたくって。
外の世界を知らないというその子にいろいろな話をしてあげたくって全速力だったんだ。

そんなことを思い出しながらゆっくりと歩いていく。
聖堂の前に辿り着くとその重厚な扉を押し開ける。
この扉は普通のフィールドとは違って自分で押さなきゃ開かないしな。

そうして開いた扉の向こうにはキリスト教のような作りの内部が広がっていた。

「あ・・・そっか。もう、自由なんだもんな、あいつは。」

R：1の時とは明らかに違っている一点を見つめながら歩みを進める。

毎回あの子と会っていた、右前列の二番目のベンチに腰を下ろす。

あの頃の俺はここでいろんな話をしてたんだよな・・・

そんな過去を思い出していると大扉が開く音が響いた。

「よいしょっと・・・ふう、いつもこの扉はなんでこうも・・・あれ？」

中に誰か居るなんて思っていなかったのだろう。

俺を見て意外そうな声を出すその人物はしばらくしていきなりアワアワという声を発して何とも分かりやすい慌てだしたと言うような行動をとりだしたと思ったら次には何度も頭を下げてくる。

「ごめんなさい！！まさか誰かが居るなんて思わなくて、い

きなり変なこと言い出して！」

・・・なぜいきなり謝られているのだろう？

その行動に若干の疑問を抱きずつ気にしないようにと声を掛ける。

「別に謝られる事なんてなにもないから、気にし無くって良いよ。」

やんわりと否定しないとなんだか面倒なことになる気がして出来るだけ優しく声を掛ける。

するとその言葉に安心したのが良かった〜と言って胸をなで下ろす彼女。

・・・何とも感情豊かな子だな。

「えっと、ならよかったです。その、何か悩んでてそのことを考えてた所を邪魔しちゃってたらどうしようかと思いました〜」

「・・・あ、そう。」

追加。随分と思い込みが激しく、そして想像力豊かなこのようだ。

「え〜っと、ここにはよく来るんですか？」

「いや、ここは今日が初めてだよ。ちよつと昔に来ていたところに似ているからね。つい来てみたくなつたんだ。」

「へえ〜・・・そうなんですか。」

そう言いながらこつちに近づいてくる彼女。

その時ふと何故かこの子の事が気になって名前を尋ねてみた。

「そう言えばまだ名乗ってなかったね。俺はカズマ。練装士やってるんだ。」

その挨拶にわざわざ俺の前に来て頭を下げながら名乗った。

「はじめまして！双剣士のキリカっていいます！」

「それが俺と彼女、キリカの忘れられない出来事のはじまりだった

」

第十一話（後書き）

はい、実にグダグダな十一話でした。

・・・まあブツチャケて言えば前半はどうでもいい話です。

後半も今日医者に行っていたときに突然思いついたネタを使って書き始めたので

前半との脈絡が全く無いと思います。

でもここでいきなりのオリキャラをぶち込んでみました。

いきなり登場した彼女、双剣士のキリカですが、ぽつと出のキャラじゃありません。

今はそれだけです。

まあ実にグダグダな回でしたが次回もどうぞよろしく願いします。

第十二話（前書き）

はいどうも、十二話です。

今回はちよろつとカズマの過去に関するネタバレです。

実際に起こった出来事をちよつと捏造していますが、まあいいですよね？

てなわけで、どうぞお楽しみください。

第十二話

SIDEカズマ

「それで、カズマさんはここで何してたんですか？」

先ほど出会った少女型PCのキリカにそう尋ねられた俺は、なんと
言おうか一瞬迷った。

バカ正直に「昔あっていた子のことを考えていた」などと言ってしまえば、何となくだが変な空気になる気がする。

・・・よし、

「ちよつとした考え事。ここなら静かだしほとんど誰も来ないから
丁度良かったんだ。」

そう答えるとキリカは、バツの悪そうな顔をして謝ってきた。

・・・あれ、そうならないように言っただつてもりだったのだが。

「す、すみません・・・考え事の邪魔、しちゃいましたよね・・・
？」

・・・うん、そう来たか。

「いや、別にそんな深刻な事じゃないから気にしなくて良いよ。

第一ちよつとここでボーツとしていただけだったんだしさ。それよりも、キリカの方はこんなところで何しようとしたの？こころって普通のプレーヤーなら全く寄りつかないところだけど・・・」

「あ、それはですね、私、ロストグラウンドを見て回ってるんです

よ。」

・・・変わった子なんだな。

ロストグラウンドにはアイテムもモンスターもいない、完全に建物のグラフィックだけがあるエリアだ。

何故そんなエリアが存在しているのかは詳しくは知らないが、ハロルド・ヒューイックの残したシステムをC・C・社が解析できなかったからそのままにしている、らしい。

俺も八咫から聞いた事なので信憑性は高いと思うが断定できないので保留。

まあとにかく、そんな何のメリットもないエリアをわざわざ見て回るなんて、変わった子なんだと納得することにした。

まあ、The worldの楽しみ方なんて十人十色だし、余計なことは言わない方が良いに決まってる。

”口は災いの元”とも言うしな。

「私、戦いとか全然得意じゃなくて、でも、折角The worldやっているんだから何かしたいな〜って思ってたなら、公式設定にロストグラウンドのことが載ってる。」

あれか、やけに後付けくさいあの設定。

でもまあ、もともとフラグメントからあったものらしいから、一概に後付けと言っているのかは分からんけどな。

「それで、ロストグラウンドだったら、モンスターも居ないし、戦わなくても済むじゃないですか！

それに、なんだかいろんな所を旅行しているみたいで楽しいですし。

」

まあその気持ちは分からなくもない。

普通のモンスターが居るようなエリアは多少の違いはあっても大概は同じグラフィックデータの使い回しだから結構似通っている部分が多い。

しかしロストグラウンドはそうじゃない。

一つ一つのエリアが全く違っていて、同じ場所がない。

それに公式設定の物語を参考にすると様々な見方も出来るのだろう。

「なるほど、おもしろい楽しみ方だな。中々興味がそそられるよ。」

実際、これでもそこそ本を読む身としてはそう言う楽しみ方も有りだと思う。

と言うか俺もやってみたいな、それ。

「本当ですか！・・・他の人に言ってもみんな”そんなのどこがおもしろいんだ”とか、”馬鹿なこと言っていないでお前もモンスターの一匹くらい倒してみろ”、”戦うことがThe worldの全てだろうが”って言われちゃって・・・でも戦ったりするんじゃないかって、もっと別の楽しみもあるんじゃないかって・・・けどやっぱり私のしてる事っておかしいのかな・・・変なことなのかなって思ってたんです。けどそう言ってもらえると、やっぱり違う楽しみもあるって思ってくれる人がいて私、とっても嬉しいです！」

そう笑って礼を言うキリカ。

まったく、そう言った連中には困ったもんだ。The worldの楽しみ方なんて人それぞれだろうに。自分が興味なくても、何故相手の行動を否定するような事を言うのだろうか。

第一戦うことが全てといったヤツはそいつにとって全てだったのかもしれないが、もう少し考えてから物を言えと言いたいな。

「別に礼を言われるほどの事じゃないさ。第一R:1の時はそう言

った人も結構いたしね。戦わないで、只この世界を純粹に楽しむこと。それも、この世界の楽しみ方の一つさ。キリカ、君は君がしたいと思ったことをしたいようにすればいい。このThe worldでそのことを否定出来るヤツなんてどこにも居ないんだしな。」

「・・・は、はい!」

俺の言葉にそう大きな声で答えるとどんどんこっちに近づいてくる。
ん・・・?

「どうかしたのか?」

「いえ、あの・・・カ、カズマさんもご、ご一緒にどうでしょうか・・・?」

「・・・は?」

「い、いえ、あの、ご、ご迷惑だったら全然断ってくれてもいいんですけども!・・・その、初めて私のやっていることを笑わないで聞いてくれたので・・・その・・・ご一緒できたらなうって・・・ず、ずうずうしいとは思いますが・・・」

「・・・なるほど。」

まあさつき話を聞いていておもしろそうだと思ったしな。

それにこれから2週間はレベル上げも禁止されてて特にやることもないし。

フム・・・

「別に構わないぞ?」

「・・・ふえ？あ、あの、今なんて・・・」

だから・・・

「別に一緒に回っても構わないって「ホ、ホホホ本当ですか！！」じよ、冗談とか、嘘だとかじゃなくって？ホントのホントにいいんですかあ！？」・・・「どんだけ期待してなかったんだよ。」

「だ、だって・・・こんな、普通の人だったら絶対に断られると・・・あ、べ、別にカズマさんが普通じゃないって事じゃなくて、その、えっと・・・あ、あうう・・・」

・・・弁護されると余計にきついんだけどな・・・てかフォローになってないんだけど・・・

「と、とにかく、本当に良いんですか？私、本当にロストグラウンド回るだけだから、特にレアなアイテムとかは採れたりしないと思うんですけど・・・」

「そんなことは望んでないって。第一そんなこと望んでるヤツがわざわざロストグラウンド巡りに付き合うなんて言うと思うか？」

「えと・・・あるわけ、無いですよね。えっと、だったら本当に一緒に回ってくれるんですね！！」

「だからそう言ってるだろうに・・・ま、これからよろしくな、キリカ。」

「よ、よろしくお願いします、カズマさん！！」

そうして俺はキリカと共にロストグラウンドを廻ることになったのだった。

「ところで、ここには只来ただけなのか？」

共にロストグラウンドを廻る約束をした俺たちはまだ大聖堂の中に居た。

ここ数日のクエストの話、R：1での冒険の話、かつての仲間達との下らない馬鹿話や、リアルでの話など。

そんないろいろな話をしているとふと、キリカがここに来た目的を尋ねた。

ロストグラウンド巡りと言うことは聞いたがただ、見に来ただけとはどうも思えずにそう尋ねてみた。

「えつとですね、ここに昔女神様の像があつたつて聞いて。それを見たいなゝつて来たんです。」

そう言つて今は何もない、八本の鎖が垂れた台座を見る。

「やっぱり今は無いんですね・・・ちよつと見てみたかつたな・・・
あ、カズマさんは見たことありますか？その女神様の像。」

「ん？・・・確かに、あるよ。・・・昔は、よく見てたからね。」

「へえ、どんな感じだったんですか？やっぱりこう、神々しい感じの像だったんですか？大人な女神様って感じの。」

大人ねえ・・・

「いや、子供の姿だよ。そうだな・・・大体13、4歳くらいだったか。白い長い髪でな。服もそれと同じくらい長いんだ。それで、いつも不機嫌そうな顔をしてて、あんま笑わなかったんだ・・・」

だから、いつも笑って欲しくて、いろんな話をしたんだよね・・・

「・・・なんか、カズマさん、像じゃなくて本人に会ってみたい
な言い方ですね・・・」

・・・ん？

あれ、これって言っても良かったんだっけ？ダメだったっけ・・・
？いや、別にアウラと知り合いだったことを言っちゃダメなんて言
われてないような気が・・・

「え〜つと、それhって、そんなわけ無いですよね〜。何言っ
てんだる私」・・・だな。」

まあ別にわざわざ誤解を解く必要も無いしな。そのままにしておこ
う。

そう考えた俺はこの話題は俺からは振らないように決めた。

「でも、なんで女神様は居なくなっちゃったんですかね。」

・・・アウラ。
生まれたときから母親であるモルガナに死を望まれた少女。
そんな彼女はこの世界を救うために神となったんだ・・・その身を・
犠牲にして。

ーアウラ！！なんで・・・どうして！！ー

ーアウラの身体に刺さったカイトの剣。それを見て僕は彼女に叫ぶ。
約束したのに・・・助けてみせるって、一緒にまた話そうって、約
束したのに！！ー

ーいいの・・・これで、いいのー

ーアウラの身体から光が溢れ出す。その光は最後の八相であるコル
ベニクを消し去る。しかし、それと共にアウラの身体がどんどん消
えていくー

ーいやだ！！消えないで！！一緒に居ようって・・・ずっと一緒にだ
って言ったじゃないか！！ー

ーごめんなさい・・・でも、あなたと話せて楽しかった・・・あな
たに会えて、幸せだった・・・ー

ーだったら、僕と一緒に居てよ！！もっと・・・もっと、いろんな
事を君と・・・！！ー

ーありがとう・・・でも、私は、いつでもあなたを見ているから・
居なくなるんじゃないから・・・

おねがい・・・笑って？・・・わたしは、あなたの笑顔が好きだか

らー

ーアウラ・・・ッ！またね、アウラ！ー！

ーうん！ありがとう、カズマ！ー

ーアウラ・・・ッ！アウラアアア！ー！

「カ・・・サ・・・カズ・・・ん！・・・カズマさん！！」

「ッ！な、なんだ突然、大きな声だして・・・」

「突然って・・・ずっと呼びかけてたのに、カズマさんったら全然返事してくれなかったんですよ？」

「どうしたんですか？・・・もしかして、寝落ちですか？」

「そっか・・・あの時のことを思い出してたら、キリカの声に気づけなかったのか。」

「悪い、ちょっとボーツとしてて・・・で、なに？」

「なにって・・・ハア、だ・か・ら！！」

大声を出して迫ってくるキリカ。

・・・あれ、なんかデジャブ？

「カズマさんは何で女神は居なくなっちゃったんだと思いますか？
ってさっきから聞いてるんですってば！？」

「あ、ああ・・・俺はそうだな・・・自由になっただんだと思う。」

「自由……ですか？」

そう……モルガナという鎖から解放されて、世界と一つになったんだ。

今はこの世界にいるのか分からないけど、きっといるんだと思う。

「そう。世界と一つになって、本当に自由になった。それで、人に、俺たちにこの世界を任せてみようって思ったんじゃないか？」

そう。アウラは消えたんじゃない。

俺たち人間にこの世界を託したんだ。絶対に見捨ててどこかに行つたとか、そんなことはあり得るはずがない。

「へえ……なんかいいですね、そう言うのって。見捨てたんじや無くって託した。」

……うん！そうですよ、絶対！！」

キリカがそう断言した。

……実際はどうなのかは分からないけど、俺が知っている彼女ならば。

最後まで笑って、この世界を見守ると言って消えた彼女ならばそうだと、なんとなくだけ。

「そうだって、俺は信じてる。」

そうだよな、アウラ。

見上げた聖堂の天井で、アウラが笑って、俺たちを見ている気がし

た。

第十二話（後書き）

どうでしたでしょうか？

いろいろと独自設定を披露してしまった第十二話でしたが、これからもこんな感じで進めていきますよ、ハイ

いろいろやないと、折角自分で書いている意味がないですからね。あ、ところで実は昨日から新しい作品を書き始めました。

戦場のヴァルキュリア〜蒼き騎士の誓い〜と言う作品です。

優先順位はこちらの方が高いのでそう頻繁には更新しないと思いますが、良かったら是非見てください。

では皆さん、次回もよろしくお願ひします。

第十三話（前書き）

はい、十三話目でございます。

一応今回はネットとリアル半々くらいですが余り展開は進んでおりません。

多少キーとなる場面はあるにはありますが基本前回よりもグダグダ
かもしれません

ですが是非そんな駄文にお付き合いください。

では十三話目、どうぞ

第十三話

SIDEカズマ

キリカと知り合ってから今日で五日目。

この五日間俺とキリカは何個かのロストグラウンドを見て回った。

アルケ・ケルン大瀑布、背面都市マグニ・フィ、六鳴山アル・ファデル。

この三つのロストグラウンドに行ったわけだが、この五日間でなぜキリカが戦闘が嫌いなのか、よく分かった。

一言で言くと、ドジなのである。それも並ではなく凄まじいドジっ娘。

ここまでのドジっ娘はマンガの中だけの存在だと信じていたくらいなの、ドジっ娘であった。

例を何個か挙げてみる。

第一によく転ぶ。

別にリアルではないここでは転んだところで何にもないわけだが、と言うかここで転んだりするのは戦闘時であったり、何かしらのトラブルに引っかけたりしたときぐらいしかほぼ無い。

・・・普通は。

今まで俺はそう思っていた。

だって、タウンで何にもないのに躓いたり、走っている途中でいきなり転んだりなんて今まで俺は見たこともなかったからだ。

・・・しかし、俺の中の常識はキリカと会ってわずか数時間で崩れ去ってしまった。

大聖堂からタウンへと戻る事にした俺たちはプラットフォームへと歩いていった。

するとキリカがいきなり転けたのだ。

まあ初めは操作ミスかとも思った。初めてそんなに日にちも経っていないそうなのでまあ偶にあることだ

そう思っただけにまた歩き出したんだが、今度は足をもつれさせて転んだ。

この時から変だとは思ったんだ。いくら何でも転びすぎじゃ、と。けどそれからタウンに戻り、別れて走り出したあいつは事もあるうちに他のPCを巻き込んで転んだ。

しかも盛大に。

それから何度も転ぶ。もう現実だったら足が擦り傷だらけで顔も傷だらけになっているだろうってくらい転んだんだ。

次に、あいつはよく迷子になる。

タウンで一緒に居て少し目を離したらすぐに消えてしまう。

この前なんて後ろを向いて歩き出して10分もし無いウチに消えた。もう誰かに攫われたんじゃないかってくらいよくいなくなるんだ、あいつは。

そのくせはぐれたのは俺の方だって思っているようで探して、見つけた俺によく「勝手に居なくならないでください」と言ってくる。

流石に反論しようかとも思ったがコイツはかなり頑固らしいと最近分かったから無駄だろうと諦めたわけだが。

そして最後が、コイツに武器を持たせて攻撃させようとすると間違っただけで見方を攻撃しやがるんだ、コイツは。

一回普通にフィールドを歩いていたらモンスターと戦闘することになった。その時コイツは目を瞑って剣を振り回すんだ。しかもここで転けるといふキリ力最大のドジが加わって、俺は一回死にかけたことがあったんだ。

まさか味方から攻撃されるとは思っただけでなかったから完全に油断してたしな。

それでも何とか勝った俺はそれ以降、キリカと共にエリアでバトルしないと誓ったんだ。

とにかく、そんなこんなで五日間が過ぎ、俺たちはタウンでのんびりとしていた。

「いや、平和ですね」

「・・・こつちはお前のおかげで、ついさっき死にかけたんだがな・・・」

ロストグラウンドに行った際、運悪くPKと遭遇した俺はすかさずキリカを逃がして戦闘に移ったんだ。

別にキリカが死なないようにとかが言う理由では無く、只単に自分が死ぬ可能性を下げたかったから。

そうしてそこそこダメージを喰らってしまったんだが、PKを倒した俺は普通に帰ろうと思っていた。

しかし、

「カ、カズマさん！！た、助けに来ましたよ！！」

そう言っただけ目を瞑りながら突撃してきたキリカにブツ刺されてしまい、後一步で死亡という何とも閉まらない終わり方でここ、マク・アヌに戻ってきたんだ。

キリカのヤツ、腕は全然なのに急に攻撃力は高かったから、中々にギリギリだった。

「そんな過去のこととは忘れましょ？未来を見ないと！！」

「つい30分前のことを過去にするな！！第一その未来をお前に閉ざされかかったんだよ！！」

別に本当に死ぬわけではないんだが気分的にそう言いたかった。

「まあまあ、落ち着いて。そんな細かいこと気にしてたら禿げちゃいますよ?。」

・・・何なんだろうな、コイツは

こんな風に厄介なヤツなんだが何故かコイツと今も一緒に居る。まあ何となくキリカと一緒に居ると気分が安らぐからなのかな。

「うわわわ!!!す、すいません!!!すいません!!!。」

「気をつけるやテメエ!!!危うく間違つてアイテム捨てちまうとこだったんだぞ!!!。」

「ホ、本当にすみません!!!。」

・・・本当に安らいでんのかな、俺・・・

「ほえ?明日はこれないんですか?。」

「まあ、夕方くらいまではな。もしかしたら夜もこれないかもしれないけど。」

サッカーの試合が明日に迫った土曜日の夜、俺はキリカのドジのフオローという仕事を終え、明日はログイン出来ないかもしれないことを告げていた。

去年の3年生との試合時も、啓太主催による打ち上げがあり、それが夕方までだったはずなのだが気づいてみれば次の日だった、と言うこともあったので一応キリカにそのことを伝えようと思ったのだ。別に酒などを飲んだ覚えなど無かったのだが気がつけば啓太の家にいてみんなで寝ていたという不可解な出来事。万が一それが今回は起きないという確証もなかったので念のため。

「何かあるんですか？彼女とデートとか。」

・・・何故にそうなるのか。

本当にこのキリカ独自の思考回路は未だ理解できないな。

「普通そこはどこかに出かけに行くとかで、彼女とデートなんて事にはならんだろうに・・・サッカーの試合があるんだよ。それでその試合に助っ人で呼ばれててな。その後に打ち上げるものがあるかもしれない、そのせいでこれないかもって話。まあ打ち上げ無くて普通にこれたら来るさ。」

「言うか俺に彼女なんていないからな。」

「え！！ま、まさかリアルのカズマさんでとんでもないブサイクなんですかー！！」

「何でそこブサイク！？別にそこは普通の顔って事でいいだろう！

「第一まだ15なんだから彼女居なく立って普通だつつつのー!!」

「え、今の15歳くらいの男の子には彼女がいっぱい居るもんだつて言つてましたけど・・・」

「誰だよ、そんなこと言つたヤツは・・・」

「家の父です。」

「そのお父さんちよつと呼んでこい。今の若者への偏見を矯正してやる。」

その言葉に流石に焦つたのか冗談ですよ〜と言つてくるキリカ。

だが、恐らくキリカの言つた事は本当だろう。なぜならキリカの言う冗談ですよ〜は大抵何かを誤魔化そうとしている時だからと俺はこの五日間で学んだからだ。

「そ、それよりも!!カズマさんがいない間に新しいロストグラウンドの場所とか特定しときますね!!」

「いや、別にいいよそんなことしなくつて。普通にキリカはキリカでやりたいことやつとけつて。普通にキリカはキリカ」

一人でロストグラウンド行つたつて別に俺は「いやです!!」・・・

突然叫んだキリカに言葉をいったん止めてしまう。

こんな風に何かを否定というか拒絶というか、とにかくそう言つたことをキリカが表に出してくるのは、初めてだったからだ。

「私はカズマさんと一緒にロストグラウンドを見たいんです!!」

人で見たってそんなのつまないじゃないですか・・・」

「キリカ・・・わかった。じゃあ明日、キリカは情報を集めといてくれよ。で、次の日はまた二人でロストグラウンドに行こうな。」

「はい!!」

SIDE???

「あいつか・・・」

マク・アヌの広場で話し合う二人のPCを柱の陰から見つめて、その光景を画像に保存する。

笑い会うその二人を見て、思わず笑いがこぼれた。

「へへへ、そうやって笑ってられるのも、今の内だよ・・・せいぜい楽しんどけよ・・・」

隠れていた柱から離れる。

万が一見つかって警戒でもされたら色々面倒だしな。

まあ、すぐにでもあの顔が苦痛に、歪む事になるさ・・・そう

「もうすぐでな・・・」

SIDE 智香

「よし、こんなもんか!」

あたしは作り終えたものを前にしてちょっとした達成感を感じていた。

いつもならもう少し寝て居るであろう、日曜日の朝。

あたしは休日に早起きするという普段では考えられない行動をしていた。まさかの弁当を自作するという行動を。絶対に普段ならばしない事を何故やっているのか。その理由は・・・

「これだけあれば一馬のヤツも納得するよな!」

そう。今日行われる青葉西とのサッカーに出る一馬に折角だから弁当を作ってやるうって思ってたんだ。

まあ、本当ならするつもりもなかったんだけど、真希のヤツから「御倉くんって結構人気あるし、こういう事やっという方が良いと思う」というアドバイスを貰ったからなんだけど。

そう、よくよく考えてみると一馬のヤツはモテるんだ。

最近じゃそう言う露骨な感じで一馬の事を見る輩は随分居なくなっただけど、考えてみれば完全に居なくなっただ訳じゃない。今でも虎視眈々と機会を狙うヤツだって居るんだ。

そう思い至ったあたしは真希の言うとおりの弁当を作る事にした。けど自慢じゃないがあたしは料理みたいなことをあんまりやった事がない。

そりゃあ、あたしだって女だし、一応授業とかで料理を少しはやりたりするけどさ。

でも他人に食べさせるほどの腕なんて持ってなかったあたしは真希に頼んでこの一週間料理の練習を積んだんだ。

毎日毎日、真希と一緒に家でやったり、料理の本を読んだりしてやつと少しはマシなのが出来た。

その成果、それが今あたしの目の前に広がっている弁当だ！！

ちよつと不格好な感じもあって、コンビニとかで売ってるような見栄えの良い弁当じゃないけど、これでも練習で随分まともになったんだ。

もう昔みたいに「木炭みたいだ」なんて絶対に言わせないんだからな！！

「おはよ～～～～あら～？」

「あ、お母さん、おはよー！」

ちよつと起きてきた母さんはテーブルの上に広がっているおかずを見た後、あたしの顔を見て一言言った。

「・・・智香、熱でも出たの～？」

「起きてきて最初の一言がそれ！？ちよつと酷すぎるでしょ！～！」

そりゃあ確かに、いつものあたしじゃ考えられない行動だと自分でも思っけどさ！それはあまりにも酷いじゃん！！

「や〜ね〜、冗談よ、冗談〜。一馬君へのお弁当でしょ〜？最近いっぱい練習してたもんね〜？」

「っ！」

き、気づいてたの！！？

こ、こっそり練習してたつもりだったのに！！

「何言ってるの〜？そりゃあ、毎日使った覚えのない食材が減ってたら流石に気づくわよ〜」

・・・あ。

そう言えば、練習で使う食材は家から持って行ってたんだっけ・・・すっかり忘れてた。

「でもやっとな智香も花嫁修業を始めたって訳ね〜。今日はお祝いでもしましよつか〜」

「や、やめてよね、もう！〜！」

「おはよ〜・・・お？もうおかず出来てるんだ？なんか随分多いんだね。どれ、ひとつ・・・」

ああー！！！！

「ちょっと、何勝手に食べてるのやー！！」

お母さんよりも少し遅く降りてきたお父さんが勝手に作って並べていた唐揚げを一つつまんで食べてしまった。
最初は一馬って決めてやのに!!!?

「だめですよ、あなた。それは智香が一馬君の為に折角作ったんですから」

「え!?!これ、智香の手作りなのかい!?!てつきり母さんが作ったんだとばかり……」

そう言っただけで謝ってくるお父さん。

……まああたしがこうやって並べといたのも悪かったから別にもういい。

それよりも

「それで……どうだったの?」

「え?なにがだい?」

「ッ!?味はどうだったかって聞いているの!?!」

本当は一馬に一番最初に食べて貰って聞きたかったけど、この際仕方ないからお父さんの意見を参考にしよう。

「あ、ああ、味ね。おいしかったと思うよ?でももう少し味は薄くても良いんじゃないかな?」

それはいいんだ。一馬は味は少し濃い方が好きだし、運動するんだから少しくらい塩分は多めの方が丁度良いはずだしね。

「大丈夫よ、確か一馬君は少し味が濃い方が好きだったしね。ね、智香？」

「う、うるさいな、別に関係ないっての!？」

「またこの子は素直じゃ無いんだからね。もういつそのこと一馬君に襲いかかっちゃえばいいじゃない」

お、おそ、襲いかかってくて!？」

「な、何言ってるのさ!？そ、そんな、そんな事するわけ無いじゃないの!？」

第一それが年頃の娘に向かって母親が言う事なわけ!！？

「ちょ、ちょっと母さん、まだ智香は15歳なんだから、そう言う事はまだ早いよ!？」

「あら、でも最近の15歳はそう言うの早いつて聞くわよ?」

もう!？」

誰からそんな話を聞いたっての!！

「それよりも智香、時間の方は大丈夫なの?」

時間?そう言えば今は・・・げえ!？」

「も、もうこんな時間!？い、急がなきゃ!！」

予想以上に時間がない事に気がついて急いでおかずとご飯を弁当箱

に詰め込む。

そして手早く片付けてすぐさまバックの中に入れて！

「そ、それじゃあ行ってきま〜す!〜!」

「いってらっしゃい。」

「いってらっしゃい。別に一馬君と一緒に朝帰りでもいいからね」

ツ!?!?

「大きな声で、恥ずかしい事言っな!?!?」

母さんの大声で顔を赤くしながらそう叫んだあたしだった。

第十三話（後書き）

どうでしたでしょうか？

サッカーは次回に持ち越しという形にさせていただきました。

それとキリカがドジな理由もすっかりあるんですがそれはまた後々。まあとにかくサッカーが次回ついに試合となり、そろそろ物語が動き出します。

ですので皆さん、今後ともこの小説をどうかよろしくお願いします。

あ、あともう一つの小説の方も興味あつたら読んでください。

それではまた次回

第十四話（前書き）

どうも、第十四話です。

今回は大分ハツチャケています。

キャラも少し壊れていると思うのでその点に十分ご注意くださいお読みください。

では十四話目、どうぞ。

第十四話

SIDE 一馬

さて、いよいよ試合当日になったわけだが、今は目の前にいる啓太^{ケイタ}を始末する方が先決だよな。

「お前は一体なにしてんだこのバカ。」

「うわあ！！い、いきなり何すんだよ一馬！！危うくオヤジから借りてきたカメラが壊れるところだったろうが！！」

「だから、何でサッカーの試合に、選手であるはずのお前がカメラなんて持って人の事撮ろうとしてんのか聞いてんだよ。」

そう。コイツは今日試合に出るレギュラーの筈なのにさっきからアップしないで人の事を写真に撮ってばかりなのだ。

まったく、この試合に連れ出した本人がアップもせずになにしてるのか……

「いやさ、お前のそう言う恰好って中々無いじゃん？でさ、その写真って要はそこそこのレアものになるって訳だ。」

……いや、全く訳が分からないが……
しかし……

「とりあえず、そのカメラ寄越せ。なんとなく気に入くない。」

「なあ！！ダ、ダメだ！！そんな事したら、予約してきた女子達

に殺される!!」

なんだよその予約って・・・

第一なんで人の写真を女子がわざわざ予約するんだよ・・・

「とにかく、それをさっさと渡せ。さもなければ・・・」

「な、なんだ・・・なにをするつもりだ!!」

「・・・いや、普通にボコすだけだったの。なんだよ、このゲームみたいなやりとりは。」

自分でやっていながら訳分かんないな、ホント。

「そ、そうだよな・・・親友にそんな酷い事する訳ないよな。」

そうやって安心したような表情を浮かべる啓太。
そうそう。

「大丈夫、ちょっと腰を折るだけだから。」

「ヤメテエエエエ!!十分重傷だからねそれえ!!どこ!!どこが
軽いんだよそれのおおお!!」

「いや、人の事勝手に撮ってるんだ、そのくらい普通だろ?」

「どこがああ!!?ねえどこがああ!!?そんなのが普通だった
ら、今頃下半身不随の人大量発生だからねえ!!?ていうか、俺の
今後の人生って一馬の写真と等価値なわけ!!?」

そんなわけ無いだろう、冷静に考える。

「俺の写真の方が価値があるに決まってるだろ？」

「アツサリイイイ！そんなアツサリと俺の価値決めないでよ！
！ていうか写真一枚よりも価値のない俺の今後の人生ってどんだけ
えええええ！？」

うげえ・・・こっちから振っついて何だけどマジでうげえ、コイツ
ほら見る、応援に来てくれた人たちとかドン引きだよ。お前の奇声
にドン引きしてるよ。

「いや、どっちかというとお前の言動にドン引き何じゃないかな・・・」

いや、だから普通だろ？

「お前の普通という基準はどこから来るんだあああ！？」

叫ぶな、鬱陶しい。

「ひ、酷い・・・親友にこんな仕打ちなんて・・・!？」

「いえ、只の他人です。」

「マジで酷くねええ!？・・・あれ、何かデジャブ？」

「お前ら、何騒いでんだよ・・・ほれ見る、青葉西の人たち完全に
変な視線でこっち見てるぞ？」

なんと・・・

「お前のせいだぞ、啓太。ゴミはゴミらしく消えて詫びる。」

「ついにはゴミ扱いですか!！」

そう言っつて騒ぐ啓太。全く、こんなだからゴミと言われるんだ。

「いや、言ってるの一馬だけだろお!?なにさらつと他の人も言っ
てますっつて感じで言っつてんのおお!？」

青葉西の奴らにまで変な誤解が広がっちゃうだろ!！」

いや、何言っつてんだよ今更。

「知らないのか?結構お前っつてゴミっつて言われてるんだぜ?なあ、
斉藤?」

「いや、その・・・ノ、ノーコメントで・・・」

そう言っつて啓太から視線を逸らす斉藤。正直な話その動作が真実を
物語っていると言えてしまうのだがな。せめて自分の口からは言え
なかつたという斉藤の気持ちだな。

ホント、いいやつだ。

「・・・なに・・・?」

そして真実を告げられた啓太の方は油の切れたブリキ人形のような
音を立てながら振り向いてくる。

まあ本当の現実というヤツを受け入れたくは無いだろうな。

しかし普段ならしっかり否定してくれる斉藤が目を逸らした事が決

定的な証拠だと確信したんだろう。

啓太はその様子を見た瞬間に絶望にくれた表情を浮かべ、orzと
言う恰好をとった。

「そんな・・・俺は・・・俺は、本当にクズ・・・だったのか・・・
？」

ポン・・・

俺は穏やかな表情を浮かべ、啓太の方に手を置いた。

啓太はその手を見て俺を見上げる。

「一馬・・・俺は・・・クズだったんだな・・・へへっ、今まで・・・
俺は、現実を・・・真実を見ないふり、してたんだな・・・」

「啓太・・・いいじゃないか。お前は、クズだろうがなんだろうが、
俺の（自称）親友だろ・・・？」

「かずまあ・・・！！」

俺の言葉に感動し、言葉もない様子の啓太。

しかし、そんな俺たちに斉藤の容赦ないツッコミが入る。

「いや、今小さく自称って言ったことに気づけよ啓太。ってか俺が
聞いた話だと御倉がこの話の発祥元だって聞いたぞ？」

・・・

「・・・一馬？」

・・・チツ

そんなこんなでコントじみた事をやっていた俺たちだったが、流石にもうそろそろ試合の時間になってきたので真面目に練習をすることにした。

「おう、御倉！！やっとサッカー部に入ってくれる気になったか？」

「・・・イヤ、だから今日も助っ人だけって言ってますよね？今週ずっと言ってますけど、聞く気ありますか、先生？」

「いや、もういい加減入ろうぜ？お前がいれば全国だって夢じゃないんだよ！」

知るかツつづの、そんなこと。

相変わらず人の言うことを無視して人のことをサッカー部に入れてこようとしてくるこの人は前原 浩三（まえはら こうぞう）。御

年38歳の比較的若い方の先生で、無駄に熱血な部分の多いサッカー部顧問である。

部活に入らないのは全国のスポーツ少年に対する裏切りだとか何とか言って俺の事をサッカー部に入れようとしてくるこの教師は他の部活動の顧問達よりもしつこく、人の言うことを全く聞こうとしないあなたそれでも教師かと言いたくなるような男である。ていうか一度そう言ってみたところ、

「お前の方こそ、その才能を無駄にしようとは、それでもスポーツ少年か!!」

と、逆に怒鳴られたことがある。

それ以来、俺はこの教師に無駄な反論をすることを諦めたのだ。

「ああ、それとな、向こうの監督にもお前のことしつかりと紹介しといてやったぞ。」

「・・・イヤな予感しかしませんけど一応聞いときます。どんな風に言っただんですか?」

多分ろくな事じゃ無いだろうとは思っが・・・

「なに、お前は我が御橋中サッカー部の秘密兵器で、去年青葉西と競り合ったあの3年生達が1点も獲れなかった程の腕前だと言っただけさ!」

何余計なこと言っただ、この熱血時代遅れ教師は!!

通りでさっきから向こうの監督がこっちを見る視線がやけに鋭い気がするな〜って思ったよ!!

原因はアンタだったのか!!

「・・・なんでわざわざそんなこと言っんですか。黙っとけば相手も油断してくれたかもしれないのに。」

「何を言っんだ。やるからには正々堂々と試合するのがスポーツマンシップってヤツだろうが。」

「・・・いや、正直に言ったらアンタの言っ秘密兵器ってのも相手にバレちゃうでしょうに。」

「てかこの人、多分ゲームとかでよくハメ技で倒されてたタイプだな多分」

「はあ・・・しっかし」

「・・・やっぱメツチャみてるよ・・・ウワァ、めんどくせえ・・・」

「思ったよりも手こずりそうだなあ」

「思いつきりこちらを見つめてくる相手チームを見ながら思わずそんなことを思っただった。」

「おい、なんかやけに女子が多いな今日は。」

普通ならこんなにいない応援の数にちょっと戸惑う俺たち。

そんなことを言い合っていたら中西のヤツが少し苛立った表情でその原因を語り始めた。

「・・・何でもあのキーパーの追っかけが随分といるらしいぜ。なんでも今日は助っ人としてこの試合に出るらしいんだけどそれを見に来てるヤツがほとんどなんだと。」

いやいや、どこのマンガの主人公なんだそいつは

そう思いながらやけにイケメンのキーパーを見てみる。

・・・確かに格好いいと思うぜ、同姓の俺からしたって十分格好いいと思える顔してるしな。

おまけに背もそこそ高そうだし、こう出来るヤツてきなオーラみたいなのが出てる感じだ。

「聞いた話だと、特定の部活には所属せず、助っ人という形でだけ試合に出るそうだ。しかも成績優秀で、あいつの出た試合は今まで負けたことが無いらしい。おまけにあいつはあの倉本 智香と幼なじみらしいぜ。」

・・・なんだよそれ。マンガじゃなくてギャルゲーなのか？ギャルゲーの主人公なのか！！

第一、倉本 智香って言えばちょっと男勝りな感じだけどかなりかわいって俺たちの学校でも噂のヤツだよな？

そんな女子と幼なじみなんて、イヤマジどこのギャルゲーの主人公なんだ！？

「いや、でも幼なじみだからってそんなに仲がいいって訳じゃ・・・」

「・・・おい、アレ見てみるよ・・・」

そう言ってそいつが指さした方を見ると、丁度話題になっていた倉本 智香がそのキーパーと話している所だった。

私服姿で、しかもちよつと気合い入った感じのその服装はただの応援にきてくるような服装じゃない。

しかも・・・!?

「おい、あれって・・・!」

「まさか・・・うそだろ・・・!!」

照れたようにそのキーパーに手渡そうとしているのは、明らかにコンビニとかで買ってきたような代物ではなく、手作り感100%な弁当だった。

しかもそれを渡している時の彼女の表情は普段を全然知らないような俺たちでも分かるほどに緊張していて、メチャクチャ照れていた。普段聞いていた倉本 智香の評判と全く違う姿を見せられた俺たちは、さっきのうわさ話を一部分訂正しなきゃいけないという確信を得てしまった。

「アレ・・・完全にキーパーのヤツに惚れてるって顔だったよな・・・」

「しかも、あのキーパー普通に受け取ってたぜ・・・ちくしょう、俺なんて幼なじみどころか女の子で親しいヤツなんて全く居ないの

に、あんなレベルの高い彼女なんて・・・!!」

「いや、倉本 智香は付き合っではない。」

なに・・・!!

「何言ってるんだ中西、今の見ただろ!? アレはどう見ても付き合っている彼女と彼氏の行動だろう!!」

あの状況でそれ以外の何に見えるって言うんだ!

「言っただろう?」幼なじみ”だと・・・あの二人は付き合っている訳ではない。・・・そう、あれは倉本 智香の片思い故の行動だ!!」

!!あ、あれがアピール行為だと・・・!!?

「そんな、あんな、あんな付き合っているカップルでも中々しない、手作り弁当を、アピールのために作るなんて・・・しかもそれでもあのキーパーは気づいていないってのか!? マジでどこのギャルゲの主人公なんだよあいつは・・・!!」

「くそ、メツチャクチャ腹立ってきたぜ・・・!!」

「ああ、俺もだ・・・!!?」

女っ気が全く無い俺たちへの当てつけとでも言うのか・・・!!

「ちなみに、向こうの主将である斉藤 晴彦だな。」

ヤツには高校生の彼女がいるそうだ。現在交際1年半らしい。」

「クソ、リア充が二人もいるってのか……!!」

「余計に負けたくねえな!!」

「ああ!!彼女のいない者の憎しみ、思い知らせてやるぜ……!!」

目の当たりにしたあまりにも違う状況に俺たちは嫉妬という名の闘志燃やしていた。

「……どうでもいいが中西はどうやってその情報を集めてきたのか、非常に気になる俺だった。」

「なあ斉藤、啓太・・・気のせいかな。なんだか相手チームの視線がやけにキツイって言うか、殺氣じみている気がするんだけど・・・」

「・・・奇遇だな御倉。実は俺もそうなんだ。」

「そうか？俺は別に何も感じないけどな。強いて言うなら空気がちよっとピリピリしてるって所かなあ」

俺たちは今、試合前の挨拶でハーフラインに集まっているのだが、やけに相手チームからの視線がキツイ事が気になっていた。

特に何もやっていないはずなのだが、俺は今、視線から容易く殺氣を感じとれるほど睨まれていた。

そのことを疑問に思い斉藤に聞いてみると斉藤の方も同じらしい。しかし啓太は何も感じていないらしいのだが、生憎啓太の感覚など信用ならないのであいつの意見は却下することにしよう。

とにかく身に覚えの無いことで睨まれてはこちらも気分が良くなるはずもない。

そう思いながらお互いに礼をしてハーフラインから離れていく。

しかしその間も背中からヒシヒシと感じる痛いくらいの視線。

そんな視線を感じながらゴールに着くとベンチの方から智香の「頑張れよー！！」と言う声援が聞こえ返事の代わりに手を振っていると更に視線が強まった。

「・・・はあ、なるほどね。またいつものパターンって訳か。ツたく、本当にどこにでもいるんだなアイツのファンってのは。」

大抵の試合で智香のファンに睨まれる事も偶にあることなので、今回も恐らくその類なのだろう。

まあ、そうと分かれば・・・

「思いつきりプレーするだけだ。」

悪いけど、俺って結構負けず嫌いだからな。

そう簡単に決めさせてはやんないぜ？

そう思っている内にホイッスルが鳴り響き、試合がついに始まったのだった。

第十四話（後書き）

どうでしたでしょうか？

またもや試合は次回に持ち越しと言う形になってしまいました。

まあ今回は啓太と一馬が予想以上に動いたと言つか、とにかくそんな感じで予想以上に長くなってしまったので次回に試合は持ち越しという形にさせていただきました。

まあ次回こそ試合がありますので、どうか皆さん次回もよろしくお願いたします

それでは

第十五話（前書き）

はい、ちょっと遅くなりましたが、十五話でございます。

今回はサッカーの試合なんですが、結構難産でした。

弟と一緒にサッカーの状況を言い合って作っていたらメチャクチャなものになってまとめるのに時間がかかり、結局前半後半で分けることにしました。

ということですが、今回は前半戦です。

それでは、どうぞお楽しみください。

第十五話

SIDE 啓太

「8番フオアチェック！9番はそのまま張り付いてるよ！マーカー、11番！」

「相田、サポートに回れ！！千葉、何とか引き離せ！！そんなんじやパス出しようがねーぞ！！」

チツ！やっぱり、青葉西は一筋縄じゃいかねえか。

北海道でも、1、2を争うディフェンス力は伊達ではなく、俺らのパスコースは完全とはいかないが、ほぼ制限された状態となつてしまい、中々思うように攻められない。

そんな中、青葉西の攻撃も、晴彦や一馬の指示の下何とか凌いでいるものの、やっぱり流れは青葉西にあった。

一応中盤での攻防という形で落ち着いているけど、こんなんじやつ青葉西に点を獲られるか分かつたモンじゃないぜ！！

そんな風に考えていると、晴彦が相手のボールをパスカットして、絶好のカウンターのチャンスになった！！

「啓太、ボサツとするな！！中に上がれ！！」

「おうよー！！」

やっと回ってきたチャンスだ！！無駄になんてしないぜ！！

「オラオラア！！どけええ！！」「パシッ！」って、アラア！！？」

ドリブルし、敵陣を突破しようとしていた俺は、いとも容易くボールを盗られてしまった・・・

「啓太あ！！お前試合終わった後、グラウンド十周だあ！！」

「そ、そんなあ〜」

監督からのその宣告で大いにやる気が失せていく・・・

「それがイヤだったら、点入れるー！！前半に一点入れなきゃ、もう5週追加だあ！！」

お、鬼だあああ！！

SIDE 一馬

「まったく、あのバカが！！」

野球部の試合と全く同じシチュエーションでボール盗られやがった！！

しかも、このチームはやっぱり野球部みたいなお遊びチームとは違って、コンビネーションが抜群に上手い！

なんとか斉藤が押さえてくれていたけど、それでも相手のパスは十

分過ぎるほどに回っている。
けど、俺もただで決めさせてやるほど甘くは無え!!

「悠人、12番チエック!!あいつが中に入ってきたらすぐにマークだ!!斉藤、そいつはいい!!
それよりも、その7番を押さえる!!そいつがパスターゲットだ!!
啓太!!いつまでも塞ぎ込むな!!
ブツチャケ邪魔だ!!」

「何で俺だけ罵倒お!!?」

やかましい!!

とにかく、相手の動きを自分なりに予測して、ルートを押さえる。
少なくともこのチームのメンバーには、マークを離せるほどの実力者は、さっき言った二人だけだ!!
他はそうレベルも変わらないはず!
それなら、パスコース、シュートコースをこちらで限定させれば・
・!

「後は、自然と予測できる!!」

「クツ!!」

ドカア!

バシィ!!

「よっしゃ、ナイスキャッチ御倉!!」

「いいぞ、一馬あ！！その調子だー！！」

予測通りのコースに来たボールをダイビングキャッチすることに成功した俺に、前原先生と智香からそう声援が送られてきた。

しっかし、本当に上手い奴らだな、こいつら。

少なくとも啓太が冷静で調子いいとき並の実力は持ってるよ、ホントに。

「ナイスセーブです、美倉先輩！！」

「お前もナイスマーク、悠人。けど、やっぱり厳しいなオフェンス陣は。てか啓太は殺した方がいいな、マジで。」

「ハ、ハハハハ・・・ま、まあもうすぐ前半終了ですし、気張っていきましょう、先輩！」

「ああ、お前も頼むぞ。」

そう言ってフィールドに戻っていく悠人。

さて、どうしようか・・・

ボールを持ったままペナルティエリアに歩きながら相手ゴールへとつながる基点を探す。

正直、相手のディフェンスが相当上手いから、オフェンス陣のパスがなかなか繋がらなくて、攻めきれないんだよな・・・

さっきも、折角の流れを啓太の野郎が引きちぎってくれやがったし・・・

仕方ない、ここは前半終了まで耐えるしかないか・・・

そう結論づけ、一応無難に斉藤へと蹴っておく。

それからしばらく一進一退の攻防が続くも、結局前半は何も起こらず、両チームとも0対0で前半は終了となったのだった。

「とりあえず、お前はシネ。」

「いきなりの罵倒！！帰ってきて一発目の言葉がシネって……！！酷すぎると思わないか、晴彦お……！！」

前半が終了し、ベンチへと戻ってきた俺はとりあえず啓太の前半のミスに関する鬱憤を晴らすために一言言いはなった。

しかし啓太のヤツは俺の一言が納得出来ないのか斉藤のヤツに同意を求める。

「悪いが、今回は俺も御倉と同意見だよ。流石にあんなところでミ

「スされちゃ、庇おうとも思えないよ。」

「は、晴彦おおお……」

「当たり前だ、バカが。」

あんな決定的なチャンスをむざむざ逃したお前を庇うなんて事するわけ無いだろうに。

「見てみる、他の部員の目を。」

そう言っただけの部員の視線をあんなバカに見させる。

その瞳はどれもふざけんなバカ、と言っていた。

「……か、返す言葉もございません……」

やっと己のしでかした事の大きさに気がついたかバカが。

「みんな、啓太のミスについては後でたっぷりと話そう。それよりも今は次の後半について話し合おう。」

それもそうだ。

こんなバカに費やしている時間は今は無かったな。

「後でまた話すのか……」

「しばらく黙ってる、バカ」

「……」

やっと沈黙したな。

「とりあえず、フォワードのマークがキツイな。マークしてきているのは11番か？」

「いえ、5番がよくついて来ます。11番はむしろ動き回ってるって感じですよ。」

ふむ・・・特定のヤツにマークじゃなくて、空いたヤツをマークしてるってことか。

「あ、5番なんですけど、縦の動きにはよくついてくるんですけど、横にはあんまりついて来ませんね。」

中央からの攻撃には余り反応してきません。でも中央は4番がしっかりと守ってるって感じで簡単には抜けられませんよ。」

「そうか・・・体系は4-4-2で合ってるよな？」

「はい、スイーパーが一枚いて、センター、サイドに一人ずつ、それ以外は典型的な4-4-2ですね。」

うわ、メンドくさつ。スイーパーがいるって大分攻めずらいもんな・・・

「やっぱり、そのスイーパーが厄介だな・・・中盤はどうなってる？俺が見た感じだとそこまで手こずってる様には見えなかったけど」

「ああ、中盤はそこまででもないさ。ただミッドフィルダーの動きが少し速い。下がっていく速さがそこそこあるから、やっぱり攻めあぐねるな。」

MFか・・・よし！

「前原先生、ちょっと俺ポジション変えて貰っていいっすか？」

「！ーおい、御倉！ー今の状況でお前がキーパーじゃ無くなったら、あつという間に点獲られちまうぞ！ー」

「いや、大丈夫だよ、斉藤。見てる限りじゃ、こっちがやられそうになるパターンは、ほぼカウンターでだけだ。実際、あちらさんのフォワードは十分止められてるから悠人とかでも十分防げる。

それよりも、今重要なのはこっちのオフENSだ。確かに、向こうのMFやRSBは縦の動きには早いけど、中央からの攻撃はほぼ全てスイーパーに任せつきりだ。CBも動くが、どっちかというところサイドへのフォローって感じが強い。だから・・・」

そうして、俺は考えついた作戦をみんなに話していく・・・話していく内にみんなの顔はだんだんと真剣になっていき、最終的にはみんなが驚いた表情へと変わった。

まあ、気持ちは分かる。実際、俺だってこんな事実言われれば、驚くほか無いと思うしな。

「いや、確かに御倉の言う通りかもしれないけど、そんな簡単にいくのか・・・？」

「まあ、やってみなければ分からないがな。でも・・・」

俺に注目しているみんなの顔を見つめる。

うーん、いつもだったならこんなに目立つのはイヤなんだけど・・・

「やってみる価値は、あるだろう？」

俺、負けず嫌いなんだよね
だから、悪いけどさ。

「・・・それで、本当に勝てるのか？」

「勝つ！そのためにやるんだからな。」

久しぶりに、本気でやらしてもらおうぜ。

SIDE青葉西

「思ったよりも強いな、あいつら。て言うか、予想以上にあのキーパーのヤツうまいわ。こっちのパスルート完全に読み切ってたぞ、あいつ。」

「ああ、それにあの主将のやつも相当だぜ。中盤はほぼあいつに支配されてるって感じだった。中西達が止めてくれなきゃばかったな。」

「あ、でも一人やけに間抜けなヤツがいたな。何か気合い入れて突っ込んできたんだけど、その割にはあっけなくボール盗れたし。逆にこっちがびっくりしたぜ。」

ハーフタイム中、俺たちは予想以上の相手チームの強さに驚いていた。
何とか相手の攻撃は防いでいる状態で、カウンターも結構うまくいっているのに、中々点が獲れない。
それは予想以上にあのキーパーと、ボランチである向こうの主将が上手かったからだった。

「ちくしょう、やっぱりイケメンはなにやらしても上手いって事なのか……!!」

「いや、別にイケメンかどうかは特に問題じゃないだろう。」

「ああ。今はとにかく、どうやってあのキーパーから点を獲得かって事が重要だしな。」

試合前の様にあの二人へと嫉妬し出そうとする奴らを押しとどめる。今はそんなことよりも、どうやってこの状況を打開するかって事の方が重要だ。

「……けど、やっぱりかわいいな、生の倉本って……」

「ああ……けど、あの眼鏡かけた子もかわいくね？なんかこう、守ってあげたい感じがする……」

「お前らは、試合に集中しろおお!!」

普段目にしないレベルの女子達を前にして思考が完全に試合から離れて言ってる奴らへそう突っ込む。

「んだよ、花田は気になんないのかよ！！あれだけのレベルの女子が、今！！俺たちの試合を見てくれているんだぞ！！だったら、一人一人しっかりとチエツクするのが礼儀ってもんだろぅが！！」

「そんな礼儀聞いた事もないわああああ！！？」

「いや、花田は恐らく本当に気にならないのだろうな。」

「うお！！中西！！いきなり出てくんじゃねえよ！！」

「どついう意味だよ、中西？花田のヤツがあんなレベルの高い女子のこと気にならないって。」

「たしか花田のヤツ彼女なんて居なかったはずだろ？だったら、普通の男子中学生ならば気になるだろうが。」

「・・・まさか、この流れは・・・！！」

「いや、まだ誰もあの事は知らないはずだ・・・いくら中西でも、そんなことは・・・」

「いや、花田にはすでに彼女がい「うおおおおお！！？」ムグ！！」

「アブねえー！！コイツ、完全に知ってやがった！！なんでだ！！まだ誰にも喋った事なんてないのに！！」

「おい、なんで中西のこと抱きしめてんだよ、花田。・・・まさか、お前ホモだったのか！！？」

「ちがうわ！！俺は普通に女の子が好きだ！！？って、そうじゃなくってさっさと試合の話に戻れよ！！」

「今まだ試合中だったの!!!?」

全く、こいつらときたら、なに試合中なのに無駄な事を話し合っているのやら。

「いや、だったらその首締めてる中西のことも放してやれよ。何か顔色がおかしくなってきたからさ。」

「何言ってるんだよ、気のせい気のせい。ただ俺たち肩抱き合ってるだけだつて。」

全く、ついに目までおかしくなったのか。可哀想にな。今度良い眼科教えてやるよ。

「いや、だつて顔真っ青だぞ、オイ。何かメツチャ腕叩いてんじやねえの、それ。」

「何言ってるんだよ、これはあれだよ、あれ。もっと強く締めてくれて言うコイツからの合図だつて。俺たちの友情はこんなもんじや無いだろつて言うコイツからのアピールだよ。」

「いや、何かもう顔色が悪いとかそう言う次元の話じゃ無くなってきてるつて言うか、むしろ死にかけてないか、それ。スツゲエ必死そうなんだけど、中西のヤツ・・・」

「いやいや、これは喜んでんだよ、マジで。ほら、もう大人しくなつただろ?コイツもやつと満足したんだよ。」

「いや、それって死んだんじや・・・」

ピーッ!!

「ほら、ハーフタイム終了だよ、さっさとフィールドに行くぞ。」

そう言っつて中西を引きずっていくおれ。

え？中西のヤツ大丈夫なのかって？大丈夫、次の瞬間には蘇ってるから。

「いや、それって死んでたっつてことだよなあ!!」

心の声は、読んじゃダメなんだぞ？

SIDE 一馬

なんだろう、スツゴク変な感じで回ってきたような気がする・・・

「おい、一馬、お前大丈夫なのかよ。いきなりフィールドでやるなんて言い出して。」

俺の事を心配したのか、後半開始直前になって啓太がそう言うてる。

別に心配される程のことでも無いだろうに。去年だってフィールドでプレーしたし、一応練習でもフィールドをやったしな。それよりも……

「俺の事何かよりも自分の事を心配しろよな、啓太。この作戦、お前がミスったら、全てオジャンなんだからな。」

そう言うつと自分の役割を再認識したのか、珍しく緊張した顔になる啓太。

「そ、そうだよな……この作戦、俺がミスったら、大ピンチになるんだもんな……」

そうそう。それにな、

「これミスったら、前原先生がお前だけ夏休み中社会の補習だつてよ。」

「なにそれ、俺初耳だよ、そんなの!! てか、そんなこといつ決まっただわけ!!」

そんなの決まってるだろうに。

「さっき俺が提案したら先生が通してくれたぞ? 元々お前の成績じ

「やんなきやばかったみたいだな。」

「そ、そんな・・・俺の、俺の壮大な夏休み、ナンパ計画が・・・」
まずは勉強しろツてのに

「けど、この作戦が成功したら俺からも先生に言ってやるよ。補修なしにしてくださいってな。」

「な・・・に・・・？」

俺の言葉が信じられないのか、随分と怪しげな目で見つめてくる啓太。

なんだよ、失敬なヤツだな。

「なんだ、そんなに信じられないのかよ。」

「いや、だって人のこと罵倒してばかりの一馬がどうしていきなりそんな優しい言葉をかけてくれるなんて、ぶっちゃけ信じられない。」

・・・随分はつきりと言うな、啓太。

まあ少し考えれば納得してしまうような行動を執っていた俺が悪いのだが。
けどな。

「今回はマジだよ。お前も知ってるだろ？俺、負けるの好きじゃないんだよね・・・」

そう言うとおあ、なるほどと、納得した表情を浮かべる啓太。

「そう言えばお前負けるのメツチャ嫌いだったな・・・なんか納得。」

「それに今回はちょっと本気で行くこうと思ってるからさ。お前と斉藤ぐらいだろ？俺の本気についてくれるのってさ。」

「うわ、マジで！！お前が本気出すのかよ！！うっわ、こりゃ死ぬ気で行かないとヤバイな・・・！！」

そう言っただけで嬉しそうな顔をする啓太。

どうでも良いけど何でいきなり楽しそうな顔なんてするんだろっか、コイツは。

「いや、だってお前の本気なんて去年の先輩達との試合以来だろ？だから何かワクワクすんだよ・・・！！？」

変なヤツだな、ホント。

でもま、期待してるらしいんで・・・

「マジで行こうか・・・！！」

SIDE 智香

「一馬のヤツ、マジになった・・・！！？」

「え、智香ちゃん、どうかしたの？」

「え！？い、いや別になんにも・・・」

やばい、徐々に一馬の本気が見られるんだ・・・！？

いつもめんどくさいってばかり言っただけでほとんど本気を出さないあいつが、本気を出すんだ・・・！？

クウ~~~~！！考えただけでもドキドキしてきた！！

一馬の横顔は今まで以上に真剣なのに、スツゴイ楽しそうに笑っている。

ああいう顔をした一馬は、想像以上の事をやってくれるんだ！！

「・・・真希」

「？何、智香ちゃん？」

あたしは興奮してて、スツゴイいい顔してんじやないかな？

だって、これから起こる事がスツゴク楽しみでしかたないんだもん・・・！！

「この後半、スツゴイ事が起こるよ・・・！？」

「え？」

ピーン！！

あたしの言葉の直後に、ホイッスルが鳴り響き、ついに後半戦が始まったのだった。

第十五話（後書き）

どうでしたでしょうか？

ちよつと自分でも持ち上げすぎた感があった最後でしたが

一応色々とかんがえていますので、次回にご期待ください。
ではまた次回もよろしくお願いします。

それでは

第十六話（前書き）

どうも、ちょっと遅くなりました。

きょうはリアルの方でちょっととした用事があったので少し投稿が遅くなりました。

さて、十六話ですが、サッカーのシーンに関してなのですが、自分の表現力が乏しく、想像しにくいところが数多くあると思いますが、その所はどうぞご容赦ください。

では、十六話目、どうぞ！

第十六話

S I D E 一馬

ピーッ！！

後半開始のホイッスルが吹かれ、相手ボールからのゲーム再開。相手はセオリー通り、一度ボールを下げてから、フォワードがこちらのフィールドへと駆けてくる。

しかし、こちらでもまたセオリー通り、ボールを持つ選手に向かってプレッシャーをかけていく。

しかしそこは流石は強豪校。それには余り動揺せずに、冷静にゲームを組み立てていこうとしている。

やっぱり生半可なプレッシャーじゃびくともしないか。

そう思いながらもハーフライン辺りを中心に守る。

まだまだ仕込みは始まったばかりだしな。

焦らず行くとしますかね・・・

S I D E 青葉西

キーパーの14番がフィールドに出てきた時は何かするつもりなのかと思っただけど、特に何も起きずに数分が経過した。

相変わらず14番はフィールドに出てきてからは、ずっとハーフライン辺りの攻防にしか参加せず、働き方から見てハーフライン辺りの防御力強化を狙ったボランチって所か。

確かにボールは中盤でカットされるようにはなったが、それは結局

前半と一緒に、それ以降のパスはこっちが完全に防いでいる。

多少中央でのパスに注意を置けば特に脅威にもならない。

それよりも、問題は向こうのキャプテンがディフェンスに回った事で、こちらの攻撃が中々通らなくなったことだ。

中盤にいたキャプテンが下がってきたことで、敵のエリアでもパスカットやクリアされることが多くなってきてしまい、中々ボールが繋がらない。

「もう少し、ラインを上げた方が良いか・・・」

特に中盤が脅威では無くなった今、ラインをもう少し上げたところで、何の支障もない。

そう思った俺は、ラインを上げるようにディフェンス陣へと指示を出した。

これで、少しは攻撃力が上がる。

その守り、もうすぐ崩してやるよ

そう思った瞬間、俺たちの予期しなかった形で、試合が動き始めた。

「カウンター!!!」

!!!クソッ!

ラインを上げて、攻撃を仕掛けていた最中にまるでそこにボールが来ると分かっていたかのように、11番にパスカットされ、いきなりのカウンターを喰らっちゃった!!!

しかも奴らは11番がボールを蹴る前に一気に俺たちのフィールドへと駆け上がって来やがった!!!

「クソッ、マーク6、3番!!!パス通されるな!!!・・・って、何!!!」

てつきりフォワードかトップ下へのパスかと思った俺たちだったが、そのパスを通されたのは、14番。キーパーだったヤツにボールは渡った。

「なんでボランチのあいつに・・・？」

そう疑問に思った俺。

しかしその答えは、すぐに証明された。

「クソ、すぐに奪い返してやる！！」

「おい、迂闊に飛び込むな！！」

スツ・・・

「なあ！！」

14番がボールを持った瞬間に飛び込んでいく相沢。

イヤな予感がした俺は相沢を制止させようとするが、次の瞬間、相沢はいとも容易く抜かれた。

あいつの前に立ち、様子を窺っていた相沢が一瞬左足に体重を移動させた瞬間に、右から抜き去っていく14番。

簡単に抜き去ったように見えるが、相沢は北海道の中でも、上位に入るボランチだ。もちろん、普通のヤツが今みたいに抜こうとしたって、相沢なら即座に防ぎ、ボールを奪い去っただろう。

けどあいつは、相沢が左に体重を移した一瞬の隙に抜いていったんだ。

ゼロからいきなりのあの加速、相沢の一瞬の油断を突いたとしか言いようがない！！

スゲエ、芸当だ。普通のヤツには真似出来ねえと思うよ。

「けど、こつちにだって意地がある!!」

そう言つて三人突つ込んでいく。

空いた穴は下がつてきた奴らが入つてくれている。

これで、パスコースも防いだ、すぐにもボールは獲れる!!

しかし、俺の予想に反して、あいつは一人目を右に行くと思せかけ、左の踵にボールをぶつけると、すぐさま切り返し、左から抜き去る。二人目は、後ろからファール覚悟でスライディングしていった一人目と挟み撃ちという状況で、チョンツと触る程度の力のタッチを右アウトサイドで行い、体勢を崩した二人目の右側を抜けていく。そしてすぐに迫ってくる三人目を高速のルーレットで躲すと、中央へと切り込んできた!!

「と、止めるー!!」

思わずそう叫び、俺自身も突つ込んでいく。

他のデイフェンスの奴らも14番へと突つ込んでいき、流石のヤツもこれは躲せないだろうと思つた瞬間、ヤツはチラツと、横目で上がつてきているチームメイトを捜す。

その動きにつられた杉崎は、アツサリと抜かれてしまい、残すは俺一人となつた。

「ちくしょう!!絶対え抜かせねえ!!」

そう決意の意味も込めて言つと、若干後ろに体重を乗せた状態で待ち構える。

コイツに自分から突つ込んでいったら一瞬で抜かれる。

そう思わせられるプレーをされてきた俺は、いつもならばしない消

極的な思考に捕らわれていた。

ヤツの動きを見極め、ボールを獲れはしなくても、シュートは打たせない！！

しかし、そんな俺を嘲笑うかのように、ヤツが蹴っていた筈のボールが俺の視界から一瞬で消えた。

「な、ボールは！！」

消えてしまったボールを思わず探してしまう俺を正気に戻らせたのは、キーパーである中西の声だった。

「上だ、花田あ！！」

「ッ！！」

その中西の声に頭上を見ると、丁度俺を通り越していくボールと、俺の横を駆け抜けていった14番の姿があった。

「ヒールリフト・・・！！」

俺と一対一になった瞬間に今までのスピードよりも少しだけ早く動き、ボールを踵で打ち上げて俺を抜いてったのか・・・！！

そのことに今更気がついた俺はすぐさま14番を追う。

せめて、シュートだけは打たせねえ・・・！！

キーパーと一対一になっているあいつの背後からダッシュで迫る俺。中西はそう簡単に抜けるキーパーじゃ無い！！

ゴールまでまだ距離はあるし、中西は前に出てきているが、幸いにもカバーが右から入ってきてる！！

例え右に打つても、この角度、距離なら、カバーに入っている佐々木で十分防げるし、左は中西が完璧に止められる！！大丈夫、まだ間に合う！！
しかしそう考えた俺のシュミレーションは隣から駆けてきた2番によつて壊された。

「一馬！！」

「ッ！！」

その声があった瞬間、あいつはノールックで斜め後ろにパスを出した。かなりのスピードが乗った2番はドンピシャのタイミングでこのボールに追いつくと、完全に14番と一対一の体勢に入っていた中西の横を抜き去り、カバーに入っていた佐々木に触れさせないルートのシュートを放ち、これがゴールネットを揺らした。

ピーーーーー！！

「おっしゃあ！！汚名返上ダぜえ！！」

そう叫ぶ2番。だが俺は、完全に俺たちの動きを読み切ったかのようなドリブルとラストパスを出した14番をジッと見つめていた。

「なんなんだ、あいつは・・・！！」

その時、俺の口から出た言葉は、このフィールドにいる俺たち青葉西、全員の思いだった・・・

SIDE 一馬

「フウ、何とか上手くいったか。」

最後のあのスイーパーが突っ込んでこなかったのが予想外と云えば予想外で、少しヤバイかな？と思ったが、なんとか言ったとおりの展開になってくれたおかげで、1点決めることが出来たか。

「一馬！！やっぱスツゲエよお前！！五人抜きとか、半端ねえし！！しかもノールックで背後の俺の足下にドンピシャでパスとかお前、後ろに目でも付いてんのかよ！！！」

「騒ぐな啓太、まだ試合は終わってねえだろうが。」

興奮した様子の啓太に肩を抱かれながら自陣へと戻っていく俺たち。しかし、啓太のヤツはまだ試合中だというのにまるですでに試合が終わってしまったかのような様子で、興奮が収まらないらしい。

「けどお前、あんなドリブル見せられたら、興奮するなって方が無理だつての！！見ろよ、青葉西の奴ら、茫然自失って感じだぜ。」

・・・啓太・・・

「俺はお前がそんな言葉を知っていたと言うことにビックリだぜ。」

「こんな時まで人のことバカにするんですかあ！！！」

「冗談だよ。流石に俺だって試合中はお前のバカに付き合ったりす

るほど間抜けじゃないしな。」

「・・・なあ、今さらつと酷い事言わなかったか？」

無視無視。

隣で今だ何か言ってくる啓太を無視しながら走っていると、啓太と同じくらい興奮した様子の智香が大声で声援を送ってきた。

「一馬くく！！その調子だああ！！そのままハットトリック決めろお！！！」

「いや、得点決めたのは啓太なんだが・・・」

一応ゴール前まで持って行ったが、最終的に決めたのは啓太だから今のはアシストって事になって、ハットトリックは一試合に3得点以上決めなきゃならないから、今から3得点なんて無理に決まってるだろうに。

今のだって、相手が油断してくれただから成功したって感じが強いんだからそんな簡単にはいかんっての。

けどまあ、これで逃げ切るって考えは毛頭無いけどな。

守る為に下がってしまって結局点を獲られてしまっただけなのはよくあることだしな。

だったら、ガンガン攻めて攻撃させないようにしていくさ。

そう考えていると試合再開のホイッスルが鳴り響いた。

「いや、しつかしやつぱり凄かったな、一馬は。完全に相手の動き読み切っちまうんだもんない。」

あの後、一応一本はゴールを決めた俺だったが、流石にそれ以降はマークが厳しすぎて特に仕事をさせてもらえずに試合終了。

結果、2対0で俺たちの勝ちとなったのであった。

そして試合後、俺たちは部室で弁当を食べながら今日の試合のことを振り返っていた。

「別に、そう大したことなんかじゃないよ。多分斉藤とかでもあれくらいのことは出来るさ。」

「冗談！あんな試合の流れをハーフタイム中に読み切って、パスルートまで絞り込むなんてこと俺には到底出来ないよ。第一よくあの場所にボールが来るって分かったモンだよ。正直な話、あの時の悠人の顔、半端無く驚いてたぞ。なあ、悠人。」

そう斉藤が言うと、先ほどの啓太と智香に負けなくらい興奮した

様子だった悠人が大声で詰め寄ってくる。

「そうですねよ御倉先輩！！正直な話本当にあそこでパスが来るなんて全然思ってませんでしたもん！！」

しかも、通すパスのコースまでほぼ先輩の言った場所ですよ！！」

「いや、アレはただ前半で一番通ってた選手同士のパスで、悠人達にマークさせてた奴らが一番多かったからそいつらにパスさせるシユチュエーションを与えてやればそうなるって思っただけだしさ。啓太へのパスだって大体声のした方向は検討着けてたし、あとはそこから辺に蹴ってやればいいだけだろ？」

ドンピシャだったのはただの偶然だって。」

実際俺自身あんなに上手く行くななんて思って無かったわけだしな。

「けどあのドリブル突破は凄い衝撃でしたよ！！青葉西の奴らだけじゃなくって俺たちまでしばらく呆然としちゃいましたからね。」

「確かにな。あんなの見せられたら戦意無くすって普通。」

好き勝手に言っている斉藤達を少し放置して、智香がわざわざ作って来てくれたらしい弁当を食う。

正直な話、前に食わされた黒炭のようなヤツを想像していたのでこの弁当の中身を見たときは思わず京子さんに作ってもらったのではないかと疑ってしまった。

けど一口食ってみて、偶に食わして貰っている京子さんの味ではなく、ほどよく俺好みの味付けをされている唐揚げなどを食って本当に智香が作ったのだなあ〜と、少し感動してしまった。

昔食った黒炭のような物からちゃんとした食えるものになっている点もそうなのだが、しっかりとあいつも女の子らしいところがあっ

ただなと安心した。
いつもちよつとばかり男勝りで、多少かわいい物も好きだったりするのだが、どつちかというとな男っぽい趣味なども多かったと記憶していたから、ちゃんとあいつも女の子だったのだな」としみじみと思ひ、中々旨い弁当に舌鼓を打つのだった。

「いや、やつぱり凄かったなあ！！一馬！あの五人抜きした所なんて鳥肌たつちやっただよ！！」

「さつきから同じ事何回も言われてるんだが・・・」

「言いじゃん別にさー！！人が折角褒めたげてるんだから素直に受け取りなつて！！」

「はいはい・・・」

部室で話し合った後、俺たちは啓太の家で少しの間祝勝会を開き、ほどほどに飲み食いをした後の智香との帰り道、祝勝会でも何回も言われた、そのプレーのことをまた智香から聞かされ、ちよつと憂鬱な気分であった。

そりゃ、褒めてくれるのは嬉しい。だが、さつきからみんなに同じ事何回も言われれば流石に鬱陶しく感じてしまうものだ。

そう思いながらも上機嫌に隣を歩く智香の笑顔に思わず笑みがこぼ

れる。

数年前まではちょっとした疎遠状態だったので、少し俺もこの状況が嬉しいと感じているようだった。

「あ、そうだ一馬！お前ちゃんと約束守ってるだろうな？」

「約束？・・・ああ、レベルを上げるなってヤツか」

隣を歩く智香からの突然の問いに最初は何を言ってるのかと思っただが、すぐにレベルを上げるなど言う理不尽な要望であることと気がついた。

「ちゃんと守ってるよ。今はダンジョン攻略とかじゃなくって観光をしているんだよ。」

「観光？The worldでか？」

俺の言った観光という言葉に疑問符を浮かべる智香。

まあ普通じゃ観光って言われたってピンツと来ないよな。

「ああ。ロストグラウンドを見て回ってるんだよ。ちょっと最近知り合ったヤツに言われてな。ロストグラウンドだったらモンスターもアイテムもないから他のPCと戦闘になることも稀だし、レベルを上げようにも上げる相手もないからな。それにロストグラウンドを見て回るのって思った以上に楽しくてな。

まるで物語の舞台に行ってるみたいで案外おもしろいよ。」

「へえ、あたしあんまりロストグラウンドとか言われてもよく分かんないな。今まではレベル上げの方ばかり気にしてたからそう言う所は行ったことないし。」

そう言うと少しの間うつんと唸っていたかと思ったら、突然あたしも行ってみたい！！と言いだした。

「いや、別に構わないと思うけど、お前レベル上げの方はいいのかわ？一刻でも早くレベル上げるんじゃないのか？」

「べ、別にそんなすぐに上げる必要なんてないしさ！それにあたしだって偶には他のことをしてみたくなることだってあるっての！」

まあそりゃあそうか。

毎日毎日戦ってばかりいちゃ、いくらゲームでも楽しくないもんな。偶には他のこととして気分を変えるってのも重要だよな。

「分かった。俺は別に構わないよ。あ、けどキリカのヤツにも聞いてみないといけねえか・・・」

俺がそう呟くと、智香は訝しげな目をして俺に尋ねてきた。

「ねえ、キリカって誰？」

「ん？ああ、俺にロストグラウンド一緒に廻りませんか？言ってきたPCだよ。ジョブは双剣士なんだけど、全然戦いが出来無くてそれで戦わなくなって済むロストグラウンド巡りしてるヤツだよ。根は普通に良い子なんだけど、あり得ないほどのドジで、俺も危うくそのドジで殺されそうになったこともあったよ。」

「な、なんか変わったヤツみたいだな・・・ま、まあいいや！！じやあ明日は一緒にロストグラウンド巡りな！！ちゃんとそのキリカって子のことも説得しろよな！！」

「あ、オイちよつと!!・・・つたく、毎回毎回突然なヤツだなあ・
・まあキリカのヤツも断ることはないだろうけど、一応しっかり
と伝えておくか・・・」

そう言つて到着した家に入つていく智香。

俺はそんな智香の後ろ姿を見送りながら、キリカになんて言おうか
考えていた。

第十六話（後書き）

どうでしたでしょうか？

とりあえず、次回揺光とキリカが出会います。

ちなみに智香はキリカが女の子だとは思ってません。

そこんところを想像しながら、次回もどうぞよろしくお願いします。
ではまた

第十七話（前書き）

どうも。

十七話です。

今回はちよつとした秘密を公開しています。

まあこれだけで何かを分かっちゃったりする人はそこまでいないとは思いますが、もしも分かっちゃってしまっても、とりあえず先を楽しみにしてください。

それでは、十七話目、どうぞ。

第十七話

SIDE一馬

「ふうああ〜あ・・・ねむ・・・」

「何言ってるんだ、もう11時だったの。まったく、どれだけ寝れば気が済むんだよ。」

試合が終わった翌日の月曜日。

本来なら学校のある時間帯だが、今日は建校記念日で本日は休日となっていた。

そのため心行くまで睡眠をとりたかったのだがついさっき窓から急襲してきた智香に耳元で大音量の音楽を流されてしまい、強制的に起床となったわけだ。

「なんだよ、今日は休みなんだからいつまで寝てたって別にいいじゃないか・・・」

「お前なあ・・・そんなぐうたらな生活してたら身体壊すだろうが、いいか！日々の健康は規則正しい生活から始まるんだからな！！休日だからっていつまでも寝てて良いなんて思うなつての！！」

別に良いよ、不健康でも・・・

俺の自由はどこに行っただろうな・・・

そんな他愛もないことを思いながら智香の話聞く。
「って言うか何しに来たんだコイツは。」

「っで？わざわざ休日に幼なじみとはいえ寝ている男の部屋にいき

なり押し入ってきて何の御用でしょうか？」

未だに眠たい目を開けて何のようかと智香に尋ねる。

第一、休日に俺がどう過ごそうと俺の勝手だとは言わない。その場合は智香が怒って説教たれてくるのが目に見えているから。

「人聞きの悪い事言うなよな!!」

事実だろうが。

そう思うが言わないなぜならそう言った場合は理不尽に切れられて俺が被害を被ることが目に見えているから。

「まあ、アレだよ。その、休日にずっと家にこもってるのも不健康だろ？だから、その、い、一緒に、その・・・出かけたりしてもいいかな？って・・・」

・・・

そんなことでわざわざあんな大音量で起こされたのか、俺は・・・

「うーん、残念だけど、今からじゃちょっと無理かな。約束があるし。」

「な・・・!!約束って、まさか女か!!」

いや、なんでそんなに迫ってくるんだよ。

でも、多分女だから、智香の言うことも間違っちゃいないのかな・・・？

って言うか昨日お前が会いたいって言ってたから連絡して今日会う事になったってのに・・・

「うん、そう言うことになるのか？」

まあ多分無いだろうけど、ネットじゃ性別偽ってロールするって事も無くは無いらな

「な！・・・女？・・・何時？あたしが見てる限りじゃそんな素振り全く無かったのに・・・何時、何時盗られたんだ・・・」

・・・なんか、いきなり打ちひしがれたような体勢になりながらぶつぶつ言い出した。

なにか変なこと言っただろうか・・・？

「一馬・・・」

「お、おう、なんだよ・・・」

何かちょっと怖くて思わず声の上擦ってしまったが、仕方ないことだと思う。

いきなりぶつぶつ言っていたと思ったたら前触れもなくいきなり人の名前を呼ばれたら誰だってビックリすると思う。

「そいつと、何時知り合ったわけ・・・？」

何か怖・・・！！

短い髪の智香の前髪が、何故か目を隠すようになっていたのかと言う点は一応置いておくにしても、

聞き慣れているはずの智香の声からなんかぞつとするような寒気が感じられて俺は無意識のうちに一歩後座すっていた。

「い、一週間くらい前かな・・・」

「一週間前・・・？おかしい・・・その間に一馬が女と会っていた形跡なんてまるでなかったのに・・・」

何か怖ええよ！！

何故自分の行動が智香に把握されているのかって所が凄まじく突っ込みたいんだが、そんなことを言える状況でもないので黙っていることにしよう。

何故こんな状況になっているのか理解出来ないが・・・

「なあ、一馬・・・その女にあたしも会ってみたいんだけど・・・」

「べ、別に構わないけど・・・」

正直今、この状況から抜け出せるなら何だってしたい。って言うか今日は智香に紹介するためにセッティングしたわけだから、丁度言い訳なんだが正直今はそんなことよりもこの状況から抜け出すための手段として使わせて貰おう！！

それくらい、今の智香は俺にとって恐ろしい存在感を出していた。

「そう・・・で、どこで会うわけ・・・？あたしちよっと準備しなきゃいけないみたいだから、少し急ぎたいんだ・・・」

何を用意するのか凄まじく疑問なんだが・・・

ま、まあとにかく、もともと紹介するつもりだったから丁度良いと言えば丁度良いのか・・・？

「じゃ、じゃあ12時半にマク・アヌに来てくれ。そこで待ち合わせだから。」

「・・・は？」

ん？何故かさつきまで感じていた智香からのプレッシャーが消えた。智香を見てみると何故か間の抜けたような顔をして俺の事を見ている。

「ちょ、ちょっと待って！！お、女ってもしかして、The worldの・・・？」

？なにを当たり前なことを。

「なに言ってるんだ智香。それ以外に俺がわざわざ休日用があるとでも思ってるのか？昨日お前が会いたって言ってたろ？だからわざわざ今日会う約束したんだよ、キリカのやつと。」

そういうと、なんだかさつきみたいなぞつとするような雰囲気は無いもののまたぶつぶつと何かを呟き始めた。

「じゃあ、あたしの勘違いだった・・・？いや、まだ可能性は捨てきれない・・・第一一馬と二人でロストグラウンドを廻ってたって言うてたし、それにどうもそのキリカつてのは女性みたいだしな・・・確かめてみるしか無いか。一馬！！」

「お、おう何だよ！」

ひとしきり何かを呟いていた智香が俺の事を呼んだ。少し驚いた物の、さつきみたいに声が上擦るってことは無かったよ。うだ。

「12時半にマク・アヌでいいんだよな！？」

「あ、ああ。それで合ってるよ。」

「・・・分かった。じゃあとりあえずは飯だよな。まだ何も食べてないんだろ？何か作ってやるよ。」

「・・・まあ、作ってくれるって言つのならありがたく食べさせて貰うよ。」

「おう！！楽しみにしてるよ！！」

そう言ってさっきよりも何故か機嫌が良さそうに部屋を出て行く智香。

その智香の変わりように俺はしばらく啞然として、一つの疑問を口にしたのだった。

「結局、あいつは何に怒ってたんだろうか・・・？」

その疑問は結局解決しないまま俺は智香に呼ばれてリビングへと降りていったのだった。

一馬の突然の女との待ち合わせという言葉に正直何時盗られたのかと考えると、結局あたしの微妙な勘違いだと判明してから一時間少々。まあ、実際にそのキリカという女に会ってみてから一馬に対してどれだけ好意を抱いているのか判断しなきゃ安心出来ない訳だけど、一応さつきよりもあたしは冷静だった。

ハッキリ言つて一馬から女との約束があるなどと言われた時は足下が崩れていくような気がして、あたし自身何をしようとしていたのかハッキリとは覚えていないわけだけど、リアルでの話では無いと聞いてひとまず安心したのと同時にやっぱりあたしにとって一馬の隣つて言うのは誰にも譲りたくない場所なんだと再確認したんだ。だって誰か知らないヤツが一馬の隣で笑つてると言う光景を想像しただけであたしは多分立ち直れなくなるかもしれない。

みんなはあたしのこと凄いとか強いんだねとか言うけどそんなの一馬が居てくれなきゃ、あたしが一馬の隣にいなきゃそんなみんなが言う「強いあたし」は脆く崩れ去ると思う。

もちろん一馬があたし以外の女と付き合うのかもしれない。告白して断られて、他の女と笑い合ったりするのもかもしれない。でも、それでもあたしは、あたしの想いを告げないうちにそうなるのは欲しくない。

何時かそうなるんだとしてもハッキリとあたしの気持ちを伝えてからじゃないと、諦められる筈もないんだ。

そう自分自身の気持ちを再確認したあたしは今ほひとまずそのキリ

かつて言う人と会うためにPCの電源を点けた。

そしてあたしはここ数日で大分慣れたHMDを頭に被せて、The worldへとログインする。

そしてすぐに相変わらずリアルなマク・アヌの caosゲートに出て、倉本智香から揺光へと変わったあたしはまずカズマを探すことにした。

SIDEカズマ

智香に作ってもらった朝飯兼昼飯を食べ終わった俺は時間になるまで読みかけだった本を読み、そろそろ約束の時間となったのでHMDを被り、The worldへとログインする。

ログインを終えた俺の目の前に相も変わらずネトゲとは思えない程の現実感を持ったマク・アヌへと出現する。

メンバーアドレスの覧の揺光とキリカの部分を見てみるとどうやらキリカはすでにログインしているようで表示はオンラインとなっていた。

揺光の方もオンラインとなっているので少し周りを見回していると丁度こちらと同じように俺の事を探している素振りを見せている揺光を発見した。

とりあえず揺光へと近づいて呼びかける。

「揺光。」

「お、カズマ、そこにいたんだ。で、そのキリカって人はもう来てるわけ？」

話しかけるとそうどこか好戦的な声で尋ねてくる揺光。

まさか会っていきなりバトルとか挑む気じゃ無いだろうな？

一応タウンでは武器を出すことは出来ないのだから会っていきなり斬りかかると言つことは出来ないがなんだか雰囲気的にそんな感じさえするかのよような声で尋ねてくる。

「えっと、一応もうオンラインになってるから、多分広場の方にいると思う・・・」

「そっか。じゃ、さっさと行くぞ。」

そう言つて一人でさっさと歩き出してしまふ揺光。

つてお前キリカがどういうヤツかも知らないのに一人で先に行くなよ。

俺は慌てて揺光の後を追うことにした。

そうして少し歩いているとあつという間に広場へと到着する。

そこでは相変わらず様々なギルドが出店を出していて商品を見ているPCで溢れていた。

その人混みの中を探していると、丁度店のアイテムを見ているキリカを発見した。

「お、いたいた。おゝい、キリカ！」

そう呼ぶとアイテムから目を離しきよると周りを見回し、こちらを発見すると顔を明るくしてこっちに駆けてくる。

「どうも、カズマさん！！それで、そちらの人が揺光さんですか？」

「ああ。コイツが今日紹介したいって伝えた揺光だ。で、揺光。こっちが話した相手の」

「キリカです、はじめまして！！一緒にロストグラウンドを見て回ってくれる人がいるって聞いて、会えるなんてうれしいです！！これからよろしくおねがいします！！」

そう本当に嬉しそうに挨拶をするキリカにやはりまだどこか警戒したような目をしたまま揺光も挨拶を返した。

「・・・揺光だ、よろしく。」

「えっと、私何か気に障ることも言いましたか・・・？」

揺光の自分を警戒するような視線に気づいたキリカは戸惑いがちに揺光へと尋ねる。

しかしそんなキリカに揺光はしばしジーツと見つめていたかと思うと突然俺に向かってキリカと二人つきりで話したいと伝えてきた。

「・・・なあカズマ。ちょっとキリカと二人で話したい事があるからちょっと離れててくれない？」

「は？いきなり何を「頼む」。・・・俺は構わないが、キリカはどうだ？」

「わ、私も構いませんよ？揺光さんの方もあたしとどうしても話してみたいみたいですし。」

キリカにそう尋ねると構わないと言つ返答が返ってきた。

「ありがとう。じゃあちよつとこっちで話せる？」

そう言うと揺光はさほど人だかりがない橋を指さす。

それにキリカは「構いませんよ。」と答えると揺光と共に橋の方向に向かっていった。

俺はその二人を見送ると手持ち部沙汰になってしまったため仕方なく噴水に腰掛け二人を待つことにした。

SIDEキリカ

「ごめんな、いきなり二人で話したいなんて言って。」

「い、いえいえ！別に構いませんから！それに私も何でそんなに揺光さんが私を警戒してるのか気になりましたし・・・」

今日初めてあつた筈の揺光さんに向けられている警戒をしている視線。

その理由が気になつて私は揺光さんと二人っきりで話し合うことにした。

「えつとさ・・・キリカはカズマと一緒にロストグラウンドを見て回ってるんだよな？」

「そうですね。私、ちょっと人よりも戦ったりするのが苦手で、でも折角The worldをやっているんだから何かしたいって思つて。それで戦わなくても何か楽しめる事つてないかな？って思つてたらロストグラウンドの事を知つて。それで観光みたいで楽しそうかな？って思つてのでいろいろなロストグラウンドを見て回ることにしたんです。」

私は戦うのが苦手だ。

元々誰かを傷付けると言う行為が嫌いと言うほどではないんだけど、どちらかというと苦手な方だったからこのゲームも始めた当初はそこそこ戦ったりもしていたんだけど、レベルが少しずつ上がつていくにつれてもつと他に楽しめる方法はないのかなと思うようになった。

実際は”あの子”と出会つたことでちょっと普通に戦ったりするのが難しくなつたつて言うのもあるんだけど、今はむしろそれで良かったと思う。

”あの子”に出会つて今は前よりも調子が良いし、それにカズマさんとも出会えてロストグラウンドを巡つたりする方がおもしろいし、”あの子”にも戦う以外の楽しみを知ってもらえてきているから。

あたしがそう言つと、揺光さんは「そつか・・・」と呟いて何かを
思い詰めてるみたいになにかを考え込んでいる。
それにあたしは口を挟まずに待つことにした。
多分揺光さんは何かを私に尋ねようとしている。
だったら私はそれにしっかりと答えてあげないといけなしね。

” - - - - ”

ダメだよ。

こういうときは相手が何を言いたいか、それをちゃんと聞くまで待
たなきゃいけないの。

” ”

うん、良い子。

「あ、あのさ・・・」

「はい？」

あの子とちょっとだけ話していると揺光さんが私になにかを言いかけ
てくる。

「キ、キリカはさ・・・カズマのこと・・・どう思ってる・・・？」

「・・・」

ああ、そういうことか。

何となく、ううん、私は何で揺光さんが私と会ったときにあんなに

警戒していたのかと言う理由が分かった。

そうか、揺光さんはカズマさんのことが好きなんだ。

それで、いきなりカズマさんと親しくなった私のこと警戒してたんだ。

” - - - ? ”

そっだよ、揺光さんはカズマさんのことが好きなんだよ。だから私のことを警戒してたの。

あなただって最初はカズマさんのこと疑ってたでしょ？

” - - - ! ! ! ”

分かってるって。今じゃあなたもカズマさんのこと大好きだもんね。

「揺光さんはカズマさんのこと好きなんですか？」

「・・・な、何言ってるのさ、いきなり！！そ、そんなこと・・・！！？」

私がそう尋ねると、顔を真っ赤にして何かを言おうとする揺光さん。このThe worldではコンピューターがプレイヤーの心拍などを感知してリアルよりも感情が表に出やすいらしい。

聞いた話だと、なんでも恋人同士が隠し事を見破ったりすることにも使われているらしい。

「フフフ・・・ごめんなさい、何となくそうじゃないかなって思ったから聞いてみたんですけど・・・」

私の問いに慌てている揺光さんを見て、思わず笑ってしまっ。

そんなあたしを顔を赤くして睨んでくる揺光さん。でも、その視線はさつきみたいに警戒した視線じゃなくってどこかかわいらしい感じがしていた。

「フフフ・・・ごめんなさい。あんまりにも分かりやすかったから、つい」

「う、うるさいな！！・・・で、どうなんだよ？」

「そうですね・・・好きですよ？揺光さんとは違う好きですけど。」

「？あたしとは違う好き？それって・・・」

私の返答にちよつと首を傾げて考え込んでいる揺光さん。

「揺光さんはカズマさんを一人の男性として好きなんですよね？」

「う・・・そ、そうだよ・・・」

また顔を真っ赤にして私の質問に答えてくれた揺光さん。
フフ、やっぱりかわいいな

「私の好きはどちらかという私の言うことを笑わないでくれたカズマさんを”友達”として好きって感じです。それに、私リアルで面識もない相手を好きになれるほど恋愛に飢えてなんていませんよ？」

今の時代には珍しいタイプだつて言うのは自覚がある。

今時出会い系で知り合つて結婚したと言う話は珍しくもないし、ネットゲームだけでお互いを知らないのに付き合い始める人だつ

ているくらいだ。
でも私はそう言った感情はカズマさんには抱いていない。
それに・・・

「私が誰かをそう思うなんて、多分ないです。」

「え？」

そう、多分私が誰かと付き合ったりするなんて事はない。
でも私はそれでもいい。
だって今私は幸せだから。

” - - - - ”

心配してくれるの？大丈夫、言ったでしょ？私は今幸せだから心配
しないです？

「だから、大丈夫ですよ。私はカズマさんを盗ったり何かしません。
それどころか、私は揺光さんを応援しますよ！！」

私の突然の応援宣言にたじろいだ様子の揺光さん。

「え、ええ！！いい、いいよ別に！！そんなことしなくったって・・・

」

「いいえ！！ここ数日一緒にいただけでも分かるくらいカズマさん
は鈍感です！！揺光さんはリアルでカズマさんの幼なじみなんです
よね？」

この前話してくれた幼なじみというのは十中八九揺光さんだ。

” - - - - ? ”

何で分かるのかって？そんなの、女の勘ってやつよ！！

「そ、そうだけど・・・」

ほら当たった！！

”・・・”

「でもリアルで幼なじみだからって安心してたらダメですよ！！ここ数日だけでも、カズマさんを狙ってるっぽい女性を私は何人か確認しています！！今時ネット上での恋愛や結婚なんてあり得ない話じや無いんですから、ここでも積極的にアピールしていかないと！！」

なんだろう、今まで感じたことのないワクワクがこみ上がってくる！！

”・・・”

「う、うう・・・で、でもどうすれば・・・」

「私に任せてください！！ロストグラウンドはただのエリアじゃなくって物語を基にしているエリアです。中には恋愛を描いた場所もあります！！そう言うところで、どんどんアピールしていきましょう！！」

「キリカ・・・そうだよ、もっとアピールしていかないと、あの鈍感な気づく訳ないんだ・・・だったらもっとアプローチしていか

ないと!!」

「その通りです!!二人であの鈍感男を目覚めさせてやりましょう!!」

「ああ!!やってやるっぜ、キリカ!!」

「はい、揺光さん!!」

そうして私たちは堅い握手を交わしました!!

全てはあの鈍感野郎を目覚めさせてやるために!!

燃えてきましたよ!!

” ”

あの子がため息を吐いたような気がしましたが、無視です!!

私と揺光さんはこうしてたった数十分でとても仲良くなったのでした。

第十七話（後書き）

どうでしたでしょうか？

キリカが途中までいつもよりも大人っぽいと感じた方、まあ彼女にも色々あると言つことでも願います。

それと今回出したちよつとした伏線。

あれは今後の展開において超重要なキーだったりします。

まあこんかいはこのくらいにして、それでは次回もどうぞよろしく願います。

第十八話（前書き）

どうも。

リアルの方が中々忙しくなってきたジーユーです。

さて、一日空けての十八話。

なんか最後の方の戦闘は、恐らく今までで一番クオリティが低いです。

そう思いながらも良い感じの戦闘シーンが書けなかったので、こんな風になってしまいました。

以降はもっとクオリティをもっと上げられるようにがんばっていきますので、どうかこれからもよろしくお願いします。

第十八話

SIDEカズマ

揺光とキリカにヤツを会わせてから今日で3ヶ月ほどたっただろうか。

世間では夏休みも終わり、学校も始まって俺たち受験生は志望校に合格するために勉強に励むはずのこの時期に、相も変わらずこうしてロストグラウンド巡りに精を出していた。

俺と智香は正直すでに推薦入学を決めているので特に勉強を慌ててすることもなく、いつも通りに過ごしている。

俺は目の前で仲良く笑い合っている揺光達を見ながらこいつらが初めて会った日のことを思い出していた。

あの日、一体何を話し合ったのか、二人で話す前と後ではまるで様子の違う二人に驚きながらも、仲良くなったのならばよかったな、と思っていた俺だったが、しばらくしてエリア散策することになった俺たちだったのだが、揺光とキリカは俺の事を忘れたかのように楽しそうにワイワイとガールズトークを始めてしまったのだ。

もちろん二人が仲良くなることに異存など全く無いのだが、流石にどうしてそこまで仲良くなったのか気になった俺は一度二人に尋ねてみた。

しかしその質問に二人は顔を見合わせて笑ったかと思うと「教えな〜い!」と何が楽しいのかさっぱり分からなかったがそう二人揃って言われてしまったので気になりながらもしょうがなくて諦めることにした。

まあそんな感じであつという間に3ヶ月が過ぎたわけで、俺たちはキリカに先日行ってきた海の話をしていた。

「でね、啓太のヤツつたらそのままナンパした女子大生にビンタ喰らってさ！！ホントトおかしかったあ！！な、カズマ？」

「そうだな。けどさ、あいつその後にもた別的女子高生にナンパしに行てつな。その女子高生が彼氏持ちでその彼氏に自慢するように蔑まれたって言って泣きながら俺たちの所に戻ってきたんだぞ。」

「うそ！！それは知らなかった！！あー、あたしもその場面見たかったな」

そう言つて笑う揺光。

そして俺たちの話を笑つて聞いていたキリカは「要するにその啓太という人は盛っているけど誰にも相手にされないゴミだつて事ですね！！」と笑顔で言い放つた。

「おい、誰だ。キリカにそんな言葉を教え込んだのは！！」

純真無垢なキリカを返せ！！天然だけど、こんな毒を笑顔で吐く子じゃ無かつたはずだ！！

「えっと、揺光さん。ちょっと良いですか？」

またか。最近キリカは揺光と二人で俺に聞こえないように話すことが多くなった。

理由を聞いても「女性にそう言うことを聞くのは、デリカシーが無いですよ！！」と、怒られてしまった。っていうか、聞いてしまつたらデリカシーに欠けるような話題を俺がいるときにするなよ、と言いたい。

「ん？いいよ。じゃ、カズマ。ちょっと離れてろよ！！いいか、絶

対に近づいてくるなよ!？」

「はいはい、さっさと話し終えてこい、ちゃんと待っててやるから。」

そう言って手をプラプラと振って揺光に答える。

この3ヶ月で二人とも、もうすっかり仲良くなったんだなあ〜と実感して、空を眺める。

「平和だなあ〜」

鳥は飛んでいないが、のどかな青空が広がっていた。

「広がっていた筈だったんだが・・・」

ついさっきまではな。

今俺は、何故か知らんが大量のPKに囲まれていた。

いや、ホントさっきまでのどかな青空が広がっていて、平和を実感していたはずなのだが・・・

「カズマ！！なにこんな時に黄昏れてるんだ！！しっかり戦えツての！！」

「へ！！死ねおらあ！！」

そう言っつて斬りかかってくるPKをため息を吐きながら、カウンタ―で吹き飛ばす。

「ゲフウ！！」と変な声を上げながら吹き飛んでいくPK。

だが、今俺たちの周りには少なくとも10人以上のPKが居り、そいつらは俺たちを取り囲むようにして次々と襲いかかってくるのだ。奴らは皆一様に俺達のがく様をケタケタと笑いながら、攻撃してくる。

しかし奴ら一人一人の攻撃力はさほど高くはなく、俺に揺光、キリ力は多少のダメージだけで済んでいた。

普通の、俺対奴らという形式ならば、こんな戦闘技術のない奴らの攻撃など、なんと仕掛けられたところで避けきる自身が俺にはある。揺光も恐らく同様だろう。

さつきからこいつらの攻撃を全てでは無いものの、しっかりと捌けている。

3ヶ月前とは比べものにならない程に技術を磨いたのがよく分かる。しかし、その技術も、この状況では十全には生かし切れない。

なぜなら、今俺達は背後にキリ力を庇った状態だからだ。

先ほども言っつたとおり、奴らのレベルはその操作技術と比例してさほど高くはない。

しかし、奴らはキリ力を執拗に狙うことによつて、俺達を彼女に釘付けにしていた。

キリ力は、戦闘技術はさほど高くはないが、不思議なことにそこそ

こレベルが高い。それ故に彼女は奴らからなにか強力な攻撃をくらいながらも、そのHPを残していた。

しかし、彼女は戦闘が苦手である。NPCであるモンスターとの戦闘でさえ苦手な彼女は、言うまでもなく対人戦など全くしたことがない。

この前PKに絡まれたときは俺が撃退したのだが、敵が一人だったのにも関わらず、彼女は正直異常なまでに怯えていた。

そんな彼女が今のこの状況に冷静でいられるかと言う問いは、言うまでもなく否だ。

彼女は大人数のPKに攻撃されてしまっってから、怯えて動けなくなっってしまったのだ。

そんな彼女を守りながらでは、満足に攻撃を避けることも、捌くことも十全にできるわけではない。

しかし、怯えている彼女を放っておく事など出来る筈もなく、俺は再びキリカを狙って斬りかかってきたPKの攻撃を防ぎ、そのガラ空きのボディへと強烈な一撃を見舞ってやる。

その一撃で吹き飛ばすPK。しかし、そうして吹き飛ばしたPKは仲間快癒の水を与えられ、またHPが回復してしまっ。

さつきからこの繰り返しだ。

与えたダメージは他の奴らに回復され、こっちはじわじわとHPを削られる。

そして奴らはそうやってどんどん死に近づいていく俺達を見て楽しそうに嘲笑いやがった。

・・・正直、ムカツク。

一人では何も出来ず、他人をいたぶり、じわじわと苦しめ、その様子を笑いながら眺める奴らの視線も、その笑い顔も、全てがムカツク。特に、キリカの怯える姿を見て、ゲラゲラと笑い声を上げているアイツは、その中でも、ダントツにイライラする！！

「おいおい、なにブルブルと震えてんだよお！！怯えてれば俺達が

いなくなるとでも思ってたのかあ？」

そう品のない声でキリカの姿を笑うPK集団のリーダーらしき男。

「なんだよ！！戦いを怖がるのが、そんなにおかしいのかよ！！」

「揺光……」

キリカの姿を見て笑うリーダーの男へとそう叫ぶ揺光。

「別に、良いだろうが、怖がってたって！！この、The worldは、戦いが嫌いなヤツだって居るんだ！！」

そんなヤツがいて悪いつてのかよ！！ただ、平和にこの一ゲーム（The world）をやっているヤツが、そうしてただこのゲームを楽しんでいるヤツが、そんなにおかしいのかよ！！そんなに、こんな風に戦うことに怯えるヤツのことが可笑しいのかよ！！」

たった、3ヶ月。

数字で言えば大して多くない日時をゲームという世界を通じてだけ知り合い、仲良くなったキリカの事を庇うように叫ぶ揺光。

リアルでの人柄さえ知らない、面識さえないこの少女の、戦いに怯える姿を笑うヤツに大して本気で怒る揺光の姿に、俺は見惚れてしまっていた。

真剣に、たった3ヶ月しか共にいなかった少女のことをここまで思うことの出来る揺光に。

そして、そう揺光に言わせるまでに、純粹で、仲良く慣れたキリカのありように、俺は戦いの最中な筈なのに、何故か穏やかな気持ちでいた。

しかし、そんな穏やかな気持ちはヤツの発した耳障りな声に完全に打ち消された。

「ギャハハハハ！何が、楽しくだ！何が平和に過ごしているだ！やっべえ、可笑しすぎて、腹痛くなりそう！！」

「な、なにがそんなに可笑しいんだ！！」

「だって、可笑しいだろお？こんな戦うことが目的のゲームで平和に過ごすだあ？そんなに戦いたくないんなら、他のゲームをすりゃあ良いだろうがよお！？第一、そんな風な弱いヤツはなあ・・・」

キリカを完全に見下しながらこう言ったのだ。

「この、The worldから消えるべきなんだよお！？ここにいる資格があるのは、力ある者のみ！！」

それ以外の、特に戦いを嫌がるようなザコに、このゲームに居場所なんて無いんだよお！！」

「！！この「黙れ・・・」か、カズマ・・・？」

頭の中が、グチャグチャだ。

ヤツは、俺達が守ったこの世界を、ただ戦える者のための世界だと言った。

俺達は、あんなヤツのために、この世界を守った訳じゃない。

彼女は、あんなヤツをこの世界に居させるために、死んだんじゃない！！！！

「キリカの居場所がない？キリカに資格がない？ふざけるなよ、ザコが。」

「なあ！！テメエ、今何だったあ！！！！」

「少なくとも、お前のようなヤツが、この世界を語るんじゃないよ！！大した力も持たない、数で威圧するだけの分際で！！！」

人を見下し、他人の怖がる様を見て笑っているような下衆野郎にキリ力を否定させ何かしない。

キリ力が、その純粋な笑顔で語ったこの世界を。俺達と共に廻ったいろいろな場所を、本当に楽しそうに笑ったあの笑顔を。

「お前なんか、否定させるかよ！！！」

拳を握りしめ、ヤツへと駆け出す。

周りにどれだけ敵がいようと、関係ない。

俺は、この拳を！！

「ヤツへと、叩き込んでやる！！！」

「ユニークアーツ発動！！」

背中が、欠けていく。

ポロポロと崩れていくその羽からは緑の光が吹き出し、それが推進剤となり、俺の身体を空中へと打ち上げる。

俺は空中でヤツを見据え、そのままヤツへと猛スピードで迫る。

ヤツは見たことも無い技を発動させようとしている俺を見て、慌ててヤツの武器である大剣を盾にする。

The worldの中でもその分厚い大剣の防御を打ち破れる者など、いるはずがない。

そう信じているヤツの顔は、笑みに染まっていた。
だが

「衝撃の……」

そんなちんけな壁なんざ!!

「ファーストブリットオオオオ!!」

ぶち壊してやる!!

ギユウウウン……

バキイン!!!

SIDE 揺光

カズマの攻撃が、あのムカツクPKに当たった瞬間、ヤツとカズマの間の空間が歪む。

まるで一馬達が捻れるかのように空間が歪み、それが元に戻った瞬間、ヤツの大剣は何か割れるかのような音と共に砕け散り、ヤツ本人もまた一瞬で仮死状態へと陥った。

「な、なにが・・・」

何が起こったのか分からない。

あたしが見た限りではカズマの拳は大剣に阻まれた筈なんだ。

けど、その次の瞬間にはカズマの拳は大剣をぶっ壊して、ヤツの顔をぶち抜いていた。

正直何が何だか分からない。

「テ、テメエ！！チートしてやがるんだろっ！！あんなの、どう考えたっておかしいぜ！！」

そう。認めたくないけど、確かにさっきのは普通に考えたら可笑しすぎる。

でも、カズマがチートなんかしてるはずない！！

「なんだ？リーダーがどうして倒されたにかも分かんないか？なら・・・」

グツと再び拳を構えて地面へと打ち付ける。

それによって、カズマの身体は、あたしが跳ぶよりも高く舞い上がる。

そして、さっきヤツを倒したときと同じ、緑の光を背中から吹き出し、猛スピードで敵へと落ちていく。

その姿はまるで、敵を貫く銃弾みたいだった。

「味合わせてやるよ！！」

「ヒ、ヒィ！！」

そのカズマの言葉に怯え、慌てて逃げだそうとするチート呼ばわりした男は、あっという間にカズマに追いつかれた。

「撃滅の、セカンドブリットオオ!!」

ギユウウウウン・・・

バキイン!!

「ギャアアア!!」

再び空間が歪むような音の後、何か割れるような音と共に、PKが仮死状態となった。

それを見た他のPK達は我先にと逃げていく。

そんな奴らをカズマは追わずに、キリカの方へと戻ってきた。

「もう大丈夫だぞ、キリカ」

・・・カズマ。

「ちゃんと説明しろ!!」

あたしを素通りしたカズマの頭をあたしは思わず双剣でぶっ叩いたのだった。

第十八話（後書き）

さて、一応シエルブリットを出してはみたものの、クオリティが低かったです。

と言うわけで、これからは大体二日に一度のペースで投稿することにしようと思います。もしかしたらそれよりも長くなるかもしれませんが。

リアルの方でも学校と部活が始まるので中々時間が取れそうにないんです。

でも、ちゃんと完結までは投げ出したりしませんので皆さんこれからもよろしく願います。

第十九話（前書き）

どうも、昨日二日に一回とか言っておきながら投稿しているジーユ
ーです。

一応二日に一回と言うスタンスで今後はいくことにしたわけですが、
まあ投稿出来るときに投稿してしまおうと思い、投稿しました。
こんないい加減な作者ですが、それでも良ければ今後も
黄金の右腕をよろしく願います。

第十九話

SIDEカズマ

「・・・死ぬかと思っただぜ。」

「うつさい！！それより、ちゃんと説明しろ！！なんなんだよ、さっきのあれは！！」

俺達を襲ってきたPKの集団を撃退したその直後、まさかの揺光の一撃により残り1/4までHPは減ったものの、すぐさま治癒の水を使い、瀕死を免れた俺は、なぜか揺光の前に正座で座らせられていた。

「説明って・・・一体何を？」

はて、何を説明して欲しいんだろうか、この暴力女さんは。正直な所、マジで何か説明しなきゃいけないことをやった覚えなどないのだが。

「だーかーらー！！なんであの時、相手の武器をお前が壊せたのかって話だよ！！普通あんな事出来ないだろうが！！・・・まさかだとは思っし、あたしだって信じたくないけど、あんな事チートでもしてない限り出来るわけ無いじゃん・・・」

・・・は？

いや、ちょっと待て。なんだ、チートって。

もしかして、こいつ・・・

「なあ、揺光。お前もしかして知らねえのか？武器の耐久限度数値のこと。」

「武器の耐久限度数値・・・？なんだよ、それ。」

ああ、やっぱり知らなかったのか。

まあ、よくよく考えてみたらこの設定のこと知ってるヤツってそんなにいないしな。

仕方ない・・・

「いいか、武器の耐久限度数値ってのは、読んで字の如く、武器ごとに設定されてる耐久性の数値だ。

これを上回る攻撃がその武器に加わると、その武器は耐久値の限度を超えて破壊されるってわけだ。

まあ普通のモンスターとの戦闘やプレイヤー同士の戦闘じゃこの数値を上回る攻撃なんてほぼ出ないからなかなか一般的には知られてない設定なんだ。」

現実の武器と一緒に。現実と違って使い続けても別に切れ味だとかは落ちたりしないけど、その引きの許容出来る限界を超えたら壊れるって訳だ。

俺自身もR：2になってからこうなったと聞いているから、システムデザイナーの誰かがこだわりを持った人物にでも変わったのだろう。

「・・・じゃ、じゃああれは別にチートでもなんでもないってのか？でも、あんな技あたし今まで見たこと無いんだけど。」

ああ、あれか。

そう言えば揺光の前でやったのは今回が初めてだったか。

「あれはシエルブリットの唯一技能だよ。装備の交換が出来ない代わりに武器を3個代償に、3発限定で俺のHPの3倍のダメージを相手に与えるんだ。まあその代償にした武器の属性もその攻撃に付加されるからまあまあ良い感じで使えてきてるよ。」

実際に武器の属性が付加出来るって分かったのはつい最近なんだがな。

まあそんな感じで、余程レベルの離れている相手が防御力の高い相手じゃ無ければ1発で仕留められるまさに必殺の拳と化したわけで、苦勞して手に入れた甲斐もあったってものだろうな。

「ユニークアーツ・・・？そんなの聞いた事ないんだけど・・・」
だろうな。

「俺も初めてやったときはビックリしたよ。武器固有のアーツなんてな。」

「ま、その代わりに俺はシエルブリット以外の武器は装備出来なくなっただけだけど。」

「ホント、ビックリだぜ。」

「けどま、代わりに大抵の敵なら一発で倒せる方法を手に入れたんだ。それでおあいこって感じでいいだろう。」

「そう言うわけで、俺はチートなんざしてないっての。」

「第一メリットだけじゃなくてデメリットもあるんだぞ？あれ一回打つのに武器一つ犠牲にするんだ。」

「しかも3回打ち切ったら戦闘終了まで撃てないんだ。一発がでかく

なかったら割に合わないっての。」

毎度毎度補充するのに武器を捧げてる俺の身にもなってみろって話だよ全く。

「そつか・・・チートしてる訳じゃなかったのか・・・ハア、よかった。」

そういつて安心した顔になる揺光。

ま、知り合いがチートしてたらコイツの性格上絶対に止めさせようとするからな。

俺がやって無くて安心したんだろうな。

「っと、それよりもキリカ、いつまでビクついてんだ？もう大丈夫だぞ？」

「・・・ほ、ホントに大丈夫ですか？」

そう言つて堅く瞑っていた目をおそろおそろ開くキリカ。

そして周りを見回し、PK共がいなくなっているのを確認すると「フワァー！！怖かったですよお！！」

と地面にへたり込んだまま叫んだ。

「ハハハ、もう大丈夫だって。あいつらは蹴散らしたからさ。」

「そうそう。ま、安心してまた散策再開と行こうぜ。」

「ううう・・・ハイ。」

ようやく落ち着いたキリカをたたせ、俺達はまたフィールドの散策

へと戻って行った。

それから数日後、揺光がまた唐突にあることを提案してきた。

「修行するぞ!!」

「・・・また例の如く唐突だな。」

リアルでもそうなのだが何故コイツはこういつもいつも唐突に何かをしたがるのだろうか。

しかも一人で決定して、俺はいつもそれに付き合わされるのだ。

「この前の事で思い知った。ちょっとレベルも上がって強くなった気がしてたけど、あたし達はまだまだ弱い!このままじゃアリーナで優勝なんてまだまだ無理だって事に気がついた!!」

「アリーナで優勝ですか。それが揺光さんの目標なんですね？」

「そう！あたしはアリーナで優勝して、チャンピオン宮皇になりたくってThe worldを始めただからね！！あ、もちろん、今のロストグラウンド巡りも気に入っているから、別にキリカは気にしないでね？」

揺光が目標を語った時に少しキリカが申し訳なさそうに顔をうつむけたことに気がついた揺光はキリカにそう言っただけで済ませたいと、今までの事を気にしないようにとキリカに言った。

「はい……。分かりました。」

「で？修行って一体何する気なんだよ？」

俺がそう聞くと揺光はフ、フ、フ・・・と、妖しく笑ったかと思うと顔をあげ、一言大きな声で「PK狩りじゃあ！！」と、一応女の子としてその叫び声はどうよ、と思った俺だった。

「・・・・・・・・・・。」

「ううう・・・PK狩りですか？」

「あ、キリカは見るだけで良いからな？無理に戦う必要なんて無いし。それにキリカには戦闘じゃなくって情報収集を頼みたいし。」

「あ、それなら大丈夫ですよ？いつもロストグラウンドの情報を集めるとき結構PKが出没しやすいフィールドとか多少は知ってますから！！」

そう言って胸を張るキリカ。
いやいや、そう言う問題なのか？

「よし、燃えて「ちよつと待て。」・・・なんだよ人がテンション上げてるときに。」

「いやいや、なんだよじゃねえだろ。何で修行内容がPK狩りなんだよ。何か理由でもあんのか？」

俺がそう言っつと揺光は「ある！！」と一言断言した。

「さつきも言っつたとおりあたし達は弱い！！あんなレベルも高くないPKにちよつと人数で負けてるからつて少し危ない状態まで追い込まれてるようじゃアリーナで勝つなんてまだまだ無理だつて思っただよ・・・それに、カズマはともかく、あたしはまだ対人戦の経験があんま無いだろ？だから、PK狩りでその対人戦の経験を少しでも稼ごうと思つてさ。」

フム、一理あるのかな？

確かにアリーナに出場するようなプレイヤーなら腕も確かだろうし、この前のPK共に手間取つてるようじゃまだまだと言つても仕方ないかもしれないな。

それに、揺光自身の言つたとおり対人戦に慣れて無いからこの前はあんなに追い込まれたつてもあるだろうしな。

「あの、この前のことだつたら、あれは私を庇つてだったのでしょうがなかったんじゃ無いかつて思つんですけど・・・」

「ううん、そうじゃないんだ！例えキリカを庇つていたとしてもあ

の程度の奴らなんかには苦戦してるようじゃアリーナでチャンピオンになんかなれっこ無いんだから。これはやるべくしてやる修行なんだった！それに、ああ言う奴らは倒したって誰にも迷惑掛けないだろ？むしろ誰かを襲って楽しんでるような奴らなら倒していても構わないじゃないか！！」

結構な暴論のような気もするが、まあ揺光の言ってることも間違っちゃいないな。

PKするなら自分もまたPK仕返されたって文句は言えないはずだし、それで迷惑掛けられてるヤツも居るわけで、別に誰かに文句言われることでもないか。

「あ、でも月の樹の人たちが何か言ってくるかもしれないね。あの人達、PKの廃止運動してて、それでPKKも何か反対してるみたいですよ。」

月の樹か・・・

PK廃止を訴えるケストレルとは正反対の評判を得ているギルドでどっかのだれかがThe worldの風紀委員会って言ってたな。よくタウンとかでPK廃止の運動をしてるのを見かけるし。

別にそれ自体は悪い事じゃ無いし、むしろ良いことのようにけど実際ゲームをどう楽しもうかは個人の自由だしな。

まあキリカみたいに戦いが嫌いなプレイヤーが集まったって感じのギルドだからそう考えたりするのも仕方ないことなのかもしれない。この前みたいなのPKも多いしな。

「うーん、月の樹か・・・PKに反対してるのは納得出来るんだけど、なんでそう言うPKを倒すのにも反対するのかよく分からないんだよな。」

「要するにあれだろ。力に対して力でやり返すPKKもまた同じだ
って事だろうさ。まあ言ってる事も分かんなくは無いんだけどな。
要は現実での平和論者みたいな武力による解決はいけません、話し
合って解決しましょう、って考えなんだよ。」

「うーん、でもさ、襲ってくるヤツに話し合いで解決しましょ？な
んて言っただって聞くわけ無いと思うんだよね。だったらヤラれる
前にやるしかないじゃん？それに、そう言うPKはさ、自分よりも
弱い人たちを狙うんだから逆にPKを倒そうって考えたって別に問
題無いじゃん？」

まあそうなんだがな。

月の樹の連中がそれで納得するかどうかはまあ、考えるまでも無い
んだが。

「ま、月の樹の連中が何か言っただら来たでまた考えればいいじ
ゃん？とにかく今はアリーナに向けての修行としてPK狩りをする
って事で！！」

「了解ですよ！！精一杯サポートしますからね！！」

揺光とキリカがやる気を見せてそう宣誓した。

ま、そうだな。何か言っただら来たらそれはまたその時に考えれば良い
ことで、今はアリーナに向けての訓練をすることの方が重要だしな。
第一ここじゃなにをするにも個人の自由なんだ。
何か言われる筋合いもないか。要は程度の問題だしな。

「よし、じゃあそうするか。」

そう言うわけで、俺達はアリーナトーナメントに向け、修行として

PK狩りを行うことになったのだった。

第二十話（前書き）

どうも。

今回は揺光さんの出番ですね。

カズマ君はちょっとしか戦闘しません。

まあ揺光さんの為の修行ですから。

それではどうぞお楽しみください。

第二十話

SIDEカズマ

揺光からの提案でPK狩りと言う名の修行を行うことになってから2日。

俺達はキリカの集めた情報を頼りに良くPKが出現するというエリアに来ていた。

「よし！！気合い入れていくぞー！！」

そう言っただけで腕をぐるぐると回してやる気十分ですと言う姿勢バリバリでPKはいないかと周りをキョロキョロと見回す揺光。そんな彼女とは対照的に俺はハア・・・と溜息をついていた。

別に今更彼女の提案したこの修行方法に反対しているわけではない。この前から思うとおり別にPKが逆にPKされたって文句は言えない筈だし、俺達がPKを倒したって誰に迷惑を掛けるわけでもない。そう分かっていながらも、俺は今回のことでまためんどくさい事になる予感がビンビンして、なかなかテンションが上がらず、エリアの天気はピクニックに丁度良い晴れやかな天候であるのに、俺は重い溜息を漏らしてしまっていたのだ。

「なんだよ、もー！！なんでそんなにテンション低いんだよカズマー！！」

「むしろ俺は何でお前のテンションがそんなに高いのか不思議で仕方ないよ。そんなにPKと戦いたいのか？」

若干バトルジャンキーなきらいがあることは多少知っていたがそこ

まで戦いを求めるようなヤツだったろうか？

「違うつて。まあPKと戦いたいつてのも少なからずあるけど、何か今のあたし達つてさ、三国志で言う賊を討伐しに行く英雄みたいじゃん！？それでなんかスツゴクテンション上がっちゃつてさあ！
！？」

なるほど、そう言う事か。

確かに今のこの状況だと悪さを働く賊を退治しに行くみたいな感じはある。

あれだ、世直しの旅みたいな感じ。

そんな今の状況が英雄に憧れ、この世界でアリーナの宮皇となって英雄になりたい揺光にとつてはたまらないんだろうな。

今の日本じゃ体験出来ないようなことだし、考えてみれば、物語の正義の味方的な事をしに行こうとしてると捉えられなくもないしな。まあだからと言って俺は正義の味方のつもりはないし、PKが悪党だとも思わないけど。

第一、正義が悪かなんてのはそれぞれの立場によつて変化するし、価値観によつても全く違う物になる。

被害者の側から見たら一方が絶対的な悪だし、加害者の側から見たらもしかしたら被害者も何か加害者側に何かをしてしまい、憎まれる様な結果、そうなつてしまったのかもしれない。

そう言えば何かの本で読んだな。

「正義の反対は悪ではなく、また別の正義である。」

要するに、この世界は善悪という二面性だけでは成り立たないし、そんな単純な事で世界は割り切れない。

悪なんて簡単に割り切れる物なんて物はなく、世界は複雑に様々な物が絡み合つて成立しているのだ。

英雄だつて一方から見れば立派な人物かもしれないが、また違う見

方をすれば大悪党かもしれない。

特に揺光の憧れる三国志の英雄達は美化されているが、現代で同じように英雄に成れるかと問われれば、否だ。

彼らは乱世という時代に生まれたからこそ英雄と成れたのだ。

戦争の英雄とは見方を変えてしまえばただの大量殺人者である。

そんな彼らのようになりたいと思うのは自由だが、善悪とは時代によって簡単に変わってしまう物なのだ。

まあそんなこと今の状況では何も関係ないのだがな。

そう今までの無駄な考えをまとめてしまう。

今この世界はゲームであり、そこに現実の善悪なんて物を持ち込んだところで意味はないのだから。

「とにかく、あたしは今楽しくって仕方ないってこと！ああ、早くPKでないかな」

鼻歌でも歌い出しそうな程上機嫌で厚く揺光をみて、普通のヤツなら逆の事を考えるんだろうな」と頭の片隅の方で考えた。

普通のプレーヤーならばPKなどとは会いたくも無いだろうし、会ってしまったても戦いたくなどないだろう。

しかし、揺光は会いたがっている。そんな揺光の願いを気まぐれな神様は聞き届けたのか、しばらく歩いていると揺光が「いたあ！！」と声を上げ、フィールドのある方向を指さした。

その指さす方を見てみると確かに呪療士と斬刀士の二人組を撃剣士、双剣士二人のPKらしき三人組が襲っている所に出くわした。

しかも、どちらがPKかというのも分かりやすいくらいにハッキリとした状況だ。

「へえ、ホントにいたな、PK。」

いくら出現しやすいエリアでも、まさか探し始めてこんなにすぐ見

つかるとは思わなかった。

第一、PKとはそうそう会う奴らじゃない。

たまたま運の悪いプレーヤーが遭遇してしまうと言っただけ外れクジみたいな存在の筈だ。

・・・あれ？でも、そう考えたら、俺かなり運悪くね？

初めてログインしたときだろ、クーンにあつた時、キリカと共に散策してたとき、揺光、キリカと一緒にいたとき・・・あつれく？

数えてみたら結構な回数遭遇してる・・・？

やばい、なんかそう考えたらちよつと落ち込んできた・・・

「おい、カズマ！！考え事なんてしてないで行くぞ！！」

「あ、ああ。そうだな・・・」

そう答えながらもちよつとまだ気持ちが下がったままだ・・・
そう思いながらも揺光がPKにやられているPC達を助けに飛び出していったので、俺も行くとするか。

八つ当たりも込めて、一発でかいのをな！！

「オラア！！！」

「グア！！！」

ドガッ！！

「衝撃のお、ファーストブリットオ！！！」

「ギヤアアアアアア！！！」

バキイイイイイン！！

明らかに違う音の打撃音が三人組のPKの内二人を襲い、一人は屍餅をつき、もう一人は盛大に吹っ飛び、その身体を灰色に染め上げたのだった。

「な、なにに！！い、一撃でミツチャンがやられたあ！！」

「うし、八つ当たり終わり！！」

「って、何で倒しちゃうんだよ！！あたしの修行になんないじゃん！！」

「いやいや、大丈夫だって。ほら、見てみ？アイツ復活するから。」

「え？」

そうやって揺光が仮死状態となったPKを見てみると仲間のPKが黄泉返りの薬を使い、復活したPKの姿があった。

「まあそうなるだろうね。複数の仲間がいたらそうやって仲間のダメージを回復させるのが基本だし。」

そうでなければわざわざパーティーに回復要員なんて必要ないわけだし、人数がいた方が戦力的に優位にたてるしな。

「テ、テメエ！！いきなり何しやがんだ！！普通不意打ちで死亡なんてありえねえぞ！！」

まあそうだよな、普通。

そんな大ダメージ一撃で受ける事なんてほとんどあり得ない事態だ

し。

「まあ、八つ当たりかな？それに一旦場を整理したかったし。」

後ろのPCを見ながらそう言う。

正直、あのまま普通に場に割り込んでたとしても後ろの二人は遅かれ早かれやられてしまっていた。

揺光的には二人を助けた上でPK達を倒したかったようなので、一度二人が回復出来る間をとりたかったてもあって出会い頭にフーストブリットを叩き込んだわけだ。

「テ、テメエ・・・おい、もしかしてあいつじゃねえの？yu ya達がやられたのって。」あ？・・・そう言や、あいつらが言っていたヤツと同じだな。へへ、ッてことはアイツを倒せば俺のギルド内での格も上がるかしんねえな！！おい、テメエ！！」

「ん？」

あいつらの意味の分からない会話が終わり、俺に向かって指を指し
てきながら叫ばれた。

「テメエ、この前14、5人くらいのPK集団と戦って勝ったヤツか？」

「えーっと、確かに勝ったけど、それがどうかしたか？」

多分この前の事を言っているのだろう。

正直14、5人くらいのPK集団と戦った事なんてあの時くらいしか思い当たらないしな。

そう思っただけで正直に答えたら「ならテメエの首は俺達がもらったあ！

「！」と言っていきなり斬りかかってきたが、

ガキーン！！

「・・・おいおい、アンタらあたしのこと忘れてない・・・？」

斬りかかってきたPKの刀を両手の双剣を交差させて、俺の前で受け止める揺光。

しかもなにやら無視された事がちよつと気に食わなかったらしく、声に怒気が混ざっている。

「んだ、テメエは！！邪魔すんじゃねえ！！！」

「！！オリヤア！！！」

ガッ！！

そう言っつて揺光を押し切ろうとするが揺光は相手が力を入れようとした瞬間、交差させていた剣を解き、

それによって体勢が崩れた相手をもと居た場所辺りに蹴り飛ばす。

そして、蹴り飛ばされた男は、ウツ！つとつめき声を上げてもいたあたりでよろめきながらも何とか体勢を立て直し、自分のことを蹴ってきた揺光に「何しやがる、テメエ！！！」と叫んだ。

「何するも、アンタらが戦うのはあたしだ。カズマじゃないんだよ。」

え？そんなの？

てつきり俺も戦うのかと思っっていたのだが、揺光の言葉に思わず口

には出さないがそう言った感じの目で揺光をみてる。
すると俺の視線に気がついた揺光はちよっとすねた感じで「当たり前だろ……」って言って来た。

「この修行はあたしの経験不足を補うための物なんだ。それでカズマの力を借りてたら何の為の修行か分からないじゃんか。」

「揺光……」

その揺光の言葉にちよっと感動。

ついこの前まで初心者だったのにいつの間にかこんな事を言うようになるようになっていたのか。

そう思いながらも揺光の覚悟に水を差すわけにもいかない。

俺は揺光に今回の戦いのことは全て任せる事にして、二人のPCの護衛に専念しよう。

「分かった。なら二人は任せろ。思いっきりやれよ？揺光なら大丈夫だ！！」

「カズマ……うん！」

そう言って再びPKの方へと向き直る。

約束した以上は俺の後ろには、一步も近づけねえかな。

そう思いながら俺は拳を構え、揺光の戦いを見守ることにした。

S I D E 揺光

「テメエ、随分となめたこと言ってるじゃねえか。お前一人で俺達三人相手になるってのかよ？自意識過剰も大概にしるよ？」

「お前からこそ、そんな腕程度でカズマと戦おうなんて身の程知らずにも程があるっての！！」

そのあたしの言葉にPKの目が変わる。

さっきまでニタニタとしていた目が今では怒りに満ちていた。

「テメエ、言わせておけば言ってくれるじゃねえか・・・良いだろう。テメエをさっさと倒してあの野郎を倒し、俺がギルドでいまのままに居るような男じゃないって証明してやらあ！！」

そう言っただけで斬りかかってくるPKのリーダーらしき男。他の二人も若干遅れながらも斬りかかってくる。

でもその剣の迫ってくるスピードは全然遅い。これくらいだったら避けるのは簡単だったの！！

そう思いながら三人の斬撃をよけ、ついでに一人一撃ずつ剣で攻撃を与えてやった。

まだまだ全然軽い一撃だったけど、自分たちの攻撃を全て避けられ、

なおかつ一撃喰らった事が許せないのか顔を怒気に染め上げてまた三人で一斉に襲いかかってくる。

けど、頭に血が上って大振りになった攻撃なんかあたしが当たってやる筈もない。

相手の剣に合わせて左右に避け続け、隙があれば一撃加える、と言う方法をとっていたら向こうは更に頭に血が上って、今度は三人同時に、前、斜め横に二人という配置で攻撃を仕掛けてくる。

けど、そんなんじゃ自分たちで自滅だつての。

三人があたしに剣を振り下ろしてくる瞬間、あたしは誰もいない背後にステップを踏んで奴らの包囲攻撃から逃れる。

戦士系のジョブのなかでも身軽な双剣士は一回のステップでも結構な距離を跳べるんだ。

「ギヤア!!!」

「く、クルイ、テメエ!!!何で俺に攻撃当ててんだよ!!!」

「お前もだよ!!!クソ、あの女メチャクチャすばしっこい……!!!」

アンタらがとろいだけでしょうが。

そう思いながらも、クルイと呼ばれたPKを突進して一人だけ他の二人から引き離し、相手の懐に踏み込んで、すかさず左右の剣を交互に振るう。するとどんどんHPを減らしていくPK。

あたしはこのチャンスを逃がすはずもなく、遠慮無くどんどん攻める。

「ク、この野郎!!!」

けど、流石に相手だつて無抵抗な筈もなく、あたしに向かって剣を

振ってくるけど、その剣をあたしは右手の剣でキンッ！ と軽く当てて、軌道を逸らし、防ぐ。

その行動にコイツは目を見開きながら舌打ちをしようとするけど、その瞬間、コイツの周りに連撃リングが浮かび上がった。

「！ッな、このタイミングでかよー！」

コイツのHPは残り少ない。それに、仲間のPKはこっちに向かってきてるけど、それよりもあたしが連撃を叩き込む方が早い！！貰った！！

「いくよー！！」

『連撃！！』

「一雙燕返し！！」

相手を空中に切り上げてからの空中で連続切り！！最後に敵を地面に叩きつけるようにして一撃を加える！！

「ガハア！！」

その一撃で地面へと打ち付けられたヤツはその身体を灰色へと染め上げて、動かなくなった。

「よし、まずは一人！！」

「くそ、ミツチャンがまたやられた・・・！！」

「てか、ミツチャン死にすぎじゃねー！？」

そう言いながらやっとあたし達の所に辿り着いた仲間のPK二人。
・・・そう言えばコイツ、最初にカズマにやられたヤツだったっけ。
まあいいや!!

残すは後二人!!

回復アイテムなんて使わせないよ!!

「そおら、いつくぜええ!!」

そう言ってあたしはPK達へと再び突進していった。

第二十話（後書き）

どうでしたでしょうか？

途中のカズマ君言っていた善悪の価値観は私自身の持論ですので様々な意見があると思いますが、まあ善悪なんて物は作中でも言っている通り十人十色です。

こんなところである話題じゃ無かったと思いますが、一応載せました。

では次回もよろしくお願いします。

第二十一話(前書き)

どうも、ジーユーです。

今回はほぼ揺光ですね。

それでは、お楽しみください。

第二十一話

SIDEカズマ

「揺光のヤツ、修行なんて必要無かったんじゃないか？」

一人目のPKを倒し、残り二人となったPK達の下へと向かっていく揺光を見ながら、俺は思わず、そう口にした。

揺光の戦い方は、3ヶ月前とは違い、無理に全員まとめて相手取るうとするものではなく、一人一人を相手にし、3対1ではなく、1対1を三回繰り返し返す、と言ったものに変わっていた。

正直、多対一での戦闘の場合は、多人数を同時に相手取らなければならぬ。

しかし、今回のような自身よりも敵の人数が多い、しかし、相手もまた少人数という状態の場合ならば、無理に3人同時に相手するよりも、1対1を繰り返し返した方が、リスクは低い。

まあ、その間に他の相手から攻撃を喰らってしまうのでは、と言う心配もあるのだが、そこら辺はきっちり牽制しておけば、問題は無く、むしろ利点の方が多い。

第一、複数の敵を同時に相手するよりも、回数が重なるが、1対1のほうが、精神的にも余裕が生まれるはずだ。

俺が揺光を見ながらそう考えていると、「あの・・・」と、控えめながらもある程度HPの回復を終えた呪療士の少女が俺に話しかけてきた。

「彼女のこと、手伝わなくてもいいんですか？一人倒したって言うても、まだ敵は二人もいるのに・・・」

そう言ってくる少女に、「いいのいいの。」と言って手を振るう。これは、あくまで揺光の修行なんだ。ここで俺がもし手を貸してしまえば、逆に俺が揺光に襲われてしまうことのないかな。それに、この程度のレベルの相手ならば、余程油断や、不測の事態にならない限り、揺光が負けることはほぼ無いはずだ。そう考えて、俺は彼女の提案を断ったわけなんだが、彼女の方は、そのことに納得していないようで、どこか不満そうな顔をしている。ま、だからと言ってこの戦いに手を出させるつもりなど毛頭無いが。

「さて、二人とも、もう大分回復しただろ？」

一応揺光が戦い始めてから五分ほどはたっている、既に回復が終わっている二人にそう確認する。

二人は、「ハイ、大丈夫です」と答え、もう心配ないと言う事をアピールしてきた。

「じゃ、二人は今のうちに逃げといた方がいい。あのPK達を逃がすつもりは全くないけど、万が一という事もあるしな。」

しかし、二人は俺の提案を断り、「僕たちも戦います!!」と、言うて来た。

「わざわざ助けてもらったのに、そんな見捨てるような真似できませんよ!!」

「そうです!!それに、あの人だってダメージを喰らってしまってますよね?だったら、私がそれを治します!!!??」

そう言ってくる二人に俺は、「うん・・・」と、言葉を詰まらせてしまう。

正直な話、この二人がいよいよがまいが正直俺達にとっては変わらない。

それに、もしダメージを喰らってしまったても、一応アイテムはそこそこ持つてるし、無理にいてもらう必要はまったくないのだが・・・

(俺達の為に言ってくれてることだしな)

これが自分たちの事を考えた上での発言だったならば普通に断ってお引き取り願うところなんだが、生憎、彼らは善意100%らしく、断ろうにも断れない。

俺は頭を掻いて、どう言えば逃げてくれるのか、しばらく考えていたのだが、特に良い案が思いつかなかったため、「・・・いいけど、戦闘に割り込むのはあくまで揺光がやられそうになったらな。」と言う妥協案を出すだけに留まってしまった。

「はい！！ありがとうございます！！」

「わかりました！！」

二人は俺からOKがもらえたのがそんなに嬉しかったのか、笑顔でお礼を言ってきた。

その二人の様子に、「ハア~~~~」と、溜息をついてしまっても、俺は再びPK二人と戦う揺光へと視線を戻すのだった。

まあ、そうそう不足の事態などおきないだろうから、あの二人を戦わずに済むだろうと、考えながら。

S I D E 揺光

一人目のPKを倒してから10分くらい。

一人目を倒したときの勢いだったなら既に残り一人になっていただろうけど、あたしは未だに、二人のPKと戦っていた。

何故かというと、攻めてこないんだ、こいつら。

それも、ただ攻めてこないんじゃない。

まるで亀が甲羅に閉じこもったみたいに防御に徹してて、一切攻撃してこない。

少しでも攻撃してきたら、カウンターを合わせてダメージを与えていけるんだけど、こいつらはそれが分かっているのか、それとも只単に防御に集中しているだけなのか。

少し前から全く攻撃の意志を感じさせないで、ただただ剣を交差、または掲げ、防御だけをしているんだ。

正直な話、腹が立つ！！

自分から攻撃してこないのは、まあいいんだ。カズマもそうだし、今のあたしもどちらかというと、相手の攻撃に合わせた戦法をとる

からな。

けど、こいつらはそのカウンターを合わせるうんぬん以前に、攻撃を全くしてこないから、合わせようもない。

まるで何かを待っているかのように、ずっと防御だけしているんだ。男なら、気合い入れて、防御だけじゃなくて攻撃しろってのに！！

「あんたら、いつまでそうやってる気だよ！！いい加減に防御解けての！！」

「う、うるせえ！！だったらテメエも攻撃を止めやがれ！！」

そう言ってくるPKに、あたしは一瞬本当に攻撃を止めそうになった。

いや、何でそうなるのかったのは、あたしも思うんだけど、それでこいつらが本当に防御を解くんだったら、って一瞬考えちゃったんだ。

まあ、さっきまでこいつらは、今はカズマの後ろにいる二人のPCを襲っていた事をすぐに思い出して、また手を動かしたんだけどね。

「チツ！！埒が開かない！！」

攻撃をいくら重ねても、撃剣士や、重槍士のように、強力な一撃で防御を崩す、なんてことは出来無いから本当に少しずつのダメージしか与えられない。本当にイライラする。

だからか、あたしは、普通では考えられないようなタイミングでアーツを使ってしまった。

「こなくそ！！！！」

ーアーツ発動ー

「疾風双刃！！」

今までの攻撃よりは、多少は大きいダメージを与えられたけど、それと引き替えにあたしは技後の硬直に陥ってしまった。すると、それまでずっと防御に徹していた撃剣士が、今まで固まっていたのが嘘のように、いきなりその大剣をあたしに振り切ってきた。

「グウ！！」

アーツ使用後の、硬直のせいであたしはその攻撃を避けられず、まともに喰らっちゃって、吹き飛ばされてしまう。

双剣士は、スピードがある分、他の戦士系のどのジョブよりも防御力が低い。

そのため、いつもはしっかり攻撃をよけてるんだ。

でも、この攻撃は、まともに喰らっちゃって、大きくHPが削られてしまった。

「ケケケ！！まさか、本当に予想通りになるなんてな。

スッゲーな、候ことう！！」

そう笑って、あたしを吹き飛ばした撃剣士の肩を叩く。

撃剣士・・・候と呼ばれたそいつは、「まあ、俺自身もビックリだけどな。」と行って、剣を肩に担ぐ。

「最初に防御しだしたときに、なんかやけに攻めてくるし、攻撃したときにはやけにカウンター合わせてきただろ？だからこっちから

攻撃しなかったらどうかって、思っただけなんだがな。」

「ふえ〜、お前、良くそんなこと見てたな。俺全然わかんなかった。」

「いや、俺もそう思ったただけだし。後は賭けみたいな感じだったしな。」

それより、ホントにみんなにメールしたわけ？」

そう話し合いながら、あたしの方に近づいてくる二人。

くそ、あの侯とか言うヤツ、カズマみたいなことしやがるな・・・

！！

そう侯とか言うヤツのやったことを思いながら、あたしは倒れている身体を起こす。

けど、今耳に聞き捨てならない単語が出てきた気がする。

みんなにメールを回した・・・？

まさか、仲間を呼んだって事・・・！？

「おい、お前！！まさか、他の仲間に来るようにつてメール回したのかよ！！」

あたしがそう叫ぶと、双剣士の方はあたしのその言葉を、笑いながら肯定した。

「ハハハハ！！そうだぜえ？俺達の仲間、ケストレルのPKをざつと10人以上をなあ〜！！もうそろそろここに到着するはずだぜえ？いくらお前が強くなったってよお、10人以上が相手じゃ勝てねえよなああ！？ギャハハハハ！！」

そう言って笑い声を上げるPKにあたしはギリッと、歯を食いしば

る。

「あんだ、そんな大勢で勝って、うれしいわけ!? 情けないとか、思わないのかよ!」

「ああ? 何言ってるんだ、テメエ? 要は勝てばいいんだよ、勝てば!」

クソ、あたしの一番嫌いなタイプだ……!!
そう思いながら、侯と呼ばれた撃剣士の方を見る。

少なくとも、双剣士のヤツよりはコイツの方がマシだと思ったからだ。

侯はあたしの視線に気づくと、「悪いな」と一言だけ言った。

「俺自身も、こういったやり方は好きじゃないんだけどよ。もうコイツが呼んじやったから、手遅れなんだ。」

「そう言う事! 八八八八!」

チツ……!?

侯のその言葉にあたしは心の中で舌打ちをする。

既に呼んでいると言う事は、恐らくもうそろそろここに到着するはずだ。

今のこの状態じゃ、10人以上との戦闘は正直厳しすぎる……!!
あたしがそう思っていると、双剣士の方が、「お、来た来た!!」
と言って、一人のPCが走ってくるのを見つけた。

「お〜い、こっちだ、こっち! 他の奴らは「おい!! た、助けてくれ!!? ア、アイツはバケモンだ!!?」な、何言ってるんだ!!
おい!?! 他の仲間は「そいつらならもう倒したぜ?」……!!」

そう言っただけの仲間が走ってきた方向から、カズマが歩いてくる。その後ろには、さつき助けた二人のPCが、何か信じられないものを見たかのような顔で、カズマと共に歩いてきた。

「ヒイー!!」

カズマが現れた途端、駆けつけてきた筈の仲間は、侯達の後ろに隠れてしまった。

それより、今カズマはなんて言った？

全部倒したって……

「お、おい……い、今なんて言った……？」

「あれ、聞こえなかったか？さつき向こうから、やけに多い団体さんが来てよ。それで、なんかやけに物々しい感じだったから、そいつらに尋ねてみたら、いきなり攻撃されちゃってさ。んで、反撃して、そいつを残して全員俺が倒したって訳。分かったか？」

そう何でも無いかのように言ってくるカズマだけど、それを聞いた侯とその仲間の双剣士は、「あ、ありえねえ……んな馬鹿な!!」と言っただけ、後ろに隠れた仲間に本当かどうかを聞いた。だした。

「お、おい!!アイツの言ってる事、マジなのかよ!!10人以上呼んだはずだぞ!!なのに、アイツ達に、全員やられたってのかよ!!おい!!?」

カズマの言葉が信じられないヤツは、逃げてきたPKに、本当なのかどうかを尋ねた。

正直あたし自身も信じられない。

10人以上のPKをこんな短時間で倒した、って言われたって、信じられるわけがないんだ、普通。

でも、そんなあたし達の疑念を、その男は、「マ、マジだよ!!」と震える声で肯定した。

「ア、アイツが俺達に何しに来たって、聞いてきて、とりあえずPKしてやるうって、masaがアイツに襲いかかったんだ・・・。そしたら、なんかいきなりmasaが吹き飛ばされて・・・。それで、みんなでやつちまおうって事になったんだ・・・でも!!」

怯え、震える指をカズマの方向に向けながらしゃべり続ける。

「あ、アイツ一人で、みんなを殺りやがったんだ!! た、たった10分ていどで、みんな殺られちゃったんだよ!!」

そう叫び、怯えた目でカズマを指さす男に、侯達は驚愕の瞳を向ける。

かく言うあたしも、ちょっと信じられなくて、カズマの方を向いてしまった。

「カズマ・・・あ、アンタどうやって・・・」

「いや、どうやってって・・・普通に倒したんだよ。それ以外に無えだろうが。」

いや、それはそうなんだけど!!

「け、けど、そのシエルブリットは、一度に撃てるのは3発までなんだろ!! 10人以上の奴らに、3発でどうやって勝ったんだよ・・・」

「!!」

あたしがそう言つと、カズマは何か呆れたような顔をして、「アホか、お前は。」と言つて来た。

「ア、アホつて・・・!!」

「だってそうだろうが。第一、シエルブリットが撃てなくても、普通にアーツは使えるんだよ。ユニークアーツだけで勝つた訳じゃないし、別にユニークアーツだけが俺の全てじゃないつての。」

そ、それもそうだ・・・

あたしはカズマに言われたことに思わず頷いてしまった。

考えてみれば、その通りだ。別に今までだってシエルブリットの力だけで勝つてきた訳じゃないし、別にシエルブリットのユニークアーツが使え無くつたつて、カズマは十分強いんだつた。

そんな基本的な事を忘れていたあたしは、ちよつと恥ずかしくなつてしまい、カズマと合わせていた視線を俯けた・・・

「あ、ありえねえ・・・」

カズマのしたあまりにも普通じゃ考えられない事態に呆然としている双剣士の男だつたが、カズマの、

「つて言うわけで、援軍を期待しても無駄だから。」という言葉に我を取り戻したのか、「クツソオオ!!」といきなり叫んだ。

「フザケンなよテメエ!!俺達ケストレルにんなこととしてタダで済むと思つてんのか!!無事じゃすまねえかな!!」

そう叫ぶ双剣士の言葉に頭を掻きながら、「え〜つと・・・」と、言葉を漏らす。

「べつに、俺は間違ったことなんてやってないし、ケストレルに喧嘩売った覚えも無いんだが・・・」

頭を掻いていた手を下ろし、シエルブリットを展開したままの右腕を握り、双剣士のヤツに向かって突き出した。

「それがお前らの言い分で、ルールだとしたら、俺はそれに逆らってやるよ。売られた喧嘩はまあ買ってやるさ。俺の名前を良く覚えとけよ。俺はカズマだ。忘れんなよ・・・」

そうPK共に宣戦布告とも言える発言をしたカズマは、なんかメチャクチャかつこいいい！！

あれだ、マンガかなんかの主人公みたい！！
あたしが思わずそう思っていると、「揺光！」と、カズマがいきなりあたしを呼んだ。

「な、なにさ！！」

「敵が一人増えたけど、手、貸そうか？」

そう何でも無いかのように言われ、あたしはいましなきゃいけない事を思い出す。

そう、今は目の前の敵を倒すことだけ、考えるんだ！！

「いらないよ！！そこで黙って見てな！！」

カズマのおかげで、後顧の憂いも無くなった！！
悪いけど、こっからはさっきよりも派手に行くよ！！

そう心の中で宣言して、あたしは一人増えたPK連中に向かって斬りかかっていった。

SIDEカズマ

それから少しして、結局揺光はあの3人のPKに対して、それまで時間を掛けていたとは思えないスピードで、三人を倒していった。

それで、一応保護していた事になる二人のPCと一緒にあって、フィールドを横切り、プラットフォームまで歩いていた。

「本当に、ありがとうございます、揺光さん、カズマさん!!」

「ありがとうね、揺光!!!カズマ!!!本当に助かったよ!!!」
と言ってくる二人。

このふたり、これを言うだけの為に、PK集団との戦いにも手を貸

してくれたのだから、むしろ礼を言うのはこっちの方だ。
そう思いながらも、無理に言う必要もないから、ここはそのお礼を
素直に受け取っておくことにした。

「いや、こちらこそ、さっきは手伝ってくれてありがとう。っと、そ
う言えば二人の名前聞いてなかったな。今更だけど、名前を尋ねて
もいいか？」

そう尋ねてみると、「ああ、そう言えば自己紹介がまだだったね。」
と言って自分たちの名前を聞かせてくれた。

「僕はシラバス。よろしく、カズマ、揺光！」

「私はカナエです。こっちのシラバスとはリアルでの知り合いで、
今日は彼に誘われてここに来たんです。さんざんな目に会いました
けど、カズマさん達のおかげで助かりました。本当にありがとうございました。
ございました。」

「もう良いつて。それじゃ、ここで俺達はいくわ。それじゃあな！
！」

「またね、シラバス、カナエ！」

そう言っつて、俺達はシラバス達と別れ、タウンへと戻ってきたのだ
った。

第二十一話（後書き）

どうでしたか？

シラバスと一緒に出てきたカナエに関してですが、急遽作ったキャラなので、今後登場するかどうかは分かりません。

まあとにかくこれから更新頑張っていくので、皆さんどうかこれからもよろしくお願いします。

それでは、また次回。

第二十二話（前書き）

どうも、ジーユーです。

今回は、とある原作キャラが、出てきます。

しかも、ちょっと、「何それ？」「と言いたくなる形で、色々言いたくなると思います。

どうか今回も楽しんでいただければ幸いです。

第二十二話

SIDEカズマ

揺光のPK狩りが始まってから、今日で1ヶ月。

世間じゃそろそろ早いところじゃ指定校推薦なども決まって、だらける生徒も出てくるこの時期。

俺達は1週間後に迫ったアリーナトーナメントに向けて、チームメンバーを決めていた。

「えっと、とりあえず、リーダーはあたしでいいよね？」

「ああ。もともと、お前が出たいから出場するんだ。別に文句はないよ。と言うか、チャンピオンになるなら、リーダーじゃないとダメだろ。」

揺光からの確認に、そう答える俺。

一応揺光の友達に、一緒に参加してくれるヤツがいるらしいから、今はリーダーを誰にするかという話をしていた。

俺はリーダーになんてなる気はないし、チャンピオンを目指してるのは、揺光なんだから、普通に考えて、揺光以外のヤツがリーダーにはなったらダメだろうに。

一応チャンピオンは、そのチームのリーダーがなることが出来るものだ。

だったら、揺光以外がリーダーになってしまっただけは意味がない。

そのことを言うと、揺光は、「そう言えばそうだった・・・」と、素で忘れていたっぽい。

・・・コイツ、リアルでもそうなんだけど、偶に何でこんな事になったのか、って聞きたいくらいの、ポカをやらかすんだよな。

流石に、トーナメントではやらかさないとはい思うけど、一応用心しとくか。

「で、その後一人ってのは、もう決まってるんだよね？」

「おう！この前知り合った人でさ。あたしと同じ双剣士の人なんだけど、これがまた強くって。

で、ダメもとで誘ってみたらOKしてくれたんだ。で、今日会えるって言ってたから、その時改めて紹介するよ。」

揺光のその言葉に、「分かった。」と答える。

まあ、最近揺光も、修行のおかげなのか、大分対人戦が上手くなってきたし、その揺光が強いつて言うつてことは、かなり熟練のプレイヤーなんだろう。

俺がそう考えていると、「ところでさ・・・。」と、揺光から、話題を振られる。

「キリカ、最近見ないけど、大丈夫なのかな？メールじゃ心配しないでって、言ってたけど・・・。」

そう。

ここ2週間くらいの間、キリカは体調が悪いらしく、The worldに来ていなかった。

本人からのメールには、「ちょっと体調を崩してしまい、入院することになっちゃいました。でも、そんなに酷くはないので、心配しないでください。」と言う連絡が、俺と揺光には来ていた。

最初は、「入院するような病気なのか！」って、揺光が慌てたけど、俺は前にキリカから、元々身体が弱くて、今も偶に入院していると言う話を聞いていたから、一応心配だったが、揺光ほど、慌てはしなかった。

昔、俺自身も似たような経験があるので、逆にそこまで心配されてしまうと、申し訳無くなってしまう、しばらく変に気を使ってしまう事になるんだ。

こういうときは、むしろ自然なほうが、相手にとってもありがたいんだよな。

「大丈夫だって、メールに書いてあったろ？昔の俺みたいなもんだろうし、そこまで心配すんなって。」

俺がそう言つと、揺光は納得出来なさそうな顔をしていたが、しばらくすると、「・・・わかった。」と答えた。

まあ、心配なのは俺も分かる。

けど、こういうときは、キリカが帰ってきた時に、それまでの話だとかを聞かせて、元気づける方が良く俺は思うんだ。

「まあ、心配しなくても、もうしばらくすれば元気になって帰ってくるって。俺達は、キリカが帰ってきたときに、「お前がくれた情報のおかげで、修行が上手くいった。」って言えるように、まずはトーナメントの一回戦をしっかりと勝ち抜こうぜ。」

「・・・そうだね・・・ここであたしが何言つたって、キリカが治って帰ってくる訳じゃないんだ。

だったら、帰ってきたキリカに戦勝報告してやった方が良くもんなー！！おーし！！そうと決まれば、早速アインに会いに行くぞー！！」

そう言つてダッー！つと、カオスゲートまで走っていく揺光。どうやらアインって人が残りのメンバーらしいけど・・・

「俺、どこで会つかなんて知らないっての・・・」

一人で行ったら、俺はどうすりゃいいか分からないってのに。そう思いながらも、揺光の後を追ってカオスゲートまで歩いていく事にした。

S I D E 揺光

アリーナトーナメント一回戦まであと1週間。
あたしとカズマは、残りのチームメンバーになってくれると約束した、アインと言う双剣士に会いに、
今までいたタウンであるドル・ドナから、マク・アヌに移動する事になったんだけど・・・

「カズマのヤツ、どこ行ってんだよ、全く。」

あたしがダッシュでカオスゲートまで走ってきたのに、アイツは何故かあたしのペースに合わせなかったのか、一向に現れない。

まあ、待ってれば、必ず来るとは思うんだけど、やっぱりこういう時って、一秒でも早く行動したいって思うのが普通だと思うんだ、あたしは。

なのに、こうやって待たなきゃいけない事に、あたしはちょっとイライラしてる。

イヤ、まああたしがカズマを置いてきたってのも悪いとは思うんだけどさ！！

「さっさと、来いっての！！」

今は一秒でも早く、チームワークを高めるために修行したいんだから！！

今まで、カズマとはある程度連携はとれてたとは思うんだ。

でも、今日初めて会うアインと、カズマは今まで一度も連携なんて合わせたことなんてあるわけ無い。

アリーナトーナメントは個人の力だけで勝ち上がっていけるほど甘くないって事はあたしにだってよく分かってるから、出来るだけ早く、アインとカズマを引き合わせたかったんだけど、アインの方がここ最近リアルでやけに忙しかったらしくって、今日になってやっと予定が開いたらしい。

だから、わざわざ予定を開けてもらったアインのためにも、それに今は体調崩しちゃって、The worldに來れてないキリカのためにも、それに何より、あたし自身の為にも絶対に一回戦は勝ちたい。

だから、さっさと行きたいってのに！！

「お、いたいた。お〜い、揺光！」

あたしがそんな風にイライラしていると、ようやく来たカズマがあたしを呼びながら、歩いてきた。

「遅い!! さっさ・・・と・・・」

あたしはカズマに怒鳴ろうとして、アイツの方を向いたら、何か知らないけど、カズマの隣に、見たことのないPCがいた。しかも、

(女性型PC・・・!!)

あたしの見たことのないそいつは、なんかやけにカズマと親しそうに歩いてくる。

PCの外見は、白い帽子に、白い服を着た、呪療士。

しかも、多分あたし達よりも、若干年上みたいだ。

何でそんなことが分かるのかって言うと、カズマには、今大学生の従姉がいる。

その人とは少しだけ面識があるんだけど、その従姉が一馬と一緒にいるときの空気と、まるで同じなんだ。

しかも、あの目は・・・!!

(あの人と同じ、カズマを狙ってる目だ・・・!!)

そう、その従姉は、一馬を密かに狙っている。

一馬本人には気づかれてはいないらしいけど、同じく一馬の事が好きなたしには分かる。

年上の魅力と言うか、優しいお姉さんという雰囲気を見せながらも、確実に一馬を一人の異性として見ているあの人と同じ目。

しかも、なんだか雰囲気も、あの人と似すぎな気がする・・・!!
まさか、あの人本人なんて事があるんじゃない・・・

あたしはそう考え、嫌な予感を抱きながらも、その人と一緒に、近

くに来たカズマに、「・・・その人、誰？」と、尋ねた。

そして、カズマから言われたこの人の名前は、当たって欲しく無かったけど、あたしの想像通りの人だった・・・！！

「ああ。この人は志乃さん。ほら、従姉の七尾 志乃さんって知ってるだろ？あの人だよ。」

「久しぶりね、智香ちゃん。あ、こつちじゃ揺光ちゃんなんだっけ？」

「やっぱり・・・！！」

あたしの嫌な予感、外れて欲しかったんだけど、的中してしまった。

この呪療士のPCは、あたしが知っている、カズマの従姉である、七尾 志乃さんだった・・・！！

「なんで、志乃さんが・・・！？」

「いや、お前が先に行つちやったときにさ、偶然会つて。

まあ、前に会つてたから、このゲームやってたことは知ってたんだけど、今回は丁度お前もいただろ？」

だから、折角だし、こつちでの面識でも作つた方が良くも思つて。」

カズマのその言葉は、残念ながらあたしの耳には、余り入ってこなかった。

あたしは、今日の前にいる志乃さんからの笑顔なんだけど、無言で放ってくるプレッシャーを耐えるのに必死なんだ！！

この人は、一馬の前だといつも笑顔のくせに、あたしに対しては、よく分からないプレッシャーを、昔から偶に放ってくる。

それは、あたしに対する牽制だつて気がついたのは、あたしが一馬

に抱いているこの感情をしっかりと認識してからだった。

それまでは、なんだか偶に、この人から威圧感みたいなのを感じるなぐくらいしか思わなかったけど、段々とあたしが一馬への想いを理解してきたあたりから、なんで志乃さんがあたしにだけプレッシャーを与えていたのか、分かったんだよね。

それで、あたしは志乃さんに、「志乃さんは一馬のことが好きなんですか？」って聞いてみたら、「気づいちゃったんだ・・・」と言われた。そして次にあたしは志乃さんから、「悪いけど、一馬君は渡さないよ・・・」と、宣戦布告されたんだ。

最近志乃さんが大学に進学するため、あたし達に会いに来れなかったから、ちよつと安心してたけど、まさかこんなところで再会するなんて・・・!!

「・・・お久しぶりです、志乃さん・・・!!」

この時からあたしは、あたしの一番の恋敵ライバルと、再び対決していくのだな、と、直感的に感じたんだ・・・!!

SIDE志乃

「元気だった、二人とも？最近会えなかったから、ちょっと心配しちゃった。」

「いえいえ、俺は変わらず元気ですよ？な、揺光？」

「・・・そうだね。元気ですよ、あたし達は。」

やけに「あたし達」を強調してくる智香ちゃん、ううん、ここでは揺光だね。

彼女からの警戒の視線を受けながら、「相変わらずだね」と、この視線にさっぱり気づかない一馬君のことで見て、なんだか懐かしく、そして思わず嬉しくなって、ニコニコとしてしまう。

私が、東京の大学に行くため、一人暮らしをすることになってから、一年。

北海道にいる一馬君達に最後に会ったのは、もう2年前位になるのかな。

ここ最近、受験だとか、進学する大学が東京だったから一人暮らししなきゃいけないと言う事もあって、中々一馬君に会えなかったから、凄い久しぶりに会う。

まあ、前に一度ダンジョンで会ってるから、正確に言えば、智香ちゃんに会うのが久しぶりなのかな。

この前一馬君に会ったときは、オーヴァンから、「偶にはのんびりとしてくると良い。」って言われて、一人で草原エリアを探検したら、運悪くPKの集団に囲まれちゃったんだよね。

それで、流石に人数も多くて、私のジョブが呪療士だったこともあ

って、追い込まれちゃった所に、カズマ君が助けてくれたんだ。PK達を追い払って、お礼と、名前を言ったら、驚いた顔して、「知り合いと同じ名前なんだ。」って言われた。

その時はなんて名前の人なのかなって思ったから、その知り合いの名前を聞いたら、私と同姓同名だったから、もしかしてって思っカズマ君に名前を聞いたら、私の従弟の一馬君だったんだよね。

あの時はビックリして今思い出すとちよっぴり恥ずかしいけど、「一馬君なんだ！」って、普段の私なら言わないような大きな声を出しちゃったんだよね。

「……やっぱり、思い出しちゃうと、恥ずかしい……それからは、一応メールのやりとりくらいはしてたんだけど、今日は偶然知り合いに会いに来てみたら、カズマ君を見つけたから、思わず声を掛けちゃったんだよね。」

「そつか。最近私も忙しくって二人と全然会えなかったから、ちょっと心配しちゃった。でも、元気で良かった、二人とも。」

「ええ、そうですね、志乃さん。な、揺光？」

「……うん、そうだね。」

やっぱり揺光には警戒されちゃってるな。

ま、しょうがない事なんだけど。

昔は、私が中々会えないのに、なんで智香ちゃんばかりが、一馬君といつも一緒に居られるのかって子供心に悔しくって、私自身も知らず知らずに変なプレッシャーとか与えちゃってたもんね。その時は、ただ智香ちゃんが一馬君と一緒に居る時間が長いだけに不満を感じてただけだった。

でも、それが変わったのは、5年前くらいの時かな？

一馬君を年下の従弟とだけ見てたつもりが、段々一馬君を一人の男性として好きになっていったんだよね。で、私が自分の感情に気がついたのは、4年前に、一馬君の家族と一緒に海へ旅行に行ったときのこと。

それまでは、一馬君の身体は余り強くなかったから、一緒に旅行なんてしたことなかった。

でも4年前の時には、一馬君の体調も随分良くなっていて、私の家族は仕事の関係で来れなかったけど、初めて従弟とどこかに旅行へ行ける事が凄く嬉しかったんだ。

海に着いた私は、一馬君と一緒に目一杯遊んだ。

それまで一馬君とこんなに遊んだ事なんてなかったから、私は凄く楽しくて、思わず時間を忘れちゃったくらい楽しかった。

でも、海で遊んでいたとき、荷物と一緒に置いといた箸の、お気に入りのキーホルダーが、いつの間にか無くなっちゃってたんだ。

それは死んじゃったおばあちゃんが買ってくれた物で、その時にはもう売ってなかったから、大切にしていた物だった。

それが無くなっちゃって気づいた私は、一生懸命探したけど、結局見つから無くって。

それで、旅館に泊まることになってたんだけど、私は旅館で、すっかり塞ぎ込んだじゃったんだ。

そんな私を見た一馬君は、見つかる可能性なんて全く無かったのに、夜の浜辺へ探しに行ってくれた。

そのことにしばらく経ってから気がついた私は、慌てて一馬君を追いかけていった。

でも、いくら体調が良くなっちゃってと言っても、一馬君は11歳の小学生。

そんな子に夜の浜辺なんて危ないところに、一人で行かせるなんて出来なかった私は、急いで浜辺に向かった。

一馬君が旅館から出て行って、2時間くらい経った頃に、私はやっと見つけた一馬君に駆け寄って、
急いで身体は大丈夫なのかと尋ねたの。

だって、いくら身体が丈夫になったからって、一馬君はついこの前まで、どこかに出かけることさえ中々出来なかったくらいだ。

万が一、何かあったらと思ってしまうてたから、私は一馬君が何を
持っているかなんて全く気がつかなかった。

でも、一馬君は、そんな私に、無くなったはずのキーホルダーを渡
してくれた。

あれだけ探しても見つからなかったキーホルダーを渡された私は、
一瞬信じられなくて、啞然としてたちゃったんだ。

私は、渡されたそれを見つめて、「一馬君が見つけてくれたの？」
って聞いたたら、一馬君は、「うん、そうだよ。」と笑いながら、そ
う言った。

「見つけたよ？志乃さんの、宝物。」

その時私は、スツゴク胸が温かくなった。

それまでただの従弟だと思っていた一馬君が、スツゴクかつこよく
見えて、なんだか、今まで感じたことのない感情が胸の中に一杯に
なった。

その時は、「まさか従弟の、それも3歳も下の男の子に」って思っ
てたけど、考えれば考えるほどに、その感情の正体は明確になっ
ていった。

「私は、一馬君が好きだ。」

同じ年頃の女友達に言ったら、「絶対あり得ない」って言われたけど、それ以外にこの感情に対する説明が着かなかった。同じ年頃の男子で、それまで「ちよっといいかな？」って思ってた人にさえ抱かなかった、自分でもよく分からない感情。そう、私は、生まれて初めて、男の子に恋をしたんだ。

それから、自分の感情を自覚した私は、彼の一番近くにいる智香ちゃんに凄い危機感を抱いた。

家は隣同士で、生まれたときからずっと一馬君と一緒にだった女の子。彼女が自分の気持ちに気づいてなかった頃はまだ良かったけど、しばらくして、智香ちゃんから、「志乃さんは一馬のことが好きなんですか？」って聞いてきたときの彼女の視線から、「ああ、やっぱりこの子もか」って分かったんだ。

いままでずっと一馬君と一緒に居たのだから。彼は、こんなすてきな男の子なんだ。好きになって当然だっと思っただ。

でも、そんなの関係ない。

私も、一馬君を一人の男の人として、好き。

だから、私は、智香ちゃんに、「悪いけど、一馬君は、渡さないよ・・・」と、3歳年下の女の子に、宣戦布告した。

あれから、大学への進学、一人暮らしするための準備などで、しばらく私は一馬君と会えない日々が続いた。

その間、智香ちゃんがどれだけリードしたのかは分からない。けど、私は諦めないよ？

だって・・・

私は、彼のことを、愛しているから

第二十二話（後書き）

どうでしたでしょうか？

この作品は、オリ主×揺光じゃなかったのか！！
とおっしゃりたい方。

その通りでございます。

・・・でも、私は、揺光の次に、志乃が好きなんです・・・
それに、考えてみたらオーヴァンや志乃達との絡み方を考えてい
なかったという・・・

で、どうせなら、こうしたいかな？って考えていたら、指が結構
な勢いで、志乃のことを書き始めたのです・・・

志乃の台詞の部分だけ、メツチャ早く終わりました・・・

ま、これでヘタレなハセヲ君が主人公に絡んでくる理由が出来たの
で、これはこれでいいかな？ってことで、採用しました。

賛否両論あるかもしれませんが、出来ればこれからも、この駄作を、
どうかよろしくお願いします。

第二十三話（前書き）

どうも、ジーユーです。

今回、カズマ達の二つ名が出ます。

色々考えてみた物なんですが、どっかで聞いたな的な意見がたくさんあると思います。

まあ、そこら辺は温かい目で見てくれると幸いです。

それでは皆さん、相変わらずこんな駄作ですが、どうぞお楽しみください。

第二十三話

SIDEカズマ

ドル・ドナのカオス・ゲートで志乃さんと別れ、当初予定していた、アインと言う双剣士に会いにマク・アヌに来てから、10分ほど経っただろうか。

揺光は志乃さんと会ってから、ブツブツと何かをずっと呟いていた。

「くそ、なんでよりによって、あの人とゲームで偶然会うなんて出来事が発生するんだよ・・・折角最近はこの人と会わないでいたから、すっかり安心してたつてのに・・・これでまた志乃さんからのアプローチを何とか一馬に悟らせないように・・・」

志乃さんと別れてからずっとこの調子で、正直、揺光の近くを通る人たち、ほぼ全員の揺光を見る目が、何か不気味な物を見るかのような目だったのは、まあしょうがないと思う。

実際、俺自身も揺光が知り合いじゃなかったら、同じ様な目で見たことだろう。

「おい、揺光。いつまでも一人でブツブツ言ってるなって。周りの人の視線が痛いから。」

正直な話、他人の振りでもしていたい所だが、流石にそう言う訳にもいかないから、俺は一応揺光にそう声を掛けてみる。

すると、それまでブツブツと何かを呟いていた揺光が、呟くのを止め、こつちをジッと、見つめてくる。

「な、なんだよ・・・」

「・・・ハア・・・（あたしがこんなに一馬の事で悩んでるつのに、当の本人は全く自覚無いんだもんな・・・案外、ほっといてもどうにもならない気がしてきた。）」

見つめていたと思えば、いきなり溜息をつかれ、なんだか呆れたような視線を向けられる。

理由が全く思いつかないから、なんだか知らないが、理不尽な気がするんだけど。

「なんだよ・・・何か俺に言いたいことでもあるのか？」

あるならハッキリと言ってくれないと分かん。

そう思つて揺光に言つと、何故かますます呆れられた顔をして、再び溜息をつかれた。

「ハア・・・（言えてたらこんな苦勞しないつのに・・・コイツが鈍感で良かったような、悪かったような・・・まあ、志乃さんの気持ちに気づかないのは、あたしにとっては良かったけど、それでもいつも一緒に居るあたしの気持ちにくらい、気付つての・・・カズマのバーカ!!」

え！なんかいきなりバカ呼ばわりされた！？唐突に、揺光からバカ呼ばわりされてしまった。

全く心辺りのない罵倒に俺が理由を探していると、揺光がマク・アヌのカオスゲートの方を向き、誰かを見つけたのか手を振って俺達の居場所をアピールし始めた。

「おい、こつち、こつち!!」

その揺光の声に、考えるのを一旦中断し、揺光の視線の先を追ってみる。

そこには、女性型のPCがいた。見た感じ、軽装で、PCの年齢的には俺達より若干上の、20代くらいだろう。

気の強そうな顔をしているが、目は理性的な光を宿しているように見える。

あの女性が揺光がチームに誘ったというアインなのだろう。

彼女の方も、揺光と俺を見つけたのか、真っ直ぐにこちらに歩いてくるから、恐らく間違いはない。

「お待たせ、揺光。ちょっと授業が長引いちゃって、来るのが遅くなっちゃった。」

俺達の所に来る早々、そう言って遅刻したことを謝るアインとおぼしき人物。

そんな彼女に、揺光は、「いいって、いいって。」と言いながら手を振り、気にしていないとアピールした。

「アインが忙しい中わざわざ時間作ってくれたのは分かってるから、そんなこと気にしないよ。」

それより、紹介するよ。こっちが、この前話したカズマ。カズマ、この人が、あたしがチームに誘った双剣士の、アインだ。」

そう紹介され、一応礼儀としてこちらから名乗る。

「カズマです。よろしく。」

「アインよ。こちらこそ、よろしくね、カズマ。」

そう挨拶を交わし、共に差し出した手を握り合い、握手する。話し方からして、俺達よりも年上なんだろう。なんとなく、志乃さんとかと同じ雰囲気を感じた俺は、そう判断した。

「さて、顔合わせも済んだことだし、早速クエストに行つて、連携プレアの練習といこうぜ!!」

「了解。じゃ、お互いに頑張りましょうね、カズマ、揺光。」

「こちらこそ、よろしく頼む、アイン。」

そう言い合つて、俺達は、初めての連携確認と言う事で、カオスゲートから、クエストへと繰り出していったのだった。

「アイン、今！！」

「了解！！—双燕返し！！」

アインのアーツがモンスターに、ダメージを与え、そこにすかさずカズマが、シエルブリットを振りかぶり、「喰らええ！！」と叫んで、攻撃をモンスターへと叩き込む。

その一撃で、モンスターは、「グオオオ・・・」とうめき声を上げて、粒子となって消え去った。

アインと顔合わせを果たしたあたし達は、連携プレーの確認のため、事前にキリカから渡されていたPK出没率の高いエリアへと来ていた。

もちろん、連携を確認するなら、モンスター相手でも一向に構わないんだけど、トーナメントであたし達が戦うのは、NPCであるモンスターじゃない。

人間の操作するPCなんだ。

だったら、連携を確認し合うのも、同じPCである、PK達の方が、本番に近い状況で出来るってもんだろう！

そう考えたあたしは、モンスターの相手をしながらも、何時になったらPKは現れるのかなと、考えていた。

「っと、これで一応残るモンスターはボスだけか・・・けど、やっぱりそう都合良く、PKは現れないか・・・」

そう言って、カズマはシエルブリットをしまう。

あたしとアインも、カズマに習って各々の剣をデータへと変換し、光の中へと収納する。

カズマの言うとおり、あたしの目論見通りには行かず、PKの姿は、未だ現れていなかった。

今までも、偶にPKと中々遭遇しない事もあったから、その可能性も一応考えてはいたんだけど、今までキリカから渡された情報のエリアには、かなりの確率でPKが出現したから、今回も大丈夫だと思っただけど・・・

「流石に、そう何度も上手くはいかなかったかな・・・」

折角、アインと一緒に来たのに。

普段は探さなくたって来るくせに、こういうときに限って中々来ないんだから、あいつらは！！

あたしが憤慨していると、アインが、「あ、あれそうじゃない？」と言って、あたし達の後ろから来るパーティーを指さした。

一見、あたし達と同じように、このエリアにクエストとして来たパーティーに見えなくもないけど、あたし達を見て駆け出してきた先頭のPCの行動は、ただの一般PCにしては不自然だった。

「みただね！よっしゃ、カズマ、アイン！！準備はいいかい！？」

「ま、問題はないよ。」

「私もね。あれくらいなら、問題無いわ。」

そう言って、しまったばかりの武器を取り出すあたし達に、PKらしきパーティーは、あたし達の予想通り、あちらも武器を抜き、突撃してきた。

「オラア！！」

いきなりそう叫びながら斬りかかってくる撃剣士の剣を、少しだけ身体を横にずらして回避すると、その斬刀士を、カズマが殴り、PKの仲間の二人組の所まで吹き飛ばした。

「おい、チーチャン！！何一人で突っ込んでんだよ！！相手は、あの「徹甲弾」のカズマ何だよ！！それに、「鬼姫」揺光も、いろんなPK仲間がやられてるって話だしさあ！！後一人は知らないけど、あいつらと一緒にいるって事は、かなり強いんだよ、絶対！！三人でかからないと、敵わないって！！」

「ハハハ・・・私、二人みたいに強くないから、そこまで言うほどでも無いんだけどな・・・」

そう笑うアインの言葉はスルーする。

「っていつか、誰が「鬼姫」だよ、誰が！！」

「お前しかいないだろうが。あれだけPK相手に暴れといて何を今更・・・」

そう呆れたように言うカズマに、あたしは、「うう・・・」と、言葉を詰まらせてしまった。

あいつらの言う「徹甲弾」やら、「鬼姫」やらは、あたし達にいつの間にか着けられていた二つ名らしい。

カズマの方はまだ分かる。

シエルブリットの意味って、「徹甲弾」って意味だし、アイツの一撃って、マジで徹甲弾並だから、まだ納得はできるし、カズマは男

の子だから、そう言われてたって、別に構わないと思う。

でもさ、誰が着けたのか全く分からないけど、「鬼姫」って、失礼だと思っただよな。

” 姫 ” はまだ良いけど、 ” 鬼 ” ってなんだよ、 ” 鬼 ” って。

一応英雄に憧れたり、少し男の子っぽい所もあるって自覚はしてるけど、あたしだって女の子なんだ！！

” 鬼 ” って言われて、嬉しいはずないだろ！！

そんなこんなで、あたしは、自分に着けられたこの二つ名が、好きじゃない。

なのに、最近のPKときたら、あたし達を見るなり、「鬼姫」揺光だ！！だの、「鬼姫」が出た！！だの、いくら何でも失礼だろ、テメエら！！って言いたくなる。

「何言っただ、ショウジ！！男だったら、正々堂々一人で戦うのが格好いいんだろうが！！」

「いや、チーチャン。PKやってる時点で、格好いいとか、格好悪いだとかの話じゃ無い気がするんだけど・・・」

あたしが自分の二つ名について考えていると、なんかPK達が言い争いを始めていた。

なんか、カズマ達もいつらの会話を聞いて、攻めて良いのか迷ってる顔してるし。カズマにしては珍しく。いつもだったら、容赦なく拳を叩き込むのにな。それを見て、あたしは一旦考えるのを止めて、そいつらの会話を聞いてみた。

「馬鹿野郎！！ダークヒーローのものいるだろうが！！それに、ギルドの仲間がやられてるって話なんだ！！相手もPKKだし、丁度

良いじゃねえかー!」

「いや、ダークヒーローって、ちょっと意味違う・・・」

「どっちでも良いんだよ、そんなのは!あれだよ、あれ!俺達が強いつて話のこいつらを倒せば、一躍俺達ヒーローって事だろ!」

「いや、ヒーローじゃなくて、どっちかというとヒールじゃないかな・・・」

・・・なんだ、この会話は・・・

あたし達が今まで出会って来たPK達とは全く違う方向性の会話を繰り広げるこいつらに、あたしはそんな疑問を浮かべてしまう。

てか、ヒーローとか、ダークヒーローって、そんなの目指すんだったら、PKになっちゃダメだろ。

と言うか、もしかしてこいつらって、小学生くらいの年齢何じゃないのか?特に、あの真ん中でヒーローだの何だの言ってるさっき突っ込んできたヤツ。

あたしが奴らのことを、そう考えていると、「・・・なあ・・・」と、カズマから声を掛けられた。

「あいつら、多分小学生くらい年齢なんじゃないか?やけに昔どこかで聞いたような会話を展開されて、ふと思った。」

「あ、私もそう思った。なんだか、近所の小学生達が話してるような感じの事言ってるし。」

二人もあたしと同じ事考えてたみたい。

ていうか、カズマ、アンタの言う昔聞いたような会話って、どこで聞いたんだよ。

あたしはふと、そう考え、カズマに聞いてみた。

「忘れたのか？あの会話、昔、俺とお前が繰り広げた会話にそっくりだぞ？」

ああ〜！思い出した！！そっか、何かどっかで聞いた事あるような会話だな〜って思ってたなら、あたしが一馬に同じ様な事言ってたんだ。

あたしは昔から戦隊ものだとかが結構好きだったから、そう言う会話を一馬と一緒にやってたんだっけ？

まあ、ほとんどあたしが一方的に色々言っただけで、それを一馬にダメ出しされるって感じだったんだけどさ。

あたしがそう懐かしみながら、ヒーロー志望のPK達を見つめると、「とにかく！！」と大きな声で真ん中のヤツが一言叫んでるから、そろそろ会話も終わるんだろう。

なんだか結局手を出しづらくって、あいつらの会話最後まで聞いてちゃったんだな、あたし達。

「やるなら、1対1だろ、展開的に考えて！！この状況だったら、それしか無えだろ、普通！！」

「・・・分かったよ、それでいいよ、それで。」

「まあ、この状況だったら、三人で必殺技決めるとかよりも現実的だからね。僕も賛成だよ。」

そう二人が言うと、「よおし、それで決まりな！！」と、元気よ

く真ん中のヤツが言った。

・・・と言うか、「三人で必殺技で決める」とか、本気で考えたのかな？本気だったら、ちよつと誰かアイツにこのゲームにそんな物は無いって教えてあげて。なんか昔の自分を見てるようで、悲しくなってくるから。」

「待たせたな、鬼姫共！！今、このチール様が、お前達に、正義の鉄槌を下してやるぜ！！・・・鉄槌で合ってるよな？」

「・・・合ってるから、自信持って、チーチャン。ほら、何かあの人達の目が生暖かく見守ってるって感じになってるから。真ん中の人以外。」

「ぬ！！これから自分たちの事を倒す俺達を観察していたのか！！おのれ、やるな、PKK共！！」

「何でチーチャンっていつもこんなに前向きなんだろうな。」

「俺に聞くなよ。て言うか、真ん中の鬼姫、マジ目が怖いんだけど。」

だ・か・らあ！！

「鬼姫って呼ぶなっつてんだよ！！第一、ヒーロー志望なら、なんでPKなんてやってんだよ！！そこは百歩譲って、PKKだろうが、普通！！」

「フッフ・・・甘いな、鬼姫。俺達は、そんな枠には捕らわれないのさ。全く新しいヒーローを目指す俺達は、PKと言う、一見悪役にしか見えない者たちの中で、見事にヒーローとなるべく、日夜P

KKを倒しているのだから!!」

「いや、ただ入ったギルドがケストレルで、いつの間にかPKとして活動してたけど、普通のPCを襲うのも何だから、PKKと戦うことにしたって素直に言おうよ、チーチャン。」

「ちょ、おま!!なんでそんな事言うんだよ、ヨッシー!!それはお前、秘密だつて言っただろうが!!」

「いや、どうでも良いけど、鬼姫さんメツチャ怒ってるよ、チーチャン。」

鬼姫、鬼姫、連呼すんなあ!!

「もういい!!カズマ、アイン!!さっさとあいつらブツ倒すよ!!」

呼ぶなつつうのに、何度も何度もかい声で言いやがって!!

「落ち着け、揺光。何かお前ヒーロー志望君と同じくらいのテンションになってるからな。小学生と同レベルの幼なじみは勘弁して欲しいんだが。」

「黙れ!!あいつらをk i e eすれば、落ち着く!!」

「・・・だめだな、こりゃ。」

そうカズマが呟くと同時に、あたし達は戦闘に突入したのだった。

SIDEカズマ

「ハアア!!」

「グー!!やばいよ、チーチャン!!やっぱこいつら強いって!!!!ヨ
ッシーももうやられちゃってるし、このままじゃ!!!!」

「大丈夫!!最後には俺達が勝つ!!鬼姫なんて悪役みたいな名前
のヤツに負ける「どらぁ!!」「うぉお!!」

「だから、なんでそう呼ぶかな、チーチャン・・・」

・・・なんか苦勞してそうだな、こいつら。

揺光のことをしつこいくらいに「鬼姫」と呼んだPK達は、俺達に

かなりの所まで追い込まれていた。

一人一人のレベルでもそうだが、ここ最近PKを狩りまくっていたこともあって、俺と揺光の対人戦闘技術は、かなり上がっている。

アインの方も、俺達のフォローに入ったりして中々上手く立ち回っている。

そのフォローは、さっきまでのモンスターとの戦闘でもそうだったが、中々良いところできてくれるから、こっちとしても結構助かっている。

まあそんな感じで、一人倒し、残りは二人になっているわけだが、中々こいつら、あのコントからはちょっと想像できないくらい強かった。

あのヒーロー志望君が、突っ込んできて、この斬刀士が、一撃が大きいヒーロー志望君の隙を埋め、さっきまでいた銃戦士が、その二人を援護する。

中々良いコンビネーションで、ほんの少し前までは、中々手こずっていたけど、援護役の銃戦士を先ほどアインが倒したことにより、戦況は俺達へと傾いた。

「行くぞー!!」

「くう!!」

拳で、斬刀士の身体を打ち上げた俺は、すかさず連続して拳を当てていく。

必死にそのラッシュを防御して耐えようとしているが、強めに一発剣に叩き込むと、防御が崩れ、ボディがガラ空きになった。

「やば・・・!!」

「悪いな、貰うぞ!!」

そう宣言した俺は、普通のアーツでも良かったのだが、折角なので、背中の羽を一枚消費する。

羽が崩れていき、代わりに、緑色の光が、俺の身体を回転させる。

「衝撃の、ファーストブリットオ!!」

防御を崩され、ガラ空きになっていたそのボディへと、この世界でシエルブリットだけが出る、必殺の一撃を叩き込んだ。

今では、そこそこ慣れた、空間が歪む様な現象の後、ガラスが割れるような音と共に、吹き飛んでいく斬刀士。

その身体は、蓄積されていたダメージも当然の如く有り、仮死状態を表す灰色へと変化していた。

「シヨウジイイ!!くそ、お前達、良くもシヨウジを「死ねえ!!」
うわあ!!ちよ、最後まで言わせるよ、鬼姫!!」

「だから、鬼姫って呼ぶなああ!!」

そう叫び、ヒーロー志望君を苛烈に責め立てる揺光。

その表情は、まさに鬼のようだ。

「全く、ああいう風にしてるから、鬼って言われるんだろうに。」

「いいの、カズマ?揺光のこと手伝わなくても。」

「こつこつちゃ悪いけど、あの程度の相手なら、揺光一人で十分だ

よ。それに、何か今日はやけに疲れたし、後はアイツに任せようと思っ
てね。」

完全にヒーロー志望君を揺光に任せた俺は、そうアインに言いな
がら、観戦モードへと移行する。

なんか、あの二人の戦いには介入しちやいけないような気がするん
だ、何となく。

そうして地面に腰を下ろした俺の隣に、「それもそうね。」と言っ
て、アインも地面に座る。

しばらく二人の戦闘を、特に何かをするわけでもなく、ただポー
ツと眺めていると、揺光の一撃がヒーロー志望君へと決まり、そこ
から連撃に繋がって、ついにヒーロー志望君のHPがゼロに変わっ
た。

「ぐはあ！！く、見事……だが、忘れるな、鬼姫……俺は、何
度でも蘇ってやるぞ……正義は、必ず……勝つ……の、だ……
・ガクツ」

なぜか最後にどこかの魔王みたいなことを言って倒れるヒーロー
志望君に、「だから、鬼姫って呼ぶなあああ！！」揺光は仮死状態
となったヒーロー志望君へとそう叫んだ。

最後まで揺光のことを鬼姫と呼んだ彼は、ある意味勇者だったのだ
ろうと、試合に勝って勝負に負けたってことういうことを言うのかな
と勝ったはずなのに悔しがっている揺光を見ながら、俺はそう思っ
た。

第二十三話（後書き）

どうでしたでしょうか？

あんなどこかで聞いたような二つ名を出しておきながら、そろそろ、トーナメントに行こうかなくなって考えている今日この頃。

まあ、さっさと本編に行きたいと考えているので、これから色々やっつけていきたいと思えます。

こんな駄作ですが、皆様これからもどうかよろしくお願いします。

第二十四話（前書き）

どうも、ジーユーです。

忙しくなって参りました。

更新速度が落ちたりしてしまつかもしれませんが、どうかこれからもよろしくお願いします。

第二十四話

SIDE 一馬

「フアア〜アア・・・猛烈に眠い・・・」

私服へと着替えた俺は、無理矢理連れてこられた智香の家で、一言そう呟いた。眠い。マジ眠い。もっと寝ていたい。

しかし、俺のそのささやかな願いは、耳元で叫ばれている智香の声によつての叶えられぬ願いとなつていいいた。

「おい、一馬！！何眠そんな顔してるんだよ！！遂に始まるんだぞ、アリーナトーナメント！！もっとシャキツとしろシャキツと！！」

テンションの高い智香に、背中をバンバンと叩かれながらそう言われる。

・・・ホント、何故お前は日曜の朝っぱらなのにそんなテンション高いんだよ。

あのヒーロー志望のPK達と戦つてから、一週間が経つた。

全国的に休日である日曜日の今日は、ついに智香の待ち望んだアリーナトーナメント第一回戦の日だ。

この一週間、リアル、ゲーム問わず、まるで遠足に行く小学生のように、そわそわと落ち着き無く今日という日を楽しみにしていた智香は、昨夜夜遅くまでPK狩りに俺を無理矢理付き合わせ、それから解放され、ようやく寝たのが3時と言つてもう夜と呼んで良いのか悩んでしまう時間だった。しかし、智香は俺の事を、まさかの6時と言つてあり得ない時間に起こして来やがったのだ。

「なんでこんな時間に起こすんだよ・・・俺、昨日お前に付き合われて、まだ3時間くらいしか寝てないんだぞ・・・トーナメントが開始されるのって、10時過ぎからだろ？いくら何でも早すぎだろ・・・てか、なんでそんなに元気なんだよ、お前・・・」

昨日は俺と一緒にPK狩りを敢行していた筈なのに、ピンピンとしている智香の姿に寝ぼけ眼でそうツツコミを入れて問う。コイツだって、3時間くらいしか寝てない筈なんだが・・・いつもと同じくらい、イヤ、もしかしたらそれ以上に元気があるんじゃないだろうか。

「だって、今日がトーナメントだって考えたらもう、ワクワクして眠れなかったんだって！！それに、一馬っていつつも、起こしても起こしても、中々起きないじゃんか！！だから、余裕を持って起こしてやったんだよ！！」

だったら、あんな時間までPK狩りなんてものに付き合わすんじゃない。それに、いくら何でも余裕を持ちすぎているだろうに。マジで遠足に行く小学生か、お前は。

そう思いながらも、確かにいつもの俺ならば、三時に寝てしまえば、恐らく夕方近くまで寝ていたのかもしれない。寝ていられるだけ寝るので、もしかしたらトーナメントに間に合わなかった可能性も、無きにしもあらず、と言った所だったろう。だが、そうだとしたらあの起こし方は無いんじゃないだろうか？

「それで、お前の言う余裕を持った起こし方ってのは、あの寝ている俺の鳩尾に、垂直フライングニーを叩き込む事なんだな。下手すりゃ、あのまま永眠コースだったよ・・・」

俺がそう言うのと、流石に悪いと思っっているのか、「うつ！！」と詰まったような声を出して、頭を押さえながら、ちよつと泣きそうな顔になる智香。

でも、アレはマジでやばかった。寝ている無防備な俺の鳩尾に、いきなりコイツの膝が突き刺さったんだ。下手をすれば、確実に永眠コースまっしぐらでも可笑しくは無かったと思う。

まあ、10分くらい悶絶したあと、寝不足と言う事もあり、ブチツと我ながら珍しく切れてしまい、オロオロとしていた智香の頭を、拳で挟み込みそのままグリグリと拳を動かす、所謂梅干しと言われている技を10分ほどかましてやった。

いくら永眠寸前まで持つて行かれても、一応、自称か弱い乙女である(二度言うが自称である。乙女と言える様な人物は普通窓から男の部屋に侵入などしないと思うが)智香に、それ以上の制裁を下そうとは思えなかったため、梅干しで勘弁してやった。まあ、流石に10分は効いたのか、しばらくの間、ずっと頭を押さえたまま涙目になっていたのには、多少の罪悪感が浮かんだが。

しかし、これが啓太とかならば問答無用で、俺の気が済むまで殴っていたらろう。その結果、泣こうが喚こうが知ったこつちや無い。永眠寸前まで行ったんだ。それくらいしても罰は当たらない筈だと思ふ。

「あ、あれは、本当に悪かったよ・・・で、でも、本当に窓の枠に躓いて、結果的にそうなったってだけで、悪気があった訳じゃないんだぞ！！本当に！！！」

「分かってるって。まあ、流石にマジでやられたら、ちよつとシヨツクだけだな。」

てか、ワザとだったら、流石に女だろうと、梅干し程度で済ませ

はしない。それに、本当にワザとだったら、地味にシヨツクだ。それなりに仲良くしてたと思ってた幼なじみに、あわや永眠コースと言う攻撃をかまされるなんて、流石の俺でも、色々と落ち込むと思う。

そんなことを思い出しながら欠伸をして眠気を我慢していると、智香のパソコンに到着メールが来た。

「お、メールか。え〜っと・・・あー！キリカからだぞー！今日はトーナメント戦見に来られるってさー！」

「そうなのか？それは良かった。少し入院が長引いたみたいだけど、見に来られるって事は、もう大丈夫だってことかな。」

「うんー！メールにもそう書いてあるー！マジでよかった。安心したよ。っと、返信しなきゃ。え〜っと、「退院おめでとうー！今日は絶対に勝つから、楽しみにしてるよなー！」これでよし。じゃあ、送信！・・・完了！よーしー！気合い入れて、一回戦勝たなくちな、一馬ー！」

そう言って、まだ試合時間まで1時間以上もあるというのに、気合いを入れる智香の姿に、クスツと笑みが零れた。キリカのこと、結構気にしてたからな、こいつは。

智香のパソコンに届いたキリカからのメールには、「ちょっと検査とかが長引いちゃって、予定よりも入院期間が長かったんですけど、もう退院したし、身体の方も平気なので、今日の一回戦は必ず見に行きますねー！頑張ってくださいー！」と書いてあった。随分と入院してる期間が長かったので少し心配していたのだが、どうやら無事退院出来たらしい。何にしても、キリカが見に来るって言うのは朗報である。俺にしても、智香にしても、一安心よ言った所

である。

智香は何度も、「やるぞー！！やってやるぞー！！」と気合いを入れて叫んでいる。少し近所迷惑な気もするので一応、「智香、声がでかい」と注意する。だが、それもしかたない事だろう。

智香の目標のために、色々と力を貸してくれたキリ力が、無事退院し、俺達の試合を見に来るのだ。陰ながら自分たちを支えてくれた、支援者とも言える彼女は、智香にとってはもう既に親友と言える存在である。

そんなキリ力に、出来るなら自分達の戦いを見て貰いたい、キリ力のおかげで、こんなに強くなった！！と伝えたいって気持ちがずつと智香の中には有ったんだと思う。そして今、そのキリ力が自分達の戦いをハッキリと、見に来てくれると分かったため嬉しくなつてしまい、メールが届く前よりも更に気合いが入っているのだろう。

まあ、俺も同じ様なことを思っていた為、智香の気持ちも良く分かる。今日はしっかりと気合い入れて試合に臨むことにするとしよう。せつかく見に来てくれたキリ力の前で、無様な戦いを見せるわけにもいかないしな。そう決めた俺は、まずさっきからずっと、「やってやる！！勝つぞー！！」と叫んでいる智香を静めることから始めるのであった。

SIDE 揺光

「さあ、やって参りました！！紅魔宮、アリーナトーナメント！！5ヶ月前、突如としてチャンピオン宮皇が引退するという事態となり、そのため、長らく続いたこの紅魔宮の宮皇となった、暁！！その彼に挑み、新たな宮皇となる者が、果たして現れるのでしょうか！！会場は、盛大に盛り上がっております！！」

「結構居るんだな、相変わらず。」

「そりゃ、そうでしょ。トーナメントが開催される日って、いつもこんくらい居るじゃん」

「そう言えば、そうだったな。」

控え室から、観客席の映像を見ながら一馬はそう言った。その姿には、緊張している様子なんて、全く無い。普通、これだけのPCが見てきたら、少しは緊張すると思うんだけど、相変わらず神経が太いんだな、一馬は。

まあ、かく言うあたしも、さほど緊張してないし、人のこと言えないんだけどね。アインも緊張してる様にも見えないや。結構あたし達って、みんな神経太いんだ。

控え室にいる他のチームの、多分初参加だと思う人たちが観客の数

に緊張している姿を見ながらあたしはそう思った。

「本日の最初の試合は、こいつらだあ!!」

実況の言葉と共に、スクリーンに表示される対戦表。

そこには、あたし達のチーム、破軍の名前があった。

「よし!!勝つぞ、カズマ、アイン!!」

「分かってるよ。朝そう決めたしな。」

「了解よ、揺光。一回戦で躓いてなんていられないもんね。」

そうだ!!あたし達は、宮皇になるんだ!!それに、キリ力だっ
て見てる。あの子のおかげで、あたしはここまで強く成れたんだ。
こんなところで、負けてなんていらんないんだ!!キリ力のため
にも、あたし自身の夢の為にも!!

「絶対に勝つ!!」

そう自分自身へと宣言したあたしは、頭上に現れた光によって、
アリーナのフィールドへと転送された。

「新進気鋭の、ニューフェイス!!徹甲弾、そして鬼姫と呼ばれ、
恐れられる彼女達の実力は、はたして本物なのか!!チーム破軍
!!」

フィールドへと転送されたあたし達へと実況の、選手コールにあ
たしは、「鬼姫言っな!!」と、条件反射で、叫んでしまった。
クソ、マジで鬼姫って言い始めたヤツ、何時か見つけてボコボコに

してやる！！

「ベテラン揃いの、いぶし銀！！ランカー上位の実力を発揮し、新人達をもしや瞬殺してしまうのか！！

チーム豪！！」

あたし達の対面に現れたのは、チーム全員のPCがやけに渋いオッサンキャラで固めている三人組で、アリーナでの上位ランカーに名を連ねる、チーム豪だった。

「おいおい、いきなり俺達に当たるなんて、ついてねえな、新人さん達。」

「油断すんじゃないぞ、銀。相手は、二つ名まで持つてるPKKらしいからな。」

「淳の言うとおりだ、銀。いくら相手が新人でも、万が一と言う事もある。油断して足下を掬われるなんてみっとも無い負け方だけはゴメンだぞ。」

そう言って、余裕そうにしていた左の銀という男を戒める、淳というPCと、リーダーの龍。

正直な話、正々堂々と勝ちたかったから、これあの銀ってPCの油断が消えてくれれば、あたしとしては嬉しいんだけどね。

「油断してくれてるなら、その方が俺としてはありがたいんだがな。楽に勝てそうだし。」

「何言ってるんだよ、カズマ！それじゃあ、正々堂々とした勝負にならないだろ！！」

あたしは、全力で戦いたいんだからな!!

「両チーム、準備はよろしいでしょうか!」

「おう!!」

「いつでも。」

実況からの確認に、即答で答えるあたしと、リーダーの龍。
燃えてきたよ……!!

「それでは、試合開始いっ!!」

「いくぜ!!」

実況の開始宣言と共にあたしは、真っ直ぐに龍へと突っ込んでいった。

SIDEカズマ

「オラオラオラ！！どうした、小僧！！その程度か！！」

（暑苦しいオヤジだな・・・）

俺は、銀と呼ばれていた重槍士から次々と突き出される槍を紙一重で躲していきながら、そう思っていた。正直、暑苦しいその言動と同じく、このオッサンから繰り出される槍は、中々苛烈だ。

ちよつとでも避けるスピードを緩めてしまえば、すぐさま彼の槍に次々と突き刺され、あっという間にHPが無くなってしまっただろう。上位ランカーというのも納得がいく実力で、今まで出会ったPK達何かよりもずっと強いと思う。

だが・・・

「クツ！！何時までも避けてんじゃねえぞ、オイ！！男なら、正々堂々と傷付け合いながら戦うってのが、昔からの決まりだろうが！」

しばらく反撃もせず回避につとめていたら、そうやって来た銀。予想通りな展開に、思わず笑いそうになってしまう。彼の振るう槍も、心なしおおざっぱになってきたし、一気にカウンターを合わせやる。

そう考え、チャンスを窺う事にした俺は、攻撃を続けてくる銀の槍から目を離さずに、ジツと彼の槍をめを追っていく。

必ず来るそのチャンスをつかみ取る為にな・・・！！

第二十四話（後書き）

中途半端なところで終わらせてしまつて申し訳ありません。
決着は次回に着く予定ですので、お楽しみに。
それでは、次回もよろしくお願いします。

第二十五話（前書き）

どうも、ジーヨーです。

只今、大学のパソコンから投稿しています。

授業の合間に結構時間が空いてしまい、せっかくなので投稿しました。

結構今回は長い方ですが、ぜひお楽しみください。

第二十五話

SIDE???

「カズマ・・・か・・・」

アリーナの観客たちが眼下で繰り広げられる戦いに熱狂するなか、俺は只一人の男の顔を見つめていた。

「徹甲弾 シェルブリット のカズマ」

最近名を上げてきた、超レアアイテムである「シェルブリット」を有するPKK。そのシェルブリット独自の固有技能、ユニークスキルと本人は言っているらしい攻撃は、普通のPKだったならばHPが全開であったとしてもやられてしまうと言われているほどの攻撃力を誇っている、今やThe worldでも多くの者に知られている凄腕のプレイヤー。

しかし、俺にとってはアイツは・・・!!

「なんで、リアルでも、ゲームでも、お前は・・・!!」

憎い・・・俺とは全く違う、リアルでも、ゲームでも天才と言えるほどの才能を持つお前が・・・!

ゲームしか、一この世界 The world でくらいしか居場所のない俺と違う、俺の望むすべてのものをどちらの世界でも手に入れてしまうお前が憎い・・・!!

「.....」

「！！ああ、分かってる・・・もうすぐ、もうすぐだ・・・！！」

そうだ・・・俺は力を手に入れた。普通の奴なんかじゃ、到底かなわない力を・・・！！

この力があれば、俺はあいつに勝てるんだ・・・！！この世界で、お前が俺に敵うはずないんだ・・・！！

「カズマさん、揺光さ〜ん！！頑張ってください〜い！！」

「ん？」

俺の耳に、ほとんどの客がカズマ達と戦っている相手チームへと応援するなか、前の席の方から、カズマ達を応援する歓声が聞こえてきた。

何となく気になった俺は、その歓声を送ったPCのことを見てみる。

そこには、俺があいつらのことを調べている時に、よくカズマ達と共にいた少女のPCがアイツ達へと一生懸命に歓声を送っていた。

「あいつは・・・」

「.....」

俺がそいつのことをみると、俺の中から、「アイツ」の声が聞こえてきた。

！！そうか・・・そうだな・・・それは、ヤツへの復讐には、もっとこいな作戦だな・・・

「ククク・・・カズマ・・・お前の大事なお仲間を、俺が・・・」

ーぶっ壊してやるよ・・・

俺は、これからやることによつて、奴が苦しむ姿を思い浮かべ、その姿に顔を愉悦に歪ませながら、まだ何も知らないヤツへと視線を送るのだった。

S I D Eカズマ

「この野郎お!!」

ブウォン!!

「シッ!!」

バコッ!!

「グウ!!クソツタレが!!」

かなりの速度で突き出された槍を、紙一重で躲し、銀の顔に、力ウンターでシエルブリットを、叩き込む。拳が、銀の顔に直撃し、HPから、今のダメージ分數値が多少減少するが、本当に多少程度

だ。

さつきから、大振りになってきた銀の攻撃に合わせて、何度も拳を叩き込んでいるのだが、やはり、重槍士は防御力が高い。カウンターで、通常より喰らうダメージは大きい筈なのだが、中々思うようにHPが削れない。

かといって、普通に打ち合えば、防御力の低いこつちが先に倒れてしまう。

どう攻略したものか、と考えながら銀の槍を避け続ける俺に、もう何度目か分からない、銀からの怒鳴り声が、俺の耳へと響いてくる。

『見事なまでに、カウンターを合わせていくカズマ選手！銀選手の苛立ちは、どんどん高まっていくぞお！！』

「テメエ！！男だったら、チマチマ、チマチマ攻撃して来ねえで、派手に打ち合おうって思わねえのか！！さつきから、避けてばっかで、男らしくねえんだよ！！男なら、熱く打ち合えッてんだよお！！」

そう言っつて、更に激しくなる槍の攻撃だが、こちらも避けるスピードを上げて、そのことごとくを避けていく。てか、打ち合うだけが男らしい戦いじゃないだろうに。ボクシングのカウンター使いだっつて、こうして戦うというのにな。

『ただいまの戦況、私には、全くの互角に見えます！！初参戦のチームが、ベテラン相手にここまでの試合を繰り広げている所を、私は今まで見たことがありません！！』

実況の声が響く中、俺はカウンターのことにに関して色々と考えていた。ま、そんなことを考えたって、銀を倒せる訳じゃないんだがね。心の中でそう言いながら、俺はチラッと、揺光達の様子を窺う。

二人とも、今まで戦った相手よりも技術もレベルも上なので、多少は苦戦している様子だが、ピンチというわけでも無いみたいだ。二人とも、良い感じで戦ってる。

が、戦えているからと言って、勝ってる訳じゃないんだ。俺も、早めに二人のフォーローに回りたい。そのためには、目の前で未だ叫びながら槍を突き出してくる銀を倒さなくてはならないんだよな……

「仕方ない、多少のダメージは覚悟するか……」

俺がやられたとしても、揺光さえ負けなければ、この試合は俺達の勝ちとなるんだ。しかし、逆を言えば、揺光が負けてしまえば、この試合は、俺達の負けとなる。

故に、ここで大事なものは、俺が生き残るか、ではなく如何にして揺光を最後まで生き残らせるかが重要なんだ。

だから……!!

「いい加減に「やってやるよ!!」!!ウオオツ!!」

今までのカウンターを合わせるための様子見ではなく、こっちらから打って出る、攻撃的なスタンスへと換え、さっきよりもより紙一重の距離で躲しながら、多少のダメージは覚悟の上で、攻撃する!!

「へっ!! やつと男らしくなりやつたみてえだ「オラア!!」つと!! 話す間もやらないってか!! 上等だぜ!!」

『おっつとお!! 先程まで、見事なまでにカウンターだけを合わせ、それ以外はひたすらに攻撃を避け続けていたカズマ選手!! ここで一気に勝負に出たのかぁ!!!! ダメージを全く気にしない、怒濤の攻撃を開始した……!!』

俺と銀の拳と槍が、交差する。それぞれの攻撃が直撃して、HPからダメージ分の数値が減少する。しかし、やはり重槍士の防御力は高い。シエルブリットも、確実に攻撃力が以前よりも上がっているというのに、なかなかダメージがやつに通らない……！！それに比べ、俺の防御力は低いため、かなり削られてしまった。

が、ダメージ量に差があるなんて、最初から分かり切っていたんだ。このまま、ダメージを喰らいながらも、必ずぶちのめしてやる！！そう腹を決めて打ち合っていくうちに、俺は昔、まだ双剣士として、モルガナ達と闘っていたころのように、集中力が高まり始め、相手の攻撃がゆつくりと見えるようになってきていた。

『激しい！！激しすぎる攻防だ！！両者共に、ダメージを気にせず、壮絶に殴りあっているう……！！まるで古代の決闘だあ！！』

俺と銀は、お互いにダメージを負いながらも、攻防を続けていく。その姿は、実況の言う通り、古代の剣闘士のようなのだろう。しかし、集中力が高まってきていた俺は、そんなことなど全く気にせず、ただただ目の前の銀から繰り出されてくる攻撃だけに集中していた。お互いにダメージを蓄積しあい、打ち合う銀の表情はいたって楽しそうであった。

「いいぜえ！！やっと男の戦いらしくなってきたやつだ！！血が滾ってきたがる！！そうだろお！！お前もさあ！！」

勢いよく突き出される槍を、体の表面に掠らせるくらいギリギリの距離で避け、返事の代わりに、拳を突き出す！！銀はその一撃をボディで受け、一瞬動きを止め、苦悶の表情を浮かべるが、本当に一瞬で、次の瞬間には再び、その剛槍を繰り出してくる。

集中力が高まっている今、先までのように攻撃を喰らいながら、というスタイルではなく、その前までのカウンターを合わせるための

回避ではなく、体に掠らせるようにしてギリギリ回避。システムがダメージを受けていると判断できるかできないかのギリギリの領域を見切っていく。普段ならばできる芸当ではないが、今のこの状態ならいける……!!

銀の方も段々と、攻撃が当たったというシステムの判定が出ないことに疑問を感じ始め、そして俺が本当にシステムに当たったと判断されない、ギリギリのラインで攻撃を避けていることに気がつき、俺のその信じられない行動に、驚愕の表情を浮かべる。当たり判定が上がっても不思議ではない、システムの判定範囲を見切るという普通ではありえない芸当を繰り返している俺に、先ほどのように怒鳴り声を上げもせず、引きつるような笑みを浮かべた。

「んだ、そりゃ……お前、化けモンかよ……」

その銀の質問にも俺は答えず、その代わりに俺の行動で動きが鈍った奴の体へと、連続で拳を繰り返していく。動きを鈍らしていた銀は、俺の攻撃に反応できず、次々と拳が当たり、ダメージを蓄積させていく。

「くそ、マジか……!!」

そう悔しげに口にした銀は、状況打開のためというよりも、この状況からなんとか脱出しようと、苦し紛れに槍を横に薙ぎ払う。しかし、大振りなその攻撃に今の俺が当たるはずもなく、一瞬早く、しゃがんで回避する。

結果的に空振りに終わった銀の攻撃だったが、伊達にアリーナランカー上位者なわけではなく、その次の瞬間にはアーツを発動させていた。

「悪いが、これで沈んでもらうぜ……!!」

ーアーツ発動ー

「崩天裂衝！！」

そう叫びながら俺に迫りくる銀。確かに、防御力の低い錬装士である俺が、重槍士である銀のアーツを喰らってしまえば、ダメージをある程度蓄積させている俺にとっては、致命傷となってしまうだろう。

けど、悪いな。

「そうしてくるって事は、予想してたんだよ・・・！！」

そう呟き、俺もまたアーツを発動させる！！このアリーナバトルには、通常のフィールドには無い特殊なシステムがある。

アリーナ特有のシステムである、反撃システム。アーツを発動した相手の直後に、自身もアーツを発動させれば、連撃と同レベルのダメージを相手へと喰らわすことのできるシステム。しかし、それを実際に行うには、瞬時に相手のアーツ発動に合わせて、こちらもアーツを発動させなければならず、熟練者でもなかなかできる者はいないらしい。だが、今の俺にとっては、銀の攻撃が当たる前にアーツを発動させることなど、そう難しいことじゃない・・・！！

『反撃！！』

「なに！！」

アリーナバトルはこれが初めてであるはずの俺が、上級者でも難しい反撃を発動させたことに、再び驚愕の表情を浮かべる銀。しかし、すでに発動している反撃により、銀のアーツはキャンセル。代

わりに、俺の攻撃が、奴の体へと叩き込まれる……!!

「仁王鎚!!」

システムによって繰り出されていく拳打の嵐。その拳打は、銀の体を容赦なく襲い、奴のHPをすさまじいスピードで削っていく。だいたい1/2程度HPが削られた銀は、ようやく俺の拳打の嵐から解放される。そのことに、苦しそうな表情を浮かべながらも、与えられたダメージ以上の攻撃を俺へと叩き込もうと視線をまっすぐにこちらへと向ける銀。けど、悪いな……

「これで、終わりなんだよ……!!」

「ユニークアーツ発動」

「なに!!」

通常のアーツとは違う、このシエルブリット特有のアーツである。これは、SPを消費して打ち出すものじゃない。故に、アーツ発動直後だろうが、問題なく、撃てるんだ……!!

「衝撃のお……」

背中が一番上の羽が、砕ける。その羽は、緑の光へとその姿を変え、光の奔流となり、俺の体を銀の下へと、弾丸のごとく、飛翔させる……!!

未だダメージで動けない銀は、これから俺のやろうとしている攻撃の威力を、感じ取ったのか、必死で回避しようとするが、もう遅い……!!

一瞬のうちで銀の体へと辿り着いた俺は、その拳を突き出して、こ

の技の名前を、叫んだ!!

「ファーストオ、ブリットオオオ!!」

ギユウウン……!!

「く……そ……」

バキイイイン!!

銀の体に叩き込まれたシェルブリットによって奴の体を中心として歪む空間。

そして、悔しそうに一言だけ言葉をこぼした銀は、鏡が割れるような音が響き渡るとともに、揺光と交戦していた、リーダーの龍の元へと吹っ飛んでいく。

「クツ!!何だ、一体!……!!銀!!」

突然交戦していた自分たちの下へと吹き飛んできた”何か”を間一髪回避した龍は、その“何か”が、自身のチームメイトである銀の姿だと気づき、奴へと呼びかける。

しかし、その体は俺の攻撃によって、すでに仮死状態を示す灰色へと染まっていた。

さっきまであれだけ騒いでいた観客たちが、啞然としてしまい歓声が鳴りやむ。

観客たちと同じく、俺が銀を吹き飛ばしたあたりから啞然としていた実況が、ハツとした表情で、マイクを握り、声を出した。

「な、な、な、なんとお……!!アリーナ上位ランカーである銀が、ノックアウトオオオ!!見たこともないアーツで、銀の体を吹き

飛ばしてしまつたああああ!!』

「ウ、ウオオオオオオオオ!!」

実況の声によつて、啞然としていた観客たちが、一斉に叫び、歓声をあげる。

同じく、少しの間信じられないという表情をしていた龍が、「クッ!」と呻き声を上げて、俺のことを睨み、視線で牽制してきた。

「まさか、銀がやられたのか・・・今日初試合のはずの、新人に・・・!!」

「いくらアリーナが初めてだって言つても、別に対人戦が初めてというわけじゃないんだ。そう驚くことでもないだろ?」

驚愕の表情を浮かべる龍へ向かつて俺はそう言い放つ。確かに普通ならばアリーナトーナメント初参戦の新人が、上位ランカーであるこいつらを倒すのはほぼ不可能なのかもしれない。けど、俺は可能だった。それだけだろ。

「カ、カズマ・・・あんた、本当に倒したのかよ・・・」

あれだけ「勝つ」と言っていた揺光が、未だ啞然とした表情でそつたずねてきた。試合前の気合はどこへといつてしまったのだろうか。小さな、しかし驚きに満ちた声でそう聞いてくる揺光へと視線をやり、俺は嘆息しながら、「見ての通りだよ」と、向こうのリーダーは既に気を持ち直していると言つのに、未だ啞然としてそう尋ねてくる我がリーダーへと、少々呆れながらそう答えた。

「グアア!!」

「ハッ！淳ッ！！」

俺と揺光へと注意を払っていた龍が、その叫び声を聞き、視線を俺たちから逸らす。チャンスなんだが、俺自身も、その声がした方が気になったので、視線を声がした方へと向ける。

そこには、右手の剣を振り下ろした格好で、対戦相手である淳を倒したアインの姿があった。

『おおつとお！！銀選手に引き続き、チーム豪の淳選手までもが、チーム破軍のアイン選手によって、打ち破られたあ！！』

「馬鹿な・・・淳までもがやられたというのか・・・」

先ほどよりも啞然とした表情で龍がそう呟いた。まあ、新人に、チームメイトがみんな倒されれば、啞然としてしまうのも、無理はないか。

「ア、アインも・・・よおし！！この勝負、あたし達がもらった！！」

アインが敵を倒したのを見た揺光が、試合前のテンションへと戻り、そう叫んだ。状況は、3対1と、俺たちチーム破軍に有利だ。けど、ここで揺光がやられてしまえば、俺たちの負けとなってしまう。

「油断するなよ、揺光。お前が負ければ、俺たちの勝利に意味がなくなるんだからな。」

「分かってるよ・・・さて、それじゃあ、あたし達も決着を着けようか、龍!」

「クツ! お前を倒せば、俺たちの勝利なんだ!! 悪いが、負けるわけにはいかん!!」

そうお互いに叫ぶと、双方ともに己の武器を相手へと振るう。しかし、俺たちの立て続けの勝利によって、調子が上がっている揺光とは反対に、龍の方は、仲間二人が倒されたという精神的なダメージが大きいのか、その動きにさつきまでの精彩はなく、揺光に押されていく。

「クツ!!! こ、こんな所で!!! 私は!!!」

「あたし達が、勝つんだあ!!!」

ーアーツ発動ー

「無影斬!!!」

龍のアーツが発動し、揺光へと勝負をかけた。しかし・・・

『反撃!!!』

「ツ!!! 馬鹿な!!!」

龍のアーツに、奇跡的なタイミングで揺光がアーツを発動させた。単なる偶然だったのか、それとも揺光の執念によるものなのかは分からないが、それによって、揺光の反撃が成功する。

「疾風!!」

「私の・・・負けか・・・」

揺光が自身に迫ってくる様を見て、そう呟いた龍。しかし、その表情はなんだか満足したような表情だった。

「滅双刃!!」

「グアアアアアア!!」

揺光の反撃が成功し、龍の体が空中へと吹き飛ぶ。そして、地面へと落ちた龍の体の色は、灰色へと染まっていた。

「勝・・・った・・・」

アーツを終え、地面に降り立った揺光は啞然としながらそう呟く。勝ったことが認識出来ていないようで、ボーっとしたままだ。つたく・・・

「おめでとう、揺光。お前の勝ちだよ。」

俺がそう言うと、頭を俺の方へと向け、しばらく啞然としていたかと思ったら、いきなり笑顔になって、俺へとジャンプしてきた。

「うお!!」「勝ったあ!!」「っ!!」

『・・・ハッ!し、試合終ー了ー!!な、なんとなんとお!!!勝利したのは、初参加の、チーム破軍だあ!!!』

第二十五話（後書き）

どうでしたでしょうか？

自分の家のパソコンと少し勝手が違いますが、家のよりもかなり性能がいいので、結構スムーズに書けました。

それと、ついさっきアクセス数を確認したところ、なんと、10万アクセス突破、

および読者数が、1万人突破しました！

いやはや、こんな作品を多くの皆様に読んでいただいとるとは、感謝の言葉しかありませんね。

そこで、記念作品を書こうかなって思ってるんですが、人によっては、「そんなことより、本編進める！！」と言う人も多いと思いますので、アンケートを取りたいと思います。

期限は、5月1日までです。

それでは、今後もよろしくお願いいたします。

第二十六話（前書き）

どうも、少し投稿が遅れました。

大学の授業が始まり、部活も本格的に始まってしまい、予想以上に時間がとれなかったため、更新が遅れました。

正直な話、大学で部活など全くやりたく無いのですが、一応スポーツ推薦で入ってしまったので辞められなく・・・

とりあえず、これから大幅に更新遅れたりすることもあると思いますが、更新は辞めませんので、これからもよろしくお願いします。

第二十六話

SIDE一馬

「ふう・・・結構キツかったかな。」

アリーナで勝利した俺達は、その後解散となり、アインと揺光はそのまま観戦、俺はキリカと会ってから、今日は落ちた。

流石に、もう眠気が限界なんだよ、マジで・・・久々に、極限状態に近い、あの周りの速度が遅くなるくらいの集中力を発揮したから、余計に眠くなってきたし。

元々アレをやった後は、異常なほど疲れが出てくるから、それもあって既に倒れそうなくらいに眠い。

幸いなことに、今日は日曜だ・・・しかも、いつも俺の安眠を乱してくる智香は、ただいまアリーナ観戦中。よって、俺の眠りを妨げる者は居ない・・・

「寝よう・・・もう、明日の朝くらいまで爆睡しよう・・・」

頭がボーツとして、フラフラと足下がおぼつかないけど、ベットに倒れ込むようにして着地。ああ、気持ちいい・・・ベットの寝る前のこのひんやりとした感じが、凄まじいほどに気持ちが良い・・・

心地よいその冷たさに、目を閉じて眠ろうとしたその時、ベットの脇の棚に置いていた携帯が、マナーモード独特のブーブーというバイブ音で、着信が来たことを告げる。

ベットに顔を埋めたまま、手探りで携帯を探す。ようやく携帯をつかみ、誰からかと言う事を見ずに電話に出た。

「……もしもし？」

『あ、もしもし、一馬君？』

「……志乃さん？どうしたんですか？」

顔を埋めていたシートから起き上がる。携帯から聞こえてきた声は、この前The worldで会った志乃さんからだった。

「どうしたんですか、志乃さんから電話かけてくるなんて、珍しいですね。いつもならメールか、家の方からかけるのに。」

『珍しいなんて、そんなこと無いと思うんだけどな。まあ、それよりも、一回戦突破おめでとう。見てたよ、一馬君達の戦い。あんなに強かったんだね。改めて驚いちゃった。』

志乃さんからのお祝いの言葉に、「ありがとうございます。」と答えながら、俺は志乃さんがアリーナバトルを観戦しに来ていたということが、正直意外に思えた。

志乃さんは、別にああ言うバトルとかは、嫌ってはいなかったとは思うけど、別にわざわざ生で行ったりするほど好きでは無かったと思うんだけど……

「わざわざそのために電話してくれたんですか？」

『えっと、もしかして迷惑だったかな？』

「いえいえ、そんなこと無いですよ。ただ、ちよつと意外に思っただけです。志乃さんて、ああ言うアリーナバトルとか、わざわざ見に来るイメージとか余りなかったですから。」

『そんなこと無いよ？私だって、偶にアリーナの試合とか見に行ったりはするよ？それに、一馬君達の初試合だもん。実際に見に行く価値だってあるでしょ？』

どうだろうか・・・俺達の試合以上に見応えのある試合など、それこそ数多くあると思うし、わざわざ見に来て貰うほどの価値があったかどうかは正直分からないんだが・・・

「価値があつたかは分かりませんが、そう言つて貰えると嬉しいですね・・・それで、そのために、わざわざ電話を？」

『なんか引つかかるな、その言い方・・・でも、確かに他のようもあるんだけどね。一馬君、今度の日曜日って何か用事あるかな？』

「日曜日ですか？いえ、何もありませんよ。普通にゲームしようかなって思ってます。」

ここ最近はずっと智香に付き合つて行動していたためか、やけに濃いイベントだとか、バトルばかりだったからな。ここらで一息入れたいし、久々にのんびりとキリカと共にロストグラウンド巡りでもしようかなと思つている。

『あ、じゃあ、ちょっと会えないかな？なんだか私達のギルドマスターが一馬君に会つてみたいらしいんだけど・・・』

「志乃さん達のギルドマスター、ですか？確か黄昏の旅団つて言うギルドですよ？俺全く面識無いから会いたいつて言われても理由が分からないんですけど・・・」

なんでも仕様外のアイテム、キ・オラザ・トワイライト黄昏の鍵と言う物を探しているらしい。

・・・正直、仕様外の代物って言ったら、カイトが持っていた腕輪や、アウラの存在位しか思いつかないけど、R:2にも、そう言った管理の及ばない代物も無い訳では無いと思う。志乃さんの所属するギルドはそう言ったアイテムを探し求め、ゲームを楽しんでいるらしい。

そんなギルドのマスターが、俺なんかに会いたいなんて、何のようだろう？

『実はね、今日アリーナの試合をオーヴァン、ギルドマスターと一緒に観戦してたんだ。それで、一馬君達のことを見ていたオーヴァンが、「是非一度直に会ってみたいから、連絡を取ってくれないかって言われてね。それで、もし都合が良ければ良いんだけど、一度会ってくれないかな？もちろん、時間はあんまり取らせないように私からもオーヴァンに言うし、無理だったら構わないんだけどね？』

別に、ただ会うだけなら構わないし、志乃さんにそこまで遠慮されることでも無いよな。

「いいですよ？会って話すだけなんですよ？特にこれと言った予定もあるわけでは無いですし、志乃さんの頼みを断るのもなんですしね。」

『本当？ありがとうね、一馬君。それじゃあ、後日会う時間と場所の詳細をメールで送るね。それじゃあ、疲れてるだろうし、今日はこのくらいにしてまた会うときに色々とお話しよう？』

「分かりました。それじゃあ、また。」

『うん、またね、一馬君。』

その言葉を交わして、通話を終える。携帯を閉じた俺は、今度こそ眠りにつこうと、背中からベットに倒れ込み、目を閉じた。

SIDE志乃

「会ってくれるって、一馬君。」

「そうか。それは良かった。」

一馬君にかけていた携帯を閉じた私は、再度HMDを着けて、すぐそばにいた一馬君に会いたいと言った張本人であるオーヴァンに彼からの返答を伝えた。

私達、黄昏の旅団のリーダー、オーヴァン。彼は、その右腕を巨大な棺桶のような物で覆い、仕様にはない異形のPCボディを所持している。

「ところで、なんで急に一馬君と会いたいなんて言い出したの？団

員勧誘なら、この前ハセヲが入団したばかりじゃない。」

「少し、彼が気になってな。別に勧誘するつもりはないさ。」

そう言っつて、いつものようにどこか遠い所を見るようにして微笑む。彼がこういう顔をしているときは、大抵何かを探しているか、欲しい物が見つかった時だから、彼が言う一馬君の勧誘はしないと
言う言葉も、余り信用できないんだよね。

私個人としては、一馬君が入団することに反対するつもりはない。けど、今現在の彼自身の事を考えると、余り勧誘することには賛成
出来ないんだよね。

いくら推薦が決まっていると言っつても、一馬君は受験生。ただでさえアリーナトーナメントに参加していて大変だろうそんな彼に、旅
団の時間が掛かる仕事を頼んだりなんて出来ないもんね。

「本当に勧誘しない？」

「ああ。しないさ。ただ、少し確かめたいことがあるだけだからね。」

オーヴァンはそう言っつて、ギルドの@ホームに向かって歩き出す。私も、そんな彼の後に続いて歩き出す。

「ねえ、確かめたい事っつてなに？」

「そうだな・・・強いて言えば、彼が持つ、不思議な何か、かな？」

「また、そうやってはぐらかすんだから・・・」

オーヴァンは、今までまともに質問に答えてくれたことがない。

いつもなんだかよく分からない言い回しを用いて、わかりにくい表現で私達の質問に答える。それに、連絡も無しにギルドを空けたりすることが多いから、おかげで、副団長の私がギルドの事とかを色々やらなきゃいけないようになったりして、少しだけ迷惑。もう少し分かりやすい言葉で答えてくれても良いと思う。何かこだわりがあるのか分からないけど、他の団員のみんなも多分そう思ってるんじゃないかな？

「はぐらかしているつもりは無いさ。実際、俺にもしっかりとした答えがある訳じゃないんだ。ただ、なんだか彼のことやけに気になってね。志乃の知り合いだと言うから、折角だし話をしてみたいと思っただけなんだ。」

「・・・そうなんだ。」

やっぱり、この表情は何かを狙っている時の表情な気がする。私は、オーヴァンに一馬君を合わせることに、少しばかりの不安を感じながら、みんなが待っているホームに向かっていった。

「あ、志乃さん！！オーヴァンも珍しく一緒なんだね！！」

「おお、本当にオーヴァンも一緒なのか。久々に全員集合なのな。しかし、団長が来ないギルドに呆れ、そんなギルドに所属している自分にビククリって感じだな。」

「お、出た、匂坂節！！」

「フフフ。お待たせ、三人とも。少し遅れちゃったかな？」

「そんなことねえよ・・・ただ俺達が早かったただけだ。」

「そう。ありがとね、ハセヲ。」

「べ、別に礼を言われる様な事は言つてねえよ・・・」

「あれ、ハセヲが照れてますよ、師匠!!」

「なっ!!べ、別に照れてなんかねえつつつの!!」

「そう言う事言わなくて良いんだよ、タビー。てか、少し黙ってよ
うな?」

「あ、師匠ヒッドイ!!」

三人の会話に、私は自然と笑顔が浮かんできた。それは、オーヴ
アンも一緒だったみたいで、いつもみたいに、少しだけ口元を歪め
る笑い方じゃなくて、結構ハツキリと分かる笑顔を浮かべた。

「相変わらず元気なようで安心したよ、タビー、匂坂。」

「へへへ!!私はいつでも元気だよー!!」

「心配なら毎回顔くらい見せたらどうだ?まあ、元気なことは否定
しないけどさ。いつも通りだって事だね。」

そう言つて、タビーは元気に、匂坂君はいつもの少し気怠げな感
じでオーヴアンの言葉に同意した。匂坂君は、旅団設立してから少
ししてから入ってきた仲間で、今は獣人族の少女型PCを使つて

新人のタビーの指導係をしてもらってるんだ。タビーの方も、匂坂君の事を師匠って慕ってくれてるみたいだし、順調なのかな？

「・・・本当に、アంతって顔出さないんだな。今まで全然会わなかったし。」

「まあ、俺にも色々と事情があるのさ、ハセヲ。」

そうオーヴァンはさっきまでの自然な笑みじゃなくて、いつも通りのニヤリとした笑みでハセヲの嫌みに答えた。

S I D E ??? ?

彼は、その胸に浮かび上がる感情を抑えつけながらも、眼前でニコニコとしながら、先程まであのアリーナで戦っていた揺光、アインと共に次の試合を観戦しているキリカを見つめていた。

別に、彼女に恨みがある訳じゃない。それどころか、その少女の隣にいる揺光の向こう側である倉本智香が悲しむかもしれないと思う

と、少しだけいたたまれなくなる。

別に自分は、彼女を苦しませたいわけではない。しかし、あの少女を利用することによって、アイツが苦しむと言うのなら、自分はおえて、この手を染めよう。

そして、悲しむ彼女のことを自分が癒すんだ。

アイツではない、この俺が!!

「……………」

「いや、今はダメだ……アイツが、もっと苦しまなきゃ、お前だって楽しくないだろ……?」

「……………」

「ああ、そうだ……思いっきり苦しめるために、今はまだ……」

そう、今ではない。もっと、アイツが一番苦しむ状況を作り出さなければならぬし、こんなところでもし手を出せば、隣にいる揺光にすぐ気づかれてしまう。

それに、今はヤツがいない。ヤツがいるときでは無ければ意味はないし、それにヤツを苦しませるには、もう少し時間がある……

「……………」

「焦るなよ……もう少しで、お前も楽しめるんだ……ク、ククク……」

昏い笑みが、浮かぶ。その笑みは、もし今笑顔でいる揺光達が見れば、一瞬で彼のことを警戒し、出来ることなら遠ざかろうとするくらい、不気味な笑み。

しかし、その笑みを浮かべる彼自身は、酷く愉しそうに嗤う。
今の彼の頭の中には、憎む男、カズマが彼の手で引き起こされる悪夢によって苦しみ、嘆く姿しか無かった。

「もうすぐ・・・もうすぐだ・・・」

まるで呪詛のように、彼はずっと「もうすぐだ・・・」と呟いていた。

「もうすぐ・・・お前の、お前に、俺が・・・!!」

そう言って、顔を手で覆い、昏い笑みを浮かべ、ただただ自分が彼へと下す仕打ちを想像していた。

その彼の身体から、黒い、不気味な泡が、ポコリツと浮かび上がる。その泡はまるで、彼と共にこれから起こる出来事を想像して嗤っているかのように音を立てた。

そして、その泡と呼応するかのように、キリカ自身気づかないうちに、彼女の身体からも、白い泡が浮かび上がり、自身達を見つめる者達を睨み付けるように波打つのだった。

第二十六話（後書き）

なんか、中途半端というか、クオリティが落ちたかな・・・？
まあとにかく、そろそろ一回目のターニングポイントへと突入して
いこうと思っています。

前書きにも書きましたが、これから忙しくなってしまうので、
更新が遅くなってしまうですが、どれだけ遅くなっても更新は続け
ますので、これからもどうかよろしくお願いします。

第二十七話（前書き）

どうも、ジーユーです。

今回もちよっとグダグダかな？

けど、そろそろ展開も一気に変わっていくので、どっかこれからも寛大な心でよろしくお願いします。

第二十七話

SIDEカズマ

「さて、ここら辺な筈なんだけど・・・」

志乃さんから、ギルド黄昏の旅団の、ギルドマスター、オーヴァンという人が俺に会いたいと言う連絡のあった日から、一週間。特にこの数日間、変わったことが起きることなく、いつも通りに過ごしていたら、いつの間にか約束の日曜となっていたため、俺は志乃さんから指定された、ロストグラウンド、アルケ・ケルン大瀑布へと来ていた。

ここには以前キリカと共に来ていたため、別に懐かしむほど月日は経っていないのだが、何となく懐かしくなり、早めに来てしまったのだ。

ここは、大瀑布と名がつくだけのことはあり、日本じゃまず見られない、何本もの滝が落ちていく様は、迫力があって、俺的には結構お気に入りの場所だ。人によっては、偽物の、ただのCGじゃないかと言う人もいるかもしれない。けど、これだけのものを直に見れるんだから別にCGでも構わないと俺は思っただけだな。

そんな風に考えながら、迫力のある瀑布を眺めていると、プラットフォームから、光のリングが現れ、そこから3人のPCが現れた。

一人は、見慣れた白い呪療士である志乃さん。二人目、三人目は面識のない、男性型のPCだ。一人は、黒い軽装で、銀髪。このアルケ・ケルンを物珍しそうに見ている事から、多分だが初めて間も

ない初心者だと思う。で、三人目の男は、何というか、異様な男だ。左腕を覆うあの棺桶みたいな拘束具が何かみたいなのもそうなんだが、俺には全体的な雰囲気、なぜだかR：1の時に、俺達のバツクアップを務めてくれていた、ヘルバを思い起こさせた。

いや、PCの性別、外見さえも違うのに、何でそう思うのかは俺自身なんと言って良いのか分からないんだけど、何というか、昔にヘルバから感じていた、得体の知れない感じと言うのか、とにかくそんなところが、俺にあのハツカーの事を思い起こさせたんだ。

俺がそんなことを考えていると、志乃さんが、「お待たせ」と言っ
つて、俺の下へと歩いてきた。

「ゴメンね、少し待たせちゃったかな？」

「いや、俺がちよつと早く来すぎちゃったただだから、気にしないで
良いですよ。それより、その二人は？」

「そつか。カズマ君は初めて会うんだもんね。それじゃあ、紹介す
るね。彼は、ハセヲ。最近旅団に入ってくれた新人なんだ。まだ初
めて1ヶ月経ってないから、フィールドで見かけたら、よろしくね。」

「・・・どうも。」

そつぽ向いたまま、小さく頭を下げ挨拶してくるハセヲ。そんな
彼に、「こちらこそ、よろしく。」と言って、一応挨拶を交わす。
俺より年は上なのか、下なのか・・・ネットゲームだから、そう言
った事は分からないけど、なんだか、この人、態度というか、雰
囲気が、子供が初めて会う人を警戒しているみたいに見えるな・・・

「それで、こっちが私達のギルドマスター、オーヴァン。今日、カズマ君に会ってみたいって言ってた人なの。」

「初めまして。ギルド黄昏の旅団のギルドマスター、オーヴァンという。この前の試合、拝見させて貰ったよ。中々良い試合だった。」

「えっと、どうも。それで、俺にどういった用件でしょうか？」

正直な話、余りこの人と会話を重ねたくない。なんだかこの人と話していると、何かを探られているような感じがしてならないんだよな……

「用件、と言うほどのものではないんだがね……ただ、あれだけの戦いが出来るプレイヤーと話してみたいと思ってね。志乃に頼んで貰ったんだ。」

「はぁ……」

……やっぱり、何か探られてる感じがするな……

「なあ、なんでオーヴァンはアイツに会いたいなんて言い出したんだ？」

「さぁ……私にも良く分かんないや。ただ、カズマ君に興味があるって言われただけだしね。」

志乃さんと、ハセヲの会話が少しだけ聞こえるけど、大した情報はないみたいだな……正直、俺自身がその理由を一番聞きたいんだが……

「・・・君は、黄昏の鍵キー・オフ・ザ・トワイライトというものを、知っているか？」

は？なんだ、いきなり・・・

「・・・名前くらいは、知ってますけど・・・それが何か？」

「私達は、それを探していてね・・・君は、あると思うかい？」

「・・・なんなんだ、マジで。何が言いたいのか、よく分からないというか、本当にこの人と話していると、イヤになるくらい、ヘルバを思い出すな・・・」

「ない、とは言い切れないでしょうね。このゲームに限っては。」

「ほう・・・」

「The worldには、普通のゲームにはない不思議な力みたいなものがある。もし、それがあなたの言う黄昏の鍵キー・オフ・ザ・トワイライトだって言うのなら、無いなんて言い切れませんよ。ま、あるという保証もありませんがね。」

俺がそう言うと、オーヴァンは、なぜだか凄まじく嬉しそうに、ニヤリと妖しく笑った。

「・・・やべえ、ミスったかもしれない・・・」

「そうか・・・ところで、君はギルドに興味はあるかな？」

「オーヴァン。やっぱり誘ってるじゃない・・・」

志乃さんが、どこか呆れながら、オーヴァンにそう言った。対して、オーヴァンは、「すまないな。」と言いながらも、全く反省しているようには見えない。

「というか、

「ギルド、ですか？興味無くはないですけど、今はそれよりも、友達との約束があるんで、今は何とも言えませんけど……」

「もちろん、分かっているつもりさ。君は今、アリーナトーナメントがあることも。だから、すぐに返事を貰おうとは思っていない。いつでも良い。時間が出来たら、私か、志乃にメールをくれ。今日は会えて良かった……」

そう言って、オーヴァンは踵を返して、プラットフォームへと歩いていく。俺は、そんな彼に、「あの……」と、思わず声をかけた。

「なんで、俺なんかをギルドに？正直、あなたの言うキ・オブ・ザ・トワイライト黄昏の鍵になんて、全然興味無いんですけど……」

知っているのと、興味があるのでは全く違う。俺は黄昏の鍵になって、全く興味は無い。なのに、何で俺なんかをギルドに誘うのか、聞いてみたくなった。

「……そうだな、君にも素質を感じたんだ。そのハセヲとは、また違う、君だけの素質を。」

そう言って、オーヴァンは転送されて行った。

素質……？何のことだよ、それ……

「なんか、意味分かんない人だったな・・・」

オーヴァンが去っていたプラットフォームを見つめながら、俺はそう呟いた。

S I D E 志乃

「全く、オーヴァンたら、勧誘しないって言うときながら、やっぱり勧誘するんだから・・・ゴメンね、カズマ君、忙しい時期なのに。」

「いえ、別にいいですよ。オーヴァンにも言った通り、今は揺光の方を優先させなきゃいけないから、どうせ答えはすぐに出せませんし、考える時間がありますから。」

そう言って、カズマ君は、気にしてないと、言ってくれた。本当に、オーヴァンはすぐに興味がある人のことを誘おうとするん

だから・・・

「なあ、俺そろそろ帰ってもいいか？特にやることも無いみたいだし、ホームに戻りたいんだけど。」

そう言っつて、ハセヲがなんだか不機嫌そうにしながら、プラットホームを指さした。うーん、私もなんでオーヴァンがハセヲを連れてきたのか分からないけど、折角だし、もう少し話したら良いんじゃないかな？

「そんなこと言わないの。折角だから、カズマ君から色々聞いてみたら？カズマ君、ハセヲよりもこのゲームの事詳しいし、もしかしたらマルチウエボン練装士としての戦い方だって教えてくれるかもよ？彼も練装士だしね。どう、カズマ君？」

「えっと、俺は別に構わないですけど・・・」

「じゃあ、決まり！これから三人でクエストにでも行こう？」

「おい、俺はまだ行くなんて「行かないの？」・・・分かったよ。行くよ！！」

そう言いながら、まるですねた子供みたいに、プラットホームまで歩いていくハセヲ。そんな彼の姿に、思わず笑みが浮かぶ。

「フッフ、それじゃあ、私達も、行こうか、カズマ君？」

「あ、はい。分かりました。」

ハセヲと違って、なんだか余裕な感じで歩いていくカズマ君。や

つぱり、同じ男の子でも、なんだかカズマ君の方が、大人な感じがするよね。
そう思いながら、私も二人の後に続いて、プラットフォームへ歩いていった。

一回マク・アヌへと戻ってきた私達は、すぐにパーティーを組んで、カオスゲートからフィールドへと転送された。

レベルはこの中で一番レベルの低いハセヲに合わせてあるから、私やカズマ君にとっては少々味気ない感じがするけど、久々にカズマ君と一緒にクエストに出れるから、私的には、結構嬉しいんだ。それに、ハセヲのレベルアップにもなるし、カズマ君は結構面倒見が良いから、ハセヲとも結構仲良くなったように見えるし、一緒にクエストに出てよかったかな。

「志乃さん！！ハセヲの回復頼む！！ハセヲ、一旦下がれ！！俺と交代だ！！」

「わ、わかった！！」

カズマ君が私達にそう指示して、ハセヲが戦っていたモンスターへ攻撃を仕掛ける。

その間に、ハセヲは私がいる後方へと息を絶やしながら下がってきた。

「リップス！・・・はい、これで大丈夫。どう、ハセヲ？カズマ君は。」

「

「ハア、ハア・・・どうって言われても・・・強いッてことぐらいしか分かんないし・・・あと、なんだかいつもと違って、何か安心出来るって言うか、集中しやすいって言うか・・・」

そっか。やっぱり、カズマ君と来て正解だったみたい。だって、いつもならこんなにハセヲは、素直に相手の事なんて褒めないもの。カズマ君の事、結構認めてるって事かな、ハセヲは。

「そっか。それじゃあ、早くカズマ君のこと手伝ってあげないとね。ハッキリ言っちゃうと、このクエスト、ハセヲのレベルに合わせてあるんだから、カズマ君にやらせてちゃ、ダメだよ？君の腕を上げるために彼は手伝ってくれてるんだから。」

「ッ！！分かってるよ！！」

そう言っただけで、カズマ君は戻ってくるハセヲに気がついてたみたいで、絶妙なタイミングでモンスターを吹き飛ばすと、ハセヲとポジションを変えた。

その行動を見るだけで、カズマ君がどれだけの腕を持っているのかも、結構分かったやう。だって、普通モンスターと1対1で戦っている時に、後ろから仲間が来ている事なんて分からないと思うんだ。それだけ余裕を持って周りを見ながら戦う。

言葉にしたら簡単に聞こえるかもしれないけど、後衛で戦っているあなたも、直接モンスターと戦いながらそんな事が出来る人って、多分上級者でも中々いないんじゃないかな。

私がそんな事を考えていると、いつの間にかモンスターは全てハ

セヲとカズマ君によって、倒されていた。それにしても、早いな。カズマ君の実力からしたら、当然だと思うけど、今回モンスターと戦っていたのは、ほとんどがハセヲ。ハセヲ自身に、アツサリとこのフィールドのモンスターを倒せるほどの力は、ハッキリ言っちゃうと、まだ無い。

まあ、ついこの前はじめての初心者だから、仕方ないと思うけどね。

そんなハセヲ主体でモンスターと戦っていたのに、こんなに早く戦いが終わるんだから、どれだけカズマ君がハセヲを上手く誘導しながら戦っていたのかと言う事がよく分かるね。

私がそんな事を考えていたら、カズマ君が、「やったな、ハセヲ。」と言いなながら、シエルブリットを装備したままの右腕を突き出した。ハセヲは、カズマ君が何をしたいのか最初は分かってなかったみたいだけど、ちょっとした後には、なんだか恥ずかしがりながら、カズマ君の拳に、軽く剣をコツンツと当てて、照れくさそうに、すぐにそっぽを向いちゃった。

私はそんな二人を見ながら、「男の子なんだね。」と思わず呟きながら、嬉しくなっちゃって、笑顔がつつい零れちゃった。なんだか、ハセヲとカズマ君が、仲の良い兄弟みたいに見えたんだ。そんなわけ、無いのにな。

そんな事を考えながら、私は照れくさそうに笑みを浮かべているハセヲと、そんなハセヲを笑って見ているカズマ君達の下へと歩いていった。

第二十八話（前書き）

はい、二十八話目でございます。

なんやかんやで、もうすぐ三十話に行こうとしているこの小説。

相変わらず展開遅いですが、ここから一気に加速させていくつもりなので、

これからもよろしくお願いします！

第二十八話

SIDEキリカ

『Winner、チーム破軍!!』

実況の人の宣言と共に、観客席の人たちが一気にわき上がった。揺光さん達が、一回戦を終えてから、今日で2週間くらいが経って、先週行われた二回戦は、一回戦の時よりも、相手が強く無かったみたいで、難なく揺光さんが勝利したんです。

それで、今日は揺光さん達の三回戦の試合が行われました。

結果は、完全勝利!! 試合時間も、5分くらいしかかかって無くて、揺光さん達はほとんど無傷で勝っちゃったんですよ!!

「おい、あいつらすごくない?あのチーム鬼武者って、上位ランカーで、かなり腕はあるはずなのに、ほとんど無傷ってやばいだろ・・・」

「いや、それを言ったら、一回戦に、あの豪に勝ってるんだぜ?普通新人が勝てる相手じゃねえって。それに、二回戦の相手だって、弱くはなかったのに・・・あいつら、マジで宮皇なっちまうんじゃないか?」

私の前で観戦していた人たちが、そう言って揺光さん達のことを見つめています。私は、自分が褒められている訳じゃないのに、なんだか凄く嬉しくなりました!!

そんな風に、ニコニコとしながらアリーナの裏にある、路地で私は一人でいました。気分も良かったので、折角だし、”この子”と

二人つきりでいたかったから。

「今日も揺光さん達、本当に凄かったね！！相手の人たちも、凄く強いつて話だったのに、あっという間に倒しちゃうんだもん！！」

” - - - - ! ! ? ”

「フッフ、ありがと。でも、私は大したことしてないよ？凄いののは揺光さん達だもん。私は、ちょびつとだけ揺光さん達のお手伝いをしただけ。」

” - - - - ”

「そうだけど・・・でも、もう少しで揺光さん達は宮皇なんだもん！！私達も、精一杯手助けしよう！！今は、それが一番楽しいしね！！」

そう二人で話していると、メールボックスに突然一通のメールが届きました。

「あれ、これって揺光さんから？なんだろ・・・」

そう思ってみてみると、そのメールには、「久しぶりに、みんなでクエストに行こう！！」と書いてありました。

それだけじゃなくて、「その後に、良い感じのロストグラウンドをカズマが、見つけたらしいから、クエスト終わったら行こうぜ！！」ともあります！！

最近、揺光さん達のアリーナトーナメントにつきっきりだったので、余りロストグラウンドには行っていなかったもので、とつても

嬉しくなり、すぐに返事を書いて、送信します!!

「えっと・・・もちろん、行きます!!この後、楽しみにしてますね・・・っと!!これでよし!!ああ、楽しみだなあ!!」

久々に、みんなで探検です!!

” - - - ? ”

「そうよ?久しぶりに、みんなで冒険!!どこに行くのかな?今から楽しみだね!!」

” | | | | | ! ! ”

「フッフ、それもそうだよね。みんなといられば、どこだって楽しいもんね!!」

私が、あの子の言葉にそう頷くと、「ちよつと、いいかな?」と突然後ろから声をかけられました。

声をかけられた方を向くと、そこには見知らぬ一人のPCが立っていました。

「君さ、カズマ達と知り合いなんだろう?ちよつと、話さないか?」

「えっと・・・あなたは?」

そう言つて、私に手を差し伸べてくる。男性型のPCで、良くあるネット上での美形キャラの容姿を持った人。そんな人、ここじゃよく見かけるんですけど、なんだかこの人からは、イヤな感じがして、その手を握ろうとは思えませんでした。

「ああ、自己紹介がまだだったね。俺は、フリード。カズマにちょっと興味があつてね。それで、君がカズマの知り合いだって聞いて、少し話しを聞いてみたくなつたんだ。」

そう笑顔で言ってくるフリードさん。特に怪しく見える訳じゃ無いんですが、やっぱりどこか信用できません。それに……

” - - - ! ! ”

(うん . . . 分かつてる。)

「えっと、すみません。この後ちょっと用事があるので、また今度でいいですか?」

”この子”も、この人には凄く警戒している。いつもならば、初対面の人に対してここまで警戒を表さないこの子が、これほどまでに警戒しているのを感じて、私はこの人の誘いを断った。

「そう . . . わかつたよ。」

そう言つて、アツサリとフリードさんは、引き下がった。杞憂だったのかな?と思ひながら、私は踵を返して、カオスゲートへと向かおうとしました。

「本当は、大人しくついて来てくれるのが、一番良かったけど . . . まあ、いいや。」

「え?」

” - - - - - !!!”

フリードさんのその言葉に、振り返ろうとした瞬間、私の目の前は、闇に包まれてしまった。消えゆく意識の中、あの子の声が、聞こえるけど、私は指一本動かさません・・・

「カ・・・ズマ・・・さん・・・」

S I D E 揺光

初勝利を飾った一回戦から、今日で2週間ちょっと。ついこの前まで、新人扱いされていたあたし達も、二回戦、三回戦と勝利して、遂に明日、準決勝に進出することになった！！

それで、日頃あたし達のバックアップとして色々と手伝ってくれているキリカへのお礼も兼ねて、みんなでクエストに行くことにし

たんだ。キリカも、賛成してくれて、折角だから、クエストが終わった後はどこかのロストグラウンドでゆっくりしようって決めてたんだけど……

「キリカと連絡が取れない？さっきメールが返ってきたばっかなんだろ？」

「そうなんだけどさ……さっきから全然連絡が取れないんだよ。メールも全然返ってこないし……ログインはしてるみたいなんだけどさ……」

待ち合わせの時間になっても、現れないキリカ。いつもだったら、約束の時間の15分前くらいには必ずいて、遅刻なんてしたことなかったのに……

「とりあえず、もう一度連絡を……ん？」

「?どうしたんだよ、カズマ？」

「いや、メールが来たんだよ……八咫から？えっと……!!」

突然届いたっていうメールを読んでいたカズマが、何か信じられないものを見たかのように、驚愕の表情を浮かべた。

「……揺光、悪い、ちょっと用事が出来た。」

メールを読み終えたカズマは、そう言って広場から急ぎ足で、傭兵区画の方へと歩き出した。あたしは、突然のカズマのその言葉に、一瞬唖然となっっちゃったけど、すぐにアイツの後を追いかける。

「な、なんだよいきなり・・・キリカのことはどうするんだよ!!」
「大丈夫だよ。今向かっている場所は、キリカの事について何か知
っている筈のヤツの所だからな。さっきのメールにそうあった。」

「な!!だ、だったら、あたしも一緒に行くに決まってるだろ!!
なんであたしを置いて行こうとするんだよ!!」

「八咫・・・メールをくれたヤツが、俺一人で来るようになって言っ
て来たんだよ。それに、これから行くのは、@ホームだ。ゲストキ
ーもない揺光じゃ、入れないだろ?だから、ここで待っていてくれ。」

そう言って、歩く速度を上げるカズマ。

なんだよ、それ・・・ふざけんなよ!!あたしがそんな事で、大人
しくするはずないだろ!!

上等じゃないか!!揺光として、キリカの居場所がわからないなら
・・・!!

SIDE 智香

「こつちから、居場所を突き止めてやるよ!!」

装着していたHMDを取っ払って、あたしは、窓から一馬の部屋
へと侵入する。ネットで情報が得られないなら、リアルで、一馬に
ついて行ってやるだけだ!!

「一馬！！」

「うお！！ち、智香！！お、おまえ、何だよ、いきなり・・・」

あたしが窓から大声で、HMDを着けていた一馬のことを呼ぶと、ビックリしたのか、身体を一瞬椅子の上で跳ねて、あたしの方へと振り返る。

「ゲームじゃ、キリカの情報は何だろ？だったら、一馬のところで、情報を得た方が良いじゃんか。」

あたしがそう言うと、一馬にしては珍しく、ポカーンとした表情であたしの顔を見つめてきた。そして、頭に手をやると、ハア・・・と溜息をついて、あたしを呆れた表情で見ってくる。

「ホント、お前のこういう時の行動力って、ある意味尊敬するは・・・まさか、直接俺の部屋まで来るとは思わなかったよ・・・分かった。今ディスプレイの方に、カズマの視覚を移すから、こっちは来いよ。」

そう言うと、HMDを外して、パソコンの画面を操作しだす一馬。その間にあたしは一馬の隣に座る。

ちよっただけ待っていると、パソコンの画面に、カズマの視界が映し出された。

「っと、出来た。さて、これからキリカの情報をくれるヤツの所に行くわけだけど、頼むから静かにしてくれよ。正直、こういう行為って、あんまり褒められたものじゃないんだからな。」

「分かってるって。安心しろ、ちゃんど黙ってるって！」

あたしがそう言うと、一馬は、「ホントに分かってんのかな・・・」
と言いながら、カズマを操作して、ギルドの中へと入っていった。

SIDEカズマ

予想外の事態があったが、俺はキリカについて話があると連絡してきた八咫の下へと来ていた。

「来たか・・・カズマ。」

「ああ。で、メールにあった、キリカについて話したい事って何だよ、八咫。丁度今そのキリカを捜索中だな。居場所を教えてくださいすると助かるんだけど。」

「何・・・？なら、今から調べてみよう。それと、君を呼んだ訳についてだが、私に、あのキリカというPCについての情報をくれな

いか？」

「情報・・・？情報つて、それなら俺なんかよりも、お前の専売特許だろ？て言うか、なんでキリカの情報なんか欲しがるんだよ。あいつはただドジなだけのプレイヤーだぜ？特にこれと言ってお前が興味を持つような存在じゃないと思うんだが・・・」

・・・なんで、コイツがキリカになんて目をつけるんだ？コイツが興味あるのは、確か普通ではない、The worldの不思議な現象とかについてだろ？なんで一プレイヤーのキリカについてなんて聞いてくるんだ・・・？

「フム・・・そこから説明することにしよう。まず、彼女はただの一プレイヤーでは無い可能性がある。」

「何・・・？」

キリカが、ただのプレイヤーじゃない・・・？

「どういう意味だ、八咫・・・キリカが、ただのプレイヤーじゃないって・・・」

「詳細については、今は説明出来ないが・・・簡潔に言つと、PC名キリカの情報量が、正規と比べ、異常な数値を示していることが最近になって判明した。彼女自体の行動に関しては、何の不審な点も見あたらないので、彼女と親交の深い君に、直接彼女のことを聞いてみたくてね。」

「キリカの情報量が、異常・・・？チートでもしてるって言いたいのかよ！！」

(おい、ちょっと、いきなり大きな声だすなって!! アイツにはれるだろうが!!)

(あ!!ゴ、ゴメン・・・つい、頭にきて叫んじゃった・・・)

側でいきなり大声を発した智香の声をHMDのマイクが拾ってしまい、カズマの声として、叫ばれてしまう。

その事に怪訝な表情をしながらも、幸いにも気づかれなかったのか、八咫はそのまま話を続ける。

「・・・?君らしく無い意見だな・・・そんな事で、私がわざわざ君自身に情報を求める訳が無いだろう。これは、チートなどと言った下らない事では無いと、私は考えている。そこで、かつてあの事件を体験している君が彼女と親しいと判明してね。君自身に彼女のことをどう感じたのかを聞いてみたいと思い、連絡したのだが『ピコーンッ!』どうやら、キリカの居所が判明したようだな・・・!」

なんだ?八咫の表情が、変わった・・・?

「これはこれは・・・少々厄介な事になっているようだぞ。」

「!!キリカ!!」

そう言っつて八咫が俺へと見せてきた映像には、何か黒いもので貼り付けにされたようにして気を失っているキリカの姿と、それを見て笑みを浮かべている一人の男性型PCの姿だった。

「八咫!!キリカはどこにいるんだ!!」

「場所は、ロストグラウンド、エルディ・ルー。彼女と共にいるのは、PC名フリード。彼もまた異常なデータ量を持つ者の一人だが・
・キリカとは、情報の種類が違うのか？ハツキリとは特定出来ない。」

そんな事、知ったことか。場所さえ分かれば、それでいい！！

(一馬！！)

「(分かっているよ！！)分かった。恩に着るぜ、八咫！！」

俺はそう八咫へと礼を言うと、@ホームから出て行く。

待ってるよ、キリカ！！今俺達が、助けに行くからな……！！

S I D E 八咫

「やれやれ、相変わらず、ああ言っせっかちな所は変わらんらしいな。」

私は、恐らく彼女達が写っているこのロストグラウンドに飛んで

行くであろうカズマの後ろ姿を見ながらそう呟いた。
PCボディは違っても、彼の後ろ姿は、まるであの時と変わっていないように見えるな。

「八咫様、よろしいのですか？彼を行かせても。」

「構わんさ。彼はこれくらいの事で倒されてしまつような者ではない。我々は、これから起こるであろう事象を観察することに務めればいい。」

「は……」

私はカズマの去っていく姿を横目に、そう尋ねてくるパイへとそう言つて、彼らが来る前に行つていた、The worldの観察へと再び意識を戻した。

そう、彼がこのままただで終わる筈がない。あのカイトと共に、戦いの先頭を駆け抜けた彼が、簡単に終わる筈など有り得はしない。

私は、その時自分らしくない、勘というものが感じている、彼がこれから起こすであろう”何か”を目撃するために、目の前に写る、エルディ・ルールの画面を見つめていた。

第二十八話（後書き）

どうでしたでしょうか？

次辺りに、フリードの正体と、バトルを入れていくつもりです。

このバトルが、今後の鍵になったりするかもしれない・・・かな？

まあ、とにかく頑張っていきたいと思いますので、

こんな駄文ですが、これからもどうぞよろしくお願いします。

第二十九話（前書き）

どうも、ジーユーです。

大学が、忙しい・・・レポートや、発表に時間が取られて、中々良い作品が書けません。

いやまあ、本当に忙しかったら書けないんですけどね。

しかし、ただでさえ低かったクオリティが、更に低くなってしまったような気がします。

まあ、一応書き上げたんで、アップいたします。

それでは、相変わらずこんな駄文でございますが、それで良ければ、どうぞ。

第二十九話

SIDEカズマ

俺と揺光は、八咫のいた@ホームから出ると、すぐにカオスゲートから、さつきアイツに教えて貰ったロストグラウンド、エルディールへと来ていた。

本当ならば、揺光にはタウンに残っていて欲しかったのだが、「キリカが危険な目に会ってんのに、あたし一人で安全な所なんかにいられるか!!」と言って、無理矢理着いてきちゃった。

全く、本当に昔っから、こういう頑固な所は変わらないんだからな、こいつは。

けど、俺の考えが正しければ、これから戦おうとしている敵は、恐らくあの”モルガナ”達と同じ、イリーガルな存在。

さっきの八咫の言動から推測すると、ヤツは今恐らくシステム側の人間として、このThe worldを観察しているのだろう。そんな八咫にさえ、解析出来ない存在である、キリカとフリードというPCは、システムの仕様から逸脱した存在なのだろう。

だとしたら、ヤツにPKされてしまえば、どうなってしまうのかなんて、予想が出来ない。よくてPCデータが無くなる、最悪で、かつての事件と同じ、未帰還者になってしまう可能性だってあるんだ。

そう考えたら、揺光を連れてくるべきじゃないのは、考えなくたって、分かっていたんだが、コイツはリアルの方で、キリカの居場所を俺と一緒に聞いていた。

ということ、俺がもし一人で行ったとしても、後からついて来てしまふ事も考えられたからな。それならいつそ、一緒に行つて、俺が守ればいい。

そう考えて、揺光と一緒にここまで来たわけだが・・・

「こりやまた、不気味なところだよな・・・」

眼前に広がるロストグラウンド、死所 エルデイ・ルー。不気味な暗さが、本当にこれから起こる事を暗示しているようで、不気味な感じだな・・・

「なに弱気な事言つてんだよ！！ほら、あそこに！！」

そう言つて揺光は、黒い何かに身体を縛られ、空中に貼り付けにされたキリカを指さした。

「キリカ！！待つてろよ、今「待て、揺光・・・」なんでだよ！！キリカが目の前にいるのに！！」

「あそこ見てみる。キリカ助ける前に、どうやら倒さなきゃいけないヤツがいるみたいなんだ・・・」

俺はキリカの元へと走つていこうとする揺光を制止して、白い巨木の裏から気配を感じて、視線を鋭くして、敵を見つめた。

「おい、どうした！！誘いに乗つて来てやつたんだ、隠れてないでさっさと出てこいよ！！」

俺が巨木の裏にいる奴にむかってそう叫ぶと、スツと八咫のところで見た映像に写っていたPC、フリードが、不気味な笑みを浮かべながら、現れた。

そのPCボディは、白と金色の装飾品で着飾っており、外見は凄まじく美形に設定されている。

あれは、確か初期設定の時に選べる無料のものじゃなく、C・Cから販売されている有料のPCボディの中でも一番高いバルムンクを模したタイプのヤツであり、かなりのリアルマネーを払わなければ、手に入らない代物だ。多分かなりの金持ちなんだろうな。

けど、せつかくのバルムンクを模した美形顔なのだが、その顔に浮かべる嫌悪感を感じる笑みのせいで、全て台無しになっている。まあ、どれだけ外面を取り繕うと、中身が腐っていれば、自然と外面にも現れるって言う良い例なんだろうな。

「待ちくたびれたぜ。友達なら、さつさと来てやれよな、おい。暇すぎて殺しちまいそうになっちゃただろう？」

あいつはキリカの側まで来ると、俺たちに向かって、まるで知り合いに話しかけるかのように、気安く笑いかけてきた。

そんな奴の態度に揺光は、憤慨した様子で、俺より前に進み出て、あいつに向かって叫び始めた。

「アンタ!!なに気安くあたしたちに話しかけてきてんだよ!!さつさとキリカを離しな!!さもないと、そのニヤケたアンタの顔を、思いつきりぶつ飛ばすぞ!!」

まるでそこいらのごろつきの様な言動に、こんな状況にもかかわらず、俺は苦笑いを浮かべてしまった。

対して、揺光のその言葉を聞いたフリードは、そのいやらしい笑みを浮かべたまま、揺光に対してもなれなれしい口調で話しかけ始めた。

「揺光さん、女の子がそんな口のきき方するもんじゃないと思うよ？でも、そんな君の態度も、人気が出る一因だと思うから、そのままのほうがいいのかな？まあ、とりあえず俺に君を傷つけるつもりはないから、待っていてくれる？大丈夫、すぐにそいつから救い出してあげるからね？そいつのことを殺したら二人でゆっくり話そう？」

おいおい、何なんだよ、あいつは・・・

揺光の自身をけなす言動を聞いていたはずなのに、それを聞いたうえで、俺を倒した後二人で話そうとか言いやがった。しかも、俺から揺光を救うって・・・頭おかしいんじゃないかって思えてきたぞ・・・

「キ、キモ・・・カ、カズマ、なんなんだよあいつ・・・人があいつのこと罵ったのに、笑顔で人のこと誘ってきやがったんだけど・・・しかも、あたしの事救うって・・・」

フリードの意味不明な言動に、揺光も嫌悪感を感じて、俺の後ろに隠れるようにして下がってくる。それを見たあいつは、「ハハハ、恥ずかしかつているんだね？大丈夫、すぐに救い出してあげるからね。」と、まるで見当違いの方向に、揺光の行動をとらえて、なお笑みを浮かべ続ける。

はぁ・・・なんだか、戦いたくなくなってきたな・・・

奴の意味不明な言動に、俺はだんだんやる気を削がれてきていた。けど、次の瞬間にフリードが俺に視線を移した瞬間、そんな考えは、俺の頭から瞬時に消え去った。

「さて、それじゃあ揺光さんは少し下がっててくれるかな・・・すぐにそいつのこと、殺してやるからさ・・・」

「！そうだな・・・さっさと終わらせるか。」

揺光に向けていたいやらしい笑みとは違う、殺意満載の視線を俺に向けてくるフリードの姿に、俺は緩んでいた気を引き締める。

今の奴の瞳は、狂気に犯された瞳だ・・・今までこんな目をした奴は見たことないからな・・・こりゃあ、嘗めてかかるところがちが殺られるかもしれない・・・

そう気を引き締め、俺は背後にいる揺光に、「絶対に俺たちの戦いに割って入ったりするなよ。」と、一言釘を刺した。

あんな目をしている奴と戦っている最中に、もし揺光が介入してきたとしても、守りきれぬ気がしないからな・・・

いつもならば、「あたしだって戦う！！」と言っただろう揺光も、奴の異様な雰囲気を感じたのか、素直に従った。

「わ、わかった・・・カズマ、気を付けろよ・・・」

「ああ、分かってる・・・」

そう答えた俺は、奴に向かって足を進めていく。ヤツは笑みを再びを浮かべるが、その笑みは、さっきまでの笑みとは違っていた。さっきまで揺光に向けていた笑みはまだ狂気に溢れながらも、微かに人間味を残していた。しかし、今ヤツが浮かべている笑みは、その微かな人間味さえも無くなったように感じる。

言うなれば、今のフリードが浮かべている笑みは、人の形をした
”何か”が浮かべているような気さえしてくるほどに、心がアイツ
を嫌悪しているんだ。

頭の中では、ヤツは真正銘の人間がプレイしている存在だって理
解できる。モンスターなのでは無く、ちゃんとあのフリードと言
うPCの向こうには、それを操作している人間が存在していると頭
では理解出来ているのに、心がそれを否定しているんだ。

”あれは人間じゃない。何か他のバケモノだ”って。

いつもの俺ならば、「頭がどうかしちゃったのかな・・・」と思い
ながら、考え直すような、馬鹿な考えだと思う。

けど、アイツが、フリードが浮かべているあの笑みは、本当に人
間が浮かべているのかと思ってしまうほどに醜悪なんだ。

「ああ・・・やっと・・・やっとだ・・・やっと、お前をぶち殺せ
るんだなあ、おい・・・それで、揺光さんと、俺が一緒にいるんな
事をするんだ・・・」

アイツは、そのバラムンクを横している顔で浮かべる醜悪な笑み
を、更に深くしながら、俺へとそう言って、心底嬉しそうにしながら
こちらへと近づいてくる。

けど、なんだ？このヤツから感じる不気味なプレッシャーは・・・

「・・・ぶち殺せるかどうかは知らないし、揺光を救うとか意味分
かないけど・・・まあ、お望み通り、戦ってやるよー!!」

俺は、そう叫んで、フリードへと突っ込んでいく。いつもならば、
相手の出方を窺って、隙を突くって言う戦い方なんだが、俺はこの

時、「アイツの攻撃を喰らっちゃダメだ」という自分の勘と、ヤツから感じるプレッシャーを振り払うために、自分からヤツへと仕掛ける。

一息でフリードとの距離を詰め、右を振りかぶる。いつまでも、ニヤニヤ、ニヤニヤ気持ち悪い!!

バルムンクの顔で浮かべるその醜悪な笑みに……!!

「思いつきりぶち込んでやるよ!!」

ドゴォ!!

「ガア!!」

凄まじい音と共に、ヤツの身体が吹っ飛んでいく。思いつきり加速を乗せた一撃だ。かなりヤツのHPは削れたはずだ。だが、なんだ……吹き飛ばされているヤツの姿に、なんでこんなプレッシャーを感じているんだ、俺は……!!だが、ここで手を抜いたら、ヤバイって事だけは、分かる!!

頭の中から響く警鐘に従って、俺は吹き飛んでいくヤツに追いつくため、再び地を蹴り、ヤツへと追いついた。

「ここで手は抜かねえ!!」

吹き飛んだヤツの身体は、地面と衝突し、一回弾み、滑っていく。だが、そのヤツの身体を俺は掬い上げるようにして、上へと吹き飛ばし、そのまま跳躍。

ヤツに追いつき、その身体を再び地面へとたたき落とす!!その

まま、空中で身をひねり、そのまま回転、遠心力を追加した踵は、まるで斧の如く、ヤツの身体へと、突き刺さる！！

グシャアアアア！！

「ガアアアアアア！！」

「まだまだ・・・！！」

地面へと叩きつけられ、ダメージの許容量を超えたヤツの身体から、連撃リングが浮かび上がる。その隙を見逃したりなんてしない！！これだけの攻撃を叩き込んでも、未だ、ヤツから感じるプレッシャーは消えない。俺は、ヤツからの重圧をかき消すように、アーツを発動させた。

「連撃！！」

「仁王槌！！」

システムのアシストを受け、通常では出来ないモーションから繰り出される攻撃は、確かにヤツの身体へと叩き込まれてゆく。その攻撃によって、俺の視界に写るヤツのHPは、ほぼ赤くなり、あと少しでヤツの敗北が訪れるのを、俺へと知らせてくる。

「グウウウウウウ！！アアアアアアアア！！」

連撃を無防備なその身体へと受け、まるで野獣のような叫び声を上げるフリード。けど、何でだ・・・なんで、こんなに肌がざわつく・・・イヤな予感が消えないんだ！！

「よっしゃああ!!どうだ、この野郎!!さっさと負けを認めて、キリ力を返せ!!」

ヤツから感じるプレッシャーに、顔をしかめる俺とは逆に、フリードの口から放たれる、まるで獣のような叫び声を聞き、揺光がヤツへと向かってそう叫ぶ。揺光には、完全に俺が有利に見えるんだろう。

俺だって、いつもならば、ここまで攻撃を叩き込み、カーソルに写るヤツのHPを見れば、気を抜く事はしなくても、多少は心に余裕を感じているんだ。

なのに・・・!!なんだ!!このざわめきは!!なんで、勝っている筈の俺が、やられている筈のヤツからこんな危険を感じるんだ・・・覚えのある、この重圧感・・・!!

「あの時の、モルガナと同じ「クククク・・・」!!」

「な、何笑ってるんだ!!勝負はもう着いただろう!!さっさとキリ力を返せ!!」

突然地面に倒れていたフリードが、笑い出した。その不気味な笑い声を聞きながらも、揺光はヤツへとそう叫ぶ。

「いやいや、強いな、お前は・・・ホント、ついこの前はじめてばかりの筈なのにな・・・御倉」

!!なんで、リアルの俺の名前を・・・!!

「いつもいつもお前ばかりが、みんなから、慕われる・・・俺の居場所を奪っていく・・・!!」

「！！なんだよ、アレ……！！」

フリードの身体から、何か黒い泡のようなものが溢れ出す。生理的な嫌悪感を感じるその黒い泡は、どんどんヤツの身体を包み込んでいく。

「！！カズマ、ヤツのHPが！！」

「！！まさか、ゲージが消えた！！」

俺達の視界に表示されていたフリードのHPバーが、消え去ってしまう。これで、普通の攻撃じゃ、ヤツを倒せない……！！

「ふざけんなよ……お前さえいなければ……俺は、あの人の隣にいられたんだ……お前が、あの人を苦しめてるんだ……俺が救うんだ……倉本さんを！！」

「あ、あたしを……？あ、アンタだれだよ！！」

突然自分のリアルの名前までもヤツに呼ばれ、しかも俺から救うなどと言われた揺光は、黒い泡によって包まれていくフリードへと叫んだ。

「分かんないの、倉本さん……？俺だよ……尾方だよ……？待っててね、もうすぐアイツを殺して、倉本さんのことを俺が救ってあげるから……」

そう言ってフリード……いや、尾方は、全身を黒い泡に浸食され、黒くなったその瞳で俺の事を見つめ、嗤った。

第二十九話（後書き）

どうでしたでしょうか？

正直、AIDAに取り付けれる描写が上手く思い浮かばず、どんなんだ、これ？って感じに成ってしまったような気がする・・・
文才が欲しいよお・・・

第三十話（前書き）

どうも、投稿が遅れてしまって申し訳ありません。

正直、レポートなどが忙しかったのと、ちよつとしたスランプみたいなのにかかってしまい、小説を書く気になれなくて投稿が遅れてしまいました。

その上、相変わらずの低クオリティ。

ホントどうしようも無い駄作ですが、よろしければお読みください。

第三十話

SIDE 揺光

「なんだよ、アレ……」

あたしは、目の前で起きている事態が正直信じられない。さっきまで、カズマの攻撃でボロボロになっていたフリードは、倒れていたと思ったら、突然あたしとカズマの名前を、リアルのあたし達の名前を呼んだんだ。

アイツの正体は、あたし達と同じクラスの尾方 甲だった。何であたし達のことを知っていたのかって言うのも気になるって言えば、気になる事なんだけど、それ以上に目の前で起きている事態の方が信じられなくて、あたしは言葉を失っていた。

「ガアアアアアアア！」

「……カズマ……」

「ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ……！痛いかな？痛いよなあ？もっと叫べよ……大きな声で……痛いってさああ……」

黒い何かに包まれて、一瞬でPCエディットが変化したフリードは、もうさっきまでの、美形の面影なんて全く無い状態にまで変貌しやがったんだ。

白かったボディは、生理的に嫌悪感を催す程に、どす黒く染まって、肩から何か変な突起が生えてる。

そして、変わったのは姿だけじゃなかった。

さっきまで瀕死寸前まで追い込まれていたはずのあいつのHPは、システムのバグかなんかかは分からないけど、いつの間にか消えていて、それだけじゃなくて、さっきまでのダメージが全て消えてしまったかのような動きで、カズマに迫ったかと思ったら、素手でカズマの事を吹っ飛ばしたんだ。

アリーナの上位ランカーでさえ、カズマを吹き飛ばすどころか、まともに攻撃を当てられるヤツさえほとんどいなかったんだ。なのに、それをさっきまで全然歯が立たなかったヤツがそれを成しえた事にあたしは驚愕した。

でも、カズマだってそう簡単にやられるヤツなんかじゃ無かった。カズマは吹き飛ばされた直後に体勢を立て直し、ユニークアーツを発動したんだ。

「衝撃のおおお、ファーストブリットオオオオオオ!!!」

今までどんな敵でさえ打ち倒してきたその弾丸のような一撃は、どう見たって避けられるタイミングなんかじゃなかった。傍から見ているあたしでさえそう確信し、拳はまるでアイツの顔に吸い込まれるようにして、フリードの顔面へと直撃した・・・筈だった。

ガキーン!!!

「な!!!」

「嘘・・・だろ・・・」

完全にアイツの顔面に吸い込まれるようにして放たれたその一撃

は、その身を包んでいた黒い何かが防いでしまい、ヤツへは届かなかった。防げたヤツなど居なかった。どんな敵でさえ、カズマのあの一撃を喰らって、無事だったヤツなんて一人もいなかったんだ・

なのに、アイツは、その一撃を、黒い何かで、完全に防ぎやがった。カズマの拳が、止められた・・・撃ったカズマも唾然としていたけど、それ以上にあたしは、その事実が信じられなかった・・・まだこのThe worldを始めてから、あたしはそんなに経っていないと思う。でも、そんなあたしにさえ、アイツの一撃は、誰にも止められやしないって、そう思えるほどに、アイツの一撃は凄かったんだ。

なのに、その一撃を、アイツはアツサリと防いだ・・・その事に、あたしは凄まじいショックを喰らっていた。

「おいおい、なんだよ、その攻撃はよお？それでよく徹甲弾なんて二つ名が付いたもんだよなあ？」

「クッ！！」

ニタニタと、その嫌らしい、生理的に嫌悪感を抱かせるその笑みだけは変わらずに、フリードはカズマの攻撃を嘲笑いやがった・・・！！

「しかたねえなあ・・・折角だ。本当の攻撃ってヤツを」

虚空へと手を伸ばし、空中に現れた禍々しい刀を手にして、アイツはニタリと嗤った。

「味合わせややるヨオオオオオ!!」

あたしはアイツが握っている見ているだけで、気分が悪くなってくるその黒い刀に、あたしは底知れない恐怖を抱いた。

刺々しい、その黒い刀は、「斬る」事が目的なんかじゃなくて、まるで拷問道具のような形状をしてるんだ。刺さったら、棘が中で突き刺さって、抜くときに肉が抉れるように出来ている。相手を「斬り殺す」事が目的なんかじゃない。「凄まじい激痛を与え、苦しませて殺す」その刀から感じる禍々しさにあたしは、身体中が震えた。

「グアアアアアアア!!」

「ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ!!」もつとだあ!!もつと鳴き叫べええええええ!!」

でも、あたしの身体が震えてる原因はそれだけじゃなくなった。だって・・・さつきからあれで刺されているカズマは、まるで本当に痛みを感じているかのような叫び声を上げてるんだ。The worldの攻撃は、現実の痛みになんか変化しない。そのはずなのに、カズマはまるで本当に痛みを感じているかのような叫び声を、さつきからずっとあげてるんだ・・・

狂ったように笑い声を上げるフリード。さつきまで、フリードのことを圧倒していた筈のカズマは、今やフリードにいいように弄ばれてしまっていた・・・

SIDEカズマ

「ホラホラ、どうしたんだよお？もつと泣き叫べって、言ってんだよお！！ヒヤヒヤヒヤヒヤ！！！」

「クソ！！！」

凄まじく耳障りなフリードの笑い声混じりの挑発を無視し、振るわれた禍々しいその刀を避ける。一般的な収納している武器を取り出したのとはまるで違う、本当に虚空から、まるでたった今作り出したかのようにして取り出したあの黒い刀に刺された俺は、まるでリアルの方で本当に刀で刺されてしまったかのような痛み、絶叫してしまった。

ネット上での戦いの筈であるこの戦闘で、PCカズマが受けた攻撃と同じ所から感じた、あの激痛。
モルガナの事件の時にさえ無かったその事実、俺は少しの間混乱してしまった。

アイツが持つあの刀を喰らってしまったえば、まるでリアルで刺されたかのような痛みを感じることになる。正直理解出来ないことだし、人から聞いたら信じられないようなことだ。多分、今俺が直に体験している事じゃなかったらそいつの正気を疑ってたと思うな。

だが、残念なことに、これは現実であり、俺が感じたあの痛みも、紛れもない本物だった。突き刺されただけで、あの痛みならば、もしもHPがすべて削られてしまった場合、もしかしたら、現実の俺への影響がどうなるかが正直想像がつかない。後遺症がでたり、異変が起きたりするのかもしれない。・・・最悪の場合には、死ぬことだって有り得るかもしれないしな・・・

「おいおい、避けるだけじゃあつまらねえだろうが!! さっさと・・・」
「シユアアア・・・」

「死んじまえヨオオオオ!!!!」

ギイイイイイ!!!!

「なに!!!!?」

フリードが黒い刀を振りかぶり到底届く距離ではないと言うのに刀を俺にむかって振り下ろしたその瞬間、俺にむかって刀が伸びてきた。通常では絶対にあり得ない、武器の射程がいきなり変化したことにより一瞬驚愕をしまい、動きを止めてしまった。

しかし、伸びたことには驚いたが、そのスピード自体はたいしたものじゃない!! 眼前まで迫っていたその刃を、体を全力で捻ることで、なんとか躲す。

「ツツ!!!!」

刃が左腕を掠り、リアル腕に、刃で切られたような痛みが走る。先ほど刺されたときほどの痛みよりも断然マシだが、今まで経験し

たことのない事態に、すでにそうなるかと理解していても、やはり戸惑ってしまう。

本当に、なんなんだ、アレは。モルガナ事件の時にさえ無かった、ネットで受けたダメージが、リアルにも反映されるなんて、信じられない……!!

チートだとか、バグだとか、そういう次元の話じゃない……!!
もっと、何か別の次元の話だ。

「……つまんねえ……」

俺が、フリードが身に纏う黒い何かについて考えながら、ヤツの攻撃をよけていると、突然フリードは唐突にそう言くと、黒い刀を元の長さまで戻し、俺への攻撃をピタリと止めた。

「……?」

「つまんねえんだよ、御倉ア……避けてばかりだよ……ちつとも面白く無いんですけどお?」

フリードは俺に心底つまらないというような態度で溜め息をつき、俺にそう問いかけてきた。

「別に、俺はお前を楽しませる為に、戦ってる訳じゃ無いからな。ただ、お前に捕らわれてるキリカを助け出したいだけだ。お前が楽しいかどうかなんて知った事かよ。」

俺がフリードへとそう答えると、ヤツはこちらを心底気に食わないという瞳で見つめてきた。

「キリカ・・・？ああ、そう言や、囷に使ってたんだっけか、そんなPC・・・」

ヤツはそう言うと、今ヤツが身に纏っているものと同じような黒い何かにつるされていているキリカのことを少しの間ジツと見つめ、そして何かを思いついたような表情を浮かべ、再び俺へとあの嫌らしい笑みを向けてきた。

「そくだ・・・コイツ、殺してやるっか？」

「なっ！！！！ふざけんな！！お前の相手は俺だろう！！キリカは関係ない！！手を出すな！！」

無関係の、ただ俺達と仲が良いと言うだけで、捕まり、あんな風にされているキリカを、その黒い刀で殺そうって言うのかよ！！俺がヤツへとそう叫んだ瞬間、アイツは今までで一番楽しそうな邪悪極まりない笑みで、俺へと告げた。

「なに？殺されたく無い訳？そんなに大事なの、コイツ？だったらよ～～、もう攻撃避けんなよ？お前は俺の、”おもちゃ”なんだからよ～～！！ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！！！！」

そう笑い声を上げると、再び俺へと黒い刀が迫ってきた。避けようと思えば余裕で避けられる位の速さ。だけど、これを避けたら、アイツは躊躇なくキリカを殺そうと、あの刀を突き刺す・・・！！

そう考えた俺は、迫り来る刃で与えられるだろう苦痛に少しでも耐える為に、歯を食いしばる・・・！！

ザシューウウウウ！！

キリカを人質に取られ、フリードから一方的に攻撃される俺を見て、揺光はそうヤツへと叫んだ。そしてその言葉を聞いたフリードは、その醜悪な笑みを揺光へと向けながら、本人的には優しく言い聞かすように、俺達からすれば非常に嫌悪感を抱かせるような口調で揺光の問いに答えた。

「ヤダなく、揺光さん。プライドならあるんだよ？でもね・・・今はそんな事より、コイツを痛めつける方が何倍もおもしろいんだよお？大丈夫、揺光さんのことは傷付けたりなんかしないよ？俺は優しいからねえ。ヒヤヒヤヒヤヒヤ!!!」

「アンタは・・・!!!」「よせ・・・揺光・・・カズマ!!」
でも・・・!!」

「大丈夫だ・・・俺は、まだ・・・耐えられる・・・!!!」

「!!!ツ・・・分かった・・・カズマ・・・頑張つて・・・!!!」

フリードへと飛びかかろうとした揺光を、痛みに耐えながらも呼び止める。揺光が強くなったのは分かってるし、多分普通の戦いならば、フリードみたいなヤツには決して負けないだろう。

けど、今はダメだ。今のアイツの力は、普通のヤツが手を出してどうにかなるようなものじゃない。

正直、個人で受ける危険度だけで言えば、モルガナの時よりもヤバイ。モルガナは、リアルへの痛みなどは無かった。

俺がそう揺光へと息も絶え絶えにそう言つと、フリードは揺光へと向けていた視線を俺へと再び向けさつきまで浮かべていた、醜悪

な笑顔ではなく、気に入らない者を見るかのような瞳で俺を射抜く。

「……気に入らねえ……何がまだ耐えられるだよ……」

そう呟くと、右腕にもつその黒い刀を頭上へと掲げる。すると、その刀にヤツの身体から黒い何かが溢れ出し、刀を覆い始める。ポコポコとまるで泡があふれ出るかのような音を発しながら包まれていった刀は、その形状を変え、もはや刀などではなく、まるでギロチンのような形状へと変化した。

今までのような、俺をいたぶるためにわざと苦しませるような形をしていた刀とは全く逆の、俺の命を完全に奪うための形状。

……ああ、アレは流石に耐えきれないかな……

先程までの刀でも、ほぼ限界に近いんだ。流石にあれで切り裂かれたら、HPも、そして俺自身も無事に済むか分からない……いや、十中八九ダメだろうな……

「……もう、いいや。死ねよ、お前。」

ヤツは、そのギロチンを構え、俺を冷ややかな目で見下ろし、一言俺へと告げると共に、そのギロチンを振り下ろした。

「……ゴメンな、揺光。約束、守れなかった……」

「カズマア！！！！」

迫り来る、ギロチンの刃。揺光の叫び。それらを聞きながら、俺へと振り下ろされたギロチンは、真っ直ぐに切り裂いた。

ザシュツッ!!

「え・・・?」

俺の前へと躍り出た、キリカの身体を。

なんで・・・どうして、キリカが・・・切り裂かれてるんだ・・・?

「カズ・・・マ・・・さん・・・」

「ツッ!!キリカアアア!!」

キリカはそう俺に呼びかけると、力なく地面へと倒れてしまった。
・・・俺の盾となって・・・

第三十話（後書き）

一応大学の方が忙しいので、投稿するのが遅くなったりするとは思いますが、出来るだけ二日に一度、それが無理でも、一週間に一度くらいのペースでこれからも頑張っていけますので、これからもよろしくお願いします。

それでは、また次回。

第三十一話（前書き）

どうも、遅くなりました。

三十一話です。

凄まじく時間がかかってしまいました。大学の課題2時間をとられた上、絶賛スランプ中なので、何度も何度も書き直すという事態に陥ってしまい、今までで無いくらいに作るのに時間がかかりました。ハッキリ言って、スランプ中なので、大した内容ではありませんが、それでも良いと言っ心優しい方がいましたら、是非お読みください。

第三十一話

SIDE 揺光

「キリカアアアアアア！」

カズマの絶叫が、あたしの鼓膜を震わせた。倒れ行くキリカの体を抱えるようにして抱きとめたカズマは、「キリカ！っっかりしろ、キリカ！！！」と何度も何度も呼びかけている。

「嘘……だろ……？」

フリードが振り下ろした刃から、カズマを守るようにして身を投げ出したキリカは、近くで見なくなっただけで分かるくらいの致命傷を負っている……分かりたくもないのに、理解できてしまうあたしは、でもその事実を否定するようにして、「嘘だ……嘘だよ……」と呟いていた。

「……マタ、邪魔しやがって……どいつもコイツも、ナンデみんなオレの邪魔をする……！！ゴミが……ゴミ風情が、オレがどれだけこの時を待ってたと思ってやがる……！！！！まともにも使えないゴミの分際で……！！！！！」

なんつった……今、あいつはキリカの事、なんて言った……！！

「……今……なんて言った、テメエ……」

あんたが、キリカを傷付けたのに……アンタのせいで、あの子

はあんな風になってるのに・・・!!

「揺光さん・・・ゴメンね、ゴミに邪魔されちゃった。でも待っててね。すぐに御倉を殺してやるからさ・・・すぐに、キミと二人きりにナレルカラネ・・・」

「テメエエエエエ!!!!」

キリカをなんて呼んだ!!あの子は、あたしの友達だったんだ!!
!そんな子を、アンタは今、ゴミって呼びやがったのか!!
フリードの言葉に激昂したあたしは、頭の中が真っ白になるほどの怒りを、ヤツへとぶつけるようにして剣を振るった。

「キリカ・・・何で、俺なんかを庇ったりなんてしたんだ・・・！」

フリードの凶刃によって身体を傷付けられ、苦しそうに俺の腕の中で呼吸を繰り返しているキリカに、俺は泣きそうな声で尋ねた。

いつも・・・いつもそうだ！！俺が守らなきゃって思った人たちは、いつも俺の手の中からすり抜けていく・・・なんで・・・俺は守れない・・・！！なんで・・・なんで、俺はいつも守られてばかりなんだ・・・！！

「カ・・・ズマ・・・さん・・・」

スツと、キリカの手が、俺の頬へと添えられた。弱々しい、今にも消えてしまいそうなほどに傷ついているキリカの手は、今も消えてしまいそうなくらいに儂い。

「無事・・・ですよね・・・？」

「！！コイツは・・・！！こんな時にまで人の心配するのかよ・・・！！！！」

「バカ！！俺よりも、お前の方が・・・！？」

そう言っつて、俺はキリカの身体を見て、思わず息を飲み、その後に続く言葉を発することが出来なかった。

「なんだよ・・・これ・・・」

「へへへ・・・やっぱり、驚いちゃいますか・・・？」

そう笑ったキリカの身体は、フリードが身に纏っていた黒い何かと同じようなものが、キリカの身体を修復するかのようになり、傷口を覆いだしていた。

みるみるふさがっていくその傷口はしかし、かなり深く、キリカは未だに苦しそうにしている。

「キリカ・・・なんだ、コレは・・・」

「この子は・・・あたしの、友達です・・・」

「友・・・達・・・？」

俺が呟くと、その白い何かは、キリカに触れている腕から伝わって、俺の身体にまで登ってきた。

「!!なんだ・・・!!」

「大・・・丈夫ですよ・・・？カズマさんの・・・怪我も、治そうと・・・してるんです・・・」

キリカのその言葉を肯定するかのようになり、フリードによって傷付けられた身体が、どんどん回復・・・いや、修復されていく。

「ダメージが・・・消えた・・・？」

「へへへ・・・この子、カズマさんのことも・・・大好きですから・・・優しい人・・・が好きなんですよ、この子・・・ッゴホ、ゴホ

ッ！！」

「！！キリカ！！大丈夫か、おい！！」

突然咳き込んだキリカを、抱き寄せて彼女の様子を見る。

PCボディの方のダメージは、信じられないけど、もうほとんどが修復されている。少なくとも、こっちは大丈夫だ。

けど・・・リアルの方の身体が、耐えきれなかったんじゃないのか・・・！？

「ゴホツゴホツ・・・大・・・丈夫・・・です・・・それに、私何かよりも・・・揺光・・・さんを・・・」

！！その言葉を聞いた瞬間、俺はさっきまで俺を狙っていた筈のフリードからの追撃が無いことにやっと気がついて、ヤツが来た場所へと視線を動かした。

「揺光・・・！！ジツとしていろって言ったのに・・・！！」

俺がフリードへと視線を向けると、そこでは、その顔を怒りに染め上げた揺光が、普通のPCならば速攻でやられてしまうほどの速度で両手に持つ双剣を振るっていた。

対してその攻撃を受けているフリードは、余裕の表情で自分へと攻撃を仕掛けてきている揺光へと笑みを向けていた。

「・・・揺光さんも・・・カズマさんを助けたかったです・・・だから・・・」

途切れ途切れに俺へとそう言ってきたキリカは、俺に向かって、何かを差し出してきた。

その手に持っていたのは、この場にはふさわしくない、鮮やかな紫の花。それは淡い光を発しながら、キリカの身体を覆っている白い何かを生み出していた。

「キリカ・・・これは・・・」

「お守り・・・みたいなモノ・・・です・・・きつと、カズマさんのこと・・・守ってくれますから・・・ね・・・？」

そう言つとキリカは、俺の手へとその花を握らせてきた。俺は反射的にその花をそつと握り込む。すると、その瞬間に、突然頭の中に、キリカではない、どこか懐かしさを感じる声が響いてきた。

『。。。カズマ、マモルヨーーー』

「!!!今の声は・・・!!!」

「きつと・・・その子が、カズマさんを・・・守ってくれますから・・・だから・・・カズマさんは、揺光さんを・・・守ってあげて下さい・・・」

そう言つと、キリカはまるで力尽きてしまったかのように、スッとその瞼を閉じ始めてしまう。

「キリカ!!!」

「大丈夫です・・・ただ、ちょっと眠くなつてきちゃいました・・・だから・・・揺光さんを助けたら・・・起こしてくださいね・・・」

「？」

「ッ・・・ああ、分かった。ちゃんと、アイツを助けたら、起こしてやるよ。だから・・・今は眠っとけ。」

「はい・・・それじゃあ、カズマさん・・・頑張つて・・・下さいね・・・」

そう言つと、キリカは遂に力尽きたのか、その瞼を完全に閉じてしまう。そして、それと同時に、キリカの身体は光の粒子となつて・・・宙に、消えた・・・蛍みたいな光だな・・・

「必ず・・・起こしてやるからな・・・ッ」

俺は、光になつて消えたキリカへとそう誓い、スツと立ち上がる。そして、キリカから受け取つた紫の花・・・花菖蒲を見つめる。

「お前も、手伝つてくれるか・・・？」

『。。。ナニヲ？。。。』

再び頭の中に響く、柔らかな声。俺はその声に、今度こそ、果たしてみせるという決意を込めて、その声の質問に答えた。

「守りたいモノを・・・守るんだ・・・そして・・・」

「キリカを・・・起こしてやろう・・・」

『。。。ワカッタ・・・カズマ、テツダウ。。。』

「・・・ありがとう。」

「誓うぜ、キリカ。俺は、今度こそ守ってみせる。お前が、願った約束を、必ず守ってやるよ。なにせ、こんな俺の事を信じてくれたみたいだからな」

花菖蒲・・・花言葉は、優しい心、忍耐。そして・・・

『あなたを、信じています』

SIDE 揺光

「オツト、あぶないなあ、揺光さん。だめだよ、今は大人しくして無くちゃ。すぐにキミと二人きりになれるんだ。ソレまで待ってよ・・・それに、怪我しちゃうよ？こんな攻撃じゃあ、俺に一太刀だつて通らないって分かつてるデシヨ？」

わかつてるさ、そんな事！！あたしよりも断然強いカズマの攻撃だつて通らなかつたんだ。あたしの攻撃なんか当たるわけ無いって、あたしにだつて分かつてる。

けどね・・・だからって、何もしないなんて、出来るわけ無い！友達を傷付けられて、その上ゴミ呼ばわりされたんだ！！そこまですわられて、黙って落ち着いていられるほど、あたしは利口じゃないし、大人じゃないんだよ！！

「はあああああああー！！」

「無駄だよ、揺光さん。俺にそんな攻撃は、一回だつて当たるわけ無い。もう少しだけマツテテ？そうすれば、揺光さんとオレだけになれるんだ！！もう少しなんだからサア！！！！」

クソツッ！クソツッ！！クソツッ！！！！

フリードの言うとおり、あたしの攻撃は一撃も当たらずに、すべてあいつの纏っている黒い何かに防がれて、まったく意味のないものとなっていた。

キリ力を傷つけ、貶したコイツをぶっ飛ばすどころか、一発も攻

撃を当てられないことに、あたしは悔しくて悔しくて、いつの間にか涙を流していたのか、目の前が霞んできて、あいつのにやけた顔が、揺らいで見いえるようになってた。

なんで・・・なんで、こんな奴なんかに一発も当てられないんだよ・・・！！カズマを傷つけて、キリカを傷つけ、ゴミ呼ばわりしやがったこいつなんか、なんであたしの攻撃は、一発も当たらないんだ、チクシヨウ・・・！！！！

「シヨウガナイナア・・・大人しく待つてられないのなら、オシオキしちゃうよ！！！！！」

「！！コイツ！！！！！」

あたしの攻撃を黙って黒い何かで防いでいたフリードは、そういうと同時に、あたしに向かってその黒い何かを伸ばしてきた。

攻撃に集中していたあたしは、突然あたしを覆いだした黒い影を避けられず、腕を縛られ、空中に吊るされるようにして拘束された・・・！！

「クソ、放せ！！放せよこのクソ野郎！！！」

「無駄だよ、揺光さん。これは、そう簡単には外れはしないよ。ソレはね、俺の手に入れた、力なんだ。この力があれば、俺に敵う奴なんて、いないんだよ・・・ソウ、この力さえあれば、俺は最強なんだ。

あいつだって・・・御倉だって、俺には手も足も出なかったんだ・・・！！もう少しだけ、待つててね。もうすぐ、君をあいつから救ってアゲルカラ・・・！！！！」

「ッ!!お前ツ・・・頭可笑しいんじゃないの・・・!!あたしをカズマから救う?訳分かんないこと言ってるんじゃないよ!!あんたは、自分がしたことも分かってないのか!!」

キリカを、あたしの友達を傷付けておいて、それでも、あたしをアンタが救う?意味分かんない!!頭可笑しいとしか思えない・・・!!

「イヤダナア・・・忘れちゃったの?オレ達、あんなに仲良かったのに・・・ダイジョウブだよ・・・すぐにまた、あの頃のようになれるからね・・・」

ゾクッ!!

全身に鳥肌が立った。間違い無い・・・コイツは、完全に狂ってる。あたしは、リアルでもネットでも、こんなやつとなんか仲良くした記憶なんて全くないのに、コイツはあたしと仲良かったなんて言ってる。その時点でメチャクチャ可笑しいけど、あたしがコイツを狂ってるって判断したのは、ヤツの瞳だった。最初に見たときよりも、光を無くしたその瞳は、人が持つ理性という光を完全に失ってる。

「あんななんかと、仲良くなんて・・・!!」

「・・・エ?」

「アンタなんかと仲良くなんてなるわけ無いって言ってるんだよ!!いい加減に、妄想やめろ!!!あたしは、アンタなんかとは、絶対に仲良くなんてなるもんか!!!」

あたしがヤツに向かって、そう断言すると、ヤツは完全に狂った瞳であたしを見つめた。

「何言ってるの・・・？オレ達、あんなに仲良くしてたじゃナイカ・・・」

「いい加減にしろよ、この妄想野郎！！あたしは、アンタみたいなヤツが大ッ嫌いなんだよ！！アンタがどれだけ金を持っていようが、そんな変な力でカズマやあたしに勝とうが、あたしは絶対にアンタを認めない！！！」

あたしがヤツに向かってそう断言すると、ヤツは、信じられないと言っ顔をした後、あたしの言葉を信じないとも言っように、首を振って、あたしの本心を確認しようと尋ねてきた。

「ウソダヨネ、揺光さん・・・だって、オレ達はあんなに仲が良かったんだ・・・それに、オレは揺光さん・・・いや、倉本さんのことが、こんなにスキなんだよ？嘘にキマツテルヨネ・・・？」

コイツは・・・本当にあたしが言った言葉を嘘だと信じているんだろっな。自分の言ってる事が、唯一の真実だとも言わんばかりのコイツにとっては、あたしの言葉はただの嘘にしか聞こえないんだろっ。

でも、アンタは狂ってるんだよ、尾方。

「嘘なんかじゃない。あたしは何があつたって、アンタのことなんか一生好きになんてならない。あたしは・・・」

「あたしはカズマが好きなんだ。アンタの妄想に付き合う筋合いな

んか無いんだよ!!!」

あたしはカズマの事が好き。フリードにそう宣言すると、ヤツは今度こそ信じられない、信じたくなんて無いと言う顔をした後、顔をかきむしりながら、何度も何度も「ナンデ・・・ナンデ・・・」とブツブツと繰り返し始めた。

「ナンデ・・・ナンデ、ナンデナンデ、ナンデナンデナンデナンデナンデ!!!ナンデ分かってくれナイんだ!!!こんなにキミをアイシテルのに!!!こんなにガンバトルのに!!!ナンデ、ナンデあんなヤツなんだ!!!ナンデ、オレを見てくれナイ!!!ナンデオレを好きにナツテクレナイ!!!」

背筋がゾツとする。最初から狂っているというのは理解してたけど、こつやつて直にコイツの言葉を聞き、改めてコイツが狂っていると言う事を実感して、そして、その狂っている男があたしを求めていると言う事に、あたしは身体の震えを押さえるのが精一杯だった。

・・・でも、絶対にコイツには屈しない。どれだけコイツが力を持っていて、あたしがどれだけ追い込まれているとしても、コイツだけには屈したりしない!!!

「何度でも言ってるよ!!!あたしはカズマが好きだ!!!アンタが何をしようが、あたしの気持ちは、絶対にアンタなんかには向いたりしない!!!死んだって、アンタなんかを好きになって堪るか!!!」

「グッ!!!!!!アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!ナンデダ!!!!!!ナンデいつもいつも御倉ナンダ

「！！ナンデいつもオレじゃない！！スキつて言えよ！！俺の事がスキつて言えよ！！！！」

「絶対に言うかよ！！アンタなんて、大ッ嫌いなんだよ！！！」

あたしがそう断言すると、狂った表情であたしを見つめていたヤツは、急に押し黙って、顔を伏せた。

「大嫌い・・・？・・・オレのことが・・・？」

そして、伏せていた顔を起こして、再びあたしを見つめてくる。けど、その顔は、さっきまでのようにあたしが自分の事を好きだという絶対の自信を失っていた。そして、最後の希望にすぎるかのよう、さっきのあたしの言葉が嘘だと言ってくれるのを期待するような顔をして、あたしに再度尋ねてきた。

「本当に・・・オレの事が・・・嫌いな・・・？」

「・・・そうだよ。あたしは、例えアンタに殺されようとも、あたしはアンタを好きになる事は絶対に無い。あたしは・・・」

「・・・心の底から・・・カズマが好きなんだ。」

ザシュツ！！

「！！グアアアア！！」

あたしがフリードへとあたしの気持ちを告げると同時に、ヤツはあたしの身体へと、さっきまでカズマをいたぶっていた時に使っていた、黒い刀で、あたしの右腕を貫いた。

とんでもない痛みが、あたしを襲ってくる。ゲームであるはずの、仮想世界にあるはずで、現実には何の影響も無い筈のこの身体が受けた痛みが、リアルのあたしの腕に伝わってくる。

こんなのに、耐えてたのかよ、カズマは……!!

あたしは、さっきまでこの刀でその身体を切り裂かれていたカズマが、この痛みに耐えていたことに、内心で驚愕し、同時に、やっぱりカズマは凄いという、この場で思い浮かべる事では無い筈のことを考えていた。

「倉本サン……オレノコト……スキツテイッテヨ……」

痛みに呻いているあたしへと、フリードが抑揚を無くした口調でそう告げる。

好きだと言わなければ、なんども刺すよ……そう言いたいんだろうな……正直、かなり追い込まれてるんだけどね……

一回。たった一回この刀で攻撃されただけのあたしは、情けないことに、かなり追い込まれている。なのに、カズマはこの痛みを何度も何度もその身体へと刻まれていた筈なのに、あたしのように、限界だという表情など、全く出さなかった。

だったら、あたしだって……!!

「ゲツ……誰が……言うかよ……!!」

ザシュツツツ!!

「!!!ウグウウウウウ!!!」

再び、黒い刃が、あたしの身体を貫いた。今度は、左腕だ。激痛が、あたしを襲う。痛みで、意識が持って行かれそうになるのを、必死につなぎ止める。

「ネエ・・・スキッテイッテヨ・・・オレノコト・・・スキッテイッテヨ・・・イエヨ・・・イエヨ・・・イエヨオオオ!!!」

ザシュザシュツツツ!!!

「ツ-----!!!」

何度も何度も、刃によつて、あたしの身体が刻まれていく。痛みで、声もまともに出ない・・・痛みが、容赦なく、あたしの精神をガリガリと削っていく・・・

・・・頭の中で、「ヤツの言うとおりにしろ」っていう幻聴までもが聞こえ始めた・・・あたしの身体が、これ以上の痛みに耐えられないから、聞こえてきたのかな・・・

でも、それだけはしない・・・!!曲げて堪るか・・・いくら傷付けられたって・・・カズマを好きだって言う気もちを・・・コイツの言うとおりになんてしてやるもんか・・・!!

心の中でそう叫んだあたしは、痛みで霞む目をヤツに向け、ハッキリと口にしてやった。

「お断りだね・・・!!あたしが好きなのは・・・カズマだけだ・・・

」

「！！！！ソウ・・・ナラ、シカタナイヨネ・・・」

ヤツはそう言うと、右腕を掲げる。すると、黒い刀は、キリカを斬ったのと同じ、黒いギロチンへと変化した。変化した終えたそれを、ヤツはスツと、ソレを頭上に掲げる。霞んでいく目でみたアイツの顔は、全てに絶望したかのような表情をして、あたしを見つめていた。その瞳には、さっきまでの狂気と、あたしを殺そうとする意志が、ハッキリと見て取れた。

ゴメン、カズマ。あたし、もうダメかもしれない・・・でもね、後悔はないよ？だってさ・・・あたし、自分に正直だったから・・・カズマ以外の人を好きになんてなれないもん・・・

「オレヲスキニナライナラ・・・ミクラナンカヲ・・・スキデイルトイウノナラ・・・オレガ、キミヲコロシテアゲル・・・ダレニモ・・・ワタサナイ・・・！！！」

そう言って、ヤツはギロチンをあたしへと振り下ろした。

ああ・・・多分、あたしはこの痛みに耐えられそうに無いや・・・でも、いつか・・・あたしは、心を曲げなかったんだから・・・後悔は、ない・・・

あ、でも後悔、二つ、あったや・・・キリカとの、宮皇なるって言う約束・・・守れなかったし・・・カズマにも、この思い・・・ちゃんと伝えたかったなあ・・・

ハハ、なんだ・・・後悔、あるじゃん。あたし・・・

「でも、ゴメンね・・・キリカ・・・約束、守れなかったや・・・」
死んでも、カズマにまた・・・会えるかな・・・

痛みで既に開いていることが出来ない瞼が、段々と閉じてくる・・・
消えゆく意識の中・・・あたしは確かに、見たんだ・・・カズマ
の・・・あたしが大好きな・・・誰かを守る、カズマの・・・白く
光る、アイツの背中を・・・

「ハハ・・・やっぱり、カズマは・・・カッコイイや・・・」

ガキイイイイイン！！

「もう大丈夫だ・・・今は、ゆっくり寝てろ、智香・・・」

微かに聞こえた、カズマの優しい声を最後に、あたしの意識は完
全に闇の中へと落ちていった・・・

第三十一話（後書き）

マジで難産だった今回。

今までで一番時間がかかったと思います。しかも、携帯でも投稿を親による携帯の使用制限をかけられてしまい、外での執筆が出来ないと言う状態にまでなってしまったので、更に遅くなりました。

これからもこんな感じになるとは思いますが、どうかこれからもよろしくお願い致します。

第三十二話（前書き）

どうも、五日ぶりなのかな？な投稿です。

まあ、手こずりました。時間も無く、そしてどう表現しようかな、
と考えるながら書いていると、中々終わらず、ついさっきやっと書
き上げることが出来ました。

まあ、相変わらずクオリティはひくいですが、それでも良ければお
読みください。

第三十二話

SIDEカズマ

揺光へと振り下ろされた一撃を、白い光・・・プリムラの力が覆つてくれている右腕をかざして、防ぐ。さっきまでならば簡単に吹き飛ばされていただろうけど、今の俺ならば・・・キリカと約束し、彼女から力を「AIDA」でありながら、俺に力を貸してくれると言つてくれた、プリムラーを受け取った今ならば、この位のことは、既に容易い。

「カズ・・・マ・・・」

「今は、寝てる・・・すぐに終わらせるぞ。」

背後からの弱った声で揺光が俺の名を呼び、力尽きたように気絶したのを気配で感じて、俺は聞こえていないであろうと思いつながら、揺光へとそう告げた。

自分自身の誓いを実行する為に。今度こそ、守ってみせるという意志を込めて。

「ミクラ・・・ナンデダ・・・ナンデイツモイツモ・・・！
！オマエハオレノジャマヲスル・・・！！ナンデエラバレルノハ
オレジャナクテオマエナンド・・・！！ミクラアアアアアアア
！！！！！！」

揺光から何か言われたんだろう。俺を目の前にした瞬間にまるで獣のような叫び声を上げ、俺へと駆けだしてきたフリードは、その

勢いを乗せたギロチンを俺へと振るってくる。

だが、そんな大振りな攻撃じゃ俺は仕留められないぜ……!!

ガキイイーン!!

「!!ナニ……!!」

俺は、振るわれたギロチンを避けるのではなく、プリムラによって白い光に覆われたシエルブリット、その一拳で迎え撃ち、弾いた。《……》さっきまで防ぐことさえも出来なかった自身の攻撃を、防ぐどころか、拳で弾かれたフリードは、その事が信じられないのだろう。さっきまでは狂気一色で彩られていたその顔には、確かな驚愕の表情が刻まれていた。

「フツ……!!」

「クウツ!!……ナンデダ……ナンデキカナイ……ナンデオレヘトコウゲキデキル……!!」

左でフリードの顔面を殴り、ヤツとの距離を離す。さっきまではヤツの黒い何か……AIDAによって防がれていたこの攻撃も、俺がキリ力から受け取ったプリムラが力を貸してくれることによつて、ヤツの顔面へと拳はきれいに入った。殴られたフリードはうめき声をあげ、自身の攻撃が全く効いていないこと、そしてさっきまで完全に防がれていた己への攻撃が決まったことに信じられないと言う声息を吐き、そして怒りの眼差しを俺へと投げかけてくる。

「カズマ、コノヒトコワイ」

「大丈夫だよ。プリムラが力を貸してくれているんだ。大した相手

じゃ無い。」

俺へと向けられたフリードの狂気を、俺と共にあるプリムラは、しっかりと感じ取り、俺へと若干怯えた感情を伝えてきた。

ホントに、この子がフリードの操っている黒い何かーAIDAと同じ存在とは到底思えないな。

俺は怯えるプリムラへと安心するように告げると、再びフリードへと鋭い視線を向ける。

正直プリムラによってアイツの攻撃を防ぎ、防御を突破できるようになったとはいえ、俺自身の精神が満身創痍だと言う事には変わりはない。

身体の傷の方はしっかりとプリムラによって癒えはしたが、アイツによって与えられたリアルの方の痛みによる精神的なダメージが回復した訳じゃ無い。

油断して、再びアイツの攻撃を必要以上に喰らうことがあれば、例えHPが残っていたとしても俺自身の精神が持つかどうか分からない。

俺が自分自身の状況をそう分析していると、跪いていた状態から立ち上がったフリードはまるで呪詛を口にするかのように、「オレガ・・・オレコソガ・・・」と何度も何度も呟いていた。

「・・・オレハサイキョウナンド・・・ダレニモマケナイ、”チカラ”ヲテニイレタンド・・・オレダケノチカラナンド・・・ナノニ・・・ナンデ、オマエガ・・・！！オマエナンカガアアアアア！！」

そう咆吼をあげたフリードは、再び俺へとギロチンを振りかぶり、

突進を仕掛けてくる。けど、何度も何度も素直に喰らってやるほど、俺は優しくねえんだよ……!!

振り上げられたギロチンをかいくぐるようにして、ヤツの懐へと潜り込む。漆黒に染まったヤツの瞳が俺の姿を捕らえるが、反応など出来ていない。

懐に潜り込んだスピードを左足で殺し、身体をひねる。足から腰、肩、肘、手首をひねるようにして、螺旋の力を拳へと伝達させる。現実の武道家でも使える人は早々いない、身体を捻ることによって発生する螺旋の力。

だが、今の俺ならば……!! キリカから託された、プリムラによってタイムラグのない、完全にPCカズマと一体になっている今の俺なら、このくらいのことは難なくこなせる!!

そうして、螺旋によって発生した力を、右の拳一点に集中、そしてプリムラの力を上乘せしたそれをヤツの顔面へと……叩き込む!!

「グガアアアアア!!」

フリードへと叩き込まれた拳は、全身のエネルギーを乗せた一撃にふさわしい威力を発揮したようで、フリードの身体を容易く吹き飛ばした。けど、これで終わりにはしない。そのまま吹き飛んだフリードの後を追う。右足に力を込め、それを一気に解放ちヤツの後を追う!!

「グ、ガア!!……ナニツ!!」

吹き飛ばされ、何度か地面をバウンドしたフリードが何とか体勢を整え、俺へと怒りの視線を向けようと顔を上げると、既に目の前まで俺は迫っていた。その事にこれで何度目になるか分からない、驚愕の表情を浮かべるヤツのその身体へと容赦無く、左を叩き込み、ヤツの身体を空中へと一瞬滞空させた。そしてその滞空したヤツの身体へと再度叩き伏せるようにした右を振りかぶり、呻いているヤツの背中へと振り下ろす！！

「ガハアアア！！クソ・・・テメエエエエエ！！」

「何ッ！！」

地面に再びバウンドしたフリードは、怒りの咆吼をあげると、その身体中からA I D Aによる黒い槍を生み出した。そしてその槍によって自分へと向かってくる俺を、串刺しにしようとしてくる。

身体中から槍を生やすなどという予想していなかったフリードのその反撃方法に驚き、ほんの一瞬とはいえ、身体の動きが止まってしまった。

しかし、すぐに俺は、迫り来る槍山の攻撃から逃れようと、前へと進もうとしていた身体を右腕を地面に突き刺して無理矢理停止させる。

そして、槍山の矛先から何とか逃れようと全力で後ろへと跳躍。しかし槍山の迫り来るスピードはかなり早い。その上、一瞬とは言え動きを止めてしまっていた為だろう、どうやら槍山が俺へと到達する方が早いみたいだ。

これは、無傷で切り抜けるのは無理っばいな。

なんとか受けるダメージを軽減させられればと言つ気持ちで身体の前で腕を交差させ、防御の態勢をとる。が、俺が槍山によつてもたらされるであろう痛みにも耐える為には歯を食い縛つた瞬間、頭の中にプリムラの声が響いた。

『サセナイヨ! - 』

ギヤギヤギヤギヤ!!!

「ナ・・・ニイ・・・!!」

フリードの驚愕と悔しさに満ちた声がヤツの口から発せられた。俺が回避不可能と判断したヤツが放つた槍山は、プリムラが張つてくれた白い壁のような物によつて、一本も俺の身体へと突き刺さることはなかった。

金属同士が擦れ合うような耳障りな音を発して、全てがその壁によつて停止。槍山による攻撃は、プリムラによつて俺へと届くことなく完全に防がれた。

あぶなっ・・・正直こんな攻撃方法があるなんて全く想定してなかったから、一発は貰う覚悟だったけど、プリムラに助けられたな・

「サンキュープリムラ。おかげで助かったよ。」

『カズマ、マモルツテヤクソクシタ - 』

「!!!ああ、そうだったな・・・ありがとう。」

プリムラのその言葉に思わず頬が緩むと同時に、微かな悲しみがわき上がる。キリカとの約束をしっかりと守ってくれているんだな、プリムラは・・・なら、俺もすっかりと約束を守らないとな!!

「よし、いくぞ!!」

気合いを入れる意味も込めて、一言大きな声でそう言うと、俺は改めてフリードへと駆け出す。

「クソツ・・・クルンジャネエエエエ!!」

しかしヤツも俺を近づかせまいと、AIDAで生み出し、自身の身体に纏うようにして発生させている槍山を、まるで砲弾の如く射出させ、擬似的な弾幕を張る。

まるで雨のように次々と降り注いで来る槍を、時にステップを踏み、時に拳で殴り飛ばし、時にプリムラが作り出した壁によって防ぎ、一直線にフリードの元へと駆け抜けていく。

そうしてフリードの槍による攻撃をくぐり抜け、遂にヤツをシエルブリットの射程内に捕らえた!!

このチャンスを逃すわけにはいかない!!コイツで決めてやる!!

「行くぞ、プリムラ!!」

『ワカッター!!』

俺の言葉に、そうプリムラが威勢良く返事を返してきたのを聞いた俺は、アイツへと引導を渡すための一撃を喰らわしてやるために、

槍が突き刺さった部分から感じる激痛を、頭の隅へと押しやるようにして痛みを遮断する。すると、今までは無かったことなのだが、噴射される光がここに来ていきなり増した。それによって回転速度が増していき、俺の身体へと突き刺さるうとしてくる槍を弾くまでになった。

「クソ、クソクソクソ！！！！キエロ、キエロキエロキエロキエロオオオオオオオオオオ！！！！」

突き刺さらない槍を、更に打ち出しながら、錯乱したかのようにそう叫ぶフリード。

だが、その槍は今の俺には一つたりとも突き刺さることはない。回転する俺の身体は、まるで俺自体が一つの弾丸になったかのように、ヤツの攻撃の中を一直線にフリードへと飛翔する。そして遂に……！！

「ファーストブリットオオオオオオオオオオ！！！！」

ズドオン！！

ギユイイイイ……パキッン！！

「ギヤアアアアアアアアアアアア！！！！」

俺の拳が、ヤツの身体を貫いた！！ユニークアーツ特有の、空間が捻れ、それが戻ると同時に、ガラスが割れるような音が響くと同時に、フリードの口から凄まじい絶叫が響き渡る。

そして吹き飛ばされたアイツは、地面を何度かバウンドした後、力無く地面に横たわったまま、呻き声を上げていた。

「ハア・・・ハア・・・どうだ・・・!!」

荒くなってしまった息を整えながら、俺は、地面に横たわったままのフリードの姿を油断無く睨み付ける。

かなりのダメージを与えた筈だが、それでも油断は出来ない。AI D Aなんて普通じゃ無いモノを身に宿し、なおかつその力を使っているんだ。普通の判断なんてアイツには適応されるわけがない。

「グ・・・ガア・・・!!」

「!!やっぱ、まだ足りないってか・・・!!」

呻き声を上げながらも身体を起こそうとしているフリードの姿を見た俺は、再びシエルブリットを放つモーションをとりながらヤツを見据える。

「コ・・・ロス・・・コロ・・・ス・・・!!」

身を起こしたヤツは、フラフラになりながらも、俺へと殺気に満ちた瞳を向けてくる。フラフラなヤツの様子からして、やっぱりかなりのダメージを与えられたことは間違いない。だが、ヤツの瞳。その瞳に写る狂気の陰は収まるどころか、一層深くなっていた。

『カズマ、ヤツパリアイツコワイ』

「大丈夫だよ、プリムラ。もうすぐ、もうすぐ終わるさ・・・」

『デーモ、ナンダカ、サツキヨリモコワイヨ、カズマー』

ヤツの更に深まった狂気に満ちた瞳に怯えるプリムラを落ち着かせた俺は、自分自身へと言い聞かせるようにしてプリムラへとそう告げた。

しかし、さっきよりもフリードの狂気が強いせいか、プリムラが中々落ち着かない。

「落ち着いてくれ、プリム」コロス・・・」！！なんだ・・・！？」

俺がプリムラを落ち着かせようと話しかけた瞬間、フリードの口から、ヤツの声とは違う、背筋がゾツとするような声が発せられた。

「コロス・・・コロスウウウウウウウウ！！！！ウガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

ギユワアアアアア！！！！

「！！なんだ、今度は！？」

ヤツが獣のように叫んだ瞬間・・・世界が、変わった。さっきまでの、冥界への入り口のような暗いフィールドでもない、宇宙のような空間。地面もなく、天井さえもないここは、完全な異質な空間。しかし、俺には何故かここが懐かしく感じられた。

「・・・！！フリードは！！フリードはどこに行った！！！！」

突然フィールドが変化したことにほんの少しの間唾然としていた俺は、ふと我に返って、さっきまで俺へと殺気を満載にした視線を

送っていたフリードがいなくなっていたことに唐突に気がついた。

『ーカズマ、アレ!!!』

「!!!オイオイ、マジかよ・・・!!!」

ヤツを探すためにこの空間をキョロキョロと見回していた俺へとプリムラが、声を上げて、上を見るようにと言ってきた。

そして、俺がプリムラに言われた場所を見てみる・・・すると、信じられないことに、そこには巨大なまるで単細胞生物のようなバケモノが泳いでおり、しばらくすると俺の方へと向かってきたのだった。

「グウウウウウウ・・・グオオオオオオオオ!!!」

第三十二話（後書き）

次回はアバター戦です。

それでは、次回もどうぞよろしくお願いいたします！！

第三十三話（前書き）

どうも、ジーユーです。

今回、ちょっとだけですけど、カズマ君の新しい力を書いています。

第三十三話

SIDEカズマ

「なんだ、ここ・・・!!」

俺は、突然フィールドがガラリと変わってしまったことに、狼狽していた。さっきまでは、冥界の入り口のようなエルディ・ルーだったはずなのに、フリードが獣のような咆哮を上げた途端に、まるで宇宙を模しているかのような空間へと変貌してしまった。

モルガナ達との戦いでも、エリアが変貌することは稀にあつたし、そのエリアを隔離しての戦闘もR：1の時には確かにあつたが・・・

「まさかAIDAってのがここまでの力を持つてたとはね・・・!!」

AIDAがここまでの力を持つてたつてのは、予想してなかったから、さすがに驚いたな・・・しかも・・・

「あれが本性つてわけかな・・・!!」

『グオオオオオオオオオオ・・・』

頭上を漂っている単細胞生物みたいな姿をした化け物を仰ぎ見ながら、俺はそう呟いた。さっきまでのフリードの面影なんて一切感じられない、真正銘の化け物の姿をした奴は、ユラユラと二本の触手を揺らして、俺へと殺気を向けていた。

同じく、やけにタイミング良く吠えたから、もしかしたら意識がほんの少しでもあるって事なのかな？

「まあ、そんなこと気にしてる余裕もないみたいだけどな!!」

吠えた直後にバケモノとなったフリードから放たれた黒い俺の身長と同じくらいの太さの砲撃・・・いや、ビームといったほうが適切か。それを、プリムラの助けを借りて何とか回避するべく、空中を漂っているだけの体を何とか射線上から抜け出そうと行動する。

プリムラが張ってくれた白い防御壁と、黒い砲撃がぶつかり合い、すさまじい圧力が俺の体へと襲いかかってきた。壁と砲撃がぶつかり合う音はすさまじく、今にもプリムラが作ってくれた白い防御壁が破られそうになる。しかし、俺は白い防御壁とともに、俺の真横にプリムラが作り上げてくれた白い足場を蹴り、何とか砲撃をしながらか射線上より退避する。

「はぁ・・・はぁ・・・何とかしのいだけど・・・たった一撃でコレか・・・キツいな・・・」

たった一撃。たった一撃放たれた砲撃をしのいだけで息も絶え絶えになりながら、俺は頭上で悠々と俺を見下すように漂っているAIDAを・・・フリードを見上げた。

『グオオオオオオオオオオオオオ!!』

「クソ、またかよ!!」

再び奴の咆哮と共に放たれる黒い砲撃を俺は今度は防ぐことはせずに、形成された足場を蹴って、その射線上から離脱する。

正直、何発も何発もあの砲撃を喰らってしまえば、いくらプリムラの持つ力が奴と同じような力・・・イリーガルな力を誇っているとしても、そう長く持ちこたえられはしない。

『グオオオオオ！！グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！』

幾度も放たれる砲撃を回避していた俺の姿に、苛立ったのか、咆哮を上げたフリードは、遠距離攻撃から直接攻撃に切り替えたらしく、砲撃を放った直後に、俺に向かって突進してくる。

俺の身長の数倍ある巨体にもかかわらず、なかなかのスピードで突進をかけてきたフリードの巨体を回避した俺は、奴の側面に回り込み、この姿となった奴の体へと初めての攻撃を加えた。

「オラアアアア！！」

バチイイイイン！！

『グウウ・・・グオオオオオ！！』

咆哮を上げて繰り出した一撃はしかし、さほど効いた様子もなく、拳を繰り出した状態の俺へと奴は、その触手による攻撃を加くる。

「チイツツ！！」

触手を鞭のようにして放たれたその攻撃は、まるで触手自体が一つの生き物であるかのように、回避しようとする後ろに跳躍した俺を追って、方向を転換し、追撃をかけてきた。

「クソツ、しつこいんだよ!!」

プリムラの力が宿ったシエルブリットを触手へと振り下ろした俺は、その場で再び跳躍し、奴から放たれた泡のような砲弾を回避する。

砲撃のような威力はないだろうけど、だからと言ってわざわざ当たってやる筋合もない。プリムラが張ってくれた防御壁を眼前に展開しながら俺は、奴から距離をとる。

正直、さっきの一撃が全く効いた様子がないことから、生半可な攻撃は全く意味をなさないと見たほうがいいだろうな。おまけに、触手と砲弾がうざったいため、近づいてユニークアーツを叩き込むわけにもいかないつと・・・

「八方塞がりつてか・・・!!」

仕方ない・・・今は回避に専念して、隙を見つけるくらいしかないか・・・

そう判断した俺は、奴の砲撃を回避し、そのほかの攻撃を防ぎ、時に回避し、隙を見つけて反撃すべく、奴を観察する。

しかし、奴は突然、俺を消滅させるべく放っていた砲撃や泡のような砲弾の雨をなぜだか唐突にピタリと止めた。

そして、まるで何かを探すかのように、触手をあたりへと伸ばし、何かをやり始めた。

「何だ・・・何でいきなり攻撃を・・・」

『・カズマ、アレ!!』

プリムラが俺の中で叫ぶとともに、奴はあたりへと伸ばしていた触手の一本をまるで俺へと見せつけるようにして伸ばし、その触手によって掴まれているモノを俺に見えるように掲げてきた。

「アイツツ・・・まさか・・・なんで・・・揺光!!?」

その触手によって握られていたのは、さっきまで奴の作りだした十字架に貼り付けられ、気を失っている揺光の姿だった。

「お前・・・!!キリカに続いて・・・人質ってことか!!!!フリード!!!!?」

俺が奴へとそう叫ぶと、まるでその通りだとしてもいつかのように、一鳴きすると、揺光を握っている触手をグツときつく締め上げ始めた。

「ウウ・・・!!」

「揺光!!」

動けない。揺光を人質に取った奴は、俺が揺光を助けるために動こうとした瞬間、ズイツと俺へとまるで、「揺光がどうなってもいいの?」と問うように、持ち上げ、俺の行動を制した。

「クソ・・・!!苦しめるなら、俺を苦しめればいいだろ!!揺光を放せ!!」

『グウウウウ・・・グオオオオオオオオオオ!!』

俺のその叫びに奴は、まるで笑い声を上げているかのように咆哮をあげ、俺を痛みつけるために、触手での攻撃を開始した。

「ガア・・・！！ゲウツ！！」

『グオオオオ！！グアアアアア！！』

俺が苦しみの声を上げるたび、奴は喜んでいるかのように、触手を打ち付けてくる。鞭で打たれたかのような痛みが俺を襲うが、耐える。揺光に危害を加えられるわけにはいかない・・・！！

『カズマ！！イマカベヲ・・・』

「ダメだ！！グアツ・・・！！・・・ダメだ、プリムラ・・・！！」

『デモ、カズマ！！コノママジャ、カズマガシンジャウヨ！！』

プリムラが俺の苦しむ姿に悲痛な声を上げるが、ダメなんだ・・・！！

今ここでもしも俺が防御なんてしたら、あいつは揺光に何をするか分からない・・・いや、さっきまで本気で揺光のことを殺そうとしてたんだ。最悪の場合は、あいつは躊躇無く、揺光を・・・殺す・・・！！

それだけは・・・それだけはダメだ・・・！！もう、誰かが・・・俺の大切な人がいなくなるなんて、イヤなんだ・・・！！

「グアアアアア！！！！」

『 - カズマ!!! - 』

鞭と化した触手が、俺の体の肉を削ぐ。俺の、カズマを構成しているデータが削られ、その痛みが現実の俺へと反映され、まるで現実の体の肉を削いだかのような激痛が襲いにかかる。

そして、奴は俺が苦しむさまを楽しむかのように・・・いや、確実に楽しんでいるのだろう。俺の激痛に歪んだ顔を見るために奴は、何度も何度も俺の体へと触手を叩き込んできた。

「グ・・・ア・・・」

幾度も触手によって打ち据えられた俺の身体は、俺自身の意志に関係なく、地面に倒れ込んでしまう・・・意識が・・・朦朧としてきやがったな・・・さつきまでと全く同じ展開とはな・・・チクシヨウ・・・折角・・・キリ力から・・・力を貰ったつてのに・・・

『グオオオオオ!!!グオオオオオオオオオ!!!』

勝ち誇ったかのようなフリードの声が聞こえる・・・朦朧とする意識の中で、俺はこれで終わるのかと思いつながら、咆吼をあげるフリードへと目を向ける。

霞行く俺の視界に写ったのは、ひれ伏した俺の姿に、咆吼を上げ、嘲笑うかのようにして俺の周りに触手を打ち付けるフリードと、そのフリードの触手によって捕らえられ、苦しみの声を漏らしている揺光の姿だった・・・

「いいの・・・これでいいの・・・」

「揺・・・光・・・!!!」

ダメだ・・・まだ・・・終われない・・・!!

「・・・あなたに会えて、幸せだった・・・」

最早立ち上がることさえ困難な身体だが、それに鞭を打つ。こんなところで暢気に倒れてなんていられない・・・!!

「・・・わたしは、あなたの笑顔が好きだから」

まだ、揺光が苦しんでるんだ・・・このままじゃ・・・このままじゃあの時と・・・!!アウラを犠牲にってしまったあの時と・・・!!

「うん!ありがとう、カズマ!」

「一緒じゃないか・・・!!」

もう・・・もう、誰かを失うのは嫌なんだ・・・俺は・・・俺は・・・!!揺光を・・・!!

「守るんだ・・・!!」

「ポーンッ・・・」

俺の中で何かが繋がり・・・八長調ラ音が・・・響いた。

右腕を掲げる。突如俺の身体に浮かび上がった白い紋様が、俺の心臓と連動するかのようになり、光り輝きながら鼓動する。

『グウウウ・・・グオオオオオオオ!!!』

俺が放つ光が、自身に脅威になると感じたのだろう。触手で揺光を拘束したままだが、さつきまでは俺を嘲笑うかのように漂っていたフリードが、急に慌てたように俺へと攻撃を仕掛けてくる。だが・

『ーカズマノジヤマハ、サセナイヨ!!! - 』

俺の身体を守るようにして、プリムラがそう叫び、突進してくるヤツの巨体を生み出した白い壁で受け止める。尚も壁を突破して俺へと攻撃を仕掛けてこようとするフリードだが、プリムラが生み出した壁は非常に強固で、何度も何度も身体を打ち付けても、ビクともしなかった。

目を・・・醒ませ・・・

「もつとだ・・・」

”彼女”から与えられた力・・・守るための力・・・!!

「もつと・・・もつと・・・!!」

その力を・・・”もう一人の俺”!!その力を!!今!!ここで
!!!

「もつと輝けええええ!!」

解き放つ！！！！！！

「ボレアス！！！！！！」

カツ！！！！

『グオオオオオオオオオ！！！！』

目映い光が俺とプリムラを包み込む。そして光がプリムラを包み込んだ瞬間、プリムラが作り出してくれていた光の壁が消え去り、ここぞとばかりにフリードが攻めてくる。

しかし・・・

ガシッ！！

『グオオオオ！！？』

俺は、光の中から腕を伸ばし、ヤツの身体を受け止めた。通常ならば、大きさが違いすぎるのだが、今の俺にとっては造作もないことだ。

そして、光が止み、俺はヤツの前に姿を現した。

『グウウウウウウ・・・！！！！』

白と金の巨大な姿をした俺・・・ボレアスの姿を見たヤツは、怯えるように鳴いた。さっきまでの俺を嘲笑うような鳴き声ではない。完全に、俺を・・・ボレアスと化した俺を恐れるような声である。そうして怯えるヤツに向かって、俺は佇んだ状態で一言だけ、言い

放った。

『悪いが……すぐに終わらせて貰うぞ。』

第三十三話（後書き）

どうでしたでしょうか？

カズマ君のアドバイザー、ボレアスです。

語源などは後日発表しますので、どうぞお楽しみに！！！！

第三十四話（前書き）

おまたせしました、三十四話です。

四日間隔から、更にペースが落ちていっていますが、一週間に一回は更新出来るよう頑張りますので、これからもよろしくお願いします。

第三十四話

SIDEカズマ

「……………」

グツ、グツ……

ボレアスと化した俺は、鋭利な刃物のようになった手を握って開くと、言った動作をしながら、身体の調子確かめていた。

何かが繋がったような感覚の後、俺の叫びによって変化した俺の身体。しかし、頭では確かに変化したと理解しているのだが、何故だが俺はむしろボレアスと化した今の方が、自然な感じがしていた。完全に俺と馴染んでいるこのボレアスという、完全なイレギュラーなモノに変身した姿。そんなものが何故こんなにも馴染むのか。その理由は分からないが……

「……そんなことは、どうでもいいか……」

そう。そんなことはどうでもいい。重要なのは……

揺光を守れるかどうかなのだから。

『グウウウウウウ……』

ボレアスへと姿を変えた俺におびえるような声を漏らす。人としての理性を失い、バケモノと化したフリードは、その獣と同じ、本

能でこの俺の姿・・・ボレアスの脅威を感じ取っているようだ。そして、俺は警戒しながらも、俺の様子を窺っているフリードへと視線を向ける。

俺に視線を向けられたヤツは、その巨体をビクツと揺らす。しかし、次の瞬間、ヤツは何かを決心したかのように吠えたと、俺に向けて黒い砲撃を放ってきた。

ボレアスへと化すまでは、掠ることさえも命取りに感じていた黒い光の奔流。しかし、今の俺にはこの程度の攻撃にはさほど脅威を感じられなかった。何故だかは分からない・・・けれど、俺の中にはある確信があった。もうこの程度の攻撃は・・・俺の脅威になり得ないと言う確信が。

その何の根拠もない、だが何故か信じられるその確信に従って俺は、迫りくる漆黒の光の奔流に向けて右腕をかざし、一言、呟いた。

「・・・喰らえ、ボレアス」

ギョオオオオオオ・・・！！！！

俺がそう呟くと同時に、背中白いマントのようなものが反応し、瞬時に球体へと姿を変えた。それは、さっきまでプリムラが作り出していたくれた壁と同じ、純白の球体。

そしてその球体は、俺へと迫り来る黒い光の奔流に触れた瞬間・・・それを消し去った。

『・・・ッ！！！！！！！！』

フリードの息を飲んだかのような雰囲気か俺へと伝わってくる。
それはそうだろう。

一瞬。

ほんの一瞬のうちに、さっきまでは確実に掠るだけで俺の命を飲み込めていただろう砲撃。その黒い砲撃の光を、一瞬で消し去ってしまったのだ。

しかし、それだけでは無い。

次の瞬間、白い球体から、一フリードの撃った砲撃と同じサイズの白い光が放たれた《……………》。

『ツー！グギイイイ！』

自身の放った砲撃と同サイズの光がフリードを襲う。それを喰らい、苦しそうな声を上げるフリードの姿に、その白い球体は、嬉しそうな声を上げた。

『カズマ、スゴイヨ！ボク、アンナコトガデキタヨ！』

「ああ。助かったよ、プリムラ」

フリードの攻撃を一瞬で消し去り、同サイズの砲撃を放った白い球体から、プリムラの興奮したような声が響く。

そう。一瞬の内にあの黒い光の奔流を消し去った……否、砲撃を喰らった白いこの球体の正体は……プリムラだ。

一撃。その一撃によってヤツは、俺へと突進を仕掛けてきた最初の場所へと吹き飛んだ。

『グウウウウウウ……!!!!』

「気づいたか……返してもらったぞ、このクソ野郎……!!」

呻き声をあげながら体制を整えようとしたヤツは、自身の触手によって捕らえていたはずの揺光がないことに気づき、そして、プリムラが優しく包むようにして揺光を確保している事によろやく気づいたみたいだ。

『グウウウ……!!!!ガアアアアアア!!!!』

揺光を奪われたことに激昂したヤツは、雄叫びを上げる。そして自身の周囲に黒い球体を生み出し、それを砲弾のごとく放ってきた。

「プリムラ、揺光を頼む!!」

『・デモ、ソレジャアカズマガ……』

「俺は大丈夫だ!だから揺光を……揺光を守ってくれ!!」

『・カズマ……ワカタ!マカセテ!!』

「ああ……すぐに、終わらせてやる……!!」

俺の頼みを聞き入れてくれたプリムラは、揺光の全身を包むように球体を展開すると、俺から離れていく。

そして俺は、あえて俺へと降り注ぐ砲弾の雨の中に身を投じた。
かなりの数だが、この程度、容易く避けられる!!

『ガアアアア!!!ガアアアアアアア!!!』

空中を飛翔しながら攻撃を回避する俺へと次々と砲弾を撃つてくるフリード。ヤツの上げる咆哮はまるで、玩具を取り上げられた幼児のような叫び声だ。

「揺光を返せとでも言いたいのか・・・?ふざけんなよ、揺光を傷つけたくせによぉ!!」

放たれ続ける砲弾の雨の中を飛翔し、ヤツへと接近していた俺は、ヤツの上げる咆哮の意味を何となくだが理解できた。

揺光を傷つけたくせしやがって・・・揺光を殺そうとしやがったくせに・・・!!!!

「テメエなんかには・・・お前見たいなヤツにはなあ!!!」

直撃コースにあつた砲弾を右腕で消し飛ばし、ヤツへと叫ぶ。

「揺光は・・・智香は、渡さねえ・・・!!守るって誓ったんだ、今度こそ!!だから・・・!!!!」

砲弾に向け、左を突き出し、

「テメエは、ここで終わらせる・・・!!!!」

そう、ヤツへと宣言した。

キリカは、守りきれなかった。けど、今度こそ・・・揺光は・・・
智香は、守ってみせる！！

『ガアアアアアアアアア！！！！！！！！！！』

俺の言葉を忌々しく感じたのだろうか。ヤツは怒りをにじませた
激しい咆哮を上げると、生み出す砲弾の量を倍近くに増やし、それ
を次々と放ち始めた。けど、この程度・・・！！

「ウオオオオオオオ！！！」

叫び声を上げながら、一気にヤツへと接近していく。ヤツへと近
づくにつれ、激しくなる砲弾の雨。いや、すでに雨と呼べる量じゃ
ないな。

俺に迫りくる黒い砲弾は、すでに俺の立ちふさがる壁のように見
えるほどにその量を増やしていた。普通ならばここは一旦退くとこ
ろだ。

いつもの、今までの俺ならばそうしただろう。それが普通で、当
たり前の行動だ。

けど、今なら・・・今なら、アレを打ち破れる・・・！！

こいつならば・・・彼女から受け取った、このボレアスの力なら
ば、この程度の障害、なんの意味もない！！

心の中でそう叫び、俺は右腕を頭上に構え、力を集中させていく。
あの壁を・・・フリードを打ち抜く、その一撃を放つために・・・
！！

『グオオオオオオオオオオ!!!』

これから起こることの危険性を察知したのか、ヤツはそれまで自分の周りに待機させていた砲弾を一斉に俺へと放った。

迫りくる黒い砲弾は、まさに壁だ。あれを喰らってしまったえば、ボレアスへと化した俺でも、ひとたまりもないだろうな。

だが、悪いな。俺の方が・・・

「喰らえ・・・!!!」

少し、早かった・・・!!!

「抗イノ光」

ドドドドドドドドツツツ!!!

爆発音が、響き渡った。

右腕から放たれた、黄金の光を放つ一本の杭、「抗イノ光」が砲弾の壁に突き刺さり、砲弾の一部を消し飛ばした。そして、他の砲弾が連鎖的に爆発。たった一発で、壁と見紛うほどの砲弾全てが消し飛んだ。

砲弾の壁を消し飛ばした杭は、そのままフリードへと迫るが、ヤツはかるうじて杭を躲してしまった。

『グウウ……！！！！』

一瞬で全ての砲弾を消し飛ばされ、あわやその数多の砲弾を消し飛ばした杭に直撃しそうになったフリードは、怯むような声を発した。遠距離の攻撃手段を全て絶たれ、その攻撃を喰らいそうになつたんだ。そうなるのも分かるが……

「これくらいじゃ、すまさねえぞ……！！」

揺光、キリ力を傷付けたんだ。これくらいで終わると思うな……！！0から100へと瞬時に加速し、ヤツへと猛スピードで接近する。一瞬の内にヤツの懐に飛び込んだ俺は、その勢いを乗せた拳を、弓矢が放たれるかの如く、一気に叩き込んだ。

『グオオオオオオ！！！！』

さっき殴り飛ばした時よりも速い速度でフリードが吹き飛んでいくが、今度はそれを見送つたりはしない。再び0から100へと加速する。そのスピードは、さっき証明されたように、かなり速い。

しかし、フリードのヤツもこれ以上の追撃を嫌つたのか、先程まどとは比べものにならない程少ないが、再び黒い砲弾を生み出し、それを射出してきた。

「無駄だ！！」

迫り来る砲弾の中から、直撃コースにあるモノだけを選び抜き、それを殴り消していく。さっきも言つたとおり、最早この程度の攻撃じゃ、俺は止められねえぞ、フリード！！

「ウオオオオオオ!!」

両腕を振り、砲弾を掻き消しながら真っ直ぐに、フリードを目標し、飛翔する。ヤツへと近づいていくにつれ、弾幕が厚くなってくるが、この程度!!そして、一直線にフリードへと飛翔し、今、ようやく……!!

「追いついたぜ……!!」

『グギイ!!』

俺から何とか離れようと後退を続けていたフリードにようやく追いついた。苦し紛れに放たれた一発の砲弾を右腕で消し去り、そのまま振り上げた右腕を、振り下ろす!!

「オラア!!」

ドオン!

まるで大砲でも発射したような轟音と共に、ヤツの身体へと拳が突き刺さった。

『グオオオオオオ……!!』

「まだ……!!」

二発目……!!

ドオオン!!

『グオオオオオ・・・！！！！』

「フツ！！」

三発目・・・！！！！

ドオツツン！！！！

『グオオオオオ・・・！！！！！！』

五発、六発、七発、八発・・・！！！！！！

ドオンツ、ドオツン、ドオツツン、ドゴオツン・・・！！！！

拳が直撃する度に響き渡る轟音。拳を振るっている自分にも、正確な威力を推し量ることは出来ない程の力を見せているみたいだな。

絶え間なく拳を振るい、確実にヤツを仕留めるため俺は、振りかぶった左に、今まで以上の力を込め、ヤツの身体へと、その力を解き放つ・・・！！！！

「ハアツ！！」

バツゴオオン！！！！！！

『ギイアアアアアア！！！！！！！！』

今までで一番大きな轟音がこの空間に響き渡り、フリードが悶絶し始めた。

けど、ここで手は緩めない。これで決めてやるよ……!!

「こいつで、止めだ……!!!!」

―滅ビ呼ブ煌メキ―

技を発動させた瞬間、俺の周囲に黄金の光を放つ八本の剣―滅ビ呼ブ煌メキ―が現れる。俺は、その剣に、ヤツを捕らえるように指示を飛ばした。

―捕らえる―

『グオオ!!』

俺が指示を出した瞬間、―滅ビ呼ブ煌メキ―は瞬時にフリードの周囲に滞空し、ヤツの身体を貫き、その場に拘束した。拘束されたフリードは、身をよじり、何とか剣の拘束から抜けだそうともがく。だが、そんな事じゃ、その剣は外せない。

そして俺は、―滅ビ呼ブ煌メキ―に拘束され、もがくフリードに向けて、拳を固め、光を放ち始めた両腕を向ける。最後の―撃を・・ヤツに止めを・・刺すために。

「行くぜ……!!」

―命喰ラウ極光―

カッツッ!!!

『グオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!』

光が、フリードを飲み込んだ。

俺が放った光一命喰らう極光一を浴びたフリードは、今までに無い声で、叫び、苦しみの咆吼を上げた。光は、フリードを飲み込んだまましばらく照射され、十秒ほど経った頃、ようやく光が止んだ。

『グウ・・・オ・・・オ・・・』

満身創痍と簡単に分かるほどに疲弊したヤツは、かろうじて呻き声を漏らす。しかし、それはもう虫の息だと分かるくらいに弱々しい。

パキイン・・・!!

フリードの身体から、何かが割れたような音が響き渡った。

「まさか、俺が”コレ”をやることになるなんてな・・・」

内心苦笑しながら、そう呟いた俺は、右腕を頭上に掲げ、拳を握る。ここまでは、さっき放った一抗イノ光と一緒にだ。ここまではな・・・

けど、ここからは・・・違う!

掲げる右の拳を開き、そこに、砲身を・・・作り上げる。

作り上げられた砲身は、八枚の羽が広がっているような形状をした、究極全てを消し去るモノの切り札。

それは、かつて俺が目にしてきたモノとは若干違うが、本質は同じだ。

そう。

モルガナと同じ、バケモノとなったフリードを消し去ると言う点で。

どんなにヤツがバケモノとなっていようが、コレを喰らえば、全て終わる。

だから・・・！！

「消える・・・！！！」

バシユツ！！

『グオオオオオオオオ・・・！！！！！！！！』

ーデータドレイナー

砲身から打ち出されたそれがヤツを打ち抜き、ヤツを構成していたデータが、俺へと流れ込んでくる。

そして、データの吸収が終わった瞬間。

『グ・・・ア・・・』

ドスンッ・・・

この戦いの、決着が、着いたんだ。

第三十四話（後書き）

どうでしたでしょうか？

ボレアスの設定やプリムラの設定に関しては次回辺りで明かしている
ことと思います。

それでは、また次回もよろしくお願いします。

第三十五話（前書き）

すみません、前回、一週間に一度は投稿するとか言っておきながら、二日もオーバーしてしまいました・・・

第三十五話

S I D E 八咫

「相変わらず、興味深い存在だな、君は・・・」

知識の蛇に映し出されていたカズマとフリードと言うPCのイリガルな戦いの様子を見終えた私は、倒れ伏したフリードを見下ろすカズマに向かってそう呟いた。

「全く・・・CC社でも、A I D Aに対する対抗策が見つからないと言うのに、個人の力でA I D Aを撃破してしまうとはね・・・昔と同じく、行き当たりばつたりに行動を起こす筈が、いつの間にか結果を残すのだね」

The world R：2に突如として現れた謎の存在、A I D A。明らかなイリガルな存在であるA I D Aについてはまだ調査中であり、明確な対抗手段でさえ未だ見つかつてはいない。

今回、私がカズマに対してPCキリカの情報を与えたのもこの機会に何かしらA I D Aに関する情報が手に入ればいいと言った打算的な考えからだった。

結果は、予想以上の成果と言えよう。A I D Aに関してのデータだけではなく、A I D Aを撃破出来る手段を持った者を見つけられたのだから。

「さて、どう対処したものか・・・」

A I D Aを倒す事が出来る彼の力は、何の打開策も講じられていない今のCC社上層部にとっては非常に魅力的に見えることだろう。彼らにとってカズマは1ユーザーにすぎず、そのPCデータを解析し、何らかの策を用いようとする事は明白。

だが・・・

『もつとだ・・・もつと輝け！！ボレアス！！！！』

カズマがそう叫ぶと同時に、彼の身体から光が発し、一瞬の内に巨大な人型へと変化した瞬間の映像を眺めながら、私は彼に対してそう言った手段は執れないのでは無いのかと言う予感、いや、ある種の確信があった。

ボレアス。カズマがそう呼び、A I D Aを倒したこの巨人は、あくまで推測なのだが、かつての勇者カイトが所持していた『腕輪』と同じ、明らかな仕様外のモノだろう。

その顔には口や鼻と言ったモノは見られず、まるで獣を模したかのような仮面に覆われている。全体的にスマートな印象だが、その四肢はもまた獣の爪のような鋭い手足をしていて、力強さを感じさせており、このボレアスが内に持つ力を体現しているかのようだ。

しかし、重要なのは見かけなどではない。

「やはり、このデータのパターンはアウラのデータが使用されている・・・コレを用意したのは、アウラと見るべきなのか・・・？」

かつてThe worldを管理していた究極AIであるアウラ。

簡易的な調査の結果であり、確証は無いが、ボレアスからはアウラと同じデータが一部検出された。

「アウラの子・・・とても言うのか・・・」

ボレアスとは、ギリシア神話のエアースの子であり、北風を象徴する神として記されており、北風を象徴する神である。

エアースとは、ローマ神話のアウローラ。つまり、アウラの子であると言う意味なのだろう。

既にこの世界から消えたと思われるいていた究極Aエアウラ。その彼女が作り出したと思われる異質な力、ボレアス。

「そして・・・」

『喰らえ・・・ボレアス』

彼の指示通りに行動し、なおかつ彼だけではなく、PC揺光をも自ら救出する意志を示した異質のAIDAである名称プリムラ。

AIDAでありながら、前宿主であったPCキリカにも何の悪影響を及ぼさなかったようだが、変異種なのだろうか・・・いや、それよりも、このプリムラ呼ばれるAIDAを解析出来れば、よりAIDAを知ることが出来るのではないだろうか・・・

「キミは本当に、興味深いな・・・カズマ」

フリードへと近づいていくカズマの姿を見ながら、私は口元を歪めながらそう呟いた。

しかし……

「ムッ……何だ？」

カズマ達を監視していた映像が、突然途絶えてしまった。調べてみたところ、サーバー自体には何の問題も無いようだが……

「また、何か起きているのかな、カズマ……」

私は、この時カズマの居る場所で何か起きていているような予感がし、そう虚空に向かって呟いた。

SIDEカズマ

「終わったよな……」

『-ウン。オワッタヨ、カズマー』

あの不可思議な空間でフリードを倒した俺は、元の冥界の入り口のようなフィールド、死所 エルディ・ルーへと戻ってきた。

正直、さっきまでの戦闘で勝利したとはいえ、あれで本当に終わ

りかどうかを今までの経験上、中々信じられなかった俺は、周囲を警戒しながら、思わずそう呟き、プリムラの終わったという言葉を聞き、ようやく肩の力を抜くことができた。

「！そっだ、揺光は・・・！！」

俺は慌てて、フリードによってあの空間へと連れ込まれた彼女の姿があるかどうか辺りを見渡す。

プリムラがしっかりと確保してくれていたとは理解しているが、それでもやっぱり自分の目で見ないと安心出来ない。

『ーダイジヨウブ、アソコニイルヨー』

そう言ってプリムラが示した方向を向くと、そこには穏やかな顔をして眠る揺光の姿があった。

「揺光・・・ありがとな、プリムラ」

揺光の無事な姿を見て、ホッと一息つき、揺光の穏やかな寝顔を見つめていると、自然と笑みが零れた。

「グ・・・ウウ・・・」

『・カズマ、アソコー』

「フリード・・・」

揺光の姿を見ていた俺に、プリムラが声を掛けてきた。そのプリムラに示された場所にいたのは、うめき声を上げながら倒れているフリードだった。

正直、意識があるかどうかは定かじやないがその場合はたたき起してでも聞かなきゃいけない。ヤツがどうやってあの力、A I D A を手に入れたのかを。

「あゝ、悪いけど、そいつは置いていってくれないかな？」

A I D A をどうやって手に入れたのか。それを聞こうとフリードの傍へと歩き出そうとした俺は、背後から聞き覚えの無い声で声を掛けられ、バツと振り返った。

そこには、なんだかめんどくさそうに頭を掻きながら、俺達の方へと歩みを進めてくる見慣れない重槍士の姿があった。

『・！・！アノヒト、イツカラ・・・！・！』

「！！なんだ、あんた・・・！！」

(全く気付かなかった・・・！！俺はともかく、プリムラさえも・・・！？)

自慢ではないが、俺の気配を察知する能力は、そこそのモノだと自負している。

R：1時代から隠れているプレイヤーの気配などを良く察知出来たりしていたから、普通のプレイヤーならば、大抵声を掛けられる前にいるかどうかと言う事ぐらいならば分かるくらいのモノは持っているつもりだ。

しかし、それも絶対ではないから、俺だけが気づかなかったと言う事ならば、まあ納得は出来る。

だが、ヤツの気配は、プリムラさえも・・・A I D A であるプリ

ムラの索敵からも逃れた。

プリムラはAIDAだ。もちろん、フリードに寄生していたモノとは違い、プリムラは俺に寄生しているわけじゃない。

それでも、プリムラの力はかなりのモノだと思う。

第一、このThe worldと言う世界で、この世界で生まれたAIDAと言う存在であるプリムラさえも誤魔化すことが出来る程び気配を隠蔽出来るコイツは

「普通じゃ無いってことだよな……!!」

『アノヒトト、タタカウノカズマ?』

「ああ……戦うよ、プリムラ……」

プリムラの問いにそう答えながら、俺は拳を構え、臨戦態勢を整える。プリムラは、交戦の意志を示した直後に、身体を覆うようにして光の膜を張ってくれた。

俺達に気配を悟らせないとすると、かなりの腕を持ってると考えた方が良い。待ちに徹しても、今の状態じゃ、やられるだけだ。

だったら……!!

(こっちから仕掛ける……!!)

そう結論を出し、俺は重槍士へと駆け出そうと腰を落とし、脚部へと力を込め、一気に重槍士の懐に飛び込もうとした瞬間。

「待った、待った！こつちには戦う気はないっての！！」

「何……？」

彼はそう言うと、両手を挙げながら再び、「だから戦う気は無いんだって」と言いながら、更に俺達の近くに歩み寄って来た。

「だから、こつちにはお前と戦闘をする意志はねえって言ってんだよ。その証拠に不意打ち仕掛けなかつたろ？」

「………」

『「カズマ……」』

どうする……

正直、さっきまで今までしたことのない戦闘を繰り広げたばかりだ。そのためか、かなり神経が磨り減っているようで、頭がいつもより重く感じる。

そのために弱気になっているのかもしれないけど、こんな状態でこの重槍士とまともに戦える気がしない……

……ここは、ヤツの言う事を信じてみるか……？

そう考えた俺は、構えは解かないが、落としていた腰を上げ、いまだ両手を挙げて交戦の意志がないと主張する重槍士へと話かけた。

「……あなた、俺と戦う気は本当になんだ……？」

「お、信じてくれるのか？」

俺のヤツの意志を確認するための質問を聞き、自分の事を信じてくれたのかと言う表情で、俺へと軽い感じで逆に問い返してくる重槍士に、再度質問を投げかける。

「どうなんだ・・・？」

「見ての通りさ。さっきから言ってる通り、俺にアンタと戦う意志はないぜ。俺が用があるのは、そこに倒れてる負け犬のゲス野郎だからな」

「フリードを・・・？」

『アノヒト、アノイヤナヒトノナカマナノカナ・・・？』

(多分・・・違うと思う)

未だに呻き声を上げ、苦しみ倒れているフリードを指さしながら、そう言う重槍士。その言葉を聞いて、一瞬フリードを助けにでも来たのかと思っただが、ヤツのフリードを見る目を見て、即座にそうでは無いと直感し、プリムラへとそう伝える。

俺が見る限り、重槍士のフリードを見つめる瞳は、仲間を助けに来ただとかそう言う類のものでは全く無い。むしろあの目は、敵を、いや、汚らわしいゴミでも見るかの様な冷たい瞳だったからだ。

「ああ。俺的にはそんなヤツはほっとけば良い。いや、むしろさっさと消えて欲しいって思ってるんだけどよ？アイツがそんなゲス野郎でもまだ使えるって言うてよ。で、仕方なく回収しに来たって訳ホント、さっさとくたばれば言いのにな、このゴミ以下のカス野郎

は

回収する……？やっぱり、コイツはフリードの仲間なのか……！！

「お前達が……フリードに、あの力を……AIDAをやったのか……？」

「ん？ああ、その事か。残念なことに俺達だ。俺は最後まで反対したんだがな……」

「ッ！！」

「おつと！！」

ガキインツ！！

(！！予想以上に速いな、オイ……！！)

俺の質問に対して、ヤツが肯定の言葉を言った瞬間、俺は地を蹴り、ヤツへと殴り掛かっていた。フリードに、AIDAを与えた。つまり、キリカをこの世界から消し去り、揺光を傷付けた元凶だ。殴られずにはいられるか……！！

しかし、俺の拳はヤツへと届くことなく、一瞬で手元に出現させた槍によって防がれた。

通常、収納状態の武器を手元に出現させるには、熟練者でも、1秒は必要だ。

けど、コイツは1秒どころか、俺がヤツへと殴り掛かる、その一瞬

で武器を取り出しやがった。

(やっぱり、一筋縄ではいかないって事か・・・)

分かってたことだ、別に慌てたりなんかはしない。けど、このまま戦いを続けても、勝機が見えないってのは、少し厳しいかな・

「おいおい、待ってての！こっちはお前と戦う気は無いんだって何度も言ってるだろう！！」

「俺の大切な人たちを傷付けたフリードに、その原因とも言えるAIDAを渡した相手の言葉を信用しろってのか？」

「いや、だからあのゲス野郎にAIDA渡したのは俺じゃ無くて、別のヤツだって！！」

「お前の仲間がAIDAを与えた事は事実だろうッ！！」

そう叫びながら、拳を振るう。しかし、振るったその拳はいとも容易く重槍士の持つ槍によって弾かれる。

クソ、やっぱりいつものキレが無い・・・！！

俺が予想以上に疲弊している自分の状態に対して悪態をついていと、いつもよりも大振りに振るわれた拳を躲した重槍士は、ハア・
・・・と嘆息すると、非常に面倒くさいと言った表情を浮かべながら、俺に告げた。

「まあ、そう言われたら何とも言えないんだが・・・仕方ない」

「……しつかり、避けるよ……?」

「ッ!」

『「カズマ、トンデ!」』

ゾクウツ!!

そう眩き、片手で持ち、それまで俺の拳を弾くだけだった槍をヤツが両手で握り、構えを取ったその瞬間。今まで感じたことのない悪寒が背中を駆け抜けた。

なにか……ヤバイ何かが、来る!!

そう感じた瞬間、俺は振るおうとしていた拳を止め、全力で横に身体を投げ出す。

「貫け……イグニル……!!」

ヤツのその言葉と共に、黒い槍がプリムラの防御膜を突き破り、俺の脇腹を掠っていった。

『「ウワアツ!」』

「グウツ!」

なんでだ……!!直撃は避けた筈なのに、なんでこんな激痛が走るんだ……!!

槍自体は、しつかりと回避出来た。当たったのは、脇腹の皮一枚程

度の筈だ。なのに、フリードのギロチンを喰らった時以上の痛みが、掠っただけの傷から全身を蝕む。

「おお、しつかりと避けれたか。ちょっと掠ったみたいだけど、良い相棒持つてる持つてるみたいだな。いやあ、良かった良かった
！！」

脇腹を押さえながら膝をつく俺の姿を見ながら、ヤツは感心したように手を打つ。その姿は、一見俺をバカにしているように見えるんだらう。だが、違う。

アイツは、本当に感心しているんだらう。俺がヤツの攻撃をダメージを負いながらも回避出来たことに対して。

(クツ……！！大丈夫か、プリムラ……)

『う、ウン……デモ、スコシチカラガハイライナイヨ……』

プリムラの弱った声が脳裏に響いた。防御膜を貫かれ、俺にダメージが届いたんだ。膜を張ってくれていたプリムラへのダメージは俺以上なのかもしれない……

あの黒い槍……あれも、AIDAの力、なのだらう。ただし、同じAIDAのプリムラの張った防御膜を簡単に消し去ってしまう程の力を持った。

(フリードのAIDAとは、比べものにならないくらいに、強い……！！)

(クソツ・・・今の俺じゃあ、何をしようが、太刀打ち出来ない程の相手か・・・)

「さてっと。それじゃあ、本来の仕事に戻らせて貰うぜ」

膝をついたままの俺にそう告げると、重槍士は未だ倒れているフリードの側まで悠々と歩いていく。

(クソツ、まだダメージが・・・!!)

ヤツの歩みを邪魔したい。だが、ヤツから受けた傷が発する痛みで、身体が思うように動かない。

そうしてヤツの行動を見送るしかない俺は、歯を食い縛りながらヤツの後ろ姿を睨みつけた。

俺の視線を感じているのかいないのか、とにかくヤツは俺の視線を意に介さずに真っ直ぐフリードの所へ行き、痛みを顔に歪めているヤツをさつきよりも更に冷めた目で見下ろす。

「ハア・・・なんで俺がこんなヤツを回収しなきゃいけないんだよ・・・」

本当に憂鬱そうな溜息を漏らすも、ヤツはフリードの身体をいとも容易く持ち上げ、首だけを回し、未だにダメージが抜けきらない俺へと視線を合わせ、一言言いはなった。

「さて、俺の用事も終わったし、これで失礼するぜ」

「待て・・・よ・・・」

「ん？」

そのままプラットフォームへと歩きだそうとしていた重槍士の背に、途切れながらも声を投げかけた。震える膝に鞭を打ち、何とか立ち上がると、ヤツの顔を睨みつけながら尋ねた。

「お前の……名前……は……なんだ……？」

俺のその質問を聞いたヤツは一瞬キョトンとした表情で俺を見つめ、笑みを浮かべた。

「ハハッこの状況で名前を尋ねるのか……おもしろいな、お前」

「質問に……答える……!!」

「ああ、そうだな……俺の名前は」

身体ごとこちらを向き、ヤツは楽しそうな表情で俺へと名前を告げた。

「ジンだ。覚えとけよ？」

「カズマ……だ……」

「カズマか……覚えとくぜ。それじゃあな、カズマ。また会おうぜ」

そう言ってヤツは、今度こそ背を向け、プラットフォームへと去っていった。

「ジン……か……クツ」

『「カズマ……」』

「大丈夫だよ、プリムラ……大丈夫だ」

再び脇腹から伝わる痛みによって膝をついた俺を労るようなプリムラの声に、そう返し、俺は重槍士、ジンが去っていったプラットフォームを見つめ、確信、した。してしまった。

「このままじゃ、揺光を守れない」

掠っただけの攻撃で、ここまで動け無くされているんだ。あの攻撃をまともに喰らってしまったええ。

「一撃で、やられる……」

（もっと……強く、ならなきゃな……）

守りたいモノを、守りきるためにも。

「もっと、強くなる……!!」

『「ウン!!ボクモ、モットツヨクナルヨ、カズマ!!」』

「ああ……一緒に強くなろう、プリムラ。何からも……どんなヤツからも、大切なものを、守りきれるように……」

第三十五話（後書き）

何度も何度も見直し、納得出来ず、書き直した結果がこのクオリティ・・・！！

文才が、文才が欲しいです・・・！！

まあ、そんな愚痴は置いといて。

なんだか、いつの間にか25万PV、2万ユニーク達成しました！！

いやはや、更新速度が落ちていく中、こんなにもたくさんの読者が居ると言うことに感謝感激です！！

こんな駄作ですが、読んでくださる方がいる限り、これからも精一杯頑張っていきますので、今後もどうかよろしくお願いします！！

第三十六話（前書き）

A）何故だ・・・何故、期日通りに投稿出来ないんだ・・・！！

B）それは、お前が他人様の作品にうつつを抜かしているからだ！！

A）な、なんだってえー！！

第三十六話

SIDEカズマ

「いよいよ、か・・・」

「うん・・・キリカとの約束、しつかり果たさなきゃね・・・」

フリード・・・尾方にAIDAを与えた者達の仲間と名乗った重槍士、ジンとの戦いから一ヶ月。二週間前、準決勝でチームテンペストという強豪チームを下した俺達は、紅魔宮の挑戦者チーム控え室で、目前に迫った紅魔宮トーナメント決勝戦の開始時刻まで待機と言われ、最後のコンビネーションの確認、そして緊張をほぐす為の軽い雑談を交わしていた。

「そうね・・・闘病生活を送っているキリカちゃんのためにも、頑張らなきゃね」

「アイン・・・そう、だね・・・」

(アイン・・・すまない、本当のことを伝えられなくて・・・)

アインには悪いと思うが、フリードによって俺達が受けた被害のことは話さなかった。キリカがフリードによって消された・・・未帰還者になったことを。

単純に信じてもらえないということもあったが、それ以上に何の関係もないと言ったら彼女に失礼だとは思いますが、これ以上ほかのだから巻き込むわけにはいかないんだ・・・

・・・なんだか、しんみりとしちまったな・・・話題、変えなきゃな。

なんだか暗い雰囲気になってしまった空気を变えるべく、俺はキリカのことを話題にしつつも、この空気を払うため、ある一通のメールを開いた。

「にしても、ホントあいつは自分のことよりも他人を心配する奴だよな・・・これから入院する奴が自分のことより俺たちの試合のことを考えるなんてな」

『キリカハ、ヤサシカツタカラネー』

(ああ、そうだな。あいつは、ホントすごく心の優しい奴だったよ・・・)

俺以外には聞こえない、俺の脳に直接語りかけてきたプリムラのその言葉を肯定し、俺はキリカから送られてきたメールを見つめる。

どうやったのかは不明だが、キリカはフリードによって消されてしまった後、俺たちのもとにメールを送ってきた。一瞬キリカが無事だったのかと思っただが、八咫に確認を取ったところ、キリカのプレイヤープライバシーの問題ということでリアルの名前、住所は教えてくれなかったが、現行病院に運ばれており、やはり意識を失った状態なのだそうだ。

そんな状態で、どうしてメールなんかを送れたのか・・・本当に不思議なのだが、おかげでインにもキリカのことを入院するため、The worldを離れたと説明できたことは助かったが。

それはともかく、キリカから送られてきたメールには、自分のことは心配しないで、試合に絶対勝ってください、精一杯応援します！という内容が記された、自身のことよりも自分の周りの人を気にするキリカらしい文面だった。

「ほんと、入院する時くらい、自分の心配すればいいのについて思うけど・・・でも、やっぱり私はキリカちゃんらしいって思うよ・・・二人ほどあの子とは交流なかったけど、それでも他人を心配できるやさしい子だつてことくらいは分かっているし・・・ホント、負けられないよね・・・」

「うん、あたしもそう思う・・・」

そう答えた揺光とアインは、それぞれキリカから送られてきたメールを開く。

そこにはだいたい俺と同じような、自分は大丈夫です、みんな決勝頑張ってくださいと言った内容が書かれているんだろう。

それを眺めている揺光とアインの表情は、どちらも苦笑した後に優しい眼でメールを見ているみたいなので、十中八九あたっていると思う。

そんなこんなで緊張をほぐしていると、ポーンツという音とともに、俺たちのもとに「間もなく試合が開始されます」といったお知らせが届いた。

「時間だね・・・それじゃあ、行くところか！！勝ちにさ！！！！」

「ああ。勝つぞ」

「そうね。勝ちましょう！」

トンッ

揺光の突き出された拳に、自分たちの拳を当て、この試合に勝利すると宣言した俺たちは、転送用ポータルまで行くと、光に包まれた。

「暁・・・それは、夜明けと黄昏を意味する言葉・・・その名を持つ男は、光を失ったこの紅き大地に夜明けをもたらし、その頂点へと昇った・・・！！そして今宵！！暁を黄昏へと変え、夜空に浮かぶ破軍の星を輝かせるため！！鬼姫がこの赤き大地に昇る、太陽を喰らいにやって来たあ！！！」

「あのD」、本当に殺しに行つてやるうか・・・！！」

「落ち着けてのに・・・」

初めの頃よりもさらに過激な紹介をするDJに対して殺気を送る揺光を落ち着かせる。いやまあ、鬼姫だけでも怒ってたのに、あんな太陽を喰らうとか「本当にバケモノです」と言ってるみたいなの紹介されたら怒るのも仕方ないとは思っけどな。

「今は、目の前の戦いに集中しろって。その後なら俺も何にも言わねえよ」

我ながらなかなかひどいこと言っているとは思っけが、仕方ないことだと思っけ。てか、もう少しマシな紹介の仕方あったと思っけし、わざわざ弁護する必要無いつてことで。

「挑戦者側から現れるは、揺光選手率いる、チーム破軍！！優勝候補のチームを次々に撃破し、初参戦ながらも、決勝へと勝ち進んできたその実力は、紛れもなく本物！！鬼姫の異名を持つ揺光選手、チャンピオン宮皇を倒し、その名の通り、破軍の星を、このアリーナに輝かせる地上事が出来るのか！！」

「ワアアアアア！！！！」

DJの紹介と共にヒートアップし始める観客の声援を浴びながらリングインする俺達チーム破軍。揺光が自身を相も変わらず鬼姫という名で呼ぶDJへと凄まじい目つきでガンを飛ばしているが、それに関してはスルーの方向で。

特に俺への害もないし、別にガンを飛ばすくらいなら何の実害も生じないしな。

「そして、反対側からあゝ！！宮皇《チャンピオン》のお！！入場だあああ！！！！」

ーワアアアアア！！！！！

俺達が入場してきた時以上の歓声がアリーナに轟き、正面の柱にこの決勝で戦う敵、宮皇暁率いるチーム暁が入場する。

チーム暁の編成は、重槍士が一人、双剣士が一人、そして、斬刀士である宮皇暁の三人で、かなり攻撃重視の編成だ。

その攻撃力は並ではなく、対戦したチームのほとんどが十分以内に倒されていると言う話だ。まあ、分かっていることは、今回の相手は、今までの敵なんか比較にならないくらいに強いだろうってことかな。

あくまで予想だから、実際に戦ってみないと詳しいことは分からない。

と、言いたい所なのだが・・・

(やっぱり、宮皇は伊達じゃないって事かな・・・)

実際にこうして対峙してみたからこそ感じられる、この気迫・・・尋常じゃないな。

宮皇の発する覇気は、彼の試合を観戦した時とは比べものにならないくらい強く、彼がどれだけ強いのかということ、こうしてただ対峙しているだけでもかんじとれてしまう。

今は気を張っているからこそ平気だが、少しでも気を抜いてしまえば気迫だけで圧倒されてしまいそうだ。

「さて・・・はじめまして、というのもおかしな話だが一応自己紹介をしておこうか。私はチーム暁のリーダー暁だ。よろしく」

「チーム破軍の揺光だ。悪いけど、勝たしてもらおうよ」

暁からの唐突な自己紹介に揺光も自らの名前を言った後、宣戦布告というのも変な言い方だが、宮皇に対して王座をいただくと宣言した。

そんな揺光の言葉を聞いた暁は口元を微妙に歪め、何か面白いものでも見たかのような口調で「そうか」と答えた。

「まあそれはともかく、最初に言っておこうかな。よくここまで来れくれた。まずはおめでとうと言っておこう」

「・・・？何の話だよ」

「いやなに、初参戦にしていきなり決勝の舞台に立てるものなどそうはいない。それだけでもすでに偉業を一つ達成していると考えられるからな。それに対しての純粋な賞賛と、その腕に対しての敬意だよ」

「別にあんたにそんな風に評価される覚えはないけどね。まあ、受け取っというてあげるよ。それと、あんたのいるその王座もね」

「ハハハッ本当に威勢がいい挑戦者だ。まあもつとも・・・」

「ッ！..!」

「そう簡単には、この席は譲れないがね・・・」

暁から感じられる威圧感が一層増して俺たちの体に押し掛かってくる。しかし、そんなプレッシャーをはじき返すかのように、揺光もまた、暁に向かって一言、言い放った。

「上等・・・!!その席、あたしたちが奪ってやるよ・・・!!!!」

揺光がそういった瞬間、試合開始のエフェクトが、俺たちの間を駆け抜けた。

S I D E 揺光

「はあああああ!!!!」

「フツ!!!!」

ガキイン！！

「ハア！！」

「クツ！この！！」

ガガガ！！！！

「これもダメか・・・なら！！」

フォン！！

「又ツ！！」

キイツン！！

クソツこれもダメとはね！どんだけ守りが堅いんだよコイツは・・・！！

「なかなか、良い攻撃だ。少しヒヤリとしたよ。こんなに気が抜けない試合は久しぶりだ」

（久しぶり、か。まだまだ、余裕だって言いたいんだろうが、この野郎！！）

あたしの仕掛ける連続攻撃をことごとくその手に持つ刀で弾いた暁は、余裕さえも窺わせる表情を見せながら、そう言って隙のない構えであたしの一挙手一投足を見逃さないとでも言うかのような鋭い眼光を向けてくる。

「フンッ、あたしの攻撃をほとんど防いでおいて、よく言うよ。まだまだ余裕そうじゃなか」

「いやいや、キミを前にして余裕など持てるわけがない。油断すれば、私の身が危ないからね。そのくらい、キミの攻撃は鋭いさ。自身を持つたらしい」

あたしの皮肉を混ぜた言葉を苦笑しながらそう返してきたヤツは、隙など一切見せないであたしへとその切っ先を向けたまま構えを続ける。

（クソッ、少しくらい油断してくれたら儲けものだったんだけど・・）

あたしは内心でそう毒づきながら、どうやったらコイツに勝てるかを必死になって考えていた。

試合が開始された直後、あたし達は事前に相談して決めた相手へと向かった。アインは、自分と同じ双剣使いの男へ、カズマは重槍士。そして、あたしは宮皇の暁へと攻撃を仕掛けた。

「ハアアアア！！！！」

「はあっ！！！！」

けど、試合開始から5分くらい経過した今も、あたしは目の前であたしの行動を観察するように戦っている暁に碌なダメージを与えられていなかった。

今まで戦ってきた相手でも、こんな短時間じゃ、倒せないと言うことは何度かあった。むしろ、5分程度で倒せてきた相手の方が少ないから、それは気になんてしていない。けど、コイツは倒す倒さないの領域じゃない。攻撃が、全くと言って良いほどに当たらないんだ。

あたしの振るう剣をことごとくその刀で弾き、その上まるでカズマみたいに、カウンターの要領でダメージを喰らわしてくる。与えられたダメージだって、少し剣先が掠って与えられたくらいのも微々たるモノでしかない。

強いとは予想していたけど、ここまで強かったとはね・・・！！

いくら攻撃しても、この宮皇には、一発だつてまともには当たらないかもしれない。正直、あたしもこれまでの戦いで、少しは実力がついた。でも、だからこそ分かってしまう。暁とあたしじゃ、実力にかなりの差があるって言う事を。なまじ自分自身の力と、暁の実力がどれだけ違うかって事が実感出来ちゃう分、余計に焦って攻撃が大振りになっていたのかもしれない。前までのあたしだったら、もしかしたら既に心が折れていたかもしれない。

でも、今のあたしは、そう簡単に折れたりしない。折れるわけには、いかない。

約束したんだ。

あのメールを見て、あたしは、キリカに約束したんだ。絶対に勝つてみせる。宮皇チャンネルオンになってみせるって！！

直接、言葉で伝えた訳じゃ無い。けど、あのメールには、書いてあったんだ。キリカはあたしが勝つって、宮皇になるって、そう信じてたんだ。

・・・なら、あたしは宮皇になってみせる。キリカとの約束を、果たすためにも！！

だから！！

「絶対に、勝つんだ！！」

「又ウ！！」

気迫を乗せて振るった剣を受け止めた暁は、今までのような余裕のある表情ではなく、どことなくこわばった表情であたしの剣を受け止めた。

グレア・・・

「！！ツクウ！！」

！！ヤツの体勢が、崩れた・・・！！

「ダアアア！！！！」

今まで隙らしい隙を見せなかった暁が見せた、一瞬の隙。そのチヤンスを逃さないために、あたしは両手に持った双剣を、振るい、ヤツへと次々に斬撃を見舞う。些細な隙だ。宮皇ならば、あんな些細なミスなどしないと思う。もしかしたら、あたしのこの判断は間違っているのかもしれない。

それでも。ここまで何度も何度も攻撃を仕掛け、その末に、やっと見つけた隙なんだ。

ここを逃せば・・・勝機は、無い！！

ここで決める！！あたしは、そう気迫を込めた剣を振るい、体勢を極僅かではあるものの崩している暁へと振り下ろす。

しかし、そこはやはり凄腕の宮皇、不十分な体勢でも、あたしの剣を的確に防ぎ、軽いダメージを負いながらも、的確にあたしの攻撃を防いでいく。

(クツ予想以上に重い斬撃で、僅かに体勢を崩してしまったな・・・やはり、手強いな。だが！！)

「ハア！！！」

「ウア！！！」

ヤツへと振り下ろそうとしていた右の剣に合わせて、強く振られた刀は、あたしの一撃を大きくはじき返した。

「うおおおお！！！」

「なっ！！ぐあああ！！！」

その次の瞬間、それまではあたしの攻撃をただ防ぐだけ、もしくは一撃だけのカウンターしか攻撃を繰り出してこなかった暁が、突然攻勢に出てきた。暁が振るった刀によって剣を弾かれ、体勢を崩

されていたあたしは、その急な切り替えに対応出来ず、その一撃を
まともに喰らっちゃった。

(クソッ、完全に狙われてた・・・!!)

体勢を崩されたあたしは、すぐさま剣を正面で交差させ、防御体
勢に移った。

そして、次の瞬間、あたしに向かって、嵐のような斬撃が降り注い
で来やがった・・・!!!!

連続で振られるその刀の速さは、普通の斬刀士とは比べものにな
らないくらい速い上に、凄まじく重い・・・!!まるで双剣士を・
いや、まるで、あたしの身を削り取るうとしてくる嵐の中に放り
込まれたかのような錯覚に陥りそうなほど手数が多く、一撃一撃が
重い。

防御の上からでも少しずつ削られていくHP。いくら双剣士の防
御力が低いからって、こんな速さでHPが削られていくのかよ・・・
!!

「ぐあ!!」

防御していた剣の上から叩きつけられた強烈な一撃によって、あ
たしは交差していた剣を崩され、2、3メートルほどの距離を吹き
飛ばされた。

地面に叩きつけられたあたしは、倒れた身体をすぐさま起こし、
再び双剣を構えた。そんなあたしの姿を油断無く刀を構えながら見
つめていた暁が、唐突に口を開き、あたしに言葉を投げかけてきた。

「君は中々に強かった。本当に、初出場とは思えない程だった・・・。しかし、今回は私の勝ちだ。また、トーナメントを勝ち上がり、私に挑戦してきたまえ。いつでも、待っている」

ツ！！もう、勝った気でいやがなのか・・・！！

内心でそう悪態をつきながらもあたしの冷静な部分は、ヤツのその勝利宣言を肯定していた。HPも残り少なく、あと2、3回通常攻撃を喰らってしまえば、すぐに底をついてしまうほどしかない。そのうえ、あたしの攻撃は、ヤツの身体に届きやしない。この状態から、ヤツに勝つ方法は・・・無い。

万事、窮す・・・なのか・・・？

双剣の柄を握りしめながら、自分自身の出したその答えに納得がいかず、何度も何度も考える。

けど、考える度に、出る結論は・・・同じだった。

勝てない。今のままでは・・・今のあたしじゃ、ヤツには、勝てない・・・

チクシヨウ・・・届かなかったのかよ・・・！！キリカとの約束・・・守れないのかよ・・・！！！！

「ではな・・・待っているぞ、揺光。また、戦おう」

そう言って、ヤツは刀を振り下ろした・・・

第三十六話（後書き）

どうも、期日を守れないダメ男です・・・

まあ、いつも言い訳の内容は一緒なので省きますね。

さて、決勝の前編をお送りいたしました今回、結末は次回に持ちこ
そとさせていただきますね。

今回は決着ですけども。

揺光は、あのままやられてしまうのか！！
待て次回！！

第三十七話（前書き）

どうも、今回は期日までに投稿出来ました。

前回、この話でアリーナトーナメント終了と言ったのですが、終わ
りませんでした（笑）

まあ、次回で終わらせられるように頑張りますので、これからもよ
ろしくお願いします。

第三十七話

SIDEカズマ

「フウ・・・ギリギリだったか・・・なんとか、間に合ったか」

「ッー！一騎打ちの邪魔をするとは、いささか無粋ではないかね？
徹甲弾・・・」

「いつの間にか付けられてたものとは言え、名前を覚えていてくれ
てたとは、光栄だね、チャンピオン宮皇」

「カ、カズマ・・・」

宮皇暁によつて振り下ろされた刀を、右腕をかざして盾にするこ
とで何とかその一撃を受け止めた俺は、チラツとまだダメージが抜
けきっていないのか、少しフラフラしている揺光の姿を見やる。本
当にギリギリだったみたいだが、何とかリーダーである揺光が倒さ
れるという最悪の事態は免れたみたいだな。

その事を確認した俺の口から、完全に無意識に安堵の息が漏れ出
た。

(っと、集中集中・・・)

再び気を引き締め、暁の顔を見る。今目の前にしているのは、か
なり実力を上げた揺光を子供扱いしていた程の実力を持つ宮皇だ。
気は、そう簡単に抜けないよな。

「それに、これはチーム戦だ。一騎打ちをそつちがしているつもりでも、俺たちは勝つために仲間同士で協力する。常識だろ？」

「フツ、それもそうだな。しかし、君は明日羅の相手をしていたはずだが・・・」

「ああ、あの重槍士か？あいつなら、さっき倒したよ」

「！！あの明日羅をこの短時間で倒すとはな・・・君もやはり、かなりの実力を持っているのだな」

完全にあの重槍士・・・明日羅とか言ったか？そいつがボディの色が灰色に変化した状態で倒れている場所を指さすと、奴の表情に、本当に驚いたと言う色が見え、その上で楽しげな表情を浮かべた。

こんな短時間で自分の仲間の一人が倒されてしまうという事態は完全に想定外だったんだろうな。けど、驚きながらも楽しそうな顔をして俺に賞賛の言葉を投げかけてくるのは、現状では数は劣れども、リーダーである揺光さえ倒してしまえば問題ないという宮皇としての自信の表れ、なんだろうな。

けどまあ、だからって簡単に諦めるほど、俺は往生際は良くないし、揺光は倒させねえよ、悪いけどな。その上で・・・倒してやるさ。

「お褒めの言葉、ありがとさん。お礼と言っちゃなんだが・・・全力で、あんたを倒させてもらうぜ。この、拳でな！！」

そう言いながら、刀を受け止めていた右腕を振り払い、暁の体を後方へと弾き飛ばす。ダメージは無いが、一回この場を仕切り直し

たい上に、さつきまでの体勢じゃ、揺光への危険が大きすぎる。

「揺光、正直に言え。まだ、戦えるか？」

油断なく俺に殺気を交えた視線を向けてくる暁に対しいつでも攻撃を仕掛けられるよう、そして攻撃を防げるよう構えをとりながら、背後でようやく起き上がれるくらいには回復した様子の揺光にそう問いかけた。

「一応、ギリギリのところで助けてもらったから大丈夫・・・と言いたいけど・・・」

「やっぱ厳しい、か？」

「正直、本当にやられていないのが不思議なくらいの状態だよ・・・正面切って戦うのはできれば遠慮したい・・・誰か、回復要員チームに入れといたほうが良かったかな・・・？」

「いや、このチーム相手に後衛を組み込んでも、速攻でやられてただろうから、この編成で正解だと思うぜ？・・・まあ、そういうのは後で相談するとして、あいつとは俺が戦うから、揺光はアインの援護に回ってくれないか？」

「カズマ、無茶だ！！いくらあんたでも、あの宮皇相手に一人で挑むなんて・・・！！」

「だからって二人で挑んで揺光がやられたら俺たちの負けなんだぞ？少し冷静になれ」

俺が諭すようにそう言うと、しばらく間を空けて、「・・・分か

った「よ一言言って身を翻した。

「……カズマ」

「ん？」

「……負けんなよな！」

「了解」

そう言つと、揺光は今度こそ双剣士と戦闘を繰り広げているアインの元へと駆けて行つた。

「さて……悪いな、わざわざ待ってもらつてさ。正直、いつ攻撃してくるかつてビクビクしてたよ」

「あれだけの殺気を叩きつけておいて良く言う……それに、私が一歩でも君の間合いに踏み込めば、君は強烈な一撃を叩き込むつもりだつたのдарう？」

「まあ、そうしようとは思つてたけど、あんたなら俺の一撃くらいなんともないんじゃないか……？」

「冗談はよしてくれよ、カズマ。君の一撃ほど、凶悪な拳を私は知らない。君の放つ一撃は、それこそ今の私のHPを一瞬で消し飛ばすほどの威力を持っている。うかつに飛び込むほど、私は愚かではないつもりだ」

「これはまた、随分と慎重なこと……」

一番相手にしたくないタイプだな、コイツは・・・

なまじ力を持つプレーヤーは多少のリスクがあるうとも、ああいう場面では大抵手を出してくるもんだが生憎この宮皇は違うらしい。

「たく、力持つてる上に、冷静沈着とか、一番厄介なタイプだ・・・
分かったたことだが、こりゃ一筋縄じゃいかないか・・・」

「性分なのでね・・・」

そう一通りの軽口を叩き合った俺たちは、互いに無言になって相手の出方を窺う。

お互いに、どちらかという自分から仕掛けるタイプじゃないからか、すさまじく張りつめた空気が漂い始める。

観客の喧騒も、同じフィールドで戦っている揺光たちの戦闘音さえも、聞こえなくなる・・・

「来ないのかね・・・？」

「生憎、俺もアンタと同じく慎重な性分だね・・・迂闊にアンタの間合いに飛び込むほど馬鹿じゃ無いつもりだ」

「ま、だからと言ってこのままじゃ埒が明かないってのもあるが・・・さて、どうするかな・・・」

「・・・」

「・・・」

再び俺と暁の間に沈黙が走り、互いを睨み合う。・・・やっぱり、

いくら見ても奴に隙らしい隙は見つからないな……。しかし、一時も気は抜けない。一瞬でも気を抜けば、この宮皇はその隙を見逃さずに、確実に仕留めに来る……。

そのことを自覚している俺は、一瞬の隙を見つけるため、そして一瞬の隙も見せないように、気を張りながら奴と対峙し続けた。

……。どれくらい、俺たちは睨み合っているのだろうか？
1分？10分？神経を集中していると、時間の感覚が狂うことがあるが、俺は今その状態に陥っていた。

相手の隙を発見しようと神経を集中し、同時に自分の隙を消し、相手の付け入る隙をなくす。どちらか一方ならまだしも、それを同時にこなさなければならぬ現状は、予想以上に俺の神経を衰弱させているらしい……。

どうする……。揺光とアインが相手の双剣士を倒すまで待つてから、3人で攻めるか……。？いや、ダメだ。いつもの状態、相手ならその案でも構わないが、今の揺光のHPは正直心持たないどころじゃない上に、この宮皇相手じゃそれは致命的。俺達からの多少のダメージ覚悟で揺光に攻撃を仕掛けられて終わる。

なら、アインと二人でならどうだ……。？……。ダメだな。正直、アインとの連携は悪いとは言わないが、いいともいえない状態だ。恐らく、俺とアインの僅かな隙を突かれ、俺かアインのどちらかが、あるいは両方がやられて揺光を撃破されるのがオチだろう……。

となると・・・

(やっぱり、こっちから仕掛けるしかない!!)

危険ではある。だが、いつまでもこうして睨み合っているのは得策ではないし、時間が経過して得をするのは俺じゃなく、向こうだ。

3対1であろうと、万が一にでも揺光がダメージを負えば、俺たちの負けだ。だから・・・

(俺が、倒すしかないよな!!)

そう心の中で決めた俺は、それまで防御のためにボクサーのように顔の前まで上げていた腕を下げ、重心を前へと移す。

その様子を見た暁は、口元を僅かに上げ、「様子見は終わりかね?」と問いかけてきた。

「ああ。あんたからはカウンターはとれそうにもないからな。だから・・・」

ダンッ!!

「俺から行かせてもらおう!!」

地面のタイルを踏み抜くかのような勢いで地を蹴り、ヤツへと駆ける。そのまま勢いを乗せた拳を、ヤツへと振りかぶり、そのまま突き出した。

しかし、暁もまたその一撃を簡単に喰らってくれるほど甘い相手

じゃ無かった。自分へと猛スピードで迫り来る拳に対してヤツは、完全に初動で出遅れていた筈なのだが、瞬時に俺の拳に反応し、刺突を繰り出してきた。

「グッ!!」

「又ッ!!」

空中でぶつかり合う拳と刀。勢いの乗っていた俺の方が有利だったはずなのだが、二つの得物は完全に力が拮抗していたのか、ほぼ同時に金属音を響かせながら、双方ともに弾かれた。

が、俺は初めからあの一撃が暁に当たるなんて思っちゃい無い。だからこそ、あらかじめ仕掛けるつもりでいた左の拳を固め、ヤツの脇腹へと振り上げる。

タイミングは、ドンピシャ。刀もシエルブリットとの衝突で、完全に切っ先は空中に向いている。いくら何でも、このタイミングで繰り出したこの左拳を刀で防ぐことは不可能!

先手の一撃、貰ったぞ、暁!!

ヤツへと確実に当たるという確信を抱いて放ったその一撃はしかし、思いもしなかった方法で防がれた。

「グウッ!!」

「なにつ!?!」

確実に当たるはずであった拳は、ヤツの握る刀の柄によって軌道

を僅かに変えられ、胴体ではなく右腕へと逸れ、俺が期待していた程のダメージを与えられずに振り切られた。

その隙にヤツは拳を振りきった状態の俺へとすかさず左腕で刀を幾度も振るってきた。だが、その速さは右腕で振られていた時よりも僅かに遅い。その僅かな速さの違いは、俺に右腕での防御を間に合わせるには十分な時間だ。

先程とは逆に、暁からの一撃を右の拳で弾いた俺は、そこにすかさず再び左拳を振るう。が、暁はその振るわれた俺の拳を余裕さえも感じさせる動きで回避すると、そのままバックステップで俺から距離を取る。そして未だに俺から与えられたダメージによって震えている右腕を見ながら微かに笑うと、俺へと話しかけてきた。

「流石だね・・・久々に背筋がゾツとしたよ。まさかあそこからすぐに左が来るとは思いもしなかった。やはり、君は気が抜ける相手ではないな」

「・・・・・・・・」

そう言っただけに笑う暁とは対照的に、俺は一言も喋ることはせずにヤツを睨みつけていた。

・・・まともに、入ると思っていた。タイミングも、拳の速さも文句なしの一撃だった。一撃必殺という訳では無いが、クリーンヒットする一撃だったはずだ。

その一撃を、見事に躲された。

分かっていたとは言え、ああも見事に回避されてしまうと、つい

つい考えてしまいそうになるな・・・
俺は、この宮皇よりも・・・弱いのではないかと。

別に、俺の方が強いという訳でもないし、必ず勝てるなどと言う自信があつたわけでもない。相手はこのアリーナトーナメントを勝ち抜いた紛れもない強者。そんな相手に対してたつた一撃躲されたくらいで何をショックを受けているんだ、俺は。

これじゃあ、まるで・・・

”俺が宮皇である暁よりも強いと思つていたみたいじゃないか”

・・・いや、微かに俺の方が強いのではないかと言う慢心はあつたかもしれない。だからこそ当たると思つた一撃を躲されたことに對してここまでショックを受けているんだろう。

ー思つてたよりも、俺は慢心していたんだな・・・

R：1での戦いを勝ち抜き、フリードとの常識を越えた戦いを経た俺は、普通のプレーヤーよりも、強い。俺自身も意識していない心の底で、目の前に立つ宮皇に対してもそんな慢心を抱いてたんだな。

多少の自信を抱く事は、決して間違いじゃない。自信がなければ何にも出来ないし、何かを達成できる事は無い。だからこそ、スポーツ選手は自分を信じるために練習を重ね、”絶対に出来る”と言う自身を得ようとするんだ。

だが、慢心は違う。慢心は、自分自身が本当に出来ること以上の事が出来る、達成できると言う過信が生み出す間違つたものだ。

相手が自分よりも格下などという慢心を、抱いたまま戦っていたなど……最低な行いだ。

自身で導き出したその答えに思わず愕然とした俺は、それまで暁に向けていた視線を下げ、戦闘中にも関わらず、目を……瞑った。

「……悪かったな、暁……」

「ん……？何がかね？」

突然謝罪しだした俺に対して、訝しげにそう聞き返してくる暁。

そんな彼に俺は、瞑っていた目を開き、俺をジッと見つめている暁に向かって語った。

「俺は……どうやら、慢心していたみたいだ。宮皇であるあんた相手に慢心するなんて、まだまだ俺も未熟者みたいだ」

「フツ、突然何を言い出すのかと思えばそんな事か。別に、君が慢心を抱いていようがないから私が私にとってはさしたる問題ではないので、わざわざ謝罪する事では無いと思うのだが、一応答えておこう。気にするな。私は、そんな些細なことを気にするほど器の小さな人間では無いつもりだ。もつとも、だからと言って手加減するつもりも無いがね」

その暁の言葉を聞いた俺は、その答えに対する礼を述べたあと、言葉を続けた。

「そうか……まずは、その答えに対する感謝を。そして、もう一つ」

「やれやれ・・・今度は何かね？」

「いや・・・ただ断っておこうかと思っただけ」

「ほう・・・なにをかね？」

「なに・・・」

スツ・・・

それまで一応構えと呼べる程度に上げていた腕を完全に垂らした俺は、上半身を倒し、まるで獣が獲物へと飛びかかるようにするかのよう足に力を溜め、俺を見つめる暁の目を見つめた。

「ここからは・・・本能のままに、いかせて貰うことにした・・・だから」

ダンツ！！！！

「ツ！！！！」

ガキーン！！！！？

「一瞬でも気を抜けば・・・喰らわせてもらっぞぞ？」

突然の俺のその一撃を受け止めたが、予想外の俺の攻撃の重さに表情を驚愕の色へと染めた暁の目を至近距離でのぞき込むようにして俺はそう言い放ち、本能のままに暴れると、そう宣言した。

かつての自分に、戻るために。

思いつきり暴れさせて貰うぞ、
宮皇^{チャンピオン}

第三十七話（後書き）

なんか、すっげー中途半端・・・

と言っか、なんだか途中からカズマが変な思考に入っっていっってしまった感があるなあ・・・

ま、いつか！ スッゲー適当

まあ、次回でアリーナ編も終わりなので、どうかこれからもこんな駄作ではありませんが、よろしくお願いいたします！！

第三十八話（前書き）

どうも、またもや投稿するはずだった日にちを過ぎてしまったジーユーです。

再び部活が再開されてしまい、日曜更新が出来なかったという悲しき事実。もうね、一週間しか休みがないとかイジメなのかと問いたくなると思う。しかも、最近はバカみたいに日差しが強いので外に出たくないのに、いかなければならないと言う・・・はあ、マジで今すぐにでも辞めたいなあ・・・

愚痴言つてばかりですみません。

まあとにかく、今回でアリーナ編は終了となります。

次回からはやつとRootに行く予定です、どうぞお楽しみください。

第三十八話

SIDE 暁

「シャアア!!」

「グウ!!」

なんだ、この重さは……!! さっきまでとは、比べ物にならないくらい一撃が重い……!!

本当に、同一人物なのか、この少年は……!!

私、現紅魔宮宮皇暁チャンピオンは、今までに経験したことのない苛烈な、そして強烈な拳打の嵐を必死になって堪え忍んでいた。

さっきまでは、多少腕は良いと言っても、反応でき、対処も容易とは言い難いがそれでも、しっかりと対処出来る程度には見切れていた彼の拳。しかし今は、回避することさえも精一杯なほどの状況に私は追い込まれていた。

先程までの、私と同じカウンターを狙ったスマートな戦法から一転、まるで獣のように本能に任せたようなメチャクチャな攻撃方法。しかしそれは、私が今まで経験したことのないような方法で攻撃を繰り出してくる。

その上、放たれる一撃一撃の重さがこれまでの比ではない程に重く、防ぐにも全力で防御に当たらなくてはいけない程の威力なので、こちらからは全く手を出せない。

まさに、窮地だ。

「ドラアアアア!!!」

「グアアア!!!」

防ぎきれなかった一撃が、胴に叩き込まれた。たったの一撃で、今まではほぼ無傷といってもよかったHPが、一割に満たない程度ではあるが削られた。

しかも、この一撃がなかなか強烈だった。蹴りを胴体に叩き込まれた私は、3、4メートルほどの距離を吹き飛ばされ、カズマとの距離が開いたと見て、すぐさまに体勢を整えようとしたのだが、思いのほかダメージが残っているのか、体が自由に動かない……!!!

そして、そんな隙を目の前の強者が見逃すはずがなかった。

「行くぜ、「仁王槌!!!」」

「グアアアア!!!」

吹き飛ばされ、膝をついていた私に向かって一気に駆けてきた彼は、私が体勢を整える隙を与えまいと、すぐさまアーツを発動させ、私のHPをまた削る。

立つこともままならなかった私にそれを防ぐ手立てなどあるわけもなく、それまでの獣のような動きから一転、プログラムによって行われる規則性のある拳が、無防備な私の体へと次々に叩き込まれるのを黙って受けるしかなかった。

そして、アーツが終わると同時に、再び吹き飛ばされる私の体は、地面に2、3回バウンドすると、フィールドのタイルを少し滑り、ようやく止まった。

「グッ・・・本当に、さつきとはまるで別人だな、君は・・・!!」

与えられたダメージが大きいせいか、いつもよりも動きが鈍い身体を動かし、倒れていた状態から何とか立ち上がった私は、こちらを油断無く見据えるカズマへとそう悪態をついた。

しかし、彼は私のその言葉に対して一切のアクションを起こさず、ただただ私の一挙手一投足を油断無く見据えるだけであった。

その姿は、さつきまでの自身の力に対しての慢心にも似た自信を抱いていた姿とはほど遠く、私にまるで漫画にでも出てくるような、覚悟を決めた戦士のように見えた。

(全く、普通の者ならば、このような状況になれば少しは油断するというのに、彼にはその隙さえも無いのか・・・)

一切の隙のない彼のその様子に、内心悪態をつきながら私はこの状況を打開する手段を模索しようとするが・・・

「ダアアアア!!」

「やはり、そう簡単に考えさせてはくれないか・・・!!」

勝つための算段を組み立てようとする私に、そんな隙を与えはしないとばかりに彼は私へと一気に襲いかかってくる、再びそのトリッキーな動きと攻撃で、再度私は防戦へと追いやられた。

SIDE 観客

「スゲエ・・・」

「あの宮皇が・・・暁が、こんなに攻め込まれるなんて・・・」

紅魔宮宮皇暁を知っている者達は、今日の試合も暁の圧勝で試合は終了となると信じて疑わなかった。

前紅魔宮宮皇であった大火が引退し、空席となっていた宮皇の席を勝ち取った男、暁。彼の強さは並大抵のものでは無く、今までの彼の試合を見ていた者達は皆、「彼が自ら宮皇を引退しない限りは、紅魔宮宮皇が変わることは無いのではないか」と言わせるほどのものであった。

確かに、今回チーム暁に挑戦するチーム破軍の力は相当なものだ。初戦で優勝候補であったチーム豪をほぼ瞬殺。その後も優勝候補、

もしくは上位ランカーと言われてきた強豪を、ほぼ無傷の状態で倒してきているのだ。彼らの実力が無いなどと言うような輩は、この場には一人も存在していない。

しかし、そんな彼らであっても、このチームを、宮皇である暁を破ることが出来るかと言う話になれば、皆「それは無理ではないだろうか？」と言った意見ばかりであったのだ。

現に、試合が開始されるまでは、いや、試合が開始され、10分程度が経つ辺りまでは、今日の挑戦者が一体何分持つかと言う話さえも上がっていた程だ。それほどまでに、現宮皇である暁の実力は、他者の追隨を許すものでは無いと思われていたのである。

だが、現実には誰もが予想し得なかった展開へと変わっていた。徹甲弾という名で知られている、チーム破軍の主力選手であるカズマが、突如その動きを変えた直後、試合の展開はがらりと変わった。まるで獣のような、だがそれでいてどこか洗礼された動きで暁を翻弄し、次々と信じられないような体勢からの攻撃を繰り出していく。その攻撃を、今までの試合では見せたことのない表情で必死に防ぐ暁という図は、それまで暁の圧勝であろうと考えていた多くの観客達を、啞然とさせていた。

そして、彼らが黙ったまま試合を眺めるのは、もう一つ理由があった。

それは、今現在カズマが繰り広げている信じられないような機動の数々であった。通常、The worldでとれる機動というのは、他のオンラインゲームよりも自由度が高いとはいえ、二次元的機動が限界である。

もちろん、アーツや、その他の特殊な技法によって跳ねたりする、限定的な三次元的機動は可能ではある。だが、今カズマが行っている機動は、明らかにそんな限定的機動ではなかった。

地を這うように暁へと迫り、黄金の右腕を振るい、空気を切り裂くとはかりの勢いで蹴りを放つ。しかし、宮皇である暁は、その鋭い一撃を的確に捌き、カズマの蹴撃を流すようにして防ぐ。だがカズマは、いなされた蹴りの勢いを利用し、あるうことか空中で体勢を上下に入れ替え、再びその拳を振るった。しかし、そんな普通ならばあり得ない体勢、場所からの攻撃を必死の形相ながらも防御する暁。カズマはそんな彼の背後に着地すると同時に、左の拳を、空中からの攻撃を防いだことよって僅かな隙を作り出してしまっている暁のボディへと容赦無く叩き込んだ。

4秒に満たない僅かな時間に繰り広げられたカズマのこの機動は、観客達から、暁の勝利という未来予想図を完全に消し去っていた。

「ぐはあ!!」

苦悶の声を上げながら吹き飛ぶ暁を、まるで宙を飛ぶかのように一息で間合いを詰めたカズマは、三度その拳を暁へと振るう。そして繰り返される暁への一方的な攻撃の嵐。その光景に誰もが黙り込み、一部の者達は、ある一つの事を考えていた。

The worldと言うゲームは、あんな動きさえも可能にするようなものなのか。だが、なら何故、今まであのような動きをする者が一人もいなかったのだろうか。何故、カズマだけがあんな動きが出来るのかと。

「チート・・・なのか・・・?」

観客席にいた者の一人がぼつりとそんな言葉を呟いた。その呟かれた言葉は、カズマの動きに魅了されて静まりかえっていた観客席にいた多くのPC達の耳に届いた。

「おまえ、いきなり何言つてやがんだよ・・・」

「だってよ・・・おかしくね？なんで、あんなスゲー動きをアイツだけができた・・・？なんでいままで誰も出来なかつたんだ・・・？」

「それは、そうだけだよ・・・けど、だからってチートつてのは・・・」

「けど、だったら他にどう説明すんだよ！あんな動き、ゼツテエ普通じゃ出来ねえのに、アイツだけが出来たんだぜ？それつて要はチートしてるから出来るつて事じゃねえのかよ・・・？」

その男の言葉によって広がる、目の前で繰り広げられる信じられない機動の数々への不信感。もしも、本当にこの動きが全てチートによるものならば、宮皇暁が破れてしまったとしても確かに可笑しくは無い。むしろ、そんな事をしてまで勝ちたいのか。卑怯ではないのかと言った意見が多数飛び交う事となつたであろう。

だが、それはある一人の男の言葉によって否定された。

「あれはチートなんかじゃねえよ」

「な、なんだおめえ・・・」

声を掛けられるまで、自分の隣に居ることさえ気付かなかつたその男は、カズマの戦う姿を見つめながら、チートの力ではないと断言した男へ「じゃあなんだって言うんだ！」と叫ぶ。

「あの動きはチートなんかで身につけられるような類の動きじゃねえよ。明らかにあのカズマってヤツ自身の力だ」

「何言ってるんだよ、お前。あんな動きが普通のやつに出来るわけがねえだろうが!!」

「普通はな。だが、あの動きはやろうと思えば、俺にも、そしてお前にも出来るんだぞ?」

「な・・・に?バ、バカ言ってるじゃねえぞ!!あんなありえねえ動き、俺は全然できねえっての!!」

いきなり、「自身にも出来ることだぞ?」と言われたその男は、予想外のその返答に、おかしいな声を上げながら「あんな動きは出来たことはない」と否定する。まあそれはそうだろう。第一、本当に出来るのならば。カズマへのチート疑惑など考える必要も無いのだ。

自分たちに出来ない動きを、奴はやっている。なんであいつだけ出来るのか?

それがわからないからこそ、自分たちの納得できる「チートをしているからこそ出来る動きなのだ」という結論を出そうとしていたのだ。

「だから言っただろ?」普通は出来ない「ってよ。まあ、どうして出

来ないのかを説明するのは結構簡単なんだけどな」

そう言いながら、その男は、カズマへのチート疑惑を言い出した男と、その隣で彼らの会話を傍観していた男へと、ある一つのことを尋ねた。

「お前ら、HMDの設定はどうしてる？」

「・・・は？なんで、今HMDの設定のことなんか・・・」

「必要だから聞いてんだよ。で？」

「オートだぜ？てか、それ以外になんかあったっけ？」

「俺もオートだけど・・・それがどうしたんだよ？なんかあの動きと関係あるわけ？」

「大有りだよ。お前ら、その設定マニュアルに変えてみな。そうすれば、あの動きの秘密もわかるさ」

そう言われた男たちは、半信半疑ながらも、言われたとおりにHMDの設定を変更する。次の瞬間・・・

「うおー！！」

「うわぁー！！」

男たちはいきなり、その場で転び、そのままダランと、体から力が抜けてしまったかのようにその場に横たわる。

「お、お前ら何いきなり倒れてんだよ……」

彼らの傍にいた観客の一人が、突然倒れた男たちへとそう声をかける。しかし、その男たちはその体勢のまま、顔だけ動かし、自分たちにも訳がわからないといった表情で、「分かんねえよ!!」と叫びながら、なんとか立とうと手足を震わせながら手すりに掴まりながら立ちあがった。

「なんだよこれ……いきなり体が倒れたと思ったら、思うように操作出来なくなっているっていうか、ただ立つだけなのに、いつものように動かさねえ……」

「おい、なんだよこれ!!意味分かんねえぞ!!」

「それがマニュアル状態だよ。オートでの操作と違って、コントローラーが補助、プレーヤーの思考をHMDが直に読み取ってPCの動きを操作する。コントローラでの操作とは比較にならないほどの操作性を得られるが、その代わり立つことさえも、しっかりと考えながらいけなくなるっていう超難易度の高い操作方法だ。それが、あの動きの正体だよ」

そう言うと男は、相変わらずアクロバティックな動きで暁を追い詰めているカズマを見た。

「嘘だろ……こんな立つのもやっとな操作方法であんなスゲー動きをしてるってのかよ……」

「ありえねえ……」

男の言葉を聞いた観客たちは、一斉にその異常性を理解し、カズ

マへの視線に畏怖の念を織り交ぜた。特に、マニュアル操作へと切り替え、直にこの操作方法のシビアさを実感した二人の男たちは、その感情が顕著であったが、同時に他の感情も宿っていた。

「本当に・・・スゲエ・・・」

「ああ・・・マジで、スゲエよ、アイツ・・・」

その瞳はまるで、マンガに目を輝かせる少年のような光を宿していた。

S I D E カズマ

「ハア・・・ハア・・・よく粘んな、あんたも・・・」

「なに・・・宮皇としての、つまらん意地さ・・・本当に、もうボロボロだよ・・・」

そう軽口をたたき合いながらも、俺たちは互いの一挙手一投足を見逃すまいと視線を鋭くしながら向かい合っていた。

マニュアルへとHMDの設定を変更した俺は、一時たりとも集中力を切らせることが出来ない状態になりながらも、相変わらず不敵

な笑みを浮かべる暁へとかなりのダメージを与えることができた。

今までまともに暁にダメージを与えられた者は居ないらしいので、これだけでもかなりの功績ではあるう。だが、ヤツと比べて受けたダメージの数は少ないものの、俺自身もかなりギリギリの状態になっていた。

理由としては、HMDの設定をマニュアルにしたことと、それと併用して認識する速度を上げていた事に起因する。

この”認識する速度を加速させる”という特殊能力みたいなこの方法を俺は、最近になってようやくそこそこ慣れてきたと言っか、勘を取り戻しつつあったので、それを、上昇した操作性の代償として、些細な思考さえも操作に反映してしまうようになったので、暁の動きを瞬時に認識、それを打ち破るための操作を実行するための手段として活用していた。

だが、元々どちらか一方を使うだけでもかなりの神経を衰弱させることとなるのだが、それを同時に使用していた事の代償に、今の俺は少しでも気を抜けば、あっという間に寝てしまいそうなほどの眠気に襲われていた。

(さっさとケリをつけねえと、今度はこっちがやられる番ってことか・・・)

目が霞み始めたのを自覚した俺は、早く暁を倒さなければ、集中力が切れ、マニュアル操作が不可能となって、自分がやられてしまう可能性を頭に浮かべた。

幸いにも、暁のHPも残り僅かだ。だから・・・

「次で、決める・・・そう言う顔をしているね・・・？」

「ッー！」

今まさに心の中で考えていたことを当てられた俺は、迂闊にも動揺を表情に一瞬とは言え出してしまった。普通ならば気付かないであろう僅かな時間だったが、暁にとってはその一瞬で十分だったよ。うで、先程までのどこか無理をしたような笑みから、最初に浮かべていたどこか余裕を窺わせる笑みに近い表情を浮かべて俺を見つめる。

「なるほど・・・どうやら、今までの君の動きは、君自身に大きな負担が掛かるようだね・・・そして、その状態を維持するのが難しくなってきたのか。だからこそ、決着を急いでいるんだろ？」

「・・・さあ、どうだろうな。随分とダメージを負ってるんだ。こちら辺でケリをつけてやろうって思っただけかもしれないぜ？」

「それはないだろう。今の状態を維持しながら戦えば、有利なのは間違い無く君だ。それに、確かに私の受けたダメージは大きいことは確かだが、決着をつけようと考えるには少し余裕が有ると思ってるがんだがね？」

(チツー!!こっちの思ってることなんかお見通しって訳かよ・・・)

たった一瞬の動揺で、そこまで読み取った暁の洞察力に俺は内心で舌を打つ。だがまあ、バレたなら、仕方ない。

どのみち、俺にも、暁のヤツにもそんな長時間戦えるような余裕

なんてものは無いんだ。たとえヤツが俺の一撃を防御してカウンタ
ーを狙うのだとしても。

(その防御ごと、ヤツをねじ伏せる・・・!!)

そう覚悟を決めた俺は、それまでダランと下げていた腕を上げ、
腰溜めに構える。小細工なんてしない。この身を一発の弾丸と成せ。
全てを打ち砕く、徹甲弾に!!

「いくぜ・・・!!」

そう呟き、それまで溜めていた力を一気に解放!!一直線に睨へ
と翔ぶ!!

「撃滅のおおお・・・!!!!」

「フツ・・・!!!!!!」

ヤツも、この一撃を止めれば、勝つと分かっているのだろう。避
けようとはせずに、完全にこちらの攻撃を受け止めようと刀を両手
で構え、腰を落とし回転を始めた俺を見据えていた。

(上等だ!!?)

「セカンドブリットオオオオオオ!!!!!!」

「グツ・・・!!ウオオオオオオオオ!!!!????」

あらん限りの声で叫びながら拳をヤツの構える刀へと突き出す。
刀に拳が衝突した瞬間、拳を中心とした空間に歪みが生じ、捻れ始

める。

俺の拳に押しつぶされまいと今までに無いほどの叫び声を上げながら必死の形相で受け止める暁。ミシミシと暁にとっては非常に不吉な音を発しながら刀は俺の拳を受け止め続けた。

刀が限界を迎えるのが先か。俺の拳がヤツへと届くのが先か・・・
分からない。分からないが・・・

(約束したんだ・・・)

脳裏に蘇る、キリカの笑顔。

(必ず、勝つて・・・！)

―揺光さんがチャンピオン宮皇になるの、楽しみにしてます！―

(アイツを・・・勝たせてやるって・・・！！)

―絶対勝てよな！カズマ！―

(約束・・・したんだ！！だから・・・！！！？)

「ブチ抜け！！シエルブリットオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

パキパキパキ・・・ゴアアアア！！！！

「刀が・・・持たない・・・！！！！」

「ウオオオオオオオオオオ！！！！？？？」

パキィィ・・・ン・・・

ドサツ・・・

澄んだ音と、誰かが倒れるような音が、俺の耳に入ってくるのと同時に、俺はそれまで必死に耐えてきた眠気が一気に押し寄せってくるのを感じた。

（待てよ・・・まだ、試合が・・・約束を・・・果たさなきゃ・・・）

そんなまだ起きていようとする俺の意志とは反対に、段々と目の前が闇に覆われていく。

「カズマ!!」

（揺・・・光・・・）

揺光の俺を呼ぶ声を薄れ行く意識の中で聞きながら、遂に俺の意識は漆黒の暗闇へと落ちていった。

第三十八話（後書き）

どうでしたでしょうか？

前書きにもあったとおり、今回でアリーナ編は終了です。いや、結構長かったなあ、としみじみ思いますね、ハイ。

次回からはやつとrootに行く予定です、こんな駄作ですが、それでもよろしければ次回からもよろしくお願い致します。ではまた。

設定2（前書き）

どうも、昨日は帰宅が1時過ぎで前日に徹夜だったせいから速攻で寝てしまいました。

今回は、設定の第二弾で、ボレアス、プリムラ、HMDの設定についてです。

設定 2

プリムラ

A I D A でありながら、キリカとの意思疎通を果たし、人間とのコミュニケーションに成功した珍しい個体。その理由は、突然変異体である A I D A - T r i - E d g e - による狂気の影響を受ける前に、キリカへと寄生したため、他の A I D A のように凶暴化することが無かった。つまり、A I D A としてはかなりの最古参である。性格は温厚、そして純粹であり、A I D A の元々の性格であった赤ん坊のような性格から多少成長しているが、精神的にまだまだ幼く、目に見える様々なものが珍しく感じており、度々カズマに「あれは何？これは何？」などの質問を連発させ、そのたびに目を（？）輝かせている。

自身に様々なことを教えてくれたキリカ、そしてその周りの人を守ろうと決めていたが、キリカ達を襲ったフリードによってキリカが未帰還者となってしまったため、彼女の頼みを聞いて現在はカズマと共行動しており、彼とともにフリードを撃退した。

なお、A I D A に性別があるかどうかは定かではないが、あるとすれば、プリムラの性別は女である。一人称は「ボク」

― 通常状態 ―

カズマとともにいるときの彼女は、彼の中にいて、ダメージなどを共有する。このときの彼女の力は主に、防御のために彼の体を覆うように白い膜をはり、それを応用した直接攻撃なのである。

基本的にこの状態のプリムラ自身に特殊な攻撃能力は無く、防御に特化した能力のみを有している。

通常の正式なバトルの中では、彼女の受けるダメージは全く無く、

彼女が受けるダメージとはすなわちイリーガルな存在であるAIDAやアバターとの戦闘のみである。

ーアバター状態ー

カズマが得た力であるボレアスと同化した時の状態。外見的にはボレアスの肩からマントのような形状で白い光を放っている。しかし、形状が固定化されているわけではないので、マントの端のほうでは粒子状になっており、飛行時などには、白い光の軌跡を描く。この状態では、通常状態で有していた防御能力のほかに、砲撃能力、そして敵の攻撃を吸収する特殊な能力があり、元々の能力は数段強化されている。

吸収できる攻撃の上限は未だ謎であるが、AIDA化したフリードの砲撃を完全に吸収していたことから、AIDA - anna 程度の攻撃ならば完全に吸収できる能力があると推定されている。

ー全てを喰らう者ーボレアス

全長約4m

かつてカズマがシエルブリットを入手した際に手に入れた謎のアイテム、思いの欠片に仕込まれていたイリーガルな存在。

他のアバターであるスケイス、イニス、メイガス、フィドヘル、ゴレ、マハ、タルヴォス、コルベニクと言ったかつてのモルガナ八相から生まれたアバターではなく、新規にアウラが作りだした全く新しいアバター。

戦闘スタイルは主に素手であり、遠距離などではプリムラの力を借りた砲撃などを使用している。

名前の由来は、アウラの語源であるアウローラと同一視されているギリシア神話でのエーオースの子である北風の神であるボレアースから。

イメージ的にはスパロボOG外伝に登場するヤルダバオトの色を白と金に変え、スケイスと足して2で割った感じをイメージすれば、ちょうどいい感じになると思います。

HMDの設定について

作品中の時間軸である2016年に市販されているHMDには、マニュアルとオートの二つの操作方法がある。

オートは、初心者、及び中級者向けで、主体となる操作をコントローラーで行う事となり、HMDでの操作は表情、感情の表現や、戦闘以外、タウンでの日常的な動作を行うために使用されている。また戦闘時には、コントローラーで行う事が些か難しい、しゃがむ動作や、ジャンプ。及びアイテムの使用などの動作をHMDが脳波を感知することによってスムーズに執り行われている。

これに比べ、マニュアル時のHMDは、オート時に制限していた思考によるイメージを、ダイレクトにPCの動きに反映できる上級者向けの操作方法。思考をほぼダイレクトにPCへと反映出来るので、コントローラを介した操作ではなく、ほぼ自信のイメージ通りの動きが可能となっている。

が、思考がダイレクトに反映されると言う事は、それまで意識していなかった”立つこと”や、”歩く、走る”と言った基本動作さえもすっかりとイメージしなくてはいけないため、非常に使いづらい仕様となっている。

常に自身がすべき行動をイメージし続けなければいけないので、メリット、デメリットを比べた結果、デメリットのほうが明らかに

上なので、なかなか使用するプレイヤーがほとんどいないという結果になった。しかし、この基本動作などのイメージと言ったデメリットを克服してしまえば、完全に自身が思い描いた通りに動くことが出来るので、オート時には不可能な、”空中での攻撃”などの動きが可能となる。使いこなせれば、現実ではできないような動きをそれこそ無限にできる可能性がある。ただし、イメージでPCを動かすということは非常に難しいので、長時間の訓練が必要となる。

イメージ的にはエヴァのシンクロですね。あれは、エヴァとシンクロすることによって、脳内でイメージした動きを、エヴァに反映させるので、このHMDの設定は、エヴァのシンクロなし状態です。あれも、最初は”歩く”ということを明確にイメージしなくては動きませんので、結構似ていると思います。

設定2（後書き）

次回は本編を更新したいと思います。

第三十九話（前書き）

遅くなりました。
三十九話です。

第三十九話

SIDE一馬

「うがぁ〜・・・だりい〜・・・」

「こら、もっとシャンとしろよ一馬！新年を祝おうつてのにそんな眠そうな顔してたら今年一年碌な事なくなるだろうが！」

「碌な事ねえ〜・・・別に、俺は平和ならそれで良いよ。多少トラブルに巻き込まれるのであろうことは何となくもの予想ついでるか
ら」

「なんだよそれ。つたく、この前のタイトルマッチじゃあんなに凄かったのに、なんでたった一週間くらいでそんなだらしくなってるんだよ全く・・・」

「んなこと言つたつてなあ・・・正月は誰だつて怠けるもんだろ。だつて何にもしなくても良い日なんだぜ？一日中寝てたつて良いんだぜ？だつたら俺は何にもしたくない。ただ寝ていたい」

「まるつきりダメ人間的発想だな、オイ！！とにかく、もうお母さんたちがおせち用意してるんだから、もっとシャンとしろよな！」

「はいよ・・・さみい・・・寝みい・・・」

「だから、寝ようとするな！！」

世界的にほぼすべての事業が休業となる一月一日の今日。新年を

俺の親戚である志乃さんの七尾家、そして血筋的には全く関係無いのだが、毎年参加している倉本家と共に祝うため、俺はこの身を包んでくれていた温い布団から引きずり出され、そのまま背中を押されながら、おせちの用意がされている居間へと歩かされていた。

居間ではすでにほとんどのおせちがテーブルの上に並べられており、親父と、智香のお父さんである智貴さんが朝っぱらからビール片手に笑い合っていた。

そんな親父たちのつまみを母さんたちと共に作っていた志乃さんが下りてきた俺に気付き、「おはよう」と相変わらず大人だと感じさせる余裕のあるというか、包容力とでも言うのだろうか？そんなものを感じさせる笑顔を浮かべながら声をかけてきてくれた。

「おはようございます、志乃さん・・・ふあああ・・・やっぱ寝みいなあ・・・」

「もう。相変わらず朝に弱いんだね、一馬君は。ほら、せっかくのお正月なんだから、もっとシャツキつとしないさい！ね？」

そうやさしく言ってくる志乃さんを見ながら、俺はさつき自分を起こしに来た智香と同じことを言ってきた志乃さんのその言葉を聞いて、思わず（同じようなセリフなのに、なんで智香はあんなに乱暴な言い方しかできないんだろうな・・・）と、考えていた。

智香と志乃さんの違いか・・・性格は、まあ違うし、年齢も違う。普通なら、そこら辺が大きな違いなんだろうけど、俺は二人を見比べたうえで、ある身体的な特徴が大きく違うことに気が付き、それが言動の違いに起因しているのではと、結論を出した。

その結論とはつまり・・・

(フム・・・やっぱり、包容力の違い、なのかな・・・?)
であった。

「ッ!! フンッ!!」

「痛ッ!! いきなりなにすんだよ、智香!!」

何の前触れもなく、背後から後頭部をいきなりグーで殴られた俺は、殴られた個所を抑えながら、振り向いていきなり殴り掛かってきた智香へと少し怒気を含んだ声でそう叫んだ。

だが、俺が被害者なはずなのに、智香は俺にまるで加害者を見つめるようなすさまじく鋭い視線を向けながら、「なんかスッゲー失礼なこと考えたろ?」と問い詰めてきた。

「何の話だ・・・?と言うか、なんでいきなりそんなこと言い出すんだよ・・・」

「勘」

お前は新人類かなんかですか!!

内心でブルブルと震えながら、本当に普通の人間なのかと疑いたくなるほどの鋭い勘を発揮した智香の顔を見ながら、なんとかポーカーフェイスを維持しながらおせちが並べられているテーブルに着く。

・・・智香から鋭い視線が飛んできているが、スルーを決め込む。

「ここで反応してしまえば、後でどうなるかなど・・・」

(考えたくもない・・・!!)

「?どうしたの、一馬君?なんだか顔色悪いみたいだけど・・・体調悪いの?」

「え!?!い、いえいえ!!全然、そんなことはありませんよ!!至って健康です!!」

「そう?無理、しないでね?」

「え、ええ・・・ありがとうございます、志乃さん」

「フッフ、どういたしまして」

再びその大人だと感じさせる、やわらかな笑顔を浮かべて俺にそう答えると、志乃さんは再びキッチンへと戻って行った。

「なぐに、デレデレしてんだよ、一馬・・・」

「なんでもないよ・・・てか、怖いからその目止めてくれて・・・お前、目が据わってるぞ・・・」

凄まじい目つきで睨みつけてくる智香に若干腰が引けながらもそう言っ、なんで正月からこんな気疲れしなきゃいけないんだろかな・・・と考えながら、はあ・・・と嘆息した。

「みんな集まったな？」

さっきまで智貴さんとともに酒を飲んでいた父さんが、テーブルに大体の料理が並んだ事を確認すると、手に持っていた酒を置いて席に着いた俺たちを見回す。おせちを作っていた志乃さんと母さん達もそれぞれ思い思いの席に着いたのを確認すると、鷹揚に「うむ！」と頷き、俺達に向かって軽く頭を下げた。

「新年、明けましておめでとございます。本年もどうぞ、よろしくお願いいたします」

父さんからの挨拶を合図に、俺達も正面、または近くの人と顔を見合わせて、頭を下げる。

「「「新年、明けましておめでとございます。本年もどうぞ、よろしくお願いいたします」」」

それぞれが挨拶を交わし、新年の挨拶を終える。御倉家では、基本的に新年の挨拶は起きてからすぐにするんじゃないかと、集まった人たち全員が揃ってからやることになっている。

普通の家だったら朝起きてきたらすぐに新年の挨拶をするんだろうけど、俺は昔からこの方法だったからなのか分からないが、家独特と言ってもいいこのみんなが集まってから挨拶をする決まりがなんとなく好きだった。理由があるのかって言われたら少し困るが、多分全員しつかりと顔を合わせて新年を祝えるからなのかな？

・・・やっぱり改めて理由を考えてもしつくり来ないな。まあ、
なんとなく好きなんだろ。

「さ、どうぞ倉本さん、飲みましょう、飲みましょう！せつかくの
新年なんですし、パーティーと飲みましょう！」

「お、ありがとうございます！・・・っは〜！いや〜！美味しい！
さ、どうぞ、御倉さんもどうぞ一杯！グツとってください、グツ
と！」

「ありがとうございます、倉本さん。・・・ク〜ツ！！美味しい！い
や〜、やはり新年を祝う酒は格別ですな！」

挨拶を終えたと同時に再び酒盛りに戻る父さんと智貴さん。そんな
二人に呆れた表情を浮かべながら俺は、一応注意したと言う事実を
残すため、酒を煽って気分良さに笑いあう男達に声を掛けた。

「父さん、ちよつと飲み過ぎなんじゃねえの？さつきからずっと飲
んでんじゃない。智貴さんも、飲み過ぎは後がつらいんだろ？少しは
自重したら？」

「な〜に言ってるんだよ一馬あ〜！せつかくの正月なんだ！飲まない
方が正月に失礼だろ！」

いや、意味わかんないし。なんだよ、正月に失礼って。

「そうだよ、一馬君！せつかくの正月なんだ！一年の始めに飲まな
いなんて、それこそ正月に失礼だろ？どうだい、一馬君も一緒に飲
まないかい？君ももうすぐ高校生なんだ、少しくらい酒の味も覚え
ておいた方が後々役にたつと思うよ？」

「お、イイですねそれ！と言うことで、来い一馬！！お前に酒の味と言つものを教えてやろう！！」

智貴さんも、大分酔つてるみたいだな・・・普段だったら未成年の俺に飲酒を勧めるなんてこと全くしないのに、一緒に飲もうなんて言うてるなんて酔っていると言う証拠だろう。父さんも同じで、普段なら「飲みたかったら飲んでもいいが、あまり飲むなよ？まだ未成年なんだから」と言つて自粛させようとするのに、巻き込もうとしてくるし・・・

ハア・・・

「父さんも智貴さんも、未成年に飲酒を勧めるなよな、まったく・・・母さん達からも言つてくれよ」

「あら、良いじゃない正月くらい好きに飲ませてあげても。三が日は仕事も無いんだし、自由にさせてあげなさいって」

「そうそう。偶には息抜きくらいさせてあげなきゃね。正月くらい好きにさせてあげて、一馬君」

「母さん・・・京香さんも・・・ハア、分かったよ・・・けど、あんな調子で飲んでたら後がつらいと思うんだけど」

「いいのよ。潰れちゃえば静かになってそれはそれでこつちとしても助かるしね。本人たちだって好きなだけ飲んで潰れるんだつたら後がどうなつたつてかまわないでしょ？」

「そうですよね。自分のやりたいようにやった後のことなんだか

ら、智貴さんだって文句言っわけないですもんね？」

「そうそう」

「・・・鬼か、あんたら・・・」

自分の旦那が苦しむことになる事など想定内だと言わんばかりの自身の母親が言い放ったその非情な言葉を聞き、その非情な台詞に笑顔で同意する京香さに対して、俺は戦慄を隠せず、思わず一歩後退った。

「あはははは！いや、正月に飲む酒は、やはり格別ですなあ！それに、何よりこれだけ飲んでも怒られないと言うのが最高ですね、倉本さん！」

「いや、全くです！正月、万歳！」

「ははははは！！」

自分達の嫁が、凄まじく恐ろしい打算的な思考から飲酒を咎めなんでいるのかと言う事に全く気がつかない二人は、とても嬉しそうな顔で、お互いに持つビールやら日本酒やらの瓶を傾け合い、笑い合う。

その姿を見て俺は、ある一つの諺を思い出していた。

「知らぬが仏、か・・・」

「ははははははは！！」

笑い合う父さん達の声を聞き、俺は何故だかほろりと涙がこぼれたのであった。

SIDE 智香

「あゝあ、父さん達、ちょっと飲み過ぎじゃない？あれじゃあ、後が辛いと思うんだけど・・・」

「・・・今は、触れないであげてくれ・・・あとで、存分に思い知ることになるだろうからさ・・・」

「？」

父さん達の痛飲と言っても良いくらいの飲み方を見て、何となく呟いた言葉に、一馬がどことなく悲痛な感じの表情を浮かべながら、哀れみのこもった目で父さん達の姿を見やる。

なにかあったのかな・・・？さっき母さん達とも何か話してたみたいだけど・・・まあ、いつか。第一父さん達も、あれだけ飲めば、後々どうなるかなんて普通に考えられるんだから、どうなったって、結局自業自得だし、あたしが気にしたって意味ないもんね。

そう気を取り直したあたしは、父さん達から視線を外し、どこか悲哀な雰囲気漂わせながら昆布巻きをつついているカズマのグラスに、よく冷えている麦茶を注ぐ。

「お、サンキュ。丁度何か飲みたいって思ってたんだ」

そう言つて、笑みを浮かべて麦茶の注がれたグラスを手にする一馬。そんな一馬の顔を見て、あたしは自然に笑みを浮かべていた。

「いいよ。決勝で勝たせてくれたお礼……って言うにはちよつとお粗末だけど、感謝の気持ちちつて事で」

「なんだよ、まだ言つてんのかそのこと。ずつと言つてるだろうが。アレは俺のおかげでも何でも無い。お前や、アインが頑張った結果だ。それを、全部俺のおかげみたいと言つなつてよ」

「でも、実際に宮皇だった暁を倒したのは一馬なんだから、感謝するくらい、別に良いだろ？あたしが好きでやつてんだからさ。……もしかして、迷惑、だった……？」

「はあ……誰もそんな事言つてないだろ？ただ、少し大きざだつて言つてんの。第一、お礼だったらあの日の内に色々アイテムもらつたりしてんだからこれ以上感謝されてちゃ、むしろ俺の方がお前に何かお礼しなきゃいけないなつちまうつて」

一馬は、そうどこか茶化したように言うと、再びおせちへと箸を伸ばして料理を口に運んだ。

相変わらず、人の恩つてのを必要以上にもらいたがらないよね、一馬つて……

昔から、他人やあたし達からのお礼の品や行動を中々受け取ろうとしない一馬の悪い癖というか、性格は、全く変わっていないみたいだ。

「ま、それはそうと丁度良い機会だし、改めて、おめでとう、新宮皇。これから大変だろうけど、頑張れよな」

「うん、分かってる・・・けど、ホントにチームから抜けるのかよ？まだまだ一馬の力は必要だったのに・・・」

「ああ、悪いな。て言うか、前から決めてた事だろ？今更文句言うなって」

「そうだけどさ〜・・・けど、チームの主力が抜けちゃったら、この後の防衛戦とかメツチャ大変なんだぞ〜？また新しくメンバー探さなきゃいけないし・・・ハア〜・・・」

そう言いながらあたしは、行儀悪いと分かっていたながらも、これからの新メンバー探しや、タイトル防衛戦のことなどを考えて、思わずテーブルに顎を乗せて溜息をついた。

一馬とあたしは、アリーナトーナメントに挑戦する前に、ある一つの約束を交わしていた。あたしが宮皇になることが出来たら、一馬はチームから抜けるという約束だ。

もちろん、二度と戻ってこないと言う訳じゃ無い。メンバーが足りなくて、緊急の時ややむを得ない時だけは助力してくれる事にはなっているけど、それでもチームの主力たる一馬が抜けるというのは・・・キツイよな〜・・・

「なあ〜、やつぱり考え直してくれよ〜。一馬が抜けちゃったら、キツイってば〜」

「今更何言っただよ。前から決めてた事だろうが。第一、本当にやばいときは力貸してやるって言っただから、少しはありがたく思えって。それに、俺にばかり頼ってたら、本当の意味での宮皇になれないから、構わないって言ったの、智香だろ？」

「そりゃ、そうだけどさ〜・・・」

「分かってるなら、諦めろって。それに、俺も見てみたいしな。眞の宮皇になつたお前の姿ってヤツをさ・・・」

「一馬・・・分かつたよ・・・見てなよ！！抜けたことを後悔させてやるくらいの、スツゲー宮皇になつてみせるからな！！」

何気ない、一馬の口から漏れたその一言は、あたしの萎えかけていた闘志に火をつけるのには、十分だった。

一馬に、期待されている。その事だけで、これだけモチベーションが上がるあたしは、見方を変えたら、スツゴク軽い女に見えるんだろうけど、今のあたしにそんな事は関係無かつた。

(絶対に、なつてみせる・・・誰にも負けない、一馬や、キリカが誇ってくれるような・・・胸を張れるような、宮皇に！！)

「なんだか、楽しそうだね、二人とも。なんの話してるの？」

そう言いながら、母さん達と話していた志乃さんが、あたしと反対側の、丁度一馬を挟み込むような形になる席に着いて、そう尋ねてきた。

「いえ、ちょっと智香のチームから抜けるって話をしただけです。そんな大した事じゃ無いですって」

「・・・それって、あたしのチームは、大したこと無いって言いたいのかよ??」

「そう言う訳じゃねえって」

「え、一馬君、智香ちゃんのチームから抜けちゃうの？この前宮皇になったばかりなのに・・・」

一馬が言った内容に少し驚いたみたいで、志乃さんは少し目を大きく見開きながらそう尋ねてきた。

「ええ。前から、宮皇になったらチームから抜けさせてもらうことになってたんで。ちよつと自分を鍛え直すためにも、宮王のチームにいるより、ソロで色々やった方が強くなれるかなって思ったんです。もちろん、完全にこれ以降智香達のチームに協力しないって訳じゃ無いですけど、一応けじめというか、気持ち的にいつまでのチームにいるのは気分的に嫌なんで」

・・・なんだか、この言葉だけ聞いてると、まるであたしのチームになんて居たくないから、さつさと抜けるんですよとでも言うてるように聞こえるな・・・

「へえ、そうなんだ。凄いね、一馬君は。今でも十分強いのに、まだ強く成りたいって思えるなんて。普通の人だったら、多分もう満足して強く成ろうだなんて考えないと思うけどね」

「俺は、まだまだ弱いですよ・・・（このままじゃ・・・今の強さで、満足なんてしてたら・・・大切なものなんて、守れるわけ無いんだ・・・）」

「・・・一馬君・・・？」

どこか思い詰めたような悲壮な表情で黙り込んでしまった一馬に、

心配した声音で問いかける志乃さん。志乃さんの声に、ハツと顔を上げて、「大丈夫？」と尋ねられた一馬は、手を振りながら「大丈夫です」と答えた。

「!!あ、いや、何でも無いです。ちょっと考えごととしてただけですから……」

「そう……あのさ、一馬君。こんな時に言うのもなんなんだけど……」

「?どうしたんですか、志乃さん？」

「えつとね……」

(あの志乃さんが、言うのを戸惑っている……?なんの話する気なんだろう……?)

いつもならば、ハキハキと言うか、言い淀むことが少ない志乃さんが、珍しく言い淀みながら、口にした内容は、あたしからしたら、「それはないでしょ」と言いたくなるような内容だった。

「あのさ……チームから抜けたって事は、今は暇……なのかな?」

「えつと、一応差し迫ったような用とかは無いですけど……どうしてですか?」

「あのね……実は、一馬君にお願いがあるの……」

「お願い……ですか?」

「うん・・・」馬君

「はい？」

「・・・私達、黄昏の旅団に、協力してくれないかな？」

第三十九話（後書き）

レポート、レポート、テスト、テスト……

この時期は、本当に忙しいですね……

しかも、他の大学は夏休みに入っている中、僕の大学はまさかの8月まで授業があるという悪夢……マジ最悪ですよ……

第四十話（前書き）

どうも、お待たせしました。

テストで手一杯で、まさかの木曜投稿という事態になってしまいました・・・

ほんとうに、すみません。

それと、遅れといて申し訳無いんですが、実は私、八月の五日から、十六日までの約二週間弱の間、合宿があるために、更新が恐らく不可能になります。

まあ、暇があったら携帯で執筆しようと思ってますので、運がよければ更新出来るかもしれないませんが、結構ガチなので、期待しないで下さい。

第四十話

SIDE一馬

「黄昏の旅団に協力してほしい？」

「そう。ちょっと私たちの探しているものがもう少しで見つかりそうだけど、他のギルドの妨害が入ってきてきてね？それで、少しでも腕の立つ人を探してるんだ。引き受けてくれないかな？」

志乃さんからの予想してなかった突然のその申し出に俺は、つい聞き返してしまった。前に志乃さんの所属しているギルド、「黄昏の旅団」のギルドマスターから勧誘は受けていたけど、その時に反対していた志乃さんから、誘いが来るなんてのは、ちょっと予想していなかった。

「えっと、前に志乃さんのギルドの、マスター・・・確か、オーヴァンでしたっけ？」

「うん。そうだよ」

「あの人に前誘われた時には志乃さん反対してたみたいですけど、なんで今回は誘ったんですか？いや、別に誘われたのがイヤとかじゃなくて、ただちょっと疑問に思っただけなんですけど」

あの時は、なんか、俺が入るのを嫌がってたと言うか、仲間に入つて欲しいって言うてくるオーヴァンに結構鋭い視線を向けてたみたいだから、何となく疑問に思っただけで聞いて見たけど、すこし、失礼だったかな？

「ああ、あの時ね・・・ん、別に何か深い訳があるとかじゃないんだけど・・・あの時は、一馬君も受験とか、アリーナのこととか色々やること一杯あったでしょ？私も、高校の受験とかは大変だったから、そんな大事な時期に私達の都合で一馬君を煩わせたくなかったからあんまり誘いたくなかったの」

ああ、なるほど・・・そう言う事だったのか。

ついこの前まで、受験生だったから、志乃さんはオーヴァンの勧誘を俺の代わりに断ってたのか。今はもう既に推薦入試も終わって完全に受験から一足先に抜け出しているし、アリーナバトルも終了してるし、特に断る理由もないけど・・・

（あのギルドマスター、何となく危険な感じがするんだよね・・・）

初めて会ったときの第一印象というのは、案外人の記憶に残るモノで、それが及ぼすその人物に対するイメージというのは、中々バカに出来たものじゃない。

まあ、何が言いたいのかというと・・・

（正直、気が進まないんだよね・・・）

別に、ギルド・黄昏の旅団に協力すること自体は構わない。前に機会ができたなら協力するとも言っているし、何よりいつも何かと俺たちの世話をやいてくれるのにも関わらず、滅多に俺たちに対して手伝ってほしいなんてことを言ったことのない志乃さんからの頼みだ。

できれば協力してやりたいと思う。てか、普通だったら即答で頼みを聞く。けど・・・うん・・・

「あ、別に無理にとは言わないから。一馬君にもいろいろと用事あると思うし、即答しなくていいよ」

しばらく黙って考えていた俺の様子を見ていた志乃さんは、何か俺に用事があると思ったのかそう言って今答えなくてもいいと言ってくれた。

正直、申し訳ないと思いつつも、ありがたい。このことに関しては、即答できるような内容ではないし、なんとなくではあるが、プリムラとも相談するべきなんだと思うから。

「すみません・・・えと、そうさせてもらいますね。正月中には返事出しますから」

「うん。待つてるね」

そう言つてほほ笑む志乃さん。申し訳ないと思いつつも、俺はその申し出に甘えることにしたのだった。

「むっ・・・なんか、あたしだけ蚊帳の外なんですけど・・・」

そう言つて、それまで話題に上らなかつたことが不満なのか、智香が少し頬を膨らませながら、俺と志乃さんの会話に入ってくる。

その様子は、正直お前本当に今年で高校生になるのかよ・・・と問いたいくらいに幼いしぐさだった。

「なんだよ、突然」

「なんだよってなんだよ！だってさ、志乃さんは強いプレイヤー探してるんだろ？だったら、あたしにだって声かけたって不思議じゃないのに、なんか一馬だけ誘われてるんだもん！それってなんか不公平だろ！！」

「子供か、お前は・・・」

「15なんて、まだまだ子供だろ！」

（それに、こういうところで志乃さんは差をつけようとしてくるんだ！絶対に一馬ひとりだけを行かせるなんて危険なこと、させてたまるか！！）

智香のその本当に子供みたいな態度を見た俺は、思わずため息を吐いて、智香に「マジでガキかよお前は・・・」とあきれた表情で言葉をかけた。

「何が不満なんだよ、お前は・・・」

「な、何がって・・・チャ、宮皇になったあたしが誘われないのに、なんで一馬が誘われるんだよ！」

（少しは気づけよな、バカ！！）

「どこのガキ大将だ、お前は・・・」

「な！！ガ、ガキ大将ってなんだよ、ガキ大将って！！」

まるでどこかのガキ大将みたいな暴論を展開した智香に、ついっ
い思って事をそのまま口に出してしまっただけで怒鳴られてしまっただが・
・コイツ、自分が言っただ事を分かってないのか？さっきの言い分は
どこの誰が聞いたってガキ大将の言い分にしかなんか聞かれないと思っ
ただが・・・

まあ、それはいいや。けど、智香は本当に理解していないのか？
志乃さんが智香のことを誘わないのは、宮皇になってから日も経っ
ていないコイツを自分達のギルドの揉め事に巻き込むわけにはいか
ないという気遣いからだと言っただけ、いくら何でも分かると思っ
ただが・・・

「けどよ、自分が誘われてないとか言っただけ、実際智香に他のギル
ドの手伝いする余裕なんて無いだろ？つい最近宮皇になったっての
に、足下固められなくちゃ、また他の誰かに宮皇の座を奪われるこ
とになるかもしれないだろ？」

「うっ！わ、分かってるよ、そんな事はさー！！」

「なら、志乃さんがお前を誘わなかった理由だって普通に分かるだ
ろっが」

「わ、分かってるけどさ・・・」

「なら、話は終わり。結論は出てるじゃないか」

「う、ううう・・・！！」

俺がそう言っただけ、まだ何か言いたそうにしながらも、俺の言う事

が正論だとは理解出来ているので、何も言えないと言った表情で、うなり声を上げる智香。

て言うか、反論出来ないから、うなり声上げるとか・・・お前、本当に俺と同じ年かよ・・・今時、幼稚園児だってそんな風にうなり声なんか上げないと思うんだが・・・

「うーん・・・智香ちゃん、ちょっと私と話さない？出来れば二人つきりで」

「志乃さん？」

俺が智香のとつた行動に対して内心でそんな風に考えていると、それまで俺達の会話を黙って聞いていた志乃さんが、突然そう言っ
て智香と共に部屋を出て行こうと立ち上がった。

「と言うわけだから、ちょっと智香ちゃんと二人つきりにさせてもらってもいいかな？そんなに時間取るつもり無いから、すぐに戻ってくるけどね」

「いや、別に構わないですけど・・・」

「なら、決まりね。行こう、智香ちゃん」

「あ、ちょ、志乃さん・・・!!」

手を引かれてリビングから退室していく智香と、志乃さんの二人を半ば呆然と見送った俺は思った。相変わらず志乃さんは、唐突に、なんの前触れもなく何かをやり出すのか・・・と。

「お、なんだ、一馬！志乃ちゃん達に置いて行かれたのか！！だつたら・・・飲め！！今日は、男達で、飲み明かそう！！」

「お、いいですね、御倉さん！！偶には男だけで飲むって言うのも、乙なもんだよ、一馬君！！」

「・・・未成年に飲酒を勧めるなよな、二人とも・・・はあ、母さん、いい加減にこの二人、止め・・・ない・・・と・・・」

「京香さ〜ん！！今日は、主婦同士で〜！！パーツとやりましょうね！！パーツと！！」

「アハハ〜！いいですね〜、琴美さん〜！！パーツとやっちゃいましょう、パーツと！！アハハ〜！！」

「・・・なに、このカオス・・・」

たった、10分程度の間、一体何があつたんだ・・・・・・目の前に広がる、余りにもカオスな現状を目撃した俺は、啞然と棒立ちして、志乃さん達の帰還をひたすら待ち続けたのだった・・・

SIDE 志乃

一馬君や、叔父さん達の居るリビングから抜け出した私と智香ち

やんは、向かいにある叔父さん達の部屋にちよつとお邪魔させてもらった。

普通、こついうところに入るのならその部屋の持ち主からちゃんと許可もらわなきゃいけないと思うけど、昔から良く入らせてもらってるし、何より親戚だから、今回は特別に使わせてもらおう。

「さて・・・ちよつとお話しようか、智香ちゃん」

そう言つて、私はちよつと無理矢理に近い形でこの部屋に連れてきた智香ちゃんと向き合つた。

「はあ・・・相変わらず志乃さんつて、行動が唐突ですよね・・・いきなりリビングから連れ出すなんて、ちよつと驚いちゃいましたよ」

「そうかな？」

私的には、そんなに突然行動してるつもりなんて全く無いんだけどな・・・？まあ、智香ちゃん達とは長い付き合いだから、私も無意識なうちに遠慮しないで行動しているのかもしれない。

「まあ、いいですけど・・・」

そう言つて、智香ちゃんはどこことなく疲れたように溜息を吐いてから、私を真つ直ぐに見つめてきた。

「さつきは、すみませんでした。あんな風に、一馬との会話、妨げたみたいになつちゃつて・・・」

「うっん、謝らなくていいよ。私の方にも、非はあるもの。あんな風に突然一馬君を横取りするような事したら、焦っても仕方ないと思うもの。私も、逆の立場なら智香ちゃんと同じ事してたと思うもん」

私がそう言つと、何故か智香ちゃんは思案顔になって、黙りこんじゃった。

「どうしたの、智香ちゃん？」

「……えっと……こういつたらなんですけど、志乃さんがあたしみたいにあんな幼稚な事する場面が思い浮かばないんですけど……」

「そうかな？私だって、好きな人が他の誰かと一緒に行動しようとしたら、どうにかして邪魔しようとすると思うよ？」

私がそう言つと、智香ちゃんは恥ずかしそうにしながらも、「……そう、ですよね」と言つて、再度私の目を真っ直ぐに見つめてきた。

「大丈夫。一馬君が私達の協力してくれるとしても、私はこの機会に一馬君にアプローチしようなんて考えてないよ」

「え？」

私がそう言つと、智香ちゃんは意外なことを聞いたと言つた顔で私の顔を見てくる。

「なんで、アプローチしないんですか……？折角のチャンスなの

に……」

「ん……なら、逆に聞くけど、智香ちゃんは一馬君と紅魔宮の宮皇を目指しているとき、一馬君にアプローチしようなんて考えた？」

「えっ！え、え……と、その……か、考えてませんでした……」

「でしょう？と言っよりも、本当に目指したいものがある時に、そんな風に誰かにアプローチを掛けようって思ったりしないよね？」

「……はい……」

そう返事した智香ちゃんは、何となく私の言いたいことを察したのか、なんだか照れたような、恥ずかしがるように顔を伏せちゃった。

「私もね？同じなんだ……オーヴァン達と一緒に、キー・オブ・ザ・トワイライト黄昏の鍵を見つけ出したって思ってるの……だから、この機会に一馬君へアプローチを掛けてみようなんて考えて無いから、安心して」

「え、あ、いや、その……」

「フフツ」

あたふたと両手を振り回しながら何か喋ろうとして、口をパクパクと動かす智香ちゃんの姿に、思わず笑い声を漏らしちゃった私は、慌てる智香ちゃんに「落ち着いて」と声を掛けて、話を進めることにした。

「だから、安心して？私は今回、絶対に一馬君に対して、何かをしようなんて思わないから。それに・・・」

「・・・それに？」

「智香ちゃんが何の行動も起こしていないのに、私が行動を起こして一馬君と付き合ったとしても、納得できないでしょ？お互いに、ね？」

「えっと・・・そう、ですね」

気まずそうな表情で同意した智香ちゃんは、顔を伏せて黙り込んでしまった。しばらく、何かを考え込んでいた智香ちゃんは、それまで伏せていた顔をあげて、いきなり「すみませんでした！」と言って頭を下げてきた。

「智香ちゃん？どうしたの、急に？」

「・・・あたし、正直、志乃さんのこと、疑ってたんです・・・志乃さんの言う通り、志乃さん達のギルドに、一馬だけで行かせたら志乃さんが一馬に思いを伝えてしまうんじゃないかって・・・あーあしが居ない間に、もしも、志乃さんと一馬が付き合う事になるんじゃないかって・・・そんな風に考えてたんです、あたし。志乃さんは、全然そんな事考えて無いのに・・・本気でギルドの為に一馬を誘ってたのに、あたしはそんな事ばかり考えてた・・・」

「智香ちゃん・・・」

そう言って智香ちゃんは目の端に涙を溜めながら、私に向かって

頭を下げた。

「あたしは・・・志乃さんを・・・子供の頃から知ってるのに・・・
凄く、あたし達に良くしてくれてたのに・・・そんな志乃さんを、
あたしは、信じようとしなかった・・・信じられなかった・・・だ
から・・・ごめんなさい、志乃さん・・・」

そう言っただけで謝罪してくる智香ちゃんを見つめながら私は、涙を流
す彼女の顔が、何故だか凄く綺麗だと感じた。ああ、この子は、な
んて綺麗な涙を流すんだろうって。

誰だって・・・誰かを好きになったのならば、必ず抱く、嫉妬の
感情。いくら相手が親しい人間であろうと、自分以外の誰かが、好
きな人と一緒に居ると考えれば、誰だってさっきまでの智香ちゃん
と同じように考えると思う。

実際に、私だって何度も言うように、智香ちゃんと立場が逆だっ
たなら・・・うん、つい最近まで、私はさっきまでの智香ちゃん
と同じような事を考えていた。

智香ちゃんが、一馬君に思いを伝えてしまったら？もし、一馬君
がその思いに答えたら？私は・・・どうしたらいいの？

不安で、不安で、仕方なかった。だから、The worldで
一馬君と会った私は、それまで大学の勉強や、アルバイトとかで少
し疎遠になっていた一馬君との連絡を再開した。

智香ちゃんは、そんな事するような子じゃ無い。一緒にチームだ
からと言って、それを利用して一馬君に接近しようなんて考えるよ
うな子じゃ無いんだと、内心で分かっているながらも私は、自分の不

安で心が一杯になって、時間を作って、一馬君と連絡を取り合った。

（だから、智香ちゃん・・・私は、あなたの言うような、綺麗な人なんかじゃないんだ・・・嫉妬をいだいていた、ただの・・・女、なんだよ・・・）

そう内心で呟いた私は、けど、その事を表情に出さないようにしながら、智香ちゃんの顔を上げさせて、その目を真っ直ぐ見つめた。

「智香ちゃん・・・顔、上げて？」

「でも・・・」

「・・・もう、いいよ。言ったでしょ？私だって立場が逆なら同じように考えてたって」

「でも・・・あたしは・・・」

「いいの！この話は、もうおしまい！分かった？」

そう言って、笑顔を浮かべる。本心からの笑みじゃないけど、今は、笑顔を浮かべよう。

この子に、失望されたくないから。

・・・やっぱり、醜いなあ、私。

「約束するよ。私は、一馬君に告白するときは、智香ちゃんが居る前です」

「えー！そ、それって、どういう意味ですか！！」

私の唐突な発言に、智香ちゃんはそれまで涙を浮かべていた目を見開いて、私に詰め寄ってきた。

「どづいう意味って、そう言う意味だよ？」

「いや、そう言う意味って言われても・・・」

「私が一馬君に告白するときは、必ず智香ちゃんと二人揃って告白しようって意味」

「・・・は？」

私の言った言葉の意味がイマイチ理解出来ていないのか、ポカンとした表情で棒立ち状態になる智香ちゃん。けど、少ししたら私の言った言葉の意味が理解出来たのか、顔を真っ赤にしながら、あたふたと腕を振りながら私を問い詰めてきた。

「ど、どどどと言う意味ですか、それ！！あ、あああたしと、し、志乃さんが、いいいい、一緒に、告白するって！！」

「フフフ、少し落ち着いたら、智香ちゃん？」

「いや、落ち着いたらって言われても、その・・・二人で一緒に告白しようなんて言われたら落ち着いてなんかいられないでしょう！」

うーん、そうかな？私的にはそうでも無い気がするんだけどな？まあ、それはともかく。

「だって、私達、お互いに抜け駆けされるのが怖いでしょ？」

「抜け駆けって・・・まあ、そうですね・・・」

相変わらず、ハッキリ言うなあ〜と肩をすくめながらも私の質問を肯定した。

「だから、二人で、一緒に一馬君に告白するの。それで、どちらか選ばれれば、お互いスッキリすると思うの」

「けど、だからって、二人一緒に告白するなんて・・・」

そう言って渋る智香ちゃんに、私は「なら、私が智香ちゃんの知らないところで告白して、一馬君と付き合う事になってもいいの？」と尋ねた。

答えは分かりきっていたけど、念押しのためにね。

「ううう・・・イヤです・・・」

「なら、答えは一つじゃないかな？」

「・・・分りました。告白するときは、二人一緒に・・・告白しましょうー!」

ようやく観念した智香ちゃんは、なんだか覚悟を決めたような顔をして、私にそう言った。

「うん。それじゃあ、そろそろ戻ろっか? いい加減に、一馬君も待ちくたびれてるかもしれなし」

私の正論に返す言葉もないのか、唸るだけの智香ちゃんを尻目に、私はリビングのドアを開けて、部屋の中へと入った。

「あ、志乃さん！！助けてください！！」

「おら、一馬！！お前も男なら、潔く飲め！！」

「ふざけんなよ、このクソ親父！！いい加減に未成年に飲酒を勧めてくるんじゃないよ！！また蹴り飛ばされたいのか！！」

「アハハハハ！！いいぞお、アナタ！！もつとやって！！もう一回飛んでみて！！アハハハハ！！」

「煽んなよ、母さん！！てか、夫が息子に蹴り飛ばされる姿みたいとか鬼畜だな！！あんたも、いい加減に飲むの止めるや！！」

「ねえ、智貴さ〜ん！あたしも〜！！旅行行きたいの〜！！」

「ああ、行こう行こう！！いっそのこと、バミューダトライアングルにでも行こうか！！」

「きゃ〜！！智貴さんステキ〜！！」

「意味分かんないから！！バミューダトライアングル行くのがステキとか、意味分かんないから！！」

「アハハハ・・・予想以上のカオスみたいだね、これは・・・」

「笑ってないで、助けてください「ほらー！！観念して、飲めー！！」

「いい加減、マジでぶっ飛ばすぞ、クソ親父!!」

「志乃さん!! さっきのってどういう意味……って、お、お母さん! お父さん! 何服脱ごうとしてんの!!」

「だつて、暑いんだもの!!」

「そうだぞ? なんだか暑いんだよな、この部屋」

「だからって、他人様の家で脱ぐな!!」

「うん……これは、收拾するのが大変そうだな……」

リビングの混沌とした状況に、私はそう苦笑を漏らして、「志乃さん!!」と助けを求める一馬君の元へと歩いていく。

智香ちゃんも、完全に酔っぱらっている両親の姿をみて、さっきの私の言葉を聞いたですよりも先に二人の元へと駆け寄っていった。

「志乃さん!!」

「はいはい。今行くから、ちょっとまって、二人とも」

「恋愛は、戦争だよ？智香ちゃん。」

「だから・・・手加減なんて、してあげないからね？」

第四十話（後書き）

さてさて、更新遅れたにも関わらず、相変わらずの低クオリティだった回です。

いや、下手すると、今までで一番のクオリティの低さを露呈したかも・・・まあ、いいや。

キャラの心情を描くのって、かなりキツイのかと実感した回でした。

以上!!!

第四十一話（前書き）

お久しぶりです。

やっと、合宿から帰って来れました・・・
久々に、文明の利器に触れたぜえ・・・

まあ、実際は、二日前に帰ってきていたんですが、色々と立て込んでしまい、こんなにも遅くの投稿となってしまうました。

久々なので、クオリティが低くなっていると思いますが、出来れば生暖かい目で見てやってください。

第四十一話

SIDEカズマ

志乃さんから、ギルドの手伝いをしてほしいと言われ、酔っ払った父さん達に絡まれたあの混沌とした元旦から今日で一週間。

志乃さんも既に東京のアパートへと帰宅し、父さんと智貴さん達社会人は、三が日が終わってしまえば休めるわけもなく、「サラリーマンはつらいよなあ〜」などと言いながら、会社へと出勤している。まあ、父さんは会社でも結構お偉いさんらしいから、休もうと思えば多少は融通効くらしいが、「下が働いてるのに、上が働かないでどうするんだよ？」と言う理由から、出勤らしい。

いやはや、元旦の混沌な醜態を見てなければ、普通に尊敬してたんだが・・・まあ、それを差し引いても、結構立派な親だと思うよ？仕事もしっかりとこなしてるのに、俺や母さんのことをないがしろにしないで、しっかり家族の事も考えるなんてそうそう出来る事じゃ無いと思うし。

まあ、それはともかく。

志乃さんから、ギルドに改めて招待するから、カオスゲート前で待ち合わせをしようと言う事で、俺は約束の時間までまだ余裕が有ることを確認して、マク・アヌではなく、ルミナ・クロスへと足を運んでいた。

最後に来たのは、あの暁との決勝以来（たかだか二週間程度しか経っていないが）だ。カオスゲートからの転送を終えた俺の眼前に

広がるのは、相変わらず「俺は強いぜ？舐めてつとぶつ飛ばすぞ！」と言った風貌の男や、「女だからって油断していると、痛い目合うよ？」とでも言いたげな表情をした女性型PCで溢れかえっているアリーナへの大通りだった。

「相変わらず、ここは人が多いとこだよな・・・ま、今日は特別に多いのかもしれないけど」

「あれ、カズマじゃないか！」

ゲート前でポツリと独り言を呟いていると、後からの聞き覚えのある声の持ち主へと振り返った。

「お、シラバス。久しぶり！」

「うん、久しぶり。あ、そうだ。明けましておめでとうございませう」

「おお、そう言えば新年になって初めて会ったよな。明けましておめでとうございませう」

そう言ってお互いに頭を下げた俺達は、こんなところで突っ立っているのもなんだからと言う事で、とりあえず歩きながら話すことにした。

「それにしても、随分と久しぶりだな。最後にあったのは確か・・・」

「カズマ達の準決勝前に会ったつきりだね。ゴメンね、決勝の応援行けなくて・・・後で知り合いに試合見せてもらったけど、本当に凄い試合だったよ！」

「サンキユ。そう言ってもらえると、こっちとしても頑張った甲斐があったよ」

「でも、本当にカズマ破軍から抜けるの？」

「情報早いな。まあ、シラバスの言うとおりだよ。実際は、もう抜けてるんだけどな。今日は、一観客として試合を観に来たんだよ」

俺がそう言うと、シラバスはとても残念そうな表情をしながら、
「そうなんだ・・・」と顔を伏せながら俺と共にアリーナへと歩き続けた。

「あの話、やっぱり本当だったんだ・・・正直に言えば、なんで折角チャンピオンになれたのに抜けちゃったのか聞きたいところだけど・・・」

「聞かないのか？」

「うん・・・何か、事情があるんでしょう？無理に聞くことは思わないよ。それに、これはカズマと、揺光の問題だもん。部外者の僕が口を出して良い問題じゃないでしょう？」

「シラバス・・・」

俺がチームを抜けた理由なんて、正直に言ってしまうば、そう大した理由じゃない。だからと言って、他人にホイホイと喋るようなものではない。

他人とは得てして、こういった自身と関係無いところで起こった

事件に関してかなりの興味を抱く者が少なくない。そして、そう言った奴らは大抵こういう出来事が起こった場合はその原因を知っている者が居た場合、より深い事情を知ろうとしてくる者が少なくないのが現実だ。

出来れば、聞かないで欲しいと言う俺の言葉にしなかつた気持ちを見せずとも察してくれるシラバスに、俺は思わず感謝の念を抱いた。

「それよりもホラ、早く試合と揺光の試合始まっちゃうよ？彼女の試合を見に来たんでしょ？」

「・・・ああ。今行くよ」

S I D E 揺光

「揺光、もうそろそろ時間よ」

「うん、分かってるよ」

選手控え室で目を閉じながら待機していたあたしは、そう言った話しかけてきたアインの言葉に閉じていた目を開いた。

この数ヶ月で見慣れた控え室のグラフィックは変化することなく、あたしの視界に映り出す。けど、あたしの目に映るメンバーは若干の変化を見せていた。

「や、やっぱり揺光さん達は余裕そうですね・・・私は、緊張で心

臓が爆発しそうですよ……」

あたし、アインと言うメンバーは変わることなく、チーム破軍から脱退したカズマの代わりに今日からアリーナバトルでデビューすることとなったあたし達と同じ双剣士のミーナは、そう言って不安に彩られた表情でその胸を抑えていた。

「全く……今からそんなに緊張してたら、試合まで持たないわよ？」

「そ、そんな事言っただってしょうがないじゃないですか！！私、アインさん達みたいにバトルの経験なんて豊富じゃないんですから！それに、もしも私のせいで揺光さん達に迷惑掛けたらって考えると……不安で仕方ないんですよ！」

そう言って自身の抱えている不安を口にしたミーナはそれまで不安に彩らせながらも上げていた顔を伏せて、ポツリと一言口にした。

「それに……私なんか、本当にあのカズマさんの代わりに役に立てるかどうかって考えたら……」

「変わりなんかじゃないさ」

「揺光……？」

ミーナの不安に満ちた内心を黙って聞いていたあたしは、ミーナのその一言を聞いて、それまで閉じていた口を開いて、たった一言そう言った。

「ミーナ。あたしは、別にカズマの代わりとしてあんたをチームに

入れた訳じゃ無い」

「揺光……さん……？」

どこか戸惑ったかのようにあたしの顔を見つめてくるミーナの目を真っ直ぐに見つめながら、あたしはハッキリと彼女に告げた。

「あたしは、あんたにカズマの代わりなんて最初っから求めてないよ」

「で、でも、だったらなんであたしなんかをチームの一員に迎え入れてくれたんですか……？」

あたしの言葉に納得いかないのか、ミーナは不安を露わにした顔のまま、あたしへとそう詰め寄って来た。

本当に、カズマの代わりとしてでは無いのなら、どうして自分のような初心者に等しいプレーヤーを呼んだのか。何の為に、自分はこのチームへと呼ばれたのか。

その理由を知りたいと言った表情のミーナに、事前にちゃんと説明しとくんだったなあ……と思いつつながら、あたしは自分が何故彼女をチームに迎え入れたのかを話すことにした。

「そんなもん、決まってるんだろ。あんたが、チームに必要な存在だと思っただけだよ」

「ッ！」

あたしがそう言うと、ミーナは信じられないことを聞いたと言っ

た顔で、あたしを見つめてきた。

「元々、カズマがチームを抜けるのは決まっていたことだったんだよ。そう言う約束で、一緒に戦ってたんだからな。だから、あたしはカズマが抜けた後、あたし達と一緒に戦ってくれる仲間を捜してたんだ」

そんなときに、見つけたのが、ミーナだった。

「そりゃ、あんたはカズマみたいに凄く強い訳じゃ無いし、まだまだ経験も少ない新人ランカー同然のプレイヤーだろうさ。けどね。だからこそ、あたしはあんたをチームに誘ったんだよ」

「でも、何で、私なんかを・・・」

「だからさ・・・一緒に、強くなっていくためだよ」

「え・・・?」

あたしが言ったその言葉を理解出来ないでいるのか、ミーナは惚けたような顔をしながら、そんな間の抜けた声を発して、あたしの顔を唾然としてみしてきた。

「あたし達もさ・・・正直に言っつて、今までの戦いは、カズマにおんぶに抱っこ状態だったって思ってるんだ。掲示板にも、そう書いてあつたる?」チーム破軍は、カズマが居なけりゃ、暁には勝てなかった『カズマのワンマンチーム』ってさ」

「そ、そんな!! そんな事ありません!! 確かに、カズマさんは凄く強かったけど、けど、だからってカズマさんのワンマンチームな

んかじゃ絶対無かったです！！今までの試合だって、揺光さんやアインさんがいなかったら、絶対に勝ってませんでしたよ！！」

「あたしも、最初はそう思ってたさ。あたし達の苦勞も知らないで、好き勝手なことばかり言いやがって！！」ってさ・・・」

「そうですよ！揺光さんの言うとおりです！！」

そう言って、さっきまでの不安に満ちた顔ではなく、そう言った奴らが本当に許せないと言った表情で拳を握るミーナの姿を見ながら、「けどね」と言葉を挟んだ。

「よくよく、考えて見たら、さ・・・その通りだったんだよね・・・」

「揺光・・・」

アインが心配げな顔をして、あたしを見つめてくる。そんな彼女に、大丈夫という意味の笑みを向けると、再びミーナへと視線を向けて、その時に感じたことを再度話し始める。

「カズマのおかげで、1回戦のチーム豪の時も、カズマが居なきゃ、優勝候補筆頭だったあの龍にだって勝てたかどうか分かんないし、チーム暁の時は、完全にカズマの力で勝ったようなものだし・・・
実質、あたし達はカズマのお荷物みたいなもんだったんだなって・・・」

試合の映像をみて、初めて気がついた。最初の頃なんて、アインはともかく、あたしは完全にカズマの補助がなきゃ、早々に倒されてただろうし、それ以降の試合だって、あたし自身が気がつかない

危ない場面も何度もあつて、その度にカズマはあたしをフォローしてたんだ。

それに加えて、あの決勝。あの時は、後一步で暁に倒されると言う所で、カズマが助けしてくれたから・・・カズマが暁を倒してくれたから、勝てたようなものだ。その上、カズマは暁との対戦の前に、一人敵を倒していた。映像を見た限り、そんなに深刻なダメージは負っていないかったみたいだけど、それでも、あたしから一撃も喰らっていないかった暁に比べたら、ハンデを背負った状態での戦闘だったと思う。なのに、そんな状態にも関わらず、カズマは勝ってくれた。

そして・・・あたしが、宮皇になった。

もしも・・・最初から、カズマが居なかったら・・・あたし達は・・・ううん、あたしは、宮皇になるところか、1回戦で消えていたんだと思う。

宮皇なんて、夢のまた夢で、1回戦の、チーム豪に、完敗してたかもしれない・・・

そう考えたら、あたしはいつの間にか、掲示板に書いてあることを批判できなくなっていた。それどころか、その通りなのかもしれないと、考えてたんだ・・・

「揺光さん・・・」

ミーナの心配げな声が聞こえてくるけど・・・話は、ここで終わりにじゃないよ。

「だから、さ……あたし、決めたんだ。カズマが居なくても、あたし達は、宮皇に相応しいチームだって、世間に認めさせてやるって」

そう言いながら、あたしは伏せていた顔を上げて、自分が選んだ・カズマの居ない、真のチーム破軍のメンバーを見つめた。

アイン、ミーナ。そして……あたし。

カズマは居なくなつて、確かに、攻撃力は減つたかもしれない。今まで以上に、苦戦を強いられることになるかもしれない。

けど、ここからが、スタートなんだ。

「始まりが宮皇つてのも、ずるいかもしれないけど……でも、あたしは、ここから、真のチーム破軍を始めたんだ。そして、その真のチーム破軍に、ミーナが必要だって思った……だからこそ、あたしはミーナを誘つたんだ」

「揺光さん……!」

「ここから、始めよう……一緒に、強くなつていこう……!!」

「もちろんよ、揺光。私達は、宮皇のチームなんだからね」

「はい!!私も、一生懸命頑張ります!!もう、カズマさんによいしょのチームだなんて言わせません!!」

二人の頼もしい答えを聞いて、あたしは思わず口元に笑みを浮かべた。さっきまで不安一色だったミーナの顔も、すっかり気合いに満ちている。

これなら、大丈夫かな・・・？

ーピコンッー

「お、そろそろみたいだね・・・」

あたしが、二人の様子を見て、やる気に満ちた、良い雰囲気になったと確信を持った丁度その時、運営からのメッセージが届いた。

『まもなく試合開始時間です。宮皇、チーム破軍の皆様は後1分後にバトルフィールドへと転送となります』

そのメッセージを見たあたしは、座っていたベンチから腰を上げ、あたしへと視線を向けてくる二人へと好戦的な笑みをみせながら、最後の確認をとった。

「さて・・・二人とも、準備は良い？」

あたしの質問に二人は、片やリラックスした表情で、片や若干緊張の色をにじませながらも、やる気十分といった表情で頷き、答えた。

「ええ、いつでも」

「は、はい！！やってみせます！！」

「よし！じゃあ・・・行くよ！！」

「はい！！」

そう言って二人は一足先に、転送用のポートへと進んでいく。あたしも二人の後を追うべく、足を進めようとしたその時、一通のショートメールが届いた。

「なんだ、こんなタイミングで・・・!?」

けど、そのメールを見た瞬間、あたしは、驚きと共に、再び、挑発的な笑みを浮かべていた。

『見せてくれよな、宮皇の力をさ』

たった、これだけの文。けど、なんだか、アイツが・・・カズマが、見守ってくれているという事実が、あたしは無性に嬉しくて、そして、あいつの前で、無様な試合は見せられないと・・・改めて、そう思った。

「言ってくれるよな、全く・・・しっかり見てろよな、カズマ・・・新しい、あたし達の戦いを!!」

さあ・・・行くよ!!

新生、チーム破軍の出陣だ!!

第四十一話（後書き）

どうでしたでしょうか？

約二週間ぶりに家に帰って来れたので、結構筆も進まず、鈍ってた感があったのですが・・・

まあ、それはもういいや。

とにかく、これからやっとな Roots の物語に本格的に介入していきますので、今後もどうかよろしくお願いします！

では、また！！

第四十二話（前書き）

遅くなりました。

第四十二話

SIDEカズマ

「おお！すごいね、揺光達！！完全に対戦相手のチーム如月を圧倒してるよ！」

「だな・・・どうやら、心配する必要無かったみたいだな・・・」

揺光達の試合と一緒に観戦していたシラバスが、興奮気味に話しかけてくる中、俺は、眼下で行われているチーム破軍と、その対戦相手であるチームサーガによって繰り広げられる戦いを見つめながら、そう呟いた。

シラバスの興奮の度合いから見て分かるように、試合は完全に揺光達の流れだ。

俺が抜けて、世間じゃ「攻撃力が格段に落ちた」、「カズマがいなけりゃ勝てないんじゃないの？」などと好き勝手に言われていたが、そんな前評判を覆すかのように、眼下で繰り広げられている戦いは、圧倒的にチーム破軍のペースで進んでいる。

揺光、そしてアインは俺がいたときとは比べものにならないくらい俊敏に動き、相手を完全に翻弄している。今までの強豪達との戦いで、彼女達は格段に強くなった。今ならば、俺でももしかしたら危ういかも思えないと思うほどの動きを見せている。

そして、俺の中で一番の不安要素だった新人のミーナという双剣士の少女だが・・・

「それにしても、あの新しく入った娘、すごいね。見たことない子だけど、あの如月のデンを圧してるよ」

シラバスが、件の少女、ミーナを指さしながら、そう言った。そう、俺の一番の不安要素だった少女のミーナだが、こちらの心配を良い意味で裏切ってくれたようで、終始相手を圧倒している。

しかし・・・

「アレで本当に新人なのかよ・・・完全に相手を翻弄してんじゃねえか・・・」

揺光から、「新人を一人スカウトしたんだ。まだ経験は少ないんだけど、かなりできるヤツだよ」との話を聞いていたが、これは、完全に俺の予想を上回ってる。

相手にしている重槍士は、傍から見ても分かるほどに、レベルの高い相手だ。(まあ、決勝まで進んでくるようなプレイヤーが高レベルでないわけ無いんだが、それは置いておくとして)

それに、アリーナバトルの常連であるシラバスが、「強い」と断言しているので、結構な実力者なのは間違い無いのだろう。

そんな高レベルプレイヤーに苦戦するどころか、むしろ押し回している彼女の動きに、俺はそれまで抱いていた僅かな不安要素さえも払拭されたことを感じていた。

「これは、揺光のヤツ、かなり良い新人を見つけたんだな。早々いないぞ、あんな風に動けるヤツなんて」

高レベルプレイヤーに対して一步も引くことなく戦うその精神力、当たれば確実にHPが大幅に削られるであろう攻撃を的確に躲すその反射神経と、度胸。そして、途切れることなく振るわれる双剣は、防御力に定評のある重槍士のHPを一気にとはいかないが、それでも凄まじい速度で削っている。

本当に新人なのかと疑いたくなるような動きの数々を見て俺は、この勝負がチーム破軍の勝利で幕を閉じることを確信した。

「・・・お、そろそろ時間か」

「え、カズマこれから何か用事でもあるの？まだ試合終わってないのに」

「ああ、ちょっと待ち合わせがあつてな。俺はこの辺で帰るよ」

そう言つて踵を返しながら、俺は「それに、勝負はもう見えたよ」と言つてアリーナを後にした。

「さて、この辺のはずなんだけど・・・」

アリーナを後にした俺は、志乃さんとの待ち合わせ場所であるマク・アヌにある傭兵区画に来ていた。余り来たことない場所だから正直あつているのか間違つているのか、あんまり自信無いんだよなあ、実は。マク・アヌなんて、R：1の頃から知っているんじゃないのか？と思うだろうが、ここに来るのは初めてではないが、かといつて多いわけでもない。要はそんなに詳しい訳じゃ無いんだ。

今までマク・アヌで行くところなんて、カオスゲートか、クエスト屋、それかセーブ屋くらいしかないんだ。第一、こんな傭兵区画なんて、ギルドに加盟しているようなヤツじゃなければ、普通はそんなに詳しくならないだろうし、俺は普通だ、普通。

・・・誰に言っただろうな、俺は。

まるで俺以外の誰かへと弁解するかのようには待ち合わせの場所が合っているのかを考えていた事にふと気付いた俺は、少し自分が痛い子になってしまったんだろうか・・・と軽く自己嫌悪しているところに、聞き慣れた柔らかな声が背後から掛けられた。

「おまたせ、カズマ君。少し遅れちゃったかな？」

そんな相変わらず（と言っても一週間も経っていないので、そんなに久しぶりという訳じゃ無いが）の柔らかい、相手を安心させるような声で俺に近づいてきた志乃さんへと振り返る。

「いえ、時間ピッタリって所ですから、気にしないでください」

「そっか。なら、良かったかな？」

そう言っただけで口元に、これまた柔らかな微笑を浮かべた志乃さんは、俺には見えないウィンドを開き、その手になにやら多少デフォルメされた水色の編み笠のようなものを被り、オレンジ色をした小さいサングラスを着けた変な生き物・・・確か、R：2でのマスコットのなキャラクターであるグランディ、とか言うヤツが描かれたカードを差し出してきた。

「これ、何ですか？」

「ギルドに入る為のパス。いくら今から正式にメンバーになるからってギルドのパス持つてなきゃ、@ホームに入れないから」

「そう言や、そうだったっけ。前に八咫に招待されたときにも似たようなのを渡されたような記憶あるし、第一大規模なギルド以外は大体このマク・アヌに@ホーム構えてるんだもんな。入り口一緒だし、それぞれのギルドに行くには、こういうものでも無ければ、選別できないよな。」

「さ、入って。みんなに紹介するから」

「了解」

「あ、志乃さん！その人が新しくあたし達の仲間になってくれる人？」

「ギルド・黄昏の旅団の@ホームへと転送された俺と志乃さんを出迎えたその獣人型の女性PCは、まるで本物の猫のように初めて見る俺へと好奇心に満ちた視線を向けながら、俺を案内してきた志乃さんへとそう訪ねた。」

「そうよ、タビー。匂坂君達は、中に居る？」

「うん！あ、でも師匠とハセヲはいるけど、オーヴァンはまだ来てないよ」

「まったく……オーヴァンったら、今日は遅れないでっであれほど言ったのに……ごめんね、カズマ君」

「いえ、一回会ってるし、別に構わないですよ。それよりも、俺の知らないメンバーを紹介してくれる方が助かります」

「そうね。あ、そうそう。この娘はタビー。最近入団した娘で、拳闘士なの」

「タビーです！！よろしくお願ひしま！す！」

元気な娘だな。何がそんなに楽しいのか、全身で「私は元気です！」と表現しているかのような笑顔を見て、俺は彼女、タビーに対して「元気の有り余っている少女」と行った印象を抱いた。

「カズマです。よろしく、タビー」

「うん！よろしくね！！」

弾けるような笑顔とは、こういうヤツのことを言うのかな。

「それじゃあ、カズマ君、向こうにオーヴァン以外のメンバーがいるからついて来て」

俺がタビーの笑顔についてそんな事を考えていると、いつの間にか少し離れたところにいた志乃さんがそう言って先に広間へと行くうとしていた。

「あ、はい。分かりました」

「あ、あたしも〜!!」

少し駆け足気味に志乃さんへと駆けていくと、広間のようなところで何か話合っている二人の男性型PCがいた。

一人は、前に志乃さんにオーヴァンを紹介されたときに見たことのある顔で、確か、ハセヲ・・・とか言っただけ。もう一人は、ゴ―グルを着けた成人男性程度の身長があるPCで、こちらは面識はなく、完全に初対面だ。

「あ、志乃・・・」

入ってきた俺達に気付いたハセヲは、話していた男から視線を外し、俺達へと、と言うか志乃さんへとなんだかやつと迎えが来てくれたような幼児のような顔・・・と言ったら失礼かもしれないが、どこか安心したような表情を見せていたが、志乃さんと共に入ってきた俺を見つけた瞬間に、無表情・・・と言うよりも、何というかムスツとしたような表情を向けてきた。

はて・・・俺、何か悪いことでもしただろうか？

「お、志乃さん。そいつが、例の新人っすか？」

そんな風なことを思っていると、ハセヲと話していた男の方が、そう言いながら俺と志乃さんの方へと歩いてきた。

フム・・・こっちは別に俺に変な表情は向けてきてない・・・と言う事は、ハセヲ個人が何か気に入らなかったのだろうか？

「うん。カズマ君、ハセヲは、一回会ってるから知ってるよね？彼

は、匂坂君。さっき紹介したタビ一の師匠で、旅団でも結構古株なの。何か分からない事あったら、私か、彼に聞けば良いよ」

「そうですか。えっと、初めまして、カズマって言います。よろしく」

「ああ、俺は匂坂って言っただ。まあ、結構実力者だって聞いてるから期待してるって事で一つよろしくな」

差し出された手を握り替えしながら俺は、たった今紹介された匂坂という男を少しの時間だが、観察することにした。

外見は、一番スタンダードな人族の男性型PC。カラーは違うが、結構The Worldないでも良く見るPCボディの一つだ。

紹介された内容からして、結構面倒見の良い人物なのだろう。ネットゲームの中で、他の誰かを指導するという輩は、少ない。

それはそうだ。ネットゲーム、特にレベル制MMORPGであるThe Worldは、(絶対にというわけではないが)プレイした時間が多ければ多いほど、レベルが上がり、強くなることができる。

そんなゲームであると理解している者がよく知っている友人などならまだしも、赤の他人に対してサポートなどするはずがないのだ。まあ、時にはこの匂坂のような変わり者(と言ったら失礼だが)も存在するんだがな。

まあ、それだけで判断するのもどうかとは思っけど、基本的にいい人なんだろうな。こうして新入りである筈の俺にも、結構気さく

に話しかけてくれるんだし、悪い人、では無いと思う。

そんな風に彼の一時的な評価を下した俺は、いつまでも相手を観察するのは失礼だよなと思い、すぐに握っていた手を離し、相変わらず不機嫌そうな視線を向けてきているハセヲへと向けた。

「君も、久しぶりだな、ハセヲ」

「・・・ああ」

視線を合わせないようにしながらも、一応そう返答したハセヲは、自分達のギルドだというのに、どこか居心地悪そうにしていた。

「もう、ハセヲ？いつも言ってるよね？相手と話すときは、目を見て話さなきゃダメだよって。赤ちゃんでもできること、ハセヲはできないの？」

「なっ！！・・・なんで、今そんな事言われなきゃいけないんだよ・・・」

「何でって、ハセヲがカズマ君の事、真っ直ぐ見てないからでしょ？」

「・・・チツ・・・」

・・・なんだ、これ？

ハセヲと志乃さんの会話を聞いて、なんだかまるで、反抗期の子供と、それをしかる親のようなやりとりだな、とそんな事を思った俺は悪くないと思う。

と言うか、マジでなんだ、このやりとりは？本当にさっき思ったようなシチュエーションがピッタリ来るようなやりとりなんだが・
・ここじゃコレがデフォルトなのか？

「もう・・・ゴメンね、カズマ君。ハセヲが失礼な態度取っちゃって」

「も、本当にハセヲは子供だよな」

「う、うるせえ！お前こそ、ガキみたいじゃねえか！！」

「え？そんなことないよ？ねえ、ししよ？」

「そこで俺に振るか！？・・・まあ、どっちもどっちじゃないか？
タビーも子供だし、ハセヲも子供。それでいいだろう？第一、十代半ばのガキンちよがどっちが大人かなんて言ってるんじゃないの」

「え！だったら、師匠だってガキ何じゃないの？」

「残念ながら、俺は既にそんな下らないことで言い合うような年齢じゃないの。と言うか、お前らカズマほっというてそんな下らない事言ってるんじゃないよ全く」

「あ・・・ご、ごめんなさい！ハセヲのせいでカズマさんのこと無視する形になっちゃって・・・」

「おい、俺のせいだよ・・・」

「えっと、別に気にしてないから、謝らなくてもいいよ。それに、

カズマで良いよ。それと、敬語も別にいらなから

「え……でも、年、上じゃないの？」

はて……俺は年が上だなんて言ったのだろうか？

そんな疑問を抱いていると、タイミング良くタバーがそう言った根拠を話してくれた。

「えっと、私とかハセヲなんかよりも凄く落ち着いてる雰囲気出してると、志乃さんとも親しそうだったから、年上の人なのかなあゝって思っただけ……違うの？」

……そんな事で年上って判断してたのかよ……

「あゝ、違うよ。俺も、タバーとかと同じ十代半ばの……匂坂風に言えば、ガキンちよに分類される年の一人だよ」

そう言った瞬間、タバーどころか、ハセヲ、そして匂坂までもが驚きの表情を浮かべた。

「うそお！？カズマって、大学生くらいじゃないのお！」

「マジかよ！！てつきり同い年くらいかと思っただぜ……」

「……俺達と、同い年……！」

「……そんなに老けてるように見えるのか、俺……」

まだ高校生にもなってないって言うのに……地味に傷つくぜ……

「フフフ、いいじゃない。それだけカズマ君が大人びてるってことなんだから」

「・・・良いこと、なんだろうか・・・」

「それにしても、オーヴァンったら、いつになったら来るのかしら・・・ん？」

「どうかしたんですか？」

未だに姿を現さないオーヴァンに対しての不満を漏らしていた志乃さんは、突然虚空へと視線を動かして、そのまま黙り込んでしまった。

これは・・・メールでも来たのかな？

「・・・はあ、全く、オーヴァンったら・・・自分から呼んどいて、コレは無いと思うな・・・」

どうしたんだろうか？恐らくだが、たった今届いたと思われるメールを読み終えたと思ったら、何故だかいきなりうなだれてしまった。

「えっと・・・どうしたんですか、志乃さん？」

「うん・・・実は、オーヴァンなんだけど、急用ができて、来れなくなっちゃって。ゴメンね、カズマ君。こっちから誘っておいて、こんな形になっちゃって・・・」

本当に申し訳ないと言った表情で謝罪してくる志乃さん。いや、別に志乃さんのせいじゃ無いのにそんな謝られたら、むしろこっちが申し訳なくなるって！

「いえ、気にしないでください。さつきも言いましたけど、知らない人との挨拶の方が大事ですから。それに、オーヴァンとは一度会って話してますし、問題無いですよ」

正直、そんなに会いたいと思うような人物じゃないし、むしろ良かったかもしれない。まあ、今後顔合わせる事になるんだし、何か話すことがあるなら、その時に話せばいいしな。

「うーん、カズマ君が良いって言うなら、それで良いけど、実はもう一つオーヴァンからの伝言があるの」

伝言？なんだろう？

「えっとね・・・実は、そこに居るハセヲを、鍛えてあげて欲しいって」

第四十二話（後書き）

中途半端に終わってしまってますみません。

色々と考えていたら、全然纏まらなかったんで、一旦区切ることにしました。

まあ、次回辺りからは、Rootsの話に沿っていいこうと思います。

第四十三話（前書き）

どうも、お久しぶりです・・・

ここ最近ちょっと話が思いつかない状態が続いてしまい、ゲームやら小説やらを読みふけていたらしいの間にか九月が過ぎて、十月になっていたという・・・

ギレンの野　は・・・・・・・・時間を忘れてしまいますね・・・

第四十三話

S I D Eカズマ

「ガアアアアア!!」

「ッ!!」

とある初級レベルのフィールド。そこで獣の声のような だが、現実には恐らく存在しないであろう声で こちらを威嚇してくるファンタジーRPG系のゲームでは恐らく定番とも言える竜人型モンスターであるリザードマンと対峙していた黒い鎧装士の少年・・・ハセヲはいくら作り物だと分かっているにもかかわらず現実にいるかのようになりアリティを誇るそのモンスターに恐れを見せずに駆け出した。

「グルウアアア!!」

自分へと駆け寄ってきたその存在を そうプログラムされているからなのだが 敵と認識したりリザードマンは手にしていた曲刀を力任せに振り回す。

初級レベルのフィールドにいるリザードマンの攻撃力など、そう大したものでは無いがそれはある程度のレベルに達している者ならばの話だ。

ついこの前ゲームを開始した初心者のハセヲにとってはその単調な一撃でさえ喰らってしまうえばHPの三分の一程度は軽く持って行かれてしまう威力を秘めている。

が、それはあくまでも当たってしまえばと言う話だ。元々ここは

初心者レベルの、 と言つても適正レベルは20程なので場合によつては中級者レベルの者も来ることがあるが フィールドであり、その初心者レベルに設定されているフィールドのモンスターによる攻撃がそう早いはずもなくハセヲは振るわれたその剣を身体を沈めることによつて回避すると同時にリザードマンの懐へと潜り込んだ。

「ハアアアア!!!」

懐へと潜り込んだハセヲはその場で双剣を自身の持ちつる最高速度で振るい、リザードマンの身体を幾度も斬りつける。

もしもコレが現実ならばリザードマンはいくつもの傷から血を吹き出していたことだろうと思える程に幾度も斬りつけるハセヲ。もしもリザードマンに生命というものが本当に宿っていたのならその輝きは光を失い、そのハセヲと比べれば遙かに大きな体を草原に横たえていたであろう。

が、しかしここは現実ではなくゲーム。そして、リザードマンも実際に存在する生物ではなく、あくまでも1と0と言うデータで構成された存在だ。血などは流れていないし、生命などは宿っているはずもない。

そして、生命の宿っていないリザードマンにとって”痛み”という感覚もあるはずもなく、

「ガアアアアア!!!」

自分の懐で暴れるハセヲをうつとうつしそくに腕を薙ぎ払うことで自分から引きはがす。ただ腕を薙ぎ払うと言うこの動作によるダメージも軽装備であるハセヲにとっては十分驚異的だ。

「くそっ！」

その事をハセヲ自身もしっかりと理解していたようで、その攻撃を受けてでも無理に攻撃を続行すると言う手段はとらず、腕が当たると前に攻撃が届く範囲から悪態をつきながらも離脱し、油断無く双剣を構えリザードマンを見据える・・・そして

「うおおおおお!!」

「ガアアアア!!」

リザードマンとハセヲ、双方がほぼ同時に相手へと駆け出し、その手に持った剣を振るった。

「ふむ・・・まあ、だいぶマシになってきたな」

リザードマンとの戦闘を終え、一息ついているハセヲを見ながら俺はこの一週間の訓練がしっかりとアイツの身になっていることを改めて実感した。

オーヴァン以外の黄昏の旅団メンバーとの対面を終えてから一週間。俺は、あの日志乃さん経由で頼まれた仕事である「ハセヲの戦

力増強」という依頼を果たすため、彼と供に手頃なダンジョンに潜ったり、ボスモンスターを討伐するために様々なフィールドに出向いたりしていた。

その間に一応今のアイツが生かせるだろう戦い方を教えたり、適正レベルよりも多少上のフィールドに放り込んだりして志乃さん達の要望である「ハセヲを一級品の戦力に育て上げる」という無理難題を達成しようとしていた。

最初は、「そんな無茶な・・・絶対に無理だ」と言っただけで拒否しようかと思っただよな・・・いや、別にただ鍛えるだけなら俺だって普通に受けたよ？けどさ、志乃さん達（正確に言うならばオーヴァンだが）の要望は、「ハセヲを、一ヶ月以内に一級品の戦力に育て上げて欲しい」なんだぜ？

つい最近 MMORPGで言えば一ヶ月なんて本当について最近と言えるくらいなんだ 始めたばかりの完全初心者、たったの一ヶ月で一級品の戦力に鍛え上げる。正直、そんな方法があるならば俺が教えて欲しいくらいだっけ言いたかったくらいだ。

そんな感じのことを 直接ではない。直接に言ったりした場合、なんとなくだが後が怖い 志乃さんに言ったら、「カズマ君なら、できるって信じてるよ？」なんて台詞を本当に俺のことをこれっぽっちも疑っていません、必ずできると信じてます、と言った表情で告げられてさ・・・

・・・受けちゃったんだ・・・

断らなかつたのかって・・・？・・・無理だよ、あんな100%信じてますなんて感じの顔で言われちゃ・・・断ったら、何か罪悪感で一杯になりそうだったし・・・

「ハア……」

「……何、いきなり溜息ついてんだよ、アンタ」

「ん？ああ、別に、何でも無いよ……」

考え事をしている間にリザードマンを倒し終えたのか。……案外、本当に志乃さん達の依頼を果たせるかもな……

俺の想定していたペースよりも数倍早いスピードで成長しているハセヲを見ながら、俺は内心でそんなことを考えていた。

「……なんだよ、人のことジロジロと……」

「ああ、いや、なんでも無い……さて、さっさと先に進むか。まだまだ倒す獲物はたくさんいるからな」

「……まだいんのかよ……」

「当たり前だろ？そういうフィールドをわざわざ選んでんだからな。こんな簡単にクリアできるはずがないだろう」

いい加減に疲れたといわんばかりの声で抗議してきたハセヲの意見をそう言って一蹴する。まあ、冬休みでハセヲも俺も学校がないからといって半日以上こうやってモンスターを討伐しているのだから、疲れてるのも理解できるが、しょうがない。一か月で一級品の戦力にするのなら、このくらいはやらないと間に合わないんだ。

「くそつ、なんでこんなことしなきゃいけないんだよ……」

「文句なら俺じゃなく志乃さんとオーヴァンに言えよ。あの二人が依頼してきたんだから嫌なら俺から言っただけだよ。」

「・・・別に、文句言っつもりなんてねえよ・・・それに、鍛えてもらってるのは事実だし・・・」

フム・・・やっぱり、文句言いながらもちゃんと投げ出さずに付いてくるんだから根性ないわけじゃないんだよな・・・素直じゃないというか、口では文句言いながらもやることはしっかりやるし、分かりにくいけど感謝してるって言うてんだもんな・・・ツンデレってやつなのかな?・・・というか、何だろう・・・どこか身近にこんなやつがいたような気が・・・

すぐ文句いったり悪態つくくせに、謝ったりお礼言ったりするの
が下手なヤツ・・・

ああ・・・

「智香か・・・」

「?なんだよ、いきなり」

「いや、ちょっとお前に似たやつが知り合いにいたな」と思ってさ

「んだよそれ・・・」

「いや、口では悪態吐く素直じゃ無い幼馴染がいてさ。よく考えてみると結構お前と一緒になんだよな、あいつ」

「どこが似てんだよ・・・てか、リアルで会ったことないのになんで似てるって分かんだよ」

「一週間も一緒に居れば性格なんてものは実際に会わなくても何となく分かるさ。まあ偶に猫被ってるやつとかもいるけど・・・お前は結構素だろ？」

ネットゲームってのは結構地の性格が出ることも多いからな。リアルで猫かぶるようなことが多くても、ここじゃ実際に顔を合わせろわけじゃないからむしろこっちのほうがそいつの本性を現すことなんか結構多い。

それに、言ったとおり一週間も一緒に居れば性格の方も完全にでは無いが理解できたと思っっている。まあ他人の性格を完全に理解することなんてリアルだろうがネットだろうがそうそうできないことだからどうでもいいんだがな。

「・・・意味分かんねえし・・・第一、全然似てねえじゃねえかよ、俺とそいつ」

「そうか？」

俺的には結構そっくりだと思っんだが・・・

「・・・そんなことより、さっさと先行くんだろ？なら、早く行っちゃまおうぜ」

「・・・そうだな」

話題を逸らされたような気がするが・・・確かに、時間に余裕は

無いんだ。さっさと行くとするか。

SIDE志乃

「それで、どうかな？ハセヲの調子は」

『ええ、あの成長速度には正直驚いています。ついこの前まで初心者だったなんて信じられないくらいに使えるようになってますよ、あいつは』

「へえ、そんなに成長したんだ。ありがとだね、一馬君。あの子のこと、ちゃんと見てくれて」

一馬君にハセヲの事を頼んでから今日で大体二週間くらい経ったのかな？オーヴァンからの無茶なお願いを聞き届けてくれた一馬君からハセヲの成長具合を聞いた私は、自分の予想よりも強くなっていると言う一馬君の言葉を聞いて、彼にハセヲを預けて正解だったと確信した。

一馬君は、相手を過小評価すること、過大評価することもしない。その人の実力を、自分なりにしっかりと分析して的確に相手の

実力を測れる。例え、それが身内であつてもその人がダメならハツキリとダメって言う人だからね。それは、智香ちゃんの時にもしっかりと現れてたしね。

『いえ、それは良いんですけど・・・と言つか、あいつ本当に初心者だったんですか？いくらなんでもあの成長速度はあり得ないと思うんですけど』

うーん、まあふつうはそう思うよね。一馬君の話ではたった一ヶ月で初心者同然だったハセヲがたった一週間程度で一馬君さえも驚くくらいの速さで成長を遂げたんだから、驚くのも無理ないし、本当に初心者かつて疑問に思うのも当たり前だよな。

「うーん、残念だけど私にも詳しいことは分からないだ。ハセヲは、オーヴァンがスカウトしてきたから」

『そうなんですか・・・？でも、ハセヲからは志乃さんに旅団に誘われたと聞きましたけど』

へえ、ハセヲ、もう一馬君とそんな事話すくらいに仲良くなつたんだ。あんまり他人と話そうとしない子だったから、少し心配だったんだけど・・・杞憂だったみたいね。

「一応、私からも誘つたのはホントだよ？でも、ハセヲの勧誘が一番積極的だったのはオーヴァン。私は彼からの要請で誘っただけだから、ハセヲが本当に初心者なのか、何か理由があるのかについては、正直全然知らないって言っても良いくらいなんだ」

『そうですか・・・分かりました』

「ゴメンね、役に立てなくて」

『あ、いえ。こっちこそすみません。変なこと聞いたりして。詳しく知らないなら教えられるはずもないですもんね』

・・・ゴメンね、一馬君。今は、まだ・・・言えないの・・・彼女のために・・・

「すみません、変なこと聞いたりして」と、電話越しに謝ってくる彼の声を聞きながら、私は心の中でそう彼に対して謝罪した。

志乃、彼は・・・ハセヲは、あの子を起こす為の・・・

オーヴァンがハセヲに期待する理由を、私は詳しくは知らない。ただ、彼がハセヲに対して、何かを・・・彼女を目覚めさせるための何かを持っていると、期待している・・・ううん、確信しているのかもしれない。

正直、私にはどうして彼がそこまでハセヲに期待するのはよく分からない。けど・・・彼は意味のないことはいない人だから、きっとハセヲには彼が期待を寄せるだけの理由があるんだと思う。

「・・・けど、ハセヲがそれだけ成長してるって事は、オーヴァンの人を見る目も確かだったって事じゃ無いかな？」

『ううん、そうなるんですかねえ・・・なんか、ちょっと認めたく無いって思うのは、何ででしょうか・・・』

「ううん、なんでなんだろうね？」

『うーん・・・やっぱり、なんか怪しく感じるんですよね。なんかいつも謎っていうか、何してるのか分からないから、イマイチ信用できないって言うか、こーう、信じきれないって言うか・・・』

「ハハハ・・・」

うーん、散々な言われようだね、オーヴァン・・・やっぱり、付き合いの短い人だと怪しく感じちゃうもんなのかな、オーヴァンって。まあ、それもしょうがないのかなあ・・・？だって、オレンジ色の小さな丸いサングラスに、あんな棺桶みたいな拘束具腕に着けてるなんて・・・傍から見たら完全に怪しい人物だもんね・・・うちのギルドマスターなんだけど。

まあ、それはともかく

「けど、本当にありがとうね。あんな無茶なお願い聞いてくれて。それに、しっかり一馬君は私達のお願いを叶えてくれた。本当に感謝してるよ」

『志乃さん、お礼ならさっきも聞きましたから別に良いですって』

「フフ、そうだね。ちょっとしつこかったかな？」

『うーん・・・ちょっとそう思ったりも・・・』

「もう、一馬君。そう言う事は思っても言っちゃダメだよ？私だつて傷つくんだからね？」

女の子相手にそんなこと言っちゃダメなんだよ？もう・・・

『はは、すみません。じゃあ、また連絡しますんで、今日はこの辺で失礼します』

「うん。またね、一馬君」

そう言ったのと同時に切れた携帯を少しの間見つめた私は、フウ・
・・と思わずため息を漏らした。

「・・・ハセヲは・・・鍵かもしれない、か・・・」

ハセヲが入団した時にオーヴァンが言った言葉を思い出してそうつぶやいた私は、しばらく部屋の天井をボーっと見つめていた。

第四十三話（後書き）

駄作です・・・一か月以上かかって書いたのにもかかわらず、相変わらずの駄作・・・マジで才能ないね、俺は・・・

まあ、こんな駄作でも待つてくれる人がいる限り、書き続けていこうと思いますので、これからもよろしくお願いします。

ではまた次回！

第四十四話（前書き）

どうも、ジーユーです。

さて、今回は皆様にお知らせしたい事がございます。

それは・・・

祝！！四十万PV突破アンド四万ユニーク突破！！

ドンドン、パフパフ！！ワーワー！！

いやはや、久々にアクセス解析を見てみたら、まさかこんな数値になっただけとは・・・

こんな駄文を読んでいただきまして、本当にありがとうございます！！！！

これからも、精一杯頑張っていきますので、これからもどうぞよろしく願います！！

それでは、長くなりましたが第四十四話、お楽しみください！！

第四十四話

SIDE一馬

「それで、どうなんだよ。最近の戦績は」

「ん？どうって？」

ハセヲを鍛えだしてから二週間ほどがたっただろうか。休日である日曜、いつもならThe worldにログインしてあの世界を楽しんでいるはずであったが、俺と智香は俺の部屋で互いに思い思いの格好で智香が家から持ってきたスナック菓子を食べながらくつろいでいた。

なぜログインしていないのかというと、答えは簡単。今日はC・社が定期的に行うThe worldのサーバーメンテナンスのため、ログインできないのだ。

そんなわけで、ここ最近の休日は必ずと言っていいほどにThe worldをプレイしていた俺であるが今日は珍しく家でゴロゴロすることに決めた訳だ。で、適当に部屋でゴロゴロと買っておいたマンガを読みながらだらけていたのだが、そこに俺と同じくここ最近ではThe worldで揺光としてあの世界を楽しんでいた智香もまた暇していたらしく、なぜか知らんが俺の部屋でくつろぎ始めたのだ。

まあ、お互いに小さい頃から互いの部屋に勝手に上がりこんだりとかしていたので（さすがに小学4年頃からは俺のほうから智香の部屋に行くという事はしていない）、今更気にしない。

まあ、そんなこんなで部屋でだらだらとしていた俺は、唐突に「そういえば、智香の奴の最近の戦績ってどうなってるのかな？」と言う疑問が頭に浮かんだので、部屋の主である俺を押しつけてさも当然と言う顔で、我がベットを占領しながらマンガを読んでいた智香にそんな質問を投げかけてみた。

「ん〜、一応順調に防衛線もこなしてるし、ミーナとの連携も上手くいってるしね。余程の強敵が来ない限りはこのまま宮皇の座も守り通せるよ」

「ふ〜ん・・・その割には、なんか不満そうな顔してるな、お前」
全てが順調と語った智香の表情は、その内容とは裏腹に、まるで全てが全然上手くいっていないと言つかのような表情をしていた。

「あ〜・・・やっぱ分かる？」

「まあな。生まれたところからお前のことを見てきたんだ。お前が何か不満があるってことくらいはすぐに分かるよ」

俺がそう言うと、智香は一瞬きよとした表情をした後に、わたたと慌てたように起き上がり、どこか恥ずかしがるように視線をさまよわせていたと思ったら、顔を少し紅くしながら「う〜・・・！！」となぜか唸りながら睨みつけてきた。

「・・・なぜ睨む」

「・・・全然気づかないじゃないか・・・」

「？何か言ったか？」

智香が何かほそりと言ったような気がしたんだが、そのことを尋ねると、「なんでもない!!」と拗ねたような声で答えながら尚も睨みつけてくる。

・・・だから、何なんだよ・・・

「・・・はあ、まあいいや・・・で、あたしが何に不満・・・って
いうか不機嫌なのかだよな？」

「ん？ああ、そうそう。で、何なんだよ一体？俺でよければ相談に乗るぜ？」

まあ、大したアドバイスが出来るかどうかは別問題だが、と思いながら言ってみると、うん・・・と数秒離すかどうかを迷うように悩んだ末、

「まあ、一馬にならいつか」

と言って俺のベットから身体を起こし、俺を見下ろすようにベットの縁に腰掛けた。

・・・どうでも良いが、智香に見下ろされる事に何故かちょっとした苛立ちを感じた。

「実はさ・・・最近妙な新人が出てきたんだよ」

そうぽつぽつと話し出した智香の顔は、何故だか酷く話したくなさそうと言つか、言いにくそうな表情だ。

「新人って、アリーナでか？」

「うん。結構実力あるみたいで、最近一気に順位を上げてきてる奴
なんだけどさ」

「けど、なんだよ」

「うーん・・・なんて言ったらいいのかな・・・なんか、普通じゃ
ないんだよねえ・・・」

「普通じゃないって・・・どんなふうに普通じゃないんだよ？」

「うーん・・・」

俺の質問に対して明確な答えを出そうとするものの、その新人を
言い表すためのちょうどいい言葉が見つからないのか、腕を組み頭
を捻って唸る智香。

そんな彼女に口を挟むことなく、ただ黙って次の言葉を待つ。

「・・・なんて言ったらいいかわかんないけど・・・普通じゃ
ないんだよ、あいつの戦い方・・・何がって言われたらよくわかん
ないけど、なんか変な違和感って言うか・・・あゝもうっ！！上
手く言葉にできない！！なんて言ったら良いんだよ、もう！！」

「いや、そこでそんな風に言われても、俺にはどうしようも無いん
だが・・・」

余りにも理不尽などの要求に対してあくまでも冷静に返す俺に頭
を掻いていた手のスピードを更に上げ、ガシガシが、ガリガリツと
言う音が聞こえそうなくらいになった。

「~~~~ツ!!あ~~~~もう!!マジでなんて言ったら良いのか分からない!!」

「・・・だったらネットにアップされてる動画を見れば良いだろうが」

「・・・え？」

俺が頭を掻きむしりながら（年頃の女子の行動じゃ無いと思うが）必死に表現できる言葉を探していた智香にそう言った瞬間、アイツはここ数年の中でも一番と言って良いくらいに間の抜けた表情を見せたのだった。

カタカタ……

「……………」

「えっと……怒ってる……?」

「……別に、怒って無いよ」

「……………怒ってんじゃない……………」

智香の話聞き、ネット上で件のPCが戦っている試合の動画を探している俺の横でそんな事を聞いてきた彼女に、ぶっきらぼうに返事をした。

「えっと……悪かったって思ってるよ……」

「……別に、怒って無いし……」

「うう……」

我ながら不機嫌な声だと思える声で智香に返事を返す。俺の機嫌がさつきよりも悪くなったことを感じ取ったのか、弱々しい声を出す。無視。

流星に、今回のことは俺も少し頭に来てるんだ。なにせ、

「悪かったよ……その、ちょっとした……その、照れ隠し……
みたいなもんでさ……」

「ほう……」

照れ隠し、ねえ……

「うう……その、まさかあたしも……後頭部叩いた拍子に、ベットの縁に頭突きかましちゃうなんて思って無かったんだよ……」

「……」

そう……智香の言うとおり、俺はあの「ネット」で試合を探せばいいんじゃないか？」発言の直後、ベットでぼかんとしていた智香から、かなりの力で後頭部をひっぱたかれたのだ。

まあ、俺としてもただ叩かれただけならば、こつも怒りを感じる事は無かつただろう。

だが、事はそれだけで済まなかったんだ……

後頭部を叩かれた俺は、そのまま智香が腰掛けていたベットへと頭を突っ込む形で頭突きをかましてしまったのだ……それも、シートが敷いてある柔らかい場所ではなく、よりもよつてベットの縁にある木の部分へとであった……

「うう……許してくれよお、一馬あ……」

「……」

しかし、コレは完全な事故だったんだと……智香に当たるのは間違つてると……分かつてる……頭では、分かつてるんだ……

だが、人間分かつていたつてこつ、許せない事とかあるだろう？

それがワザとじゃ無いって頭では分かっているけど許せない事ってるだろ！

そう、今がその時なんだよ！！

「うううう……一馬あ……」

「……クツ」

なんなんだ……なんなんだよ、オイ！！

なんか目が子犬から捨てられた子犬にランクアップ？してるんですけど！！スツゴイ罪悪感感じさせる瞳になってるんですけど！！

俺が……俺が悪いのか！！教えてくれ……教えてくれ、プリムラツ！！

「ヒサビサノカイワガコンナノツテ、シツレイジャナイカナ、カズマ？」

おお、ホントに答えてくれたのか！！

「……ボクテキニハダマツテテモヨカッタダケドサ……デモ、ヨウコウ……ジャナカッタ、チカカワイソウダヨ？」

ぬう……

「うう……一馬あ……グスツ」

クツ！まさか、捨てられた子犬から、雨に打たれる捨てられた子犬に、更にランクアップしたと言うのか！！コレに……コレに、どう対抗しろと言うんだ！！

「カズマ・・・ナンカ、テンションオカシクナツテナイ・・・？」

「・・・実は、ちょっと・・・」

「・・・マア、トニカクソロソロユルシテアゲタラ？ソレニ、モトモトソクニオコッテルワケジャナイデショウ？コレイジヨウハ」

「そう言われ、俺は改めて智香をチラリと見てみる・・・」

「うう・・・一馬あ・・・許してよあ・・・グスツ・・・」

「・・・凄まじいほどの罪悪感が、こころ湧き出てくるな・・・はあ・・・」

「・・・もう怒ってないから、泣くなよ・・・」

「うう・・・グスツ・・・ホント・・・？」

「クツ！ホ、ホントだから、その雨の中の捨てられた子犬みたいな目で見つめないでくれ・・・ッ！」

「うつうつとした瞳で見上げてくる智香。そんな目で見つめられたら、胸が罪悪感でいっぱいになるだろうが・・・！！」

「グスツ・・・ありがと・・・」

「そう言いながらも尚もいつもの強気な表情ではなく、しおらしい」

表情でいる智香。

・・・しゃあないなあ・・・

ポンッ

「一馬・・・？」

「ハア・・・本当にもう怒ってないから・・・泣きやんでくれよ？」

「・・・うん・・・」

穏やかな表情で撫で続けられる智香の様子に「もう大丈夫だな」と言っ手て手を離そうとするが、「も・・・もうっ少っだけ・・・」と泣きそうな顔で強請られてしまい、結局しばらくの間、智香の頭を撫で続けるのだった。

SIDE 智香

「……で、落ち着いたか？」

「えっと、うん。もう大丈夫……」

「そっか」

うう……一馬の笑顔が、なんだか恥ずかしいよ……

一馬を怒らせるという、一年に数度あるかないかの緊急事態（他の奴ならそうでもないかもしれないけど、あたしにとってはかなりの緊急事態なんだよ）で、いろいろとあたし的にも意味分かんないけど泣いてしまったためについ先まで頭を撫でてもらうという、あの意味ご褒美的な展開を終えた。

……本当は、もう少し撫でてもらってもよかったんだけどさ……

「えっと……お、智香これじゃないか？智香の言ってた”変な戦い方するPC”って」

そう言っで一馬が指さした画面に映る動画を見ると……

「あ、コイツだー!!」

「合ってたか……なら、ちょっと見てみますか。宮皇殿が気にな

る新人の実力ってヤツをさ」

そう笑って、一馬はアップされていたその動画を再生した。

『アリーナに吹く一陣の風・・・それは、戦いを予感させる、不吉な風!..!』

「・・・相変わらず、このDJの口上良く意味分かんないな・・・」

「うん、あたしも未だにそう思うよ・・・」

『アリーナトーナメント、定期リーグ戦！！本日のカードは、コレだあー！！』

DJの叫びと共にアリーナのスクリーンに表示される対戦カード。それを見た一馬は、「ん？」と疑問の声を上げた。

「あれ、智香の気になってるヤツ、アリーナバトルにソロで参加してるのか？」

「・・・そうだけど、その気になってるヤツって言い方止めるよな何かヤダ」

『その速さは、まさに疾風！！双剣士だけという、宮皇と同じ布陣で敵を怒濤の内に切り裂く乙女！！チームアリス！！入場おだあー！！』

異常とも言えるテンションでのDJの紹介で転送されてくる三人の女性型PC。と言う、この紹介の仕方だとなんかあたし達の真似というか、あたし達に憧れてくみたいな言い方で何かちよつと・・・照れるなあ・・・

『続いてえ！美しい薔薇には刺がある・・・！！たつた一人でここまで勝ち抜いてきた美貌の剣士、エンデュランス！！驚異的な実力を、今日も我々に披露してくれるのでしょうかあー！！』

「美しい薔薇って・・・普通女性に対しての言葉だろに・・・」

「まあ、確かに下手な女性型PCよりも綺麗な外見してるけどね、コイツ・・・」

一通り相変わらず意味不明な前口上を述べるDJに対してのツッコミを終えたあたし達はバトルフィールドへと転送された両チームが映された画像を見つめる。

『 ……! ……!』

『 ……』

『 ……ッ! ……!!?』

「何か言い合いしてるみたいだけど・・・流石に会話までは拾えないか」

バトルフィールドで何か言い合いをしているチームアリスとエンデュランス。その会話でどんな内容が交わされているのかちよつと気になったんだけど、流石にこんな動画じゃアリーナの歓声で選手達の会話なんて聞こえない。

と言うよりも、実際あそこじゃ観客席に居たって聞こえないんだからしょうがないか。

『 それではあ、試合ッ開始い!!』

DJの宣言と共にチームアリスの面々が瞬時にエンデュランスとの距離を詰め、手にした双剣で斬りかかる、

「へえ、良い動きするな、このチーム」

一馬の感心するような声を聞きながら、あたしも同感だとばかりに頷いた。彼女らの繰り出す攻撃は、まさにDJの言う通りの苛烈さで、あたし達チーム破軍と比べても遜色が無いレベルだと思った。

それに、チームワークもかなりのレベルで、一人が攻撃し続けるんじゃなくて、三人でエンデュランスを囲むように走り回り、次々と攻撃を繰り返していく。

正直、あたしがこれと一人で戦えと言われたらかなり苦戦すると思う。

現にエンデュランスは防戦一方で一回も手を出せていない。

『おっつとお！！凄い！！チームアリスの怒濤の攻撃イ！エンデュランス選手、この怒濤の攻撃に手が全く出せません！！このまま負けてしまうのかぁ！！』

「ふん、このチームアリス、かなりの実力者なんだな。こりゃあ、今度戦うときに苦戦するんじゃないか？・・・って、智香？」

「・・・・・・・・」

普通に考えれば圧倒的にエンデュランスが不利なこの戦局。素人だって完全にチームアリスが有利で、このまま彼女らの勝ちだと思えるような状態だ。

けど、あたしは彼女らのこのまま彼女らが勝つとは思えなかった。何故なら・・・

『おおっ！！チームアリス、足を止めたぁ！！このまま止めを刺そうと言うのかぁ！！』

チームアリスがそれまで絶えず動かしていた足を止め、それぞれがアーツの発動に入った。

普通に考えれば、コレで終わり。エンデュランスの負け。けど。ア

イツは・・・

ニヤツ・・・

笑っていた。

「ツ！一馬、ここ！ここから注意して見て！」

「ツ？これからって、もう決まりそうなのに何を「良いから！」」

「これから・・・何が、起きるんだ・・・！！」

あたしがそう言った瞬間、まさにチームアリスのリーダー、アリスがエンデュランスへと止めを刺そうとした瞬間。

画面にノイズが奔り、そして・・・

「ツ！！な、なんだと・・・！！」

「くそっ！！・・・また、分からなかった・・・！！」

画面には、灰色の身体をバトルフィールドに横たえたチームアリスの姿が映っていた。

第四十四話（後書き）

はい、と言うわけで四十四話にしてようやくエン様登場!!と言うわけでしたあゝ

さてさて、今回皆様気になったことがありますでしょうか？
あると思います・・・まあ、プリムラのことだと思えますが。脈絡がない!!

まあ、「なんでプリムラとリアルで会話出来るんだよ」的な質問があると思いますが・・・
それはあれです。Linkでの天城彩花とAIKAと同じく頭の中に居るみたいな感じですよ。
詳細は後々設定で載せます

それでは、次回もどうぞよろしくお願ひします!!

第四十五話（前書き）

どうも、ジーユーです。

いつも通りのクオリティの低さ、及びグダグダな会話でんこ盛りです。

それでもいいよ〜と言う寛容な方には感謝を、

もっと精進しろや、アホが！！と言う方には謝罪します！

まあ、前書きからしてグダグダなんですが、とりあえず四十五話、投下します！

それでは、どうぞ！

第四十五話

SIDE一馬

「……………」

「……………どう？あたしの言ってる事、分かった？」

「……………ああ、分かったよ……………コレじゃあ、なんて言ったら良いのか……………普通は分かんないよな」

智香が言葉に出来ない理由がよく分かった……………なんせ、

「……………どうやったか理解出来ない攻撃なんて、説明出来るわけがないよな……………」

そう言っただけで開いていた動画を消し、隣で何とも言えないと言った表情をしている智香と向き合う。多分、俺も智香と同じような顔をしているんだろうな、などとどうでも良い事を考えながら、先程の試合を振り返ってみる。

戦況は終始チームアリスが有利だった。それは疑う余地もない事実。普通ならばあのままチームアリスがエンデュランスへと攻撃を加え、そのHPを全損させての勝利に終わっていた筈の試合。きつとあの試合をリアルタイムで見ていた多くの観客も……………いや、全ての者はエンデュランスの勝利などは考えなかった筈だ。

だが、しかし……………

「……結果的にはエンデュランスの勝利、か……」

一瞬動画にノイズが奔ったと思った次の瞬間には、チームアリスの面々がアリーナの床に伏せていたという、全く持って信じられない結果に終わった、と……

全く持って理解出来ないな……

「……やっぱり、チートしてんのかな、コイツ……」

「……チート、ねえ……まあ、そう考えるのが自然だよな、普通」

普通に考えればあのような事態を……一瞬にして三人ものPCのHPを全損することが可能な手段など、チートぐらいしか思い浮かばない。

が、いくらチートしていたとしても、ああまでも露骨な結果を残すようなチートを普通するか……？

それもアリーナみたいな大勢の衆人観衆にさらされている中で、さも「私はチートをしています」と言っているような戦い方をするなんて、俺には思えないわけなんだが……

「……チートかどうかを判断するには、少し情報が少なすぎるな」

「でも！あんな風に一瞬で全然ダメージを喰らってないPCのHPを全損させるなんて、普通じゃないって！もしも仮にアイツが何らかの特殊なアイテムを使ってあんな事ができるとしても、一瞬で三人を倒せるようなアイテムなんて存在すると思つのかよ、一馬はさ」

「……まあ確かに、そんなアイテムなんてのは俺だってあ

り得ないと思うよ。俺自身シエルブリットみたいな普通じゃない装備を持つてるから、こう言っちゃなんだけど、チームアリスレベルのPCなら一瞬とはいかなくとも、一撃でHPを全損するくらいの事は出来ると思う。けど、それが三人同時となると、な・・・」

少なくとも、俺にはそんなことできるとは思えない。

「まあ、三人が一直線、もしくは一か所に固まっている状態でシエルブリットのフィンをすべて消費した一撃ならばできないこともないだろうが、今回エンデュランスが取った手段はそういった類のものじゃないと思う」

「じゃあ、やっぱりチートなんじゃないの？それ以外説明がつかないよ、あんなの・・・」

「うん、俺的にはそうじゃないと思うんだけど・・・やっぱり情報が足りないから、そんな結論しか出せないよな・・・」

「・・・やっぱり実際に見てみるしかない、か・・・」

何が起こったのか理解出来ない俺たちがここでこうして議論を重ねたとしてもそれはあくまで憶測の域を出はしない。しかも、その憶測とて不完全とさえも言えないような情報で組み立てられた穴だらけのものだ。正直憶測とさえ言えない、いわばただの想像だ。

もしもこのエンデュランスが使った何らかの手段を特定するのならば、こんな何が起きたか分からない映像に頼るのではなく、実際にこの目で見るのが一番だと思う。

というわけで、

「今度のエンデュランスの試合っていつ分かるか？」

「え？えっと・・・あ、来週の水曜にランキング15位のチーム乱^{ブル}奮^{ブル}つて言つところと試合するみたいだよ」

「なら、その試合を見に行くか・・・智香はこの日は試合あるのか？」

「ううん、この日は無いから、あたしも一緒に見に行くよ」

直に試合を見に行くことになった。

SIDEカズマ

「と言う事になったんだけど、来週の水曜は空いてるか？」

智香との対エンデュランスに向けての情報を集めるためにアリーナバトルを直に見に行こうと決まった日から2日が経った。

C・C・社のサーバーメンテは俺の予想よりも長く掛かったようで、丁度学校から帰ってきた辺りで「サーバーメンテナンスが終了しました」というメールが届いた。

まあ、そんな事はどうでもいいか。

そんなわけで3日ぶりのThe worldにログインした俺は、早速@ホームへと出向き、そこでいつものように壁により掛かっていたハセヲへと声を掛けたわけだ。

内容は、当然の如くエンデュランスの試合を一緒に観戦しないか？と言う内容である。

「……いきなりなんだよ……てか、なんだアリーナって」

あれ、この反応は……もしかしてアリーナバトルのことを知らないのか？

そっけない（それはいつものことなんだが）ハセヲの反応に「こいつはまずアリーナと言う物の存在を知らないのでは？」と思った俺はこいつに「アリーナって知ってるか？」と尋ねてみた。

「……知らねえけど……」

返ってきた言葉は案の定、「知らない」という答えだった。

ん〜、まあけどよく考えたら知らないやつがいても不思議じゃないよな。あれって結構有名だけど、俺だって最初は知らなかったし、たぶん智香の奴に教えてもらってなければ今も知らないままだったろうし。

そんなわけで、まず俺はハセヲにアリーナバトルのことを教えることから始まった。

「アリーナってのはThe worldで公式にPC同士のバトルが行われてる場所だな。そこでトーナメント方式で頂点を目指して戦うのがアリーナトーナメントなんだよ」

本当はもつといろいろとルールだのあるんだろうけど、簡単にいえばこんなもんだと思う。

「公式でって・・・じゃあ、普通のフィールドでやってるPC同士の戦闘とかって非公式なのか・・・」

「ん〜、まあ確かに普通のフィールドでもPKだとかは行われてるけどあれって公式に認められているってわけじゃなかった気がするから、そう言う意味なら非公式ってわけになるんじゃないか？」

「なんか、曖昧だな・・・」

「そんなこと言ったってしょうがないだろうが・・・まあ、とにかくアリーナについては分ったな？」

「まあ、一応・・・」

相変わらず煮え切らないというか、ヘタレた感じの返事だ・・・

「で、来週の水曜は空いてるか？」

「えっと・・・あゝ、イヤ、この日はちょっと予定入ってるわ・・・

」

・・・ここまで説明させて、来れないとか・・・

「・・・ハア・・・」

「な、何人の顔見て溜息ついてんだよお前・・・」

「・・・いや、何でもないよ。気にするな」

折角だから、直に対人戦というものを見てみて欲しかったんだが・・・用事があるなら無理強いする訳にもいかないしな。

The worldはあくまでもゲームなんだ。ゲームで現実の予定を崩すなんて馬鹿らしいにもほどがあるし、あくまでもゲームつてのは現実に何も無い時間とかにやる暇つぶしや、現実で溜め込んだストレスとかを発散する為の”手段”であるべきもの何だと俺は思ってる。そんなゲームで現実の予定やら何やらをおろそかにするなんて本末転倒甚だししいし。

・・・まあ、人によつては「リアルよりもゲームの方が大事だ」とか言うヤツも居ると思っけど、それは例外だよな、多分。

っと、そんなどうでも良い事は置いて・・・ハセヲがダメと

なると、残るは・・・

「タビーはどうだ？」

「にゃ？なにが？」

ハセヲとは反対側の壁際でオブジェクトの鉢植えに生えている植物？をいじくっていたタビーに声を掛けてみる。

一応タビーも戦力強化の対象として入っていた筈だし、実際の戦闘を見るとというのは決して無駄にはならないはずだし、ちょうどいいだろう。

「来週の水曜に行われるアリーナバトルを見に行こうと思ってるんだが、タビーはその日空いてるか？」

「えっと、別に大丈夫だけど・・・アリーナバトルって何？」

おや、ここにもアリーナバトルの存在を知らないヤツが居たのか。しかし、こうまで知らないヤツが多いとは・・・いや、俺の周りだけかもしれないし、第一二人はまだ初心者なんだ。知らなくても不思議じゃ無いよな。

・・・けど、やっぱりアリーナバトルって結構マイナーなのかな？

「えっと、さつきハセヲにも説明したんだが、要はPC同士のバトルをC・C・社公認で行えるトーナメント方式の試合のことだよ」

「へえ、そんな場所があるんだあ〜」

知らなかったあ！と言って興味津々な瞳で俺を見つめてくるタビーの姿に、なんだか本当に猫みたいだな、などと我ながら何の脈絡

も無いことを考えながら、見に行く試合の詳細を説明する。

「ああ。ま、野良でPKとかしているような奴らとはちょっと違うけどな。で、今度その最近注目されてる新人が居るんだが、そいつの試合が水曜にあつてな。それを見て対人戦のコツというか、空気を少しでも知ってもらえる良い機会かと思つて誘つてみたんだが・
・どうだ？」

「へえ、期待の新人つてヤツだねえ！師匠、アリーナバトル見に行つても良い！？」

俺の説明に余計に興味が増したのか、少しハイテンション気味にタビーより少し離れた樽の上に座っていた匂坂へと大声で俺と共にアリーナへと行つても良いかどうか尋ねるタビー。

タビーに許可を求められた匂坂は、そんな彼女へ呆れと疲れが入り交じつたような半眼で、

「なんでいつも俺の許可取ろうとするわけ、お前は」

と逆にタビーへと質問していた。

その言葉から察するに恐らくタビーは自身が行動する場合まず匂坂へと許可を得ているのだろう。
まさに飼い猫だな、などと考えていた俺の耳に、タビーの答えが聞こえてきた。

「だって、師匠は師匠なんだもん」

「は？意味分かんないぞ、お前」

「だ〜か〜ら〜!!」弟子は師匠に行動する場合は許可を取らなくちゃいけない!」って言うルールあるの知らないの!？」

「・・・んだよ、それ・・・」

匂坂の呆れたような・・・いや、実際呆れてるのか?そんな感情を感じさせる言葉を俺と共に聞いていたハセヲは、ボソツと「・・・アホじゃねえの」と呟いた。

まあ、そう言いたい気持ちは分からなくは無いが、それを口に出すのはアウトだ。

「ムツ!!ハセヲ、何か言った?」

耳聴く、ハセヲが呟いた自分を馬鹿にする言葉を聞いたタビーは俺からしたら全然なのだが 鋭い視線をハセヲへと向ける。

タビーの鋭い視線を受け止めたハセヲは、「ウグツ・・・」と向けられた視線に怯みながら、

「・・・別に、なんでもない・・・」

とまたもやボソツと呟いた。しかし、ハセヲ・・・ヘタレだな、相変わらず・・・

「あ〜、まあ、いいんじゃないかねえの?実際カズマの言ってる事も間違っちゃいねえし。と言う事でしっかり勉強してきなさい。以上!」

なんか、スッゲー投げやり気味に匂坂がそう答え、タビーをビシ

ツと指さす。その様子だけ見ていれば、弟子に命令というか、修行内容を告げる師匠！と言う構図になるのだろうが、匂坂の、「マジでメンドくさいから、後は頼むわ〜」と言わんばかりの視線が全てを台無しにしていた。

しかし、そんな事はタビーにとっては全く関係無いのか、もしくは気付いて居ないだけかもしれないが、まあとにかく元気にビシッとこちらも見事な敬礼で匂坂の言葉に応えていた。

「了解です、師匠！と言うわけで、オツケーだよ、カズマ！」

「・・・ああ、分かった・・・」

タビーの元気な返事を聞き、俺は一応了解と伝えたわけだが・・・その返事は自分でも分かるくらい力が無かった・・・何故だろうか・・・なんか、どっと疲れたぜ・・・

第四十五話（後書き）

・・・グツダグツダでしたね・・・

まあ、ともかく次回はいよいよエンデュランスの試合がございます。
G・U・本編でも1、2を争う濃いキャラのエン様な訳ですが、が
んばって彼の濃さを描いてみようと思っておりますので、今後ともどう
かよろしくお願ひします。それでは、また次回！！

PS、感想くれるとうれしいです！

第四十六話（前書き）

どうも、毎度の事ながら一週間を若干過ぎての更新です・・・

第四十六話

SIDE 揺光

「それにしても、随分と久しぶりに感じるわね」

「ん？何が？」

「こつして観客として試合を見ようとしてることに、よ」

そう言われれば、そうだけ……確かに、最近じゃあんまり直に試合を見に来る事なんてそんなになかったなあ……

宮皇になつてからは挑戦してくる相手はだいたい決まつてるって言つたら変だけど、ほとんどはアリーナランカーだったし、それもほとんどが上位に位置する奴らばかりだったから、戦い方とかも有名で、戦い方とかは全部過去の試合の映像とかで情報を調べてたからこつして実際に試合を見るのなんて最初の防衛戦で相手チームのこと調べた時以来か……

あれからまだ1ヶ月程度しか経っていないなんて正直思えないなあ……もうとつくに半年くらい経つたような、もうあの戦いが随分と昔にあったことのように感じるや……

それ以降の敵チームの情報は、結構揃つてた上にミーナとの連携も上手くいくようになってきたから、全く相手を調べないなんて時もあったっけ……

……これって、慢心してるのかな？チャンピオン宮皇になつて、タイトル防

衛だけに固執して、すっかり自分に直接挑戦してくる相手の事しか考えなくなってたのかな・・・

ハハハ・・・これじゃあ、あんなにあたしが宮皇になるのを楽しみにしてくれてたキリカに合わす顔、無いじゃないか・・・

「・・・あなたが何を考えてるのかなんとなく分かったけど、そんなに気にすることないんじゃない？」

「アイン・・・」

自分の高慢ともいえるこれまでの行動を思い返して、軽い自己嫌悪に陥っていたあたしにアインがそんなことを言ってきた。

「間違ってたら恥ずかしいんだけど、揺光つてば「宮皇になってから試合見なくなって、慢心してたんじゃないか」なんてこと考えてない？」

「ど、どうして分かったのさ・・・」

「ただの勘よ・・・はあ、揺光さ、ちょっと堅苦しく考えすぎじゃない？」

「え・・・？」

予想もしていなかったアインの一言に、思わず間の抜けた声を出しちゃったけど・・・真面目すぎてどういう事だろ？

「だからさ、そんな今まで試合を見てなかったくらいで悩むなんてちょっとまじめすぎだって言ってるの」

「で、でもランカーだった時は毎回って言っていいほど試合見てたのに最近は全然見てなかったんだよ？それってやっぱり少し高慢だったんじゃない・・・」

「だ〜から〜！そんな「少し試合を見ることを減らした」くらいで高慢だなんて考えてたら、この世には高慢な人間であふれ返るって言うてんの。第一、そんなの碧聖宮とか竜賢宮の宮皇だって試合見ることのほうが少ないでしょ？」

そんな事ないと思うけど・・・仮にもあたしよりも宮皇歴長い奴らなんだし、しっかりと試合見たりしてたはず・・・

そう思いながらもあたしは、つい最近加入した宮皇専用ギルド、イコロにいる無愛想な二人の宮皇はあたしと違ってランカー以外の試合を見るかどうかを思い浮かべてみた。

碧聖宮（碧聖宮チャンピオン）の天狼は・・・見ない、かな？

あいつってかなりのバトルマニアだし、アリーナバトルが凄く気に入ってるっていうか、アリーナバトルの為にThe world やってるって豪語しても良いようなヤツだからランカーの試合見るかどうかって言うたら見てるって言えるだろうけど、ランカー以前の、自分に挑んでくるかどうか分からないような試合は絶対に見て無い気がする。

だってこの前「俺が興味を抱くのは、強者だけだ。雑魚には微塵も興味は無い」とか言ってたから多分あつてると思う。

・・・てか、その時の「雑魚」が「カズマのおかげで宮皇になった」とか噂されてた時のあたしなだけだね。あの時はマジで腹立つ

たね。あの陰険狼男が・・・！！

で、もう一人の宮皇、竜賢宮の太白は・・・多分、見ないかな。あいつってあたしの紅魔宮、天狼の碧聖宮よりも上位の竜賢宮の宮皇のくせに、アリーナバトルはあんまり興味無いつて感じだしランカーの試合自体もほとんど見ないヤツだから、ランカーでもないプレイヤーの試合なんて絶対と言って良いくらいに見てないと思う。

・・・あれ？こう考えてみると、今の宮皇って誰一人としてランカー以外の試合なんて全く見向きもしないヤツばかりじゃないか？と言うかむしろ、こうやってまだランカーとしては下位に居るヤツの試合を直接見るヤツって一人も居ないんじゃないか・・・

あつれ・・・あたしの悩みつてもしかして、とんでもなく不毛且つ無駄な悩みだったのか・・・？
宮皇って、もつと高潔で、アリーナランカーとかの憧れだつて考えてたあたしは、実は馬鹿なのか・・・？いやでも、実際宮皇ってアリーナランカーとかの憧れなんだから、やっぱりもつとしっかりしないと・・・

あたしがムムムツと理想の宮皇と、現実の宮皇のギャップと言うか差について悩んでいると、約束の時間の五分前になってようやくカズマがやって来た。

・・・見慣れない女を連れて。

「よう、待たせた・・・つて、なんで揺光は一人で頭抱えて唸つてんだ？」

「あら、久しぶり、カズマ。まあ、揺光はちょっとした悩みを解決

しよつと頑張ってるの。ところで、そちらは？」

「ん？ああ、紹介するよ。最近入ったギルドの仲間で、タビーって言うんだ」

「タビーでっす！よろしくお願いしまっす！」

「・・・また、増えてやがるし・・・」

「？何か言ったか、揺光？」

「別に・・・あたしは揺光。よろしく」

「あらあら・・・私はアインって言うの。揺光のチームメイトよ。よろしくね、タビー」

「ったく、何拗ねてんだよお前」

あたしのどこか拗ねたような自己紹介にアインは苦笑し、カズマは何で拗ねてるのか理解出来てないけど、初対面の相手に対して失礼だろと言った表情で肩をすくめた。

・・・少しくらいあたしが何で不機嫌になつたのかを、コイツは察するべきだとあたしは思うね！この鈍感男！？

「えっと、私何か気に障るような事したかな？」

あつと、あたしの表情、そんなに不機嫌そうに見えたのかな？それまで笑顔だったタビーが、自分が何か失礼な事でもしてしまつたのかと不安そうな顔をしてきたので、あたしは慌てて「別に、そ

「なんじゃないから！」よ否定した。

「うーん、なんか普通に良い娘そうだな、タビーって……見慣れない女だったから思わずあんな態度取っちゃったけど、もしかしてちよつと警戒しすぎたのかな？」

「さっきのあの態度だって、全面的にあたしが悪いのに、自分のせいでとか考えるのはちよつとアレだと思うけど、あたしだったらこんなすぐに謝れないと思うし……」

「……とにかく、今はさっさと謝ったほうがいいよね。」

「あ、別に、あんたが何かしたって訳じゃ無くて、丁度機嫌が悪くって睨みたいになっちゃったんだよ……ごめんな？」

「にや！そうだったの？なくんだ！よかった……あ、私こそ勝手に勘違いしてごめんなさい！」

安心したと言った表情からまたすぐに申し訳なさそうな表情に切り替わって謝罪してくるタビーを見て、「ああ、やっぱりこの娘、良い子そうだな」とって思った。

「で、結局お前は何を悩んでたんだよ」

「え？えっと、別になんでもないよ？気にすんなって！」

いきなりの質問に思わず声の上擦りそうになりながら、何とか誤魔化そうとする。別に話しても問題無いと思うけど、やっぱり少し……ねえ？その、ちよつと恥ずかしいじゃん？

「揺光は、宮皇になってからの自分は慢心してたんじゃ無いかって悩んでたのよ」

「ちょ、アイン！」

あたしが話したくないってのを分かってたはずなのに、ばらしちゃったよ、コイツ！

「はあ？慢心してる？別にこの前見た試合じゃそんな風には見えなかったが・・・なんでそんな事思ったんだよ。またどこかの掲示板にでもそうアップされてたのか？」

「そうじゃないのよ。この子、最近自分に挑戦してくる相手の試合直接見てないからって、「自分は慢心してるんじゃないか？」なんて考え出しちゃったのよ」

「・・・なんだ、そりゃ・・・」

思いつきり呆れたと言いたげな視線で（実際かなり呆れてるんだろうけど！）あたしを見つめてくるカズマ。

「タビーは対照的に。「スッゴクイ！揺光さんって、真面目なんだね！」と、この言葉だけ聞けば、褒められてんだか貶されてんだかよく分からない感心の仕方をされたけど・・・まあ、その視線には邪気みたいなのは全然無いから、純粹に感心してるんだとは思うけど・・・なんか、複雑だ・・・」

「お前・・・馬鹿だろ？」

「な、なにいく！！という意味だよ、カズマ！！」

言うに事欠いて、馬鹿ってなんだよ、馬鹿って!!

「どういう意味もなにも、そのまんまの意味だよ。馬鹿としか言いようが無いだろうが、全く・・・現実の試合とかならまだしも、ネットゲームの試合を見てないくらいで慢心とか・・・馬鹿か？そんなの、現実と二次元を混同してるって思われるような馬鹿な考えだぞ？はあ・・・馬鹿馬鹿しいにも程があるだろうが全く・・・」

こ、こいつ、何回馬鹿って言うつもりだ!!

「いいか？The worldはあくまでもネットゲームなんだ。確かに、相手を研究することは重要だ。けどな、それを少ししなくなっただからって「慢心した」なんて考えは少し行き過ぎだ。真面目なのはお前の美点だけど、もう少し肩の力を抜け。ゲームしてるのに楽しまないとか、それ自体が既に間違ってるんだよ」

「ムウ・・・」

「おお・・・なんか、凄いつて言うか、なんて言うか・・・お兄さんって感じだね、カズマさん・・・」

「ふう、これで私よりも年下だつて言うんだから・・・カズマ、本当は年上なんじゃないの？」

相変わらずの、頭ごなしに叱るんじゃなく、あくまでも諭すようなカズマのその言葉にあたしは言葉を詰まらせ、タビー達はカズマのその話を聞き感心したような声を上げていた。

・・・でも、それじゃあ、あたしが宮皇になるのをあんなに楽しみにしてくれてたキリ力を裏切ってるみたいじゃんか・・・

「・・・もしも、今お前がアイツキリカの事を考えてるんだとしたら、それこそ純粹にこのゲームを楽しむべきだ。アイツは、俺が知る中でも一番このゲームを楽しんでたからな。アイツがここに居たら、多分俺と同じ事をお前に言ってるだろうな」

・・・確かに、そうだよな・・・The コレ world はあくまでもゲーム、娯楽なんだ。ゲームは楽しまなきゃ意味がない・・・キリカがここに居たら、「ダメですよ、揺光さん！もっとこの世界The Worldを楽しまなくちゃ！」って笑顔で言ってくるよね・・・

「・・・そうだね、確かに、ゲームは楽しまなきゃいけないよね」

「ああ」

ゲームを楽しむ。その方法は、千差万別だけど、あたしはあたしなりの楽しみ方を探すとしますか！

で、まずはこのゲームを楽しむ為に・・・

ワアアアアア！！

「見せてもらうよ、エンデュランス・・・アンタが、一体何をしているのかを」

観客の歓声と共に入場してきた、一人の斬刀士の姿を見つめながら、あたしはそう呟いた。

S I D E エンデュランス

『月下に狂う、狂乱の者達・・・彼らは今宵も、その刃を振るう・・・それは、自分こそが最強だと吠えんがために！』

・・・うるさいなあ・・・
相変わらず、この実況はやかましいよ・・・

「ニヤア」

フッフ、やっぱり、君もそう思うかい、ミア？
愛しいミアの顎を指で撫でながら、僕は彼女の同意を得られて胸の中が一杯になっていた。

ミアと同じ事を思うことが出来た。そう考えれば、このうるさい実況の前口上も少しは許して上げようかなって思えてくる。

『驚異的なスピードでランクを駆け上がる、薔薇の貴公子！エンデュランス！果たして今日も、瞬殺で試合を終えてしまうのか！！』

・・・でも、やっぱりうるさいから許して上げない。

『対するは、ランカーランキング7位の、チーム撃滅剣！フランドイッシュ全員が撃剣士という、超攻撃的な彼らは、今宵こそエンデュランスの快進撃を止める事が出来るのでしょうか！！まもなく試合開始です！！』

「よう、テメエが最近噂のエンデュランスか」

転送されてきた内の一人が突然そう声を掛けてきたけど・・・答えるの、面倒だ・・・

「・・・・・・・・」

「お前、変な技使ったってな？結構噂だぜ？お前がチートしてアリーナバトルを勝ち進んできたってな。それってマジなのかよ？俺らとの試合でもチートするのかよ、ええ？」

「・・・・・・・・」

「チツ、だんまりかよ・・・」

今日の獲物対戦相手が不愉快そうに舌打ちをして、仲間達とヒソヒソと何かを話会ってるけど・・・まあ、何でもいいか・・・僕は、ミアが望むとおりに、ただ戦っただけなんだから・・・

「ニヤア」

．．．うん、分かってるよ、ミア。すぐに君の望むとおりになってあげるからね。

『それではあ！試合、開始いー！！』

すぐに、ね．．．

第四十六話（後書き）

次回はバトルに入ろうと思います

第四十七話

SIDEカズマ

「えっと、なんか一方的な試合だね」

試合開始から、五分程度が経過しただろうか。

俺達と共に試合を観戦していたタビーは、最初の方こそ初めて見るアリーナバトルという物に興奮した様子だったが、一方的な試合展開に段々と飽き始めたのかそんな感想を漏らした。

「まあ、そうね。こうまで一方的な試合というのは、結構珍しいけど、この分だとチーム撃剣士フリンディッシュの勝利で終わりそうよね・・・」

「・・・やっぱり、アインでもそう言う見方するんだ」

「え？」

この中でもアリーナバトルに関しては一番年季の長いアインの意見に、揺光は「やっぱり普通はそうだよな」と言って再び試合へと視線を戻す。

そんな揺光達のやりとりを横目で見ていた俺も、視線を試合へと戻す。

その試合展開は、タビーやアインが言った通りエンデュランスの圧倒的な劣勢。

だが、この試合展開は・・・

「この前見た映像と同じ展開、なんだよな・・・」

多少の抵抗は見せるものの、傍から見れば一方的に打ちのめされているエンデュランスを見つめていた。

決定的な一撃を喰らったりは今のところしていないが、このまま行けば、確実に残っているHPを全損されるだろうと思える展開。

誰が見てもチームフランドゥッシュ撃剣士が優勢で、エンデュランスが圧倒的に不利と言う状況だ。

だが・・・

「どうにも、不気味だよな・・・」

「ああ・・・追い詰められているヤツの顔じゃないよ、あれは」

通常、このアリーナバトルでプレイヤーが見せる表情には大きく分けて二つある。

一つは、勝者の表情とでも言うべき、余裕の表情。圧倒的な力量差がある場合、ランカーみたいに己の力を観客へと誇示する事が好きなヤツとかは大抵この表情を浮かべることが多い。

そしてもう一つは、敗者の表情と言っても良い感情である、焦燥と絶望。勝者が浮かべるのが余裕だとすると、こちらは自身と相手の力量差を感じ取った場合に浮かべるのは、「コイツには届かないのか」という絶望の表情と、「なんで俺の攻撃が当たらないんだ」や、「どうしてコイツには攻撃が効かないんだ」と言ったような焦燥感を感じさせる表情だ。

そして、この試合でそれを当てはめるのならば、「勝者の余裕」
をチーム撃剣士が、「敗者の焦燥」をエンデュランスが浮かべるべ
きなんだが………

「エンデュランスには、その焦燥が一切無い」

それは、すなわち自分が不利だとは感じていないという証拠。そ
の根拠こそ分らないが、ヤツは確かに今の状況を、一方的に攻撃
され、下手をすれば一撃で残りのHPを刈り取られると言うこの状
況であっても自身の勝利を疑っていないだろう。

「やっぱり、何かあるんだろうな、ヤツには……」

「何かって……何？」

……
タビーがそう尋ねて来たが、その答えを、俺は知らない。だから・

「それは俺にも分からないよ……分からないから、確かめに来た
んだ」

ヤツの、自信の正体を。

S I D E エンデュランス

「ふう・・・君達も、この程度なんだね・・・」

「何・・・!」

試合が始まってからもう十分くらい経ったかな・・・?

何度も何度も振るわれる大剣を回避し続ける作業に飽き出していた僕は、思ったことをそのまま口に出した。

正直、期待はずれも良いところなんだよね・・・当たり前もしない攻撃をブンブン、ブンブンと繰り返してばかりなんだもん。いくらミアが望んだこととは言え、この程度の力しかないような奴らとの戦いなんて、面白くも何とも無いよ・・・

「テメエ・・・!!負けてんのはそっちだって事理解出来てねえのか・・・!?!」

「一撃も攻撃してこねえヤツが、粹がつてんじゃねえぞ!!」

僕の言葉が気に触ったのか、険しい顔で叫んでくるけど・・・う

るさいよ・・・

「力も無いのに・・・吠えるだけなんだね・・・」

騒がしいのは嫌いなんだよ、僕は。

「ッ！テメエ・・・！ぶっ殺してやる！！」

「ああ！！」

「行くぜえ！！」

懲りもせずにもまた全員で攻撃を仕掛けて来るけど・・・当たらないって分からないのかな？迫り来る大剣に刀を直接ぶつけるんじゃない、滑らせるようにして彼らの攻撃を捌きながら、学習能力が無いんじゃないかと思うほどに繰り返されるこの攻防。

これくらいでランカー上位に居るなんてね・・・正直、期待はズレにも程があるよ。

「ミヤア」

「ミア・・・そうだね。もう、終わりにしようか」

肩に乗るミアも言葉に頷いた僕は、直後に振り下ろされた大剣をバックステップで回避する。

「あ！？何一人でブツブツ言ってやがんだテメエ！！変な猫なんか乗せやがって！！へっ、そいつもすぐにぶっ殺してやるぜ！！」

ミアと話していたのが分からないのか・・・？うん、分かるわけ無いか。こんな何の力も持たないようなヤツが、ミアのことを分かるわけ無いんだ。

けど・・・

「ミアを・・・殺す・・・？」

「ああ？そう言っただよ！！すぐにぶっ殺してやるってなあ！？」

君ごときが、彼女を傷付けるだって・・・？身の程を知らない、雑魚が・・・

「力も無い、雑魚が・・・彼女を殺す・・・」

「だから・・・」

ブオンッ

「さっきからブツブツ、ブツブツ五月蠅せえんだよお！！」

ガアンッ！！

「チッ、また避けやがった・・・！！」

もう少し遊ぼうかとも思ってたけど・・・

「もういいや・・・」

終わりにしよう・・・

SIDEカズマ

「ねえ、このままじゃエンデュランスって人やられちゃうんじゃない？いくらなんでも、さつきから一方的過ぎるよ。」

タビーが未だに一切攻撃せずにいるエンデュランスを指さしながらそう言うってくるが、俺はそれでもまだ、「アイツには何かがある」と感じていたので、その事を彼女に伝えた。

「まあ、確かにそうなんだけどな？何か隠してるみたいなんだよ、アイツ」

「何か隠してるって言ってもさ、このままじゃ負けちゃうと思うんだけど・・・それに、本当にそんな必殺技的なもの持ってるならもっと早く使っくんじゃないの？」

「うーん、そうなんだよな・・・何か逆転する手段があるんだとしても、それを発揮する前にやられてしまえば、意味無いんだよな・・・ここまで引っ張るメリットも俺には良く分からないし・・・」

「・・・やばいな、そう言われると本当にアイツが何か隠し持って

のプレイヤーを見下ろしていた。

見下ろされている三人のPCは、まるで何かを探すかのようにキョロキョロと当たりを見渡すだけで、目の前に居る巨人に対してのアクションを何にも起こさそうとしない。

「なんで、あいつらは動かないんだ・・・？」

「ねえ、カズマ？なんかいきなりエンデュランスが消えちゃったんだけど・・・」

「は・・・？」

俺の左に居たタビーがいきなりそんな事を尋ねてきたが・・・居なくなつた？何を言ってるんだ！エンデュランスは・・・アイツは、あの巨人になつて、三人を・・・！？

もしかして・・・見えていないのか？あの巨人が居ることを・・・エンデュランスが、あの巨人になつたと言う事を、認識出来ていない・・・！！

そうか・・・それなら、納得できる。目の前にあんな巨人が現れたつて、見えてなければアクションを起こさないのも当たり前か。

恐らく・・・あの巨人を認識出来るのは、俺のようなボレアスイリーガルと同じ存在を身に宿している存在だけなのかもしれない。

が、俺のその予想は次の瞬間に崩れ去つた。

「ねえ、カズマ・・・目の錯覚かも知れないんだけどさ・・・あた

し、今アンタが変わったアレみたいなのが・・・ぼんやりとなんだけどさ・・・見えるんだけど・・・」

「な・・・!!」

揺光が・・・アレを、認識出来てる・・・!?

揺光からのその言葉を聞いた瞬間、俺はそれまで自分が立てていたあの巨人が見える条件が瞬時に崩れ去ったような驚きに見舞われた。
イリーガルな存在

どういうことだ・・・?アレは、俺みたいな存在だからこそ見えるんじゃないのか・・・!?

『君達は・・・力がない』

そんな俺の当惑など知ったことではないエンデュランスは、唐突にそう発言した。が、相変わらず目の前で悠然と浮いている巨人の事など全く認識出来ないチーム撃剣士フランドイッシュの三人は 彼らからしてみれば 消えてしまったエンデュランスを見つけ出そうと当たりを見渡していた。

やっぱり、チーム撃剣士フランドイッシュも、タビーやアイン達もあの巨人を認識出来ていない・・・なら、なんで揺光は、アレを認識出来ているんだ・・・?

・・・今考えたって埒が開かないな・・・今はそれよりもエンデュランスの方を観察するか・・・

『だから、彼女は退屈してしまったんだ・・・』

彼女・・・？誰のことだ？

エנדュランスの口にした「彼女」という言葉に、俺や揺光以外に、あの巨人を認識出来ている存在が居るのかと言う疑問が新たに浮かび上がってくるが、そんな俺の疑問など知ったことではないエנדュランスは、巨人と化したその腕を頭上に振りかぶり、紅い光を作り出す。

『だから・・・』

カッ！！

「くわああああ！！」「」

『消えてくれ・・・』

バタツ・・・

パアツン・・・

『・・・しょ、勝者あ、エנדュランスウウウ！！瞬殺う！！瞬殺です！！私自身何が起こったのか全く理解出来ていませんが、エフランティックンデュランス選手、一瞬にしてチーム撃剣士を下しましたあ！！』

ワアアアアアア！！

「え、え？何が起こったの！？」

「まさか・・・本当に逆転するなんてね・・・これは、確実に昇っ

てくるわね、揺光。・・・揺光？」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

実況によるエンデュランスの勝利宣言に観客達、そしてタビー、アインが沸き上がるが、俺と揺光は今見た事実を受け止め、アイツの・・・エンデュランスが持っていた隠された力の正体を知り言葉を失っていた。

第四十七話（後書き）

揺光が何故マハを見れたかは、次回説明します。

第四十八話（前書き）

どうもお久しぶりです！

何とか年内投稿は間に合ったぜ・・・！

第四十八話

SIDE 揺光

普段と変わらない、会場の熱気。普段と変わらない、チームメイト。何一ついつもと変わらないアリーナの選手控え室で試合の開始時間を待っていた。

ここまでは、いつもと何ら変わらない状況。少しの緊張と、試合への期待感を膨らませてあたしは、いつもここでアリーナフィールドへの転送を待っていた・・・いつもは。

けど、今日は・・・試合への期待感なんて全然無くなって・・・緊張しっぱなし。全然いつもと一緒じゃ無かった。

原因は、ただ一つ。

これから決勝を・・・チャンピオン宮皇の座を賭けて戦う事になる挑戦者、エリデュランスのせいだ。

正確に言えば・・・アイツの持つ、力。あれが、あたし達の身に降りかかることを、今更ながらに恐れていた。

カズマ、そしてあたしを傷付け、キリカをこの世界から奪いさつたあの男・・・フリードと同じ、あの普通じゃ説明出来ない、あの力・・・

アレに、あたしは恐怖してる・・・

あの力を振るわれれば、あたしはまた、あの時みたいは何の抵抗も出来ずに、あの痛みを味わうんじゃないか・・・あたし達が死に物狂いで勝ち取ったこの宮皇チャンピオンの座も、あの力が振るわれれば、一瞬で失ってしまうんじゃないか・・・そんな事ばかり考えてる・・・

八八・・・情けないなあ、あたし・・・

「何暗い顔してるのよ、揺光」

試合前に沈んでたらいけないと理解していながらも、ネガティブな考えが止まらなかったあたしに、アインは呆れたと言いたげな表情で声を掛けてきた。

「アイン・・・そんなに、暗い顔してた？」

「ええ。試合前だったのに、信じられないくらい暗い顔してたわよ、あなた」

「ちょ、アインさん！」

アインの率直な物言いに言い過ぎだと思ったのか、ミーナがアインに「もう少しオブラートに包んだ方が・・・」と言うと、

「良いのよ。このくらい言わないと分かんないんだから、この子は」と言っつて、ミーナのその言葉を一蹴した。

・・・まあ、ストレートな物言いは嫌いじゃないけど、それにしただってちょっと人のことバカにしすぎだと思うな・・・

「ま、どうせエンデュランスとの試合の事で悩んでたんだろうけどね。・・・悩むのも仕方ないとは思っけどね、あたしも」

そう言っつてアインは、おもむろにあたし達と同じようにエンデュランスが居る筈の選手控え室の方を見ながら軽く溜息をついた。

「結局、エンデュランスに関しての情報はほとんど分かんなかったし、結局どうやって毎回毎回逆転してんのかもあたしたちには分かんかった・・・正直、今までみたいに、どう対処すれば勝てるのかって言う明確なビジョンが無いから、不安にもなるわよね・・・」

全く、嫌になるわよね」と言いながら、アインは首を横に振りながら、けどさ、と言っつてあたしに鋭い視線を向けてきた。

「相手の情報が無いからって・・・アンタはそう簡単に試合を投げちゃうの?」

ッー!!

「アインさん!いくら何でも言い過ぎ・・・!!」

「待つて、ミーナ!・・・投げてるって・・・そう見えたの?」

少し口調が厳しめになっっちゃったけど・・・それだけは、ハッキリさせときたい。

「・・・ええ。私には、そう見えたわ。いつものように、試合に向けて集中してなんて全然していなかった・・・まるで敗北が既に決まってるから、適当に試合を流そうとしている・・・私には、さっ

きまでの揺光が、そんな風に考えているように見えたわよ」

「アインさん！！いい加減にしてください！！揺光さんが、勝負する前から試合を投げてるなんて・・・いくら何でも、言ってる良いことと悪いことがあるんですよ！！」

「そうは言うけど、あなただって気付いて居たんじゃないの、ミーナ？」「今日の揺光は、いつもと違う」「って事」

「そ、それは・・・で、でも、いくら何でも試合前に「勝負を投げてるような顔をしてる」なんて事、言ってる良いはずありません！！」

いつもの弱気な彼女からは思い浮かべ無いくらいの剣幕でアインと口論を繰り広げるミーナにちょっとビックリしていたあたしは、しばし呆然と二人の言い合いを眺めていたけど、ハッと我に振り返り二人の間に入る。

「待つて！ストップ！！二人とも、そのくらいにしときなつて！・・・それに、アインの言う事も、完全に否定なんて出来ないしね・・・」

「っ！！揺光さん・・・！！」

あたしが、試合を投げていたと言うアインの言葉を肯定したのがショックなのか、ミーナが「嘘ですよね？」と視線で訴えて来たけど、あたしは敢えてそれを無視した。

この事に関しては、正直いくら言葉を重ねても仕方ないと思ったから・・・

「・・・実際、本当に勝ちたかったら、今回はメンバーを変えるべきだったんだよ・・・」

「どういう意味？」

「・・・エンデュランスに勝つ方法は・・・ハッキリ言えば、見つけてたんだ・・・」

「・・・」

「あの・・・それって、どうやってなんですか・・・？」

「・・・カズマの、力を借りる。アイツを中心に作戦を立てて、あたし達はそのサポートに回る・・・これが、ヤツに勝てただろう唯一の方法」

「・・・でも、あなたはその作戦をとらなかった訳だ」

「・・・うん・・・」

そう・・・本当に勝ちたいのだったら、あたしはカズマをチームに加えるべきだったんだ。あの力に対抗出来るのは、あたしが知るところではカズマだけだ。あたしは、ただ見えるだけ・・・アレに、対抗することなど出来ない。

だから、本当に・・・試合に勝利することを望むのならば、あたしはカズマをチームに誘い、エンデュランスとの戦いではチームリーダーのあたしがダメージを負わないことに注意しながら、カズマ対エンデュランスという構図を描けば良かったんだ。

実際、カズマからもそう言う申し出はあったんだ。

『エンデュランスとの試合で勝ちたいのなら、俺はいくらでも力を貸すよ』

あの日・・・エンデュランス対チームフランディッシュ撃剣士戦の後、カズマと共に、エンデュランスの分析を終えて、手段が無いと言う結論に至った時に、アイツはそう言って来た。

普通に考えれば、カズマを入れることは当たり前で、至極当然のことだったんだと思う。

だけど・・・あたしは、その申し出を・・・断った。勝利を望むのならば受けて当然、断る理由など全く無いその申し出を、あたしは・・・断ったんだ。

だから、アインの言う、「試合に勝つ気がない」って言うのは間違ってる。だから・・・アインに怒られても、しかたないんだ・・・

「・・・で、なんでその『勝てる方法』を取らなかったの？要するに、カズマをチームに加えれば勝つ可能性が少なくとも今よりは断然高かったんでしょ？」

「・・・ただの、あたしの我儘だよ」

「我儘？」

「ああ、我儘だよ・・・今のこのチームで、エンデュランスに挑みたい。負けてもいい、今、このメンバーで奴に挑んでみたい・・・たったこれだけの理由で、あたしはむざむざ勝ちを捨てようとしてるんだ」

宮皇としては間違いだらけの決断なのかもしれない・・・ううん、確実に間違いだらけの決断なんだと思う・・・それでも、あたしはカズマの力を借りずに・・・勝負してみたいって思ったんだ。

「・・・全く、それならそうとさっさと言いなさいっての」

「こればかりはアインさんと同意見です。揺光さん、そう言うことはまず最初に言うべきだと思います！」

呆れたと言いたげな表情をしながらも、さつきとは違い問いただすような口調から一転、まるで幼子を見るかのような目であたしを見つめてくるアインとミーナ。

そんな彼女たちの表情に、あたしは少しばかりの戸惑いを覚えながら、二人に「えっと・・・怒らないわけ・・・？」と尋ねた。

その言葉を聞いて、なぜだか二人はまた「しょうがないなあ、この子は・・・」とでも言うかのような表情で、

「なんで怒る必要があるわけ？」

「怒る要素がないですよ」

と、答えた。

えっと・・・完全に投げてるわけじゃないけど、それでも事実上勝負を捨ててるってはっきり言ったのに、なんで怒られないんだろう・・・？正直、めちゃくちゃ罵倒されるかなあとか考えてたから、拍子抜けというかなんというか・・・

そんなあたしの様子に、本日何度目になるか分からない溜息を吐いたアインは、

「いい？私が怒ってたのは、”理由もなく勝負を投げてるんじゃないか”って疑ってたからよ」

と言つて、「だからちゃんと理由があるんだつたら怒らいわよ」と呟いた。

「なんの理由もなく、ただ単に”どうせ敵わないから”なんて理由で勝負を投げてるんだとしたら、そりゃ怒ったし、場合によってはチームを抜けるなんてことも考えてたわ」

ちょ、軽く言ってるけど、それかなりシャレにならないんだけど！

「まあ、何が言いたいかというと・・・”今の仲間と最後まで戦いたい”なんてちゃんとした理由があるんだつたら怒るわけ無いでしょうが」

「そうですよ！あんな事言われて、嬉しくないわけ無いじゃないですか！！私、感動しました！！ねえ、アインさん！！」

「ま、感動したかどうかはともかく、嬉しかったつて言うのは確かね」

「なんでわざわざ言い換えるんですか・・・」

ああ・・・あたしつて、ホントバカだなあ・・・

アインとミーナが笑い合う中、あたしは自分のバカさ加減に呆れな

がら、この二人が仲間で本当に良かったと、改めて思った。

カズマ・・・あたし、やっぱりやってみるよ。勝てないかもしれない。全く歯が立たないかもしれない・・・それでも、あたしはこのチームで・・・アインとミーナ。この二人と一緒に、全力で戦うよ！

『まもなく、試合開始時間となります。両チームのメンバーは、転送ゲートにアクセスしてください』

「・・・よし！それじゃあ、行くよ！アイン！ミーナ！！」

「はいはい。それじゃあ、行きますか」

「ハイ！！行きましょう！！」

さっきまでとは明らかに違う、いつもみたいな試合前に感じる胸が高まるような感覚を覚えながら、あたし達は転送用のゲートにアクセスする。

さあ・・・行くよ！！エンデュランス！！！！

S I D Eカズマ

「そうか、そっちを選んだのか・・・ま、お前らしい選択だよな、
揺光」

決勝戦を前にして、ボルテージが上がりまくっている観客席の最後尾に立っていた俺は、フィールドに転送されてきた揺光の表情と連れているメンバーの姿を確認し、あいつが『勝利』よりも、『仲間との絆』を選んだことに、何となくだが安心した。

ウレシソウダネ、カズマ

ん？そう見えるか、プリムラ？

ウン。ダツテカズマワラッテルヨ？

おっと。にやけてたのか・・・気づかなかったぜ。
まあ実際嬉しいか嬉しく無いかってって聞かれれば、嬉しいんだろ
うな。

テイアンコトワラレタノニ、ウレシイノ？

ああ・・・嬉しいんだよ。

あんな提案をしておいてなんだけど、本音を言えば俺をチームに
入れてでも勝ちたいなんて思って欲しく無かったからな。

？ナンデ？カッタハウガウレシインジャナイノ？

確かに、負けるよりは勝った方が嬉しいけどな。けど、今回はか
りは勝ち負けよりも、大事なことがあったんだ。

それを、アイツは誰に言われたからとかじゃなく、自分でしっかり
考えて・・・選んだんだ。

だから、今回はこれで良かったんだよ。

ウーン・・・ヨクワカンナイヤ

ハハハ・・・そのうち、分かるようになるさ、プリムラ。

「おや、志乃からは試合に出るのかもしれないと聞いていたんだが・
・・・今日は出ないのかな、カズマ」

「！オーヴァン・・・なんでここにいるんだ？今日は旅団の活動日
の筈だろ？」

プリムラとの会話に意識を集中していた俺は、突然掛けられた声に内心ドキリとしながらも、表情にその事を出さないように注意しながら振り向いた。

オーヴァンは、そんな俺の問いに相変わらず胡散臭そうな微笑を浮かべながら、

「言つたろ？志乃から君が今日の試合に出るかも知れないと言っ知らせを受けてね。改めて君の実力というものを拝見しようと思つてきてみたんだ」

まあ、残念ながら君は出ないようだがね、と言つて試合開始の合図を待つ揺光達を見下ろした。

「志乃さんから聞いたのか・・・にしても、良いのかよ。ギルマスのかせに、こんなに自分のギルドのこと放任してさ」

「何、志乃が全て上手くやっているからな・・・私は、必要な時に行くだけで構わないんだよ。さて・・・」

「?なんだよ、もう帰るのか?」

今来たばかりだというのに、踵を返してアリーナを出て行くこととするオーヴァンを呼び止める。

「ああ。言つただろ?今日見に来たのは、君が出ると聞いたからだ。残念ながら、出ないと言つことなら今日はもう用は無いのでね。それに」

「それに・・・?」

「結果が見えている試合には興味が無いのさ」

「ッ！またあの目か・・・そう言って今度こそ出口に向かって歩き出したオーヴァンの目を見た俺は、あまり見たくないと思っていたものを目にして、さっきまでの高揚感とはまるで違う、嫌悪感に近い感情が胸の奥から沸き上がってくるのを感じていた。」

まるで実験中のフラスコでも見ているかのようなあの目を。アイツは揺光に向けていたんだ。

カズマ・・・ヤツパリ、ボク、アノヒトヤダナ・・・

プリムラ・・・そうだな。俺も、余り好きじゃないよ、アイツのことは・・・

『ワアアアアー！！』

「おっと、そろそろ試合開始か」

観客の歓声に、立ち去ったオーヴァンの姿を幻視していた俺は、視線を今にも相手に飛びかかろうかと言うような目をした揺光達へと向ける。

まあ、今はオーヴァンのことなんかよりも、こっちだよな。

「見せてくれよ、揺光・・・特別な力なんて無くても、戦えるんだって所をさ・・・」

お前の決意を。俺に見せてくれ！！

第四十八話（後書き）

いやあ、年末は色々忙しい上に、新作のソフトやらが発売されたりで小説を書く時間が余りとれなかったので、ここまでギリギリになっちゃいました・・・

まあ、クリスマスはバイトも入ってないので、もしかしたら年内にもう一回くらいは投稿出来るかもしれないので、余り期待せずにご期待下さい！

それでは、また次回にお会いしましょう！！

第四十九話（前書き）

どうも、あけましておめでとつございます。

なんとか、正月から一週間経たない内に上げることが出来ました。
相変わらずの駄文ですが、それでもよろしければどつぞつ覧下さい。

第四十九話

SIDEカズマ

「見渡す限りの、黒づくめ・・・誰だよ、こんなに呼んだヤツは。ちよつと責任者連れて来いよ!!」

数十人、下手をすると3桁はいつていそうな数のPCに囲まれた状況で、俺は軽い現実逃避も兼ねた文句を思わず口にしながら、襲いかかってきたヤツを、殴り飛ばし固まっていた敵の方へとぶつ飛ばす。

もうさつきからずっと同じ事の繰り返し・・・いい加減疲れてきたんだが。

「流石カズマだね。こんな状況でも余裕を失わないなんて。リップドウク!」

「いやいや、全然余裕じゃないんですけど。むしろかなり焦ってますからね、志乃さんつと!!」

俺と背中合わせの状態で、敵に毒呪紋であるリップドウクを掛けまくって状態異常を誘発している志乃さんにツッコミながら、再び襲いかかってきた敵の一人を、さつきの集団とは違う場所へと吹き飛ばした。

いくら何でも多勢に無勢だよなあ〜なんて考えながら、ちよつとした現実逃避のために、何故このような状況になったのか、回想でもしてみようかな。

こうなった原因は、一週間くらい前に、旅団の目的である黄昏の
鍵^{イラスト}への手がかりだと思われる「ウイルス・コア」と呼んでいるイリ
ーガルなアイテムの收拾が一段落した時の事だった……

その日、俺はハセヲの訓練の定期報告をする為に、@ホームを訪
れたんだ。本来ならメールだとかで済むこの行為を、何故わざわざ
@ホームまで出向いて行うのかというと、「ハセヲの訓練の報告は、
出来るだけ君自身の口から聞きたいので、出来れば@ホームに来て
行ってくれ」というオーヴァンからの頼みだからだ。

……まあ、その言い出した本人が、ほぼ@ホームに来ないので
報告を聞いているのは専ら志乃さんの役目になっているんだけどな。

そんなわけで、その日もまた、俺は志乃さんへとハセヲの訓練の様子、及びどの程度成長したのかを報告していたわけだ。

「どうかな？最近のハセヲの様子は」

「良い感じですよ。もともとセンスはありましたからね、アイツはもう下位のアリーナランカーぐらいなら普通に勝てるレベルぐらいにはなったと思いますよ」

「そっか・・・今更だけど、ありがとうね、カズマ君。わざわざハセヲのこと鍛えてくれて」

「本当に今更ですね・・・良いですよ、別に、気にしなくても。俺も、結構学ばされること多いです。ハセヲだけじゃなく、俺自身にもメリットあるんですから」

「それでも、だよ。お礼くらい、受け取って。ね？」

そう笑顔で言われ、俺はただ頷くしかなかった。何というか、何となく逆らいがたい何かを感じるんだよね、志乃さんのこういう笑顔って・・・

「分かりました・・・ここは、素直に受け取っておくことにしますよ」

「うん、ありがと、カズマ君。・・・それで、今後のことについてなんだけど」

一旦そこで言葉を切った志乃さんは、手元を細かく動かし始め、

「これを見て欲しいんだ」と言つて、俺へとあるデータを送つてきた。

「これは・・・コシユタ・バウア戦場跡のマップデータ？これが何か？」

「うん・・・この前、私達が搜索していた『ウィルス・コア』がようやく全部入手出来たつていうのは、ハセヲから聞いてるよね？」

「ええ。確か、大手ギルドのTanに妨害されてたものの、何とか全部入手したつて聞きましたけど・・・それがここと何か関係あるんですか？」

この前のハセヲとの訓練の後に、息絶え絶えになりながらも教えてくれた情報である、「ウィルス・コア」の收拾完了の報。正直、旅団の活動としてはハセヲの訓練くらいしかしてないので、それがどのくらい重要な物なのかは余り知らないが、The worldの中でも、大手ギルドであるTanも同じ物を狙っていたと聞いていたので、中々争奪が熾烈だったのだと言ふ事は何となくであるが理解している。

で、志乃さんが言うのは、そのウィルス・コアの一つを、コシユタ・バウア戦場跡に持つて行った所、そこでウィルス・コアと何らかの関係があるらしい柱を見つけたそうで、今度集めたコアを持つて行って何が起こるのかを実験するそうだ。

が、しかし。

「けど、十中八九Tanの妨害があると思うんだ」

だそうだ。

・・・なんで、Tanは、そこまで旅団の活動を妨害してくるのだろうか？正直言って、メリットが何も感じられないし、あんな大手ギルドが、こう言うってはなんだけど旅団のような弱小ギルドに執着する理由が全く見えないんだよね。

ギルド間の妨害行為や、戦闘なんかは珍しくは無いけど、それだつて行き過ぎればGMからアカウント停止、ギルド解散くらいのペナルティだつて下ることもあるんだ。

なのに、話を聞いていると、Tanはそう言ったペナルティが下ることを全く恐れていない。それどころか、ペナルティが下つても全く構わないとも言つかのような行動を執っている。

普通は、そう言ったメリットとデメリットを天秤に掛けた上でペナルティが下るギリギリの線を突くのが当たり前で、常識だと思うんだが、彼らの行動はその常識に全く沿っていないように感じる。

それとも・・・ペナルティが下つても構わないくらいの何かがあるのウイルス・コアに隠されているのか・・・？

・・・ダメだな、さっぱり分からん。この件については、俺がいくら推測を並べたところで、真実は分からないんだ。無駄に憶測を立てるのはこのくらいにしとくか。

「で、どう対応するんですか？正直、今いる旅団のメンバーだけでTanの妨害を完全に食い止めるのは、正直不可能だと思うんですけど」

さっきも言ったが、弱小ギルドである黄昏の旅団と、The w

or ld有数の大手ギルドであるT a nとでは、余りにも規模が違
いすぎる。それはすなわち、ギルドを構成する人数も大きく違つて
いることを意味するのであって・・・要は、戦力差がありすぎるん
だよな。

昔から、「戦いは数」という言葉がある通り、数というのはそれ
だけで力なんだ。いくらレベル制M M OであるT h e w o r l d
で、数〃力という図式が現実よりも成り立ちにくいとはいっても、
限度という物がある。少数精鋭でいくら頑張った所で、圧倒的な数
にはレベル差が最低でも30程度は無いと、有利になる要素なんて
一つも無いんだ。

「うん、それは私も問題だとは思ってるんだ。だから、今元旅団の
メンバーだった人達を探してるの」

「元旅団のメンバーだった人達・・・ですか？」

「うん。二人いるんだ。ゴートとBセットって言うP C名の人達。
オーヴァンや私、ゴートとBセットで旅団の初期メンバーだったん
だよ」

へえ、俺はてっきりオーヴァンと志乃さん、匂坂が初期メンバー
だとはかり思ってたけど・・・違ったのか。

にしても・・・元団員か・・・案外この旅団って結構全体的に個
人のレベルは高いから、志乃さんが言うその元旅団のメンバーって
いうのは戦力として大きいんだろうな・・・そんな人物が一人でも
加わってくれるんだったら、一人の負担が減らすことも可能だから、
もしかしたら目的を達成する事も出来るかもしれないけど・・・

「抜けたってことは、今は旅団となんの関係もないんですよ？本当に手伝ってもらえるんですか、その人達に」

ネットゲームでギルドを脱退したからと言って、再入団したりギルドに所属しなくても手伝ったりするヤツは結構少なくて無い。けど、そう言った場合は大抵リアルで知り合いだったからとか、やむを得ない事情で脱退しなきゃいけないことになったけど、ギルド自体が嫌だから抜けた訳じゃ無いと言った人に限った話だ。

そう言った事情以外の理由でギルドを止めた場合は、大抵はギルド自体に関わろうとせずゲームをするのが普通の行動だ。元々、こういったMMORPGでギルドを抜けると言うのは、ギルドの方針が気に食わない、ギルドの仲間と上手くいかないと言った理由が多くを占めている。

まあ、要するにギルドを止めた理由によっては、そう簡単に力を貸してくれるとは思えないんだよな。

力を貸してくれるんならそれに超したことは無いけど、もしもその誘いが断られた場合は、現状の戦力でTaNとの戦闘を迎えなきゃいけないんだ。

だから、そこら辺はハッキリさせときたいわけだ。

力を貸してくれる可能性は、どのくらいあるのかってことをさ。

「・・・正直、断言は出来ないかな？二人とも、ギルドと合わないから出て行ったタイプの人なんだけど、性格的には気分が乗ったら力を貸してくれるタイプでもあるから・・・」

うーん・・・一番判断に困る返答されちったなあ・・・

来るか来ないか・・・正直言つて断言して欲しかったんだけど・・・
はぁ・・・気分で決めるタイプかぁ・・・

・・・こう言っちゃなんだけど・・・このギルドって、ひねくれ
者率高いよなぁ・・・ぶっちゃけ純粹って言つか、素直な性格して
るのタビークらいだし・・・

俺は自分で言うのもなんだけど、比較的まともではあると思つて
るけど、あそこまで正直な正確じゃないし・・・ハセヲは、ツンデ
しだし・・・匂坂は・・・微妙にひねくれてるよな？
で、オーヴァンは言わずもがな・・・志乃さんは・・・

「・・・・・・・・」

「?どうしたの?」

「あ、いえ、別に・・・」

・・・正直、少し腹黒い所あるし・・・

うーん・・・やっぱ、このギルドに関わってる人間って、どこか
しらひねくれてるヤツが多いのかなぁ・・・?

「ねえ、カズマ君・・・今、私のこと腹黒いとか思わなかった?」

「(ビクッ!)え?そ、そんなこと思っわけ無いじゃ無いですかぁ
!?!」

怖ッ!笑顔メツチャ怖いんですけど、志乃さん!!

・・・この話は、これくらいにして・・・

とにかく、俺は俺で打てる手は打つところ。備えあれば憂い無しって言うしな。まずは、揺光とか誘ってみることにするか。

とまあ、こんな感じでTaNと戦う可能性があるって伝えられ、ハセヲを鍛えたり、揺光を戦力として誘ったりと戦力を増強するために一週間奔走した結果。

「おらぁー!!」

「へっ! 甘いよー! ミーア! アイーン!」

「はいはい」

「はい！いきますー！！」

「うにゃッー！！」

「まったく、数が多いつてのにー！！」

「ホアタアー！！つと、だ、誰か手を貸せー！！」

「全く相変わらず無闇矢鱈に突っ込んで・・・少しは学習しなさいよ、このバカッー！」

志乃さんが言っていた元旅団のメンバーであるゴードと、Bセツト、そして俺が誘った揺光、アイン、ミアアの計10名で約5、6倍ほど居るTaNの集団を押さえていると。

普通なら、数の暴力に勝てないだろうけど、予想以上にこっちの平均レベルが高いのか、もう30分以上戦闘を繰り返しているわけだけど、善戦してる。

．．．
とは言え、流石にこの数をいつまでも相手にするのは、キツイな．

「志乃さん、オーヴァンはまだ・・・？」

こっちの勝利条件は、オーヴァンが黄昏の鍵を発見するまで。条件的には、こっちの方がまだ有利だけど、いつまでもは保たない．

．．．！！

「・・・オーヴァン・・・」

「？志乃さん？」

俺が声を掛けたことにも気付いてないのか、志乃さんは塔の最上階へと悲しげな視線を向けていた。

しかし、すぐに何でも無いかのように、「もう少しだから、みんな踏ん張って！」と檄を飛ばした。

「」「」「オウ！」「」「」

戦っている全員が、力強い返事を返す中、俺は言いようのない違和感を感じていた。

なんだ・・・今の志乃さんの表情・・・なにか・・・あるのか？

「カズマ君！！」

「ッ！と、このヤロツ！！」

微かな違和感を残しながらも、俺は再び前を向き考えることを止める。今大事なのは、目の前の敵に集中する事だ。詮索は後回し！！

（何か志乃さんとオーヴァンしか知らない秘密があるっばいな・・・けど、それは後で聞くことにして！今は、目の前の奴らをぶっ飛ばす！！）

そう結論をだした俺は、また余計なことを考える前に、敵を倒すべく身体を沈め、前線へと駆け、雄叫びを上げながら拳を振り下ろす。

（この戦いが終わったら、オーヴァンにゼツテエ文句言ってやる！）

そんなバカなことを考えながら、俺は目の前の敵を殴り飛ばして、次の敵を睨みつけた。

オーヴァンに文句を言えるのが、それから三ヶ月以上後になることも知らずに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0863s/>

.hack//G.U. 黄金の右腕

2012年1月6日00時49分発行